

# 新 人文学

Annual Bulletin  
of the  
New Humanities  
Vol. 21

〔巻頭言〕

人の「こえ」を聴く 徳永良次

〔論文〕

Japanese Prostitutes  
in French Indochina

Chie SEMBA

環北太平洋の後期完新世における  
海洋航海の発展と複雑化した狩猟採集

社会との関係 手塚 薫

笹井宏之の短歌の研究 その二

—第二歌集『てんとろり』における身体語彙「ゆび(指)」を中心に—  
大村勅夫

『宝物集』における天皇 伊藤翔太

歴史的風致として選定された小樽の祭礼文化

—水天宮多賀神社例大祭と「歴史まちづくり法」—  
蟬塚咲衣



芥川龍之介『河童』の一考察

—「対」と「ずらし(ずれ)」の視点から—

太田幸夫

宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』

—タイトル「銃口」をめぐる一考察—

林 香苗



●〔研究ノート〕

ブッカー・T・ワシントンとは何者か？

—アメリカ黒人「保守」思想の「源流」をめぐる議論の再整理—  
大森一輝

●〔資料紹介〕

翻刻『八雲路日記 三上』(→)

武田佑希子

●解説シリーズ今、何が起きているのか？

第二回 台湾ポストニューシネマ

—『KANO 1931 海の向こうの甲子園』

—についてのポストコロニアル批評の試み—  
大石和久

〔彙報〕 令和五年度 大学院文学研究科

学位論文題目一覧／

文学研究科教育・研究発表活動／編集後記

# Annual Bulletin of the New Humanities

---

Vol. 21

December 2024

---

## Contents

### Foreword

Yoshitsugu  
TOKUNAGA

Listening to People's "Voice"

### Articles

Chie SEMBA

Japanese Prostitutes in French Indochina

Kaoru TEZUKA

The Interaction of Complex Hunter-Gatherer's Societies with the Development of Seafaring Technology in the Late Holocene in the North Pacific Rim

Tokio OMURA

Study of the Tanka of Hiroyuki Sasai Part2: Focusing on Body Vocabulary "Fingers" at the Secondbook *Tentorori*

Shota ITO

Emperor in *Houbutsusyu*

Sakie SEMIZUKA

Otaru's Festival Culture Selected as Traditional Scenery: Suitengu Tagajinja Shrine Festival and "The Act on Maintenance and Improvement of Traditional Scenery in Certain Districts"

Yukio OHTA

A Study of Ryunosuke Akutagawa's "*The Kappa*": From the Perspective of "Tui" and "Zurashi" ("Zure")

Kanae HAYASHI

An Analysis of Ayako Miura's Novel "*Juko*": Examining the Influence of Yuriko Miyamoto's "*Dohyo*"

### Essays

Kazuteru OMORI

The Strange (Posthumous) Career of Booker T. Washington: Reconsidering the Origins of Black Conservatism

### Document Introduction

Yukiko TAKEDA

Reprint of "Yakumoji-Nikki 3(1)" Part 1

### Exposition

Kazuhisa OISHI

Exposition Series: What's Going On Now?  
Taiwan Post-New Cinema: A Post-Colonial Essay on *KANO* (No.2)

### Notes

### Editorial Notes

〔巻頭言〕 人の「いえ」を聴く 徳永良次……………002

〔論文〕 Japanese Prostitutes in French Indochina Chie SEMBA……………307  
(001)

環北太平洋の後期完新世における海洋航海の発展と

手塚薫……………275  
(033)

榎井宏之の短歌の研究 その二

―第二歌集『てんとろり』における身体語彙「ゆび(指)」を中心に― 大村勅夫……………014

『宝物集』における天皇 伊藤翔太……………046

歴史的風致として選定された小樽の祭礼文化

蟬塚咲衣……………251  
(057)

―水天宮多賀神社例大祭と「歴史まちづくり法」―

芥川龍之介『河童』の一考察 ―「対」と「ずらし(ずれ)」の視点から― 太田幸夫……………078

宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』 ―タイトル「銃口」をめぐる一考察― 林香苗……………112

●〔研究ノート〕

ブッカー・T・ワシントンとは何者か?

―アメリカ黒人「保守」思想の「源流」をめぐる議論の再整理― 大森一輝……………160

●解説シリーズ「今、何が起きているのか?」

第二回 台湾ポストニューシネマ

―『KANO 1931 海に向こうの甲子園』 大石和久……………200

―『KANO 1931 海に向こうの甲子園』 についてのポストコロナル批評の試み―

●〔資料紹介〕

翻刻『八雲路日記 三上』(一)

武田佑希子……………180

〔彙報〕

令和五年度 大学院文学研究科 学位論文題目一覧……………308

文学研究科教育研究発表活動……………314

編集後記……………316

# 年報 新 人文学

【第二十一号】  
二〇二四年十二月発行  
目次

Annual Bulletin  
of the  
New Humanities Vol. 21

# 人の「こえ」を聴く

徳永 良次

## 高山寺展のこえ

二〇二四年七月九日から九月一日までの約五〇日間、北海道立近代美術館で「国宝鳥獣戯画 京都高山寺展 明恵上人と文化財の伝承」(以下、高山寺展)という展覧会が開催され、およそ8万人を超える入場者数を記録した。これは、単独の寺院・僧侶をテーマとした展覧会としては、記録に残るものと言える。教科書にも載っているという「鳥獣戯画」(鳥獣人物戯画)がお目当てなのはもちろん、「明恵上人の生きざまや、それにまつわる絵画、資料、さらに現代に至るまで明恵上人や高山寺を慕って集まった、多くの文化人の記録とその伝承について大変興味深かった」という感想が多かったという。



写真① 高山寺境内にある「座禪石」にて

私は、大学院生時代から約三十五年以上にわたり、高山寺典籍文書綜合調査団のメンバーとして調査に従事してきた。当初、専門の国語学（日本語学）に関連した資料の調査・分析ばかりに取り組んでいたが、次第に、それらが、いつ、誰によって、どのように、何のために保管・管理し整理されてきたかについて強く関心を持つこととなった。そうすると、現存する一万二千点以上とも言われる典籍文書の中に、鎌倉時代以降、現在に至る時々の人の「生きたあかし」とも言うべき生の記録・記事を見ることがある。その時々には気がついた記録は書き留めてみたりしていたが、近年、特に印象に残った記録をいくつか紹介していこうと思う。

## 明恵上人の「こえ」

高山寺中興の開祖である、明恵上人高弁の残した記録がある。この記録は、高山寺典籍文書綜合調査団が発行した『高山寺典籍文書目録第一』（東京大学出版会、一九七三年）には、すでに紹介されており、私も何度もその目録は利用していたので目にしていたのであるが、今夏、「高山寺展」で原本が展示されており、改めてじっくり目にする機会があり、非常に衝撃を受けたものである。その記録を紹介する。原文に読みやすく濁点、句読点を付した。



写真② 明恵上人修行の地からみた、紀州湯浅の海

華嚴一乗教分記卷上（高山寺聖教類第一部220「1」）一帖

〔奥書（成弁筆）〕／は改行を示す

哀哉、□（擦消）、南山ノキハニ船ノ一艘イデキタリツルガ、ホドナクハセトヨリ（馳通）テ北山ニカクレナム／トスル気色ヲミレバ、此耳キレ法師ガ一生涯ヲハセワタラムホドモ、アレニコトナラヌカナト思テ／雙眼ニナミダ（涙）ウカブ。筆ヲソメテ如此カキサシテマタ筆ヲソメムトスル便ニミヤリタレバ船ハ／スデニ北山ニハセカクレニケリ。弥（いよいよ）アハレヲモヨラスモノカナ

内容は、概略以下の通り。

和歌山の湯浅の海が見える庵でこの聖教で勉強していると、南から一艘の船がやって来て、すぐに北山に隠れつつある。これを見るに、この「耳キレ法師（明恵上人自身のこと）」の一生涯の短さと同じに思えて、両目に涙が浮かんできました。この事を書いているうちに、あつという間に船は北山に隠れてしまって、いよいよ寂しく悲しい気持ちになってしまった。

やや長文の紹介になったが、この文章は、写本の末尾に書かれる「奥書（おくがき）」の部分に、明恵上人（当時、成弁と称していた）が漢字片仮名交りで書き残したものである。この記事の後には、通常の奥書として記載される、「建久八年・・・」という年紀があり、一一九七年の書写とされる。写真②に掲載したような、紀州湯浅で、上人が少数の同行者とともに小さな僧庵でひたすら仏道修行を行っていた若い頃の記録である。

明恵上人は、これを書いた数年前に、仏道修行に専心することを誓い、「仏眼仏母像」の前で自ら右耳を切り落とし、痛みを堪えていると空中から文殊菩薩が現れたという逸話が知られており、この後、しばしば自分を「耳キレ法師」や「无（無）耳法師」と書き残している。修行中に、眼前に広がる海を走る船を自分の人生に重ね合わせ、果てしない修行とそれに比して人生の短さを嘆く、という明恵上人の心情が思わずあふれ出てしまい、ここに書き付けないではいられなかったであろう。

次の資料に見える記事も、明恵上人の溢れる思いが伝わるものである。

大唐天竺二里程書（高山寺重書類 10） 一幅

（前半省略）

印度ハ仏生国也、依恋慕之思難抑、為遊意計之、哀々マイラバヤ

（以下、略）

明恵上人は釈迦に深く帰依しており、釈迦と同時代に生まれなかった事を常々残念に思い、せめて自ら釈迦の遺跡を訪ねたいという思いを抱いていた。この資料は鎌倉時代元久元年（一二〇四年）ころに天竺行きを計画しており、結果的には二回渡航を企て、その度に春日明神の宣託などで中止せざるをえなかった時のものである。

唐の都、長安を出発して、一日にどのくらい進めば天竺・王舎城に到着するかを三パターンの行程で

計算したものである。この途中に、明恵上人の印度への思い、釈迦への思慕があふれ出して、先のような文章が「突然」書き記されている。冷静に距離と日数を計算しているうちに、「ああ、どうしても印度に行きたいものだ」と思わずあふれ出る感情の豊かさがよくあらわれているものであろう。

これとは別に、本来書く必要のない表現を使う記録も見える。

五教章中巻指事末（高山寺聖教類第一部293〔2〕）一帖

（裏表紙見返）

當山第一之非人成弁  
之本也

當寺之瓦礫明恵房

此山之厠掃治之大法師  
之本

この部分には、通常、書写奥書（いつ、誰が、何を、どのように書き写したとかの情報）を記載する。しかし、それ以外に明恵上人は、自分を「第一之非人」、「當（当）寺之瓦礫」、「厠掃治之大法師」とまで書き残している、これほど自分を卑下した、その思いはどのようなものであつただろうと、考えさせられることが多くなった。

## 弟子達の「こえ」

以上のような明恵上人の記録以外にも、膨大な現存資料群には、興味深く、かつ、人の生きざまを考えさせられる記録が見つかる。以下、いくつか紹介していく。

梵網經記卷下（高山寺聖教類第二部26〔2〕）一帖

（奥書）

寛喜二年十二月十六日病後勵力兩卷

（↓①）

（中略）新発心僧空弁四十七

同廿一日一交了

同三年辛卯正月十一日於禪河院御庵室御披讀其

（↓②）

次依御命加点了聽聞衆同上卷矣 空弁記之四十八歳

自同三日始至今日首尾九箇日被終其功而已

（別筆）

同正月廿四日病中右筆仰苦痛再治点了

懇念惟深三宝必証明矣 空弁重記之今度病／決定死／病也

（↓③）

これは、私が、禪淨房（空弁）という僧侶の事績について網羅的に検討していた際に見つけ出した奥

書である。禪浄房は、高山寺草創期、まだ、明恵上人が存命の頃から上人に従って高山寺において修行していた僧侶であるが、ほとんど記録が残されておらず、その存在は忘れ去られていた。

しかし、調査していく内に、禪浄房は現在で言う「図書館長」のような存在として、高山寺にあった膨大な聖教の保管と管理を担っていたことが明らかとなってきた。そのような重要な立場にありながら、明恵上人より早く示寂（亡くなること）したようで、右にあげた奥書がその最後の記録となった。寛喜三年は一二三一年で、明恵上人は寛喜四年（一二三二年）の示寂であるので、それより一年早くこの世を去ったのである。その禪浄房が残した最後の記録には、死と向かい合いながらも淡々と仏道修行に進んでいる思いが綴られている。この最後の記録を時系列的に見ていくと、寛喜二年十二月に「病後」にもかかわらず、心を奮い立たせて経典を書写し（①部分）、翌年正月には九日間掛けて、上人の命で梵網経の講義を行い、合わせて経典に訓点を加点した（②部分）。そして、正月の二十四日に、その経典にさらに加点や修正を施した（③部分）のであるが、「病中、苦痛」の中の作業であり、ついには「この度の病は死病である」と自身が書き残している。それに呼応するように、禪浄房に関する記録は寛喜三年以降、まったく見られなくなっている。

禪浄房没後、高山寺の聖教類は、鎌倉時代中期以降に大規模な編成替えがあり、その状態は少なくとも江戸時代末期までは続いていることが知られている。

最後に、江戸時代書写の典籍に書き付けられた和歌を紹介する。書き付けた人物については不明であるが、明恵上人に関する伝記類を写し取った典籍の裏表紙に書かれている。

やまのはに かげかたむきて くやしきは むなしくすぎし つきひなりけり

〔上人記〕一冊 高山寺聖教類第四部一四八函9)

## つきないおもい

「鳥獣戯画」が伝来したこと、また、日本のお茶栽培発祥の地ともされる高山寺には、一般の人は知らない膨大な典籍文書が現存しており、それらは明恵上人とその弟子達による収集や書写しただけではなく、明恵教団を崇敬する貴人が寄進したものである。現在残っているのは、幾多の自然災害や戦乱、盗難などを乗りこえた長距離ランナーであり、これからも可能な限り走り続けていくものである。私は、当初は日本語（史）資料の宝庫として、まさにその学問上の観点から高山寺とその典籍を見てきたのであるが、いつしか自分自身が「島影に消えつつある船」や「むなしく過ぎし月日」を感じるうちに、これら先人の書き残した、あふれる思いに大きく共感することとなった。

いつの時代も「人生は短く、術は長し」「人生は短く時は過ぎ去る」である。



# 論文



Japanese Prostitutes in French Indochina Chie SEMBA

環北太平洋の後期完新世における海洋航海の発展と  
複雑化した狩猟採集社会との関係 手塚薫

笹井宏之の短歌の研究 その二 大村勅夫  
—第二歌集『てんとろり』における身体語彙「ゆび(指)」を中心に—

『宝物集』における天皇 伊藤翔太

歴史的風致として選定された小樽の祭礼文化 蟬塚咲衣

—水天宮多賀神社例大祭と「歴史まちづくり法」—

芥川龍之介『河童』の一考察 —「対」と「ずらし(ずれ)」の視点から— 太田幸夫

宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』 —タイトル「銃口」をめぐる一考察— 林香苗

## JAPANESE PROSTITUTES IN FRENCH INDOCHINA

---

CHIE SEMBA  
MAHASARAKHAM UNIVERSITY

---

### ABSTRACT

This research aimed to clarify the actual situations of Japanese prostitutes in French Indochina (limited to today's Vietnam). Japanese overseas prostitutes in Singapore and nearby areas were notorious as revealed in plenty of previous studies. However, the situation in French Indochina was almost concealed. The main materials of this research derived from such as books, magazines and newspapers published in Japan from the 1880s to the 1930s.

The first Japanese prostitutes in French Indochina were stated in the 1880s. They developed their business at important locations of military and industry under the public prostitution system of the authorities there. We confirmed they were at 25 locations. They also functioned as "*Comfort agency*" for French forces. Some prostitutes were patterned with Japanese appearance. This pointed out that the French despised the Japanese because of the prostitution. Nevertheless, Japanese prostitutes served abundant customers.

"Rue Boresse", today's Yersin Street, was the Japanese Garrison Street in Saigon. There were at least 60 garrisons and over 120 prostitutes in this area during the early 20<sup>th</sup> century.

In the 1920s, Japanese consulates progressed the prostitution abandonment. According to the official data in 1923, such abandonment was completed in French Indochina.

**Keywords:** Japanese overseas prostitutes, French Indochina, Public prostitution system, Colony

## 1. Prologue

### 1.1 Purpose of this Research

As Yosaburo Takekoshi, one of the pioneers' expertise of colonization in Japan, visited French Indochina, the Dutch East Indies, Singapore and some other areas from June to September 1910 and published *"Memorial of Tropical Countries"*, said, *"Because our nation has colonized Taiwan already.... An-Nam and Dong-King are our neighbors"*<sup>1</sup>, French Indochina might have been close to modern Japan. *"An-Nam"* indicated the central part of current Vietnam. *"Dong-King"* indicated the northern part of current Vietnam.

However, with the high tariffs, the trade was sluggish, and immigrants were few due to the land disposal regulation of foreigners' restriction to own land<sup>2</sup>. Some research showed 250-350 Japanese in French Indochina (within today's Vietnam) before World War I<sup>3</sup>. Suzuki1910P60-61 said that in 1909, there were 63 males and 198 females, and added, *"There are some females along Yunnan railway, so the total should be about 350"*. This indicated most of the Japanese in French Indochina were female. They were people who were so-called overseas prostitutes.

The purpose of this research is to clarify the actual situations of Japanese prostitutes in French Indochina (limited to today's Vietnam). Japanese prostitutes in the areas such as Singapore, the Malay Peninsula and the Borneo Island are notorious as shown in plenty of previous studies, but their situations in French Indochina were almost concealed. The main materials of this research are books, magazines and newspapers published in Japan from the 1880s to the 1930s.

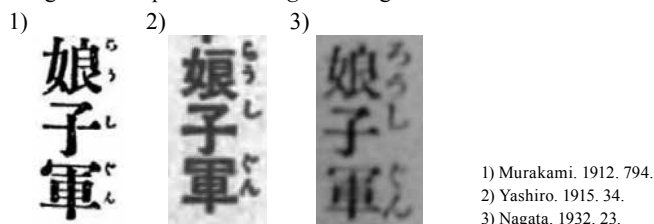
The Japanese overseas prostitutes had notably been called *"Karayuki-san (Karayuki)"*. According to Kazue Morisaki who addressed this term, it was used in the western and northern parts of the Kyushu Island during the Meiji era (1868-1912). This meant *"Women who went to overseas garrisons to work"*. From the Taisho era (1912-1926), *"Karayuki"* became the term used for going to the South Seas<sup>4</sup>, and used for people other than females and prostitutes<sup>5</sup>.

I would like to report that the Chinese character word *"娘子軍"* was used to indicate Japanese overseas prostitutes. According to Miyaoka1968P15, it was used in the 1890s, before the Sino-Japanese War. Kim1997P211 also mentioned on the term used for Japanese residents in the South Seas in the early 20<sup>th</sup> century. As far as I researched, it was frequently apparent in the 1900s-30s in books and articles about Southeast Asia. The term *"娘子軍"* reminds many Japanese of woman warriors in Aizu War (1868). As it was said *"The prostitutes are the pioneers of emigrants and soon men will emigrate to the South Seas, India, etc."*<sup>6</sup>, the term *"娘子軍"*, indicated overseas prostitutes, was used to express some positive feelings.

The woman warriors were called [jo:sign], but in the case of Japanese prostitutes

in Southeast Asia, they were typically called [ro:sign]7. Actually, in some cases, there is no indication to read, neither does in some books and articles [jo:sign]. But it seems the authors who spent some time in Southeast Asia tended to use [ro:sign].

Image 1. Examples of “*Roshigun*” Usage



“*Roshigun*” would be a better term to indicate Japanese prostitutes in French Indochina. So, in this article, the original text and write “*Roshigun*” would be a choice if needed. But in the description part, I just write Japanese (overseas) prostitutes because it is more suitable for English text. At this moment, I just report about the term used, “*Roshigun*”, as one of the results of this research.

## 1.2 Overview of Previous Studies

Before starting the main topic, let me summarize previous studies in Japan.

First, I picked up some books related to Japanese overseas prostitutes. The pioneer study was Katsumi Mori’s “*Human Trafficking*” (1959), describing “*Overseas migrant work*” of “*Women from Amakusa*”<sup>8</sup> (in Kumamoto prefecture today). Kenji Miyaoka’s “*Prostitutes - Record of Overseas Wandering*” (1968) mentioned “*Female stowaways*”<sup>9</sup> in Southeast Asia, Russia, India, Africa, and America. He used the term “*娘軍*” but read it [jo:sign]<sup>10</sup>. In 1972, Tomoko Yamazaki sent her oral history work of Saki Yamakawa who spent her half-life in Sandakan, on the Borneo Island titled “*Sandakan Number Eight Garrison*”, then published “*Graves in Sandakan*” (1974).

In 1976, Kazue Morisaki published “*Karayuki-san*” and described Japanese prostitutes in Southeast Asia, Russia, China, and India. In 1978, Yamazaki created the word “*Ameyuki-san*” meaning Japanese prostitutes in America and published “*Song of Ameyuki-san - Hapless life of Waka Yamada*”.

After Morisaki, several books titled “*Karayuki-san*” were published: Kenji Shiraishi’s “*Karayuki-san in Zanzibar*”<sup>11</sup> (1981), Masanao Kurahashi’s “*Karayuki-san in*

*the North*” (1989) and *“Song of Karayuki-san”* (1990) written about Japanese prostitutes in Russia and Manchuria. Il Myeon Kim’s *“Genealogy of Prostitute, Karayuki and Comfort Woman”* (1997) and Niina Takemoto’s *“‘Karayuki-san’ - Modern Era of Female <Overseas Workers>”* (2015) starting with the selling body custom before the modern era.

There are some works about Japanese prostitutes in French Indochina. Miyaoka mentioned in his book above. Takuji Kashiwagi published ‘Karayuki-san in Vietnam’ (1979) and ‘Japanese Advancement to French Indochina before World War II - Through mainly “Chart of Occupational Population of Overseas Japanese” (1990). Kashiwagi clarified the locations and number of Japanese prostitutes.

Japanese overseas prostitutes in Great Power’s colonies were incorporated into their colonial governance. The modern public prostitution system was established in 1802, in France, spread all over Europe during the middle of the 19<sup>th</sup> century and introduced to the colonies<sup>12</sup>. Let me pick up some works published in Japan mentioning the public prostitution system in Great Power’s colonies. Yuki Fujime’s *“History of Gender - From Public Prostitution and Structure of Abortion Crime to Anti-Prostitution Law and the Structure of Eugenic Protection Law”* (1997) mainly mentioned British colonies. Akane Onozawa’s *“Modern Japanese Society and Public Prostitution System - From the Viewpoint of People’s History and International Relationship History”* (2010) discussed prostitution abandonment in Asia. Hirofumi Hayashi’s *“Armed Forces and Sex of Imperialist Nations - Regulations of the Prostitution and Sex Facilities for the Armed Forces”* (2021) mentioned the public prostitution system in Great Power’s colonies. They mentioned French Indochina but a little. Hiroshi Shimizu and Hitoshi Hirakawa’s *“Karayuki-san and Economic Advancement - History of Singapore-Japan Relationship in World Economy”* (1998) discussed Japanese prostitutes in Singapore from the viewpoint of economy. It was suggestive for other Southeast Asian areas including French Indochina.

## **2. Outline of Japanese Prostitutes in Southeast Asia**

### **2.1 Pioneer of Foreign Advancement**

Let me summarize the history of Japanese prostitutes in Southeast Asia in brief. According to the records, the first Japanese prostitutes appeared in Singapore during 1870 or 71, the center of Southeast Asia then. Afterward, those Japanese prostitutes gained massively<sup>13</sup>.

Due to Sino-Japanese Amity Treaty (1871), people started going to China so Japanese garrisons were built there, then invited criticisms of Japan and Japanese people<sup>14</sup>. In such a situation, “*Regulation for the Japanese in China and Korea*” was announced in March 1883, on August 18<sup>th</sup>, 1885, the penalty of this regulation became stricter<sup>15</sup> and this caused Japanese overseas prostitutes to head to Southeast Asia. Also, at the end of 1884, the Japanese consulate in Shanghai cut down prostitutes so the escaped prostitutes scattered<sup>16</sup>. This could be another reason for their going south. In 1884-85, Japan was in a situation of recession, so some people were pushed to sell bodies overseas<sup>17</sup>.

The increased number of Japanese prostitutes in Southeast Asia invited criticism. In 1890, it was reported that “*Contempt*” and “*Ridicule*” to the Japanese were apparent in Singapore, and its reason was explained as the “*Prostitutes and their kept men*” were the majority of the Japanese there<sup>18</sup>.

In 1899, “*Administrative Regulation of the Dutch East Indies*” was amended and the legal status of the Japanese there was changed from “*Eastern foreigner*” to “*Similar to European*”<sup>19</sup>. One of the reasons impeded it was Japanese prostitutes. In the Dutch East Indies, it was regarded that the Japanese there were “*Not civilized, mostly coolies*”, “*Many of them were prostitutes, philanderers and such kinds of people*”<sup>20</sup>, so the authorities had hesitated to give such privileged status to the Japanese. In addition, in the early 1890s, U.S. papers started to criticize Japanese immigrants and prostitutes there, and anti-Japanese sentiment rose<sup>21</sup>.

In such situations, instruction No.1 of the Ministry of Foreign Affairs was issued on February 3<sup>rd</sup>, 1893, “*Abduction of women who are ignorant of foreign affairs with flattery... after reaching the designated foreign countries...let them work as prostitutes*” was forbidden. “*Give the proper guidance for the women not to go overseas*” was set as a purpose. This policy was to appeal that the Japanese government would manage the issues.

But the main public opinion at that time was below.

*Japanese overseas prostitutes are especially needed to encourage overseas emigration.... We should not criticize overseas prostitutes and leave them freely for economic necessity.*<sup>22</sup>

Owing to this kind of opinion, the issues of Japanese overseas prostitutes were left unsolved. In December 1886, the Tokyo Women’s Temperance Union was established and submitted petitions to eliminate Japanese overseas prostitutes many times, but these had not been fulfilled<sup>23</sup>.

After the Russo-Japanese War, the tendency to head overseas became stronger, and the descriptions such as “*A woman who came back from the South Seas wears several gold rings and carries a silk parasol, watches the play at the best seat with a young husband, and manages a money lending shop*”<sup>24</sup> were apparent. Actually, “*A woman who came back from*

*the South Seas*” was exceedingly rare, but few successful episodes were talked about with big mouths.

Japanese prostitutes were regarded as bearers of foreign advancement. So, the issues were not only overlooked but also talked about frivolously.

## 2.2 In the Economic Advancement

A different tone of argument about Japanese overseas prostitutes appeared in the 1910s. Rubber planting had started in the first ten years of the 20<sup>th</sup> century. Some results have already been brought out. Investments in different fields in Southeast Asia also became prosperous. Then, the number of Japanese enterprises and residents increased, especially in Singapore and the Malay Peninsula.

In such a situation, Yasuto Kajiware, chairperson of “*Taiwan Newspaper*”, visited French Indochina, Hong Kong, the Philippines and some other places from September 1912 to February 1913 and published “*Memorial of Travel to the South*”, said below.

*I cannot agree with Japanese overseas prostitutes about the reasons for their money transfer to Japan and contributing to repay some of the external debt. In addition, I am not such a coward who would feel glad for their money transfer. They certainly advanced to barbaric areas before men, but I do not think it has any value to praise.*<sup>25</sup>

It had been said that Japanese overseas prostitutes played the roles of “*Money transfer*” and “*Advancement to barbaric areas*”. However, Kajiware denied both roles because economic advancement brought them new bearers. We could say Japanese overseas prostitutes had completed their missions, but nobody evaluated so.

Such new Japanese residents saw Japanese prostitutes below.

*We Japanese open our offices in downtown Singapore and manage rubber plantations in the Malay Peninsula with confidence as “The first-class citizens”, but our female fellows walk around barefoot and are ridiculed by other countries’ people. We just cannot leave them.*<sup>26</sup>

With pride as “*The first-class citizens*” and some success in the business field, “*Female fellows*” came to be regarded as an obstruction to their advancement. Some rubber plantations’ owners were females who related to prostitution<sup>27</sup>, but such an opinion was regarded as the majority.

In addition, there were criticisms apparent like, “*Japanese young men in the South*

*Seas often lose themselves to Japanese prostitutes and ruin their purposes...as a result, not a few people become drifters*”<sup>28</sup>. Japanese garrisons had not accepted Japanese customers, but the situation had changed. After World War I started, many European people left the South Seas areas. Japanese garrisons lost their customers and were unable to choose customers. For this reason, Japanese customers became their choices. The withdrawal of European people during World War I brought an economic boom to Japanese business in Southeast Asia. Nevertheless, Japanese garrisons failed into recession so tried to develop new customers into fellows, then caused criticisms.

Criticism of human trafficking also rose in the 1910s, the Singapore authorities started some policies for prostitution abandonment, then influenced nearby areas. Also, the British authorities decided not to allow any female Japanese who had the intention of prostitution to enter British colonies<sup>29</sup>.

In such situations, the Japanese consulate in Singapore implemented a policy of exiling men from Japanese garrisons in April 1914, prohibition of British colonies’ males from managing garrisons within reason. In January 1920, the “*Representative of Japanese residents*” decided to make the prostitutes abandon voluntarily within the jurisdiction of the Japanese consulate in Singapore<sup>30</sup>.

Then, what was the result? The Ministry of Foreign Affairs ed. “*Chart of Occupational Population of Overseas Japanese*” (“*Chart*” for short) showed that at the end of June 1922, the category of “*Performing Woman, Prostitute, Barmaid, etc.*” of Saigon, the Java Islands and the Celebes Island became zero. Previous studies said that some just switched the category to “*Hired housekeeper, Cook*”<sup>31</sup>. This also pointed out that, in Singapore, some women became private prostitutes and belonged to other working places such as restaurants, rooming houses and cafes<sup>32</sup>.

“*Chart*” means completion of the abandonment, which could not be expressed as zero. However, we could regard such a zero person as an official declaration of complete prostitution abandonment, as seen in the consulates’ attitude. Incidentally, at the end of June 1923, Singapore still had 65 prostitutes while the Malay Peninsula and the Sumatra Island had about 200 in this category.

With the advancement of Japanese enterprises and people toward Southeast Asia, the new Japanese residents started to treat Japanese prostitutes as a nuisance. In the tide of criticism of human trafficking, Japanese prostitutes in Southeast Asia were forced to abandon.

### 3. Actual Situations of Japanese Prostitutes in French Indochina

#### 3.1 Locations and Number

“Choya Newspaper” (April 5<sup>th</sup>, 1885, P3) reported about the exiled Japanese prostitutes in Shanghai above – “Some Japanese women moved to An-Nam and Dong-King”. As far as I did the research, this is the oldest description of Japanese prostitutes in the area of today’s Vietnam. Also, the descriptions like, “There were some people who saw a grave of who died in 1885 around Hanoi” were often shown<sup>33</sup>. China and France were fighting over the suzerainty of the Nguyen Dynasty then, so it was certain that Japanese prostitutes set the target on officers and soldiers, and then moved.

Some books and articles reported the locations and number of Japanese prostitutes in the same era; Kashiwagi summarized and showed them on the maps<sup>34</sup>. According to these descriptions, maps and some other additional materials, Japanese prostitutes were in 25 locations and five other possibilities in French Indochina. Let me explain the background.

In ‘Memoir of French Indochina’, Takekoshi mentioned “Roshigun” in Lao Cai, and told the reason why they were doing their business there below.

*Let me explain why the base of Roshigun is in such a place. French troops are on this side of Lao Cai deep valley, and Qing troops are on the opposite side of the valley because this place is at the border area between French Indochina and Qing. So, Roshigun exist to perform as the comfort agency for both French and Qing troops.*<sup>35</sup>

According to Takekoshi, “Roshigun” in Lao Cai functioned as a “Comfort agency” for the troops, and Japanese prostitutes might perform this role all over French Indochina. It is said that some Japanese prostitutes accompanied the military exercise of the troops<sup>36</sup>. This shows that Japanese prostitutes did their business under the colonial governance there.

In France, regulations of prostitution in invaded areas were enacted in the 1830s to build hospitals for the registration and medical check of the prostitutes in urban areas. In the rural areas “Bordel militaire de campagne” (Garrisons for field troops) were opened. It was institutionalized in 1918 and stipulated that authorities’ permission was needed to open a new garrison for the force<sup>37</sup>. In the atmosphere of “Hatred of the colonized natives was the potential threat”<sup>38</sup>, Japanese prostitutes, people belonging to the third country, were set as bearers of the “Comfort agency”.

‘Chart of Arrangement of the Troops in French Indochina’<sup>39</sup> shows the locations of French troops, so it also implied the locations of Japanese prostitutes. According to this chart, French troops were assigned below.

*Saigon, Hue, Tourane, Hanoi, Lang Son, Lang Thuong, Tuyen Quang, Yen Bai, Hai Phong, Sept Pagodes, Bac Ninh, Cap Saint Jacques*

We could confirm the existence of Japanese prostitutes besides Hue, Lang Thuong, Tuyen Quang, Sept Pagode and Bach Ninh. But these locations have high possibilities of their existence.

Tourane was today's Da Nang (in the central part of Vietnam) and had an important port, close to the capital Hue of the Nguyen Dynasty. Besides the above, we noticed some descriptions of Japanese prostitutes in the coastal areas of Cat Hai, Nha Trang and Bac Lieu<sup>40</sup>, too. Cat Hai was close to the important port of Hai Phong, and Nha Trang had a big port in the central area. Bac Lieu was in the southern area. So, there had to have some troops, and then Japanese prostitutes joined.

Lang Thuong was inside Hanoi today, and Bach Ninh and Sept Pagodes were near Hanoi. We saw there were some Japanese prostitutes in Son Tay, Hanoi<sup>41</sup>. Tuyen Quang and Yen Bai are inland in the northern part (mentioned later). Cap Saint Jacques is located at the mouth of the Mekong River. Kashiwagi1979P211 said there were 12 Japanese prostitutes at Cap Saint Jacques in the 1910s.

Other descriptions show that there were some Japanese prostitutes in Dong Dang and Van Yen<sup>42</sup>. Dong Dang was in border areas like Lao Cai and Lang Son. Van Yen was near Dong Dang. So, there must be some troops.

Next, let me select their locations in industry areas<sup>43</sup>. These are in the northern area of today's Vietnam.

*Dap Cau, Viet Tri, Nam Dinh, Yen Bai, Thai Nguyen, Mong Cai, Vinh, Nghi An, Hon Gai*

Dap Cau was at the crosspoint of the Cau River and the railway to Lang Son, one of the central cities in the northern Hong River Delta. Dap Cau was the heart city of rice transportation so there was a big market since the old days. Sericulture also had been started which was encouraged to provide raw silk for French industry<sup>44</sup>. In addition, in 1913 Indochina Paper Mill Company was established. Dap Cau and Viet Tri factories were started operation<sup>45</sup>. Around Nam Dinh was an agricultural area where settled some important manufacturing such as Indochina Brewing Company and Dong-King Spinning Company<sup>46</sup>. Thai Nguyen and Yen Bai had iron mines, northern area of Tuyen Quang and Thai Nguyen had zinc deposits, Tuyen Quang had coalfield, and in Mong Cai and Vinh antimony was produced<sup>47</sup>. Mong Cai was also at the border area. Nghi An was near Vinh. Geographer, Akamaro Tanaka said when he visited Thai Nguyen, he met a Japanese woman who had married a native<sup>48</sup>. She might be a retired prostitute.

In Hon Gai, Dong-King Coal Mine Company was established in 1888, monopolized 20,000 km<sup>2</sup> at the east side of Hon Gai, and constructed roads, a port, and urban areas<sup>49</sup>. Kizo Nishihara told the reason he had opened his garrison in Hon Gai below.

*Previously, a French camp was here, and it had many soldiers, so the authorities requested us to open a garrison for soldiers' hygiene.*<sup>50</sup>

This indicated the authorities requested to secure their “*Comfort agency*” to even a foreigner. This garrison certainly accepted customers from not only the camp but also the industry field.

In Hon Gai, there was another Japanese garrison managed by Mr. and Mrs. Hamano<sup>51</sup>. The writer, Sakan Ando and Shingo Tazawa of the office of the Governor-General of Taiwan visited their garrison during their travels in 1921<sup>52</sup>. Ando wrote “*People Who Invite Their Mother Countries - Voice of Female Drifters*” based on his stay and published it in 1932.

In the southern area, it was recorded that Japanese prostitutes and western concubines were in Saigon, Bien Hoa, Baria and My Tho<sup>53</sup>. Saigon and My Tho were key points of commerce<sup>54</sup>. Bien Hoa and Baria were regarded as rubber planting areas<sup>55</sup>.

As we saw, Japanese prostitutes existed in not only urban areas but also rural areas. Yusaku Uehara (later minister of the Army) visited French Indochina to inspect the territory issue of the left bank of the Mekong River between French Indochina and Thailand in 1893, telling how Japanese prostitutes advanced in rural areas.

*When we entered Dong Dang, the French guide said he would show us something rare and took us to a cafe and brought three Japanese women. They were from Amakusa.... They said that they had negotiated directly with the chief of the authorities of this area to advance in this mountain, and they did not have any fear. Their advancement into the hinterlands was audacious enough to make us military men marvelously.*<sup>56</sup>

“*They had negotiated directly with the chief of the authorities of this area*” indicated their sales activity. This was an example of how Japanese prostitutes expanded their business. It also showed that the authorities accepted such an offer to secure the “*Comfort Agency*”.

Table 1 below showed the number of Japanese prostitutes with some of selected descriptions. We saw many “*Prostitutes*” and “*Roshigun*” especially in Saigon. Also there moderately were “*Western concubines*” and “*Concubines*”. Japanese prostitutes became not

Table 1. Locations and Number of Japanese Prostitutes in French Indochina

| Year                        | Place     | Nominal                       | Number   |
|-----------------------------|-----------|-------------------------------|----------|
| 1903 Research <sup>1)</sup> | Hai Phong | Roshigun                      | About 30 |
| 1904 Record <sup>2)</sup>   | Saigon    | Prostitute                    | 124      |
| 1908 Research <sup>3)</sup> | Hanoi     | Prostitute/Wife of the French | 60       |
|                             | Hai Phong | Prostitute/Concubine          | 35       |
|                             | Saigon    | Prostitute/Concubine          | 70       |
|                             | Lang Son  | Prostitute                    | 6        |
|                             | Tourane   | Prostitute                    | 5        |
|                             | Son Tay   | Prostitute                    | 3        |
|                             | Lao Cai   | Prostitute                    | 5        |
|                             | Bac Lieu  | Prostitute                    | 2        |
|                             | Others    | Prostitute                    | 10       |
| 1909 Research <sup>4)</sup> | Saigon    | Prostitute                    | About 70 |
| 1913 Issue <sup>5)</sup>    | Saigon    | Roshigun                      | 192      |
| 1913 Issue <sup>6)</sup>    | Hanoi     | Japanese girl                 | About 50 |
|                             |           | Western concubine             | 15       |
|                             | Saigon    | Prostitute                    | 70-80    |
| 1913 Research <sup>7)</sup> | Saigon    | Prostitute                    | 34       |
|                             |           | Western concubine             | 24       |
|                             | Baria     | Western concubine             | 3        |
|                             | Bien Hoa  | Western concubine             | 4        |
|                             | My Tho    | Western concubine             | 3        |
| 1917 Issue <sup>8)</sup>    | Saigon    | Roshigun                      | About 30 |

1) Mizutani. 1942. 34.

2) JACAR- B07090992000.

3) JACAR- B03050447900.

4) Kobayashi. 1910. 94.

5) Kikokusei. 1913. 55.

6) Kajiwara. 1913. 280, 322.

7) JACAR-B13080352700.

8) Murayama. 1917. 149.

only concubines of the Europeans but also other people, the natives, and the Japanese, and some married them.

From March 1913 to October 1920, Sanshiro Ishikawa visited Belgium, England, and France. During his stop-by Saigon on his way, he met some Japanese women below.

*After I landed, when I stopped by a shop to buy some postcards, the Chinese master called a name, and then a Japanese woman appeared. I felt some unexpected nostalgia, so I spent some time buying postcards and collars, requesting some Saigon coins, asking how to get to the post office, etc. Then four or five beautiful Japanese women came in and greeted me politely. They looked very happy but showed some nostalgia. So, I thought it was because they seldom see the fellow in this foreign country. When I left the shop to go to the post office, I saw a few Japanese women wearing dresses riding on xich lo. They looked very dignified.<sup>57</sup>*

Another author's story was from the shop, named "Tran Bao" –she was this Chinese man's wife. Description such as "Her age was about 34 or 35 and staying in French

*Indochina for seven years*", "*Came from Shimabara, Kyushu*"<sup>58</sup> indicate that she used to be a prostitute. Other women must be someone's wives or concubines, too. Seeing such many "*Japanese women*" in a short stay implied how many there were.

The descriptions, "*Greeted me politely*", "*Looked very happy*", "*Looked very dignified*" implied their stable life. "*Wearing dresses riding on xich lo*" might show their wealth. This pointed out that most of the Japanese prostitutes in the southern area of French Indochina lived with low-level French soldiers and low-level civil workers<sup>59</sup>. But they were described with such impressions.

In French Indochina, Japanese prostitutes got a position of "*Comfort agency*" of the forces. They also advanced to the economic field and did their business in both urban areas and rural areas. Japanese garrisons were opened due to the authorities' request and the suggestion by the Japanese.

### 3.2 Recognition by the French

How were Japanese prostitutes recognized by the French? Let me consider a description of Japanese prostitutes in Hanoi below.

*In An-Nam and Dong-King, there are many prostitutes from Germany and France, but people fear them. On the other hand, Japanese prostitutes are very honest and cute so for the guards, it is the best joy to stay with them, and among high-level officers getting a Japanese girl as a concubine is one of their trends. On Sundays, we see the French soldiers with their beautiful uniforms and Japanese prostitutes wearing beautiful long-sleeved Yuzen Chirimen and speaking in Amakusa dialect while having fun. Right now, there are hundreds of Japanese prostitutes, the best class earn 30 to 50 dollars a day and not a few of them transfer money to their homes.*<sup>60</sup>

The description, "*European prostitutes are more professional than Japanese prostitutes*"<sup>61</sup> explained the reason for "*There are many prostitutes from Germany and France, but people fear them*". They thought that Japanese prostitutes were easy to treat but such a factor favored the French.

Morisaki1976P138-139 would imply a cause of such an atmosphere of Japanese prostitutes above. In Korea, Japanese prostitutes became the target of hatred from the native customers and the prostitutes feared them. Indeed, Japanese prostitutes in French Indochina did not have such a fear. This also pointed out, "*Because France accepts the public prostitutes, Japanese prostitutes look arrogant*"<sup>62</sup>, which might be true.

Many people would agree that Pierre Loti's "*Madame Chrysanthème*" invited some interest in Japanese prostitutes. Novelist Pierre Loti, French Naval Captain Louis Marie-Julien Viaud, published 'Madame Chrysanthème' in the French paper "*Le Figaro*" in 1887. In March 1893, it was published as a book from Calmann-Lévy in Paris<sup>63</sup>.

French people in French Indochina enjoyed reliving this popular novel through Japanese prostitutes. It is said that this novel attracted the readers with exoticism<sup>64</sup>, so the "*Long-sleeved Yuzen Chirimen*" of Japanese prostitutes above might fulfil such interest. Japanese visitors often pointed out that their Kimono appearance was mismatched and strange<sup>65</sup>, but the French did not mind. It was also said some prostitutes who called themselves "*Okiku-san*" (the name of a Japanese concubine in the novel) as a sales tool<sup>66</sup>.

The descriptions of such mismatched appearances implied that they were forced to buy them. It was not certain if they had any particular intention for their Japanese appearances.

Yusuke Tsurumi, who visited the Philippines, French Indochina and the Malay Peninsula from October 1915 to January 1916, described "*A Japanese woman wearing Japanese Kimono*", whom he saw on the ship on the Mekong River below.

*A young French soldier walked around this woman persistently and tried to talk with her. She looked like a hassle and said "Non, monsieur", then left for her room. The next day, that soldier talked with her closely all day again.*<sup>67</sup>

The young French soldier was treated coldly but did not give up. This description showed their approachable atmosphere.

In Hanoi, right after the opening of World War I, such a scene was apparent.

*I heard children of the French base say "Con gái japonaise!" and point at the Japanese women. Then these Japanese women raised their hands with scared faces.*<sup>68</sup>

"*Con gái*" is Vietnamese meaning a young girl, and "*Japonaise*" is French meaning the Japanese woman. Such a phrase by the children's expression showed that Japanese prostitutes were well known among even children.

Previous studies implied some factors of their approachable atmosphere in the business strategies of the garrisons. Nishida1977P55 said that in Vladivostok, Hong Kong and Singapore, the fee of Japanese prostitutes was cheaper than white prostitutes. Shimizu & Hirakawa1998P30 said, in Singapore, Chinese prostitutes took only Chinese customers, and European prostitutes took white customers mainly. However, Japanese prostitutes accepted

the white, Chinese, Malaysians, and many other people. The reason of those came from their sense of crisis such as *“If the garrisons in the South Seas area would not take many native customers, the business might fail”*<sup>69</sup>. Accepting *“Many native customers”* would mean accepting anyone. Such situations had to be similar in French Indochina.

There was a report that the Japanese in Hai Phong were despised by the French because of the prostitutes<sup>70</sup>. Kinnosuke Takagaki, who stayed in Saigon for a while in 1910s-20s, also said, *“There is no doubt that French people think that Japanese women are free with money”*<sup>71</sup>. The French were nothing but consumers of Japanese prostitutes, but the prostitutes indeed succeeded in getting their favors and surviving.

### 3.3 Background of Prostitution Abandonment

As for his French major from Tokyo Foreign Language School (graduated in March 1916), Otokichi Mizutani, entered Mitsubishi Cooperation and worked at Hai Phong branch<sup>72</sup>. He later established Mizutani Trading Company and wrote some episodes of *“Roshigun”*.

He selected a person with his wife and a son in Tokyo but started to live with a *“Roshigun”* in Dong-King. He called this person *“X”*, but his (apparent) name is Seishu Yokoyama with the descriptions such as *“Studied French at night school”* and *“Works as a coolies’ manager of a coal mine”*<sup>73</sup>. According to *“Yomiuri Newspaper”* (September 24<sup>th</sup>, 1940, P7), he started to work in French Indochina after the Russo-Japanese War. In 1940 he returned to Japan and at that time he was 75 years old.

Mizutani also wrote a Japanese person called *“Y”*, who moved from Singapore to Hai Phong: *“Got support from one of Roshigun and opened a shop, saved money successfully”* to *“Open a branch in Yunnan”*<sup>74</sup>. *“Y”* should be Akinosuke Yasuda from Hyogo prefecture. Because of the railway construction, there used to be many Japanese prostitutes in Yunnan<sup>75</sup>.

Anonymities were used, but we did not see any particular negative feeling against *“Roshigun”*. None of their sympathy or guilt was seen, either. We also see many descriptions of Japanese prostitutes written by the visitors. They just wrote down what they had seen and heard during their stays frankly. Due to the report above, contempt by the French would cause some damage to the Japanese there; nothing indicates such issues, though.

A report by Keiichiro Kobayashi, an apprentice translation officer of the Ministry of Foreign Affairs, dispatched for the inspection of immigrants in 1909<sup>76</sup>, implied the cause in his article ‘Successful People and Strategies for Japanese Development that I Saw in An-Nam’.

*People who are doing activities are only prostitutes, and we say other Japanese just rely on*

them.<sup>77</sup>

In such a dependency, other Japanese residents could not say anything to the prostitutes who were the economic superiors and the majority. In the economic boom of Southeast Asia brought by World War I, Japanese population in French Indochina also increased, but it was brought by the increase of prostitutes<sup>78</sup>. In such a situation, the issues behind “*Roshigun*”, for example, abduction, moneylending, exploitation, were overlooked. So, their relationships could be just sufficient.

The prostitution abandonment proceeded in such an atmosphere in French Indochina. According to “*Chart*”, the number of “*Performing woman, Prostitute, Barmaid*” in Saigon became zero in 1922<sup>79</sup> and 1923 in Hai Phong (data ended in June).

In April 1923, a consul of Japan consulate in Hai Phong reported below.

*It was said that there used to be 11 or 12 Japanese prostitutes in Hai Phong. Consul Nakamura had ordered them to abandon before he left, so eight or nine of them had returned to Japan already.*<sup>80</sup>

Japan’s consulate in Hai Phong was established on February 23<sup>rd</sup>, 1920<sup>81</sup>. They could proceed with the abandonment in few ties, so they made some results quickly. In addition, the consul Osamu Nakamura in charge above had done this mission just before his leaving. This might have had some effects. We also see a description, “*A command to leave*” was issued in Saigon<sup>82</sup>.

In a shallow relationship between Japanese prostitutes and other residents, the prostitution abandonment in French Indochina was conducted quickly.

#### **4. Rue Boresse - Japanese Garrison Street in Saigon**

##### **4.1 The Establishment of “Rue Boresse”**

There was a place named “Rue Boresse” in Saigon, where Takagaki described about below.

*Along this street, there are some cargos loading shops, billiard halls, and Japanese snack shops, but most of them are garrisons. In short, Boresse Street is a Japanese Garrison*

Street.... In Saigon, people have to speak in the dialect of Nagasaki or Shimabara, or they can do nothing.

Boresse Town is located out of town and was built by landfill as a swamp, so in the old times crocodiles appeared there. The garrisons face the street in a line and each garrison is a two-story house but very shabby, so for the Japanese inside Japan it is almost impossible to live in. The garrisons are called No.1, No.2, according to the street address....

In the evening, they make a line at the painted parapets of the second floor of garrisons like shanties. They apply foundation on their sunburned faces, smoke pipes and talk to the customers on the street in French and the dialect of Nagasaki. I still remember that they were hugging and kissing the customers in full view of the public, playing the broken Japanese guitar, drunk European customers saying the learned obscene Japanese words, the red lantern hanging under the roof, etc. I still remember them.<sup>83</sup>

“Boresse Street” was also called “Boresse Town”, and it is today’s Yersin Street in district one in Ho Chi Minh. Warren2003tranP88 said that French Indochina had well organized Japanese brothel districts, this must be Boresse Street. Takagaki said, “Built by landfill as a swamp”, according to “Plan de la Ville de Saigon (Cochinchina)” issued in 1878 (Map 1), Boresse Street was located from “Quai de l’Arroyo Chinois” (today’s Vo Van Kiet Street) to “Rue Lagrandiere” (a part of today’s Tran Hung Dao Street) and the length was about 800m. At about the center of Boresse Street, on the right side from “Quai de l’Arroyo Chinois”, there was “Marais Boresse” (Boresse Swamp) on the map.

But “Plan de la Ville de Saigon (Cochinchina)” issued in 1900 (Map 2) did not have this swamp. The railways from Saigon to My Tho and from Saigon to Cho Lon were running instead. The distance from the nearest end of Boresse Street to Saigon Station was about 300m.

The railway from Saigon to My Tho was the first one in French Indochina and started construction in May 1881<sup>84</sup>. On July 21<sup>st</sup>, 1885, the first train ran, and the train ran three times a day<sup>85</sup>. This railway was not long but its income was the most in French Indochina. The railway from Saigon to Cho Lon was constructed in July 1882. The train ran four times a day<sup>86</sup>. Takagaki said, “Boresse Street is out of town”, but it gained an advantage of the land because of the railways.

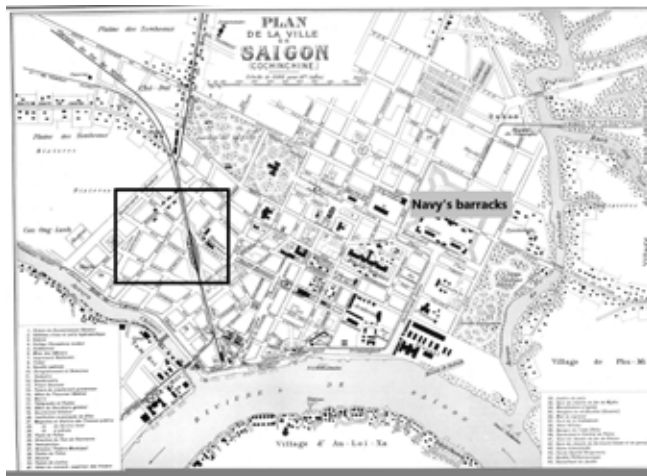
It is said, “The garrisons are called No.1, No.2, according to the street address”. Some documents show us the number of garrisons and people in Boresse Street. In 1904, Tatsukichi Nishida and Hikojiro Igarashi transferred 375 Japanese yen to the Ministry of the Army. In one of the documents, they wrote one of their addresses “No.60, Boresse Street”<sup>87</sup>. This meant there were at least 60 garrisons on Boresse Street in 1904.

Takagaki mentioned, “Very shabby”, “Like shanties”, but a line consisting of 60

Map 1. Issued in 1878



Map 2. Issued in 1900



two-story houses should be spectacular. Zenshiro Tsuboya, an employee of Hakubunkan who visited Saigon in 1916 as a member of Osaka Steamship Sightseeing Inspection, said his xich lo was pulled into a Japanese garrison<sup>88</sup>, which might be at Boresse Street.

As I wrote, Japanese garrisons acted the role of the “*Comfort agency*” for French forces. In Saigon, Boresse Street must be the one. French navy’s barracks were built on the site that used to be Jardin Castle<sup>89</sup>. According to Map 2 above, it was on the west side of “*Rue Rousseau*” (today’s Nguyen Binh Khiem Street), a square with sides of about 600m, and about 1.6 km away from the nearest end of Boresse Street. We could guess that French officers and soldiers started near the University of Humanities and Social Sciences today, passed Notre Dame Cathedral Saigon and Ben Thanh Market, turned to the left at Nguyen Kim Electronics Store today, and then inhaled into Boresse Street.

Boresse Street, a street of Japanese garrisons, was in Saigon’s new city area. There were at least 60 garrisons in the early 20<sup>th</sup> century. Japanese Garrison Street was born in the development of Saigon.

#### 4.2 People in Boresse Street

Nishida and Igarashi whom I mentioned above<sup>90</sup> also sent a name list of the donors. It lasted nine sheets and showed the residents of Boresse Street. On the first and second sheets, there were 18 names, birthplaces and the amount. Ten of them donated 20 Japanese yen. Six did ten yen. One donated three yen, and another did two yen. From the third sheet to the ninth sheet, there were just birthplaces and names. On the tenth sheet wrote, “*110 yen in total from 122 persons*”<sup>91</sup>. The people on the first and second sheets might be the owners of garrisons. The rest of them should be prostitutes.

These are people’s names on the first and second sheets. Six of them were female names, so they must be retired prostitutes.

*Tokumatsu Akita, Hatsujiro Akita, Fukutaro Murakami, Tamejiro Yamaguchi, Tatsukichi Nishida, Hikojiro Igarashi, Tomezo Nakamura, Chozaburo Kaneko, Harumatsu Nagata, Hatsutaro Hamada, Chino Matsuo, Hana Baba, Mita Nishida, Riyo Hayashida, Sado Iwanaga, Sami Arie/Yue, Takematsu Murakami, Daigoro Tozawa*

In 1911, Igarashi started a rubber plantation in Bien Hoa with Saigon residents. Takematsu Murakami, Soji Akita and Eiji Kawai<sup>92</sup>. Murakami was in the name list above. Akita would be a relative of Tokumatsu Akita and/or Hatsujiro Akita. Kawai managed Nihon Hotel in Saigon<sup>93</sup>.

Let me add some more about Igarashi. He opened a restaurant in Saigon in 1885; the year that the train from Saigon to My Tho had opened. He managed both garrison and restaurant<sup>94</sup>. A French literature researcher, Shuto Osada wrote that he had dinner at Igarashi's restaurant on his way to Singapore in 1909<sup>95</sup>.

There were some other examples of donations from Saigon. Igarashi also donated five Japanese yen for Tennyodo of Bentensan Taishido (at today's Minatomachi, Shimabara-city, Nagasaki prefecture). It was established in 1909 and was well known as an establishment by many overseas residents' donations. There were 132 donors. Ones in Malaysia were 34 and the most, and 26 people were the residents of today's Vietnam<sup>96</sup>.

According to Kurahashi1991P7, there was a female donor who lived in Saigon named "*Yori Hayashida*". This person might be the same one as "*Riyo Hayashida*" in the name list above. She donated five Japanese yen. The birthplace of Igarashi and Hayashida was Nagasaki so their donations were not for their hometown.

"*Official Gazette*" No.6835 (April 16<sup>th</sup>, 1906, P23) said "*Saigon Charity Society*" donated 275 Japanese yen for the charity of poor harvest in Northeastern Japan. Eiji Kawai and Genjiro/Motojiro Mori (mentioned later) also donated to this charity (amount is unknown).

Table 2. Birthplaces and Number of the Prostitutes of Boresse Street in 1904

| Prefecture | Number |
|------------|--------|
| Nagasaki   | 56     |
| Kumamoto   | 33     |
| Saga       | 7      |
| Fukuoka    | 4      |
| Ehime      | 3      |
| Hyogo      | 3      |
| Yamaguchi  | 2      |
| Hiroshima  | 2      |
| Shimane    | 2      |
| Kochi      | 2      |
| Wakayama   | 2      |
| Kagoshima  | 2      |
| Oita       | 1      |
| Kagawa     | 1      |
| Osaka      | 1      |
| Nara       | 1      |
| Tokyo      | 1      |
| Unknown    | 1      |
| Total      | 124    |

It was said that overseas prostitutes transferred much money to their families, but joining such donations would have other meanings. I guess for the foreign workers, joining donation was a chance to assert themselves, and they could feel ties with not only their families but also Japan.

Table 2 shows the prostitutes' birthplaces from the third to ninth sheets above<sup>97</sup>; as it was often said that there were many prostitutes from Nagasaki prefecture and Kumamoto prefecture.

Suzuki1909 said that Saigon and Hanoi had one Japanese doctor each. The doctor in Hanoi was at a house of prostitutes without opening a hospital. This meant medical check and caring for the prostitutes were the doctor's main jobs. The doctor in Saigon must be in the same situation.

Japanese prostitutes needed barbers for their Japanese-style hair. According to Takagaki1938P129, there were two barbers along Boresse Street. Kashiwagi1990P82 said that there were six Japanese barbers in Saigon in 1908

and four in 1913. The names of the barbers in Saigon in 1913 were below.

*Fukumatsu Nishizaki, Genjiro/Motojiro Mori, Tokijiro Osumi,  
Yamanaka (first name is unknown)*

Tsuboya1917P202 said, “*There is Mr. Mori’s barber in front of the hotel*”. Koshimura1919P554 also mentioned “*Mori barber shop*”. It was reported, “*In Mori barber shop, a few Japanese are working. They earn about 100 Japanese yen a month, including salary and tip*”<sup>98</sup>. “*Mr. Mori*” might be “*Genjiro/Motojiro Mori*” above. “*Hotel*” indicated Continental Hotel, next to the theater. Mori had his shop about 1 km away from Boresse Street.

Because of prostitution abandonment, it was said that the garrisons in Saigon decreased to four or five and in 1923 completely closed. However, some of them were changed to restaurants<sup>99</sup>. As I mentioned above, “*Chart*” recorded zero prostitutes in 1922.

We see some episodes about retired prostitutes below.

*From the late 1920s to the early 1930s, a lady named Yone opened a Japanese restaurant in Hanoi, and a lady named Natsu opened one in Saigon. Both businesses were quite successful. Natsu’s was near Saigon Port, and there were many Japanese who drank and had fun there during World War II.*<sup>100</sup>

Saigon Port was about 1 km away from Boresse Street. Natsu got a chance to open her restaurant at a suitable location and succeeded in her business.

Let me pick up some other episodes. A Japanese woman was working as a masseuse at Nihon-Hotel. Another was managing Akatsuka Store in Saigon. It was also said that there were about 50 retired Japanese prostitutes working as housekeepers at the French homes in Saigon<sup>101</sup>.

Along Boresse Street, there were over 100 Japanese prostitutes at the early 20<sup>th</sup> century. We saw their charity activities. Their donations indicated their active businesses. We also saw some kept working there after the prostitution abandonment.

#### 4.3 Around Boresse Street

City Saigon had Saigon Port. Next to Saigon, there was Cho Lon area prospering with rice export. There were many other prostitutes in such areas. We noticed the descriptions

of Indian prostitutes and a native prostitute<sup>102</sup>. Also, it was pointed out that for gigolos of French prostitutes, Saigon was a base city. They sent the prostitutes to Singapore, Batavia, Manila, and other places<sup>103</sup>. Some might stay in Saigon.

Osada1917P327 wrote in the section of ‘Adventure of a Haunt of Devils’ below.

*At last, we arrived at No.15 Garrison of Pierre Street and stopped our carriage. An old native lady Emily is managing this garrison, and at any time, there are many white and mixed-blood beautiful young prostitutes. This garrison is thickly forested, and it looks like a haunt of devils.*

According to some maps<sup>104</sup>, “*Pierre Street*” was in the northern area of the navy’s barracks. The description indicated at least 15 garrisons were there and there was a garrison managed by a native. Because of white prostitutes, Pierre Street might be more deluxe than Boresse Street.

Boresse Street did its business within the competition.

## **5. Final Chapter**

Lastly, let me summarize what could be clarified about Japanese prostitutes in French Indochina through this research.

In French Indochina, Japanese prostitutes were apparent from the 1880s. We confirmed that they did their business under the public prostitution system of the authorities there. The business had run in the important locations of military and industry and developed even in rural areas. We confirmed their 25 locations. We saw the examples of the authorities requesting the Japanese to open the garrisons. The Japanese made a sales call. Japanese prostitutes also served as “*Comfort agency*” for French forces. Some prostitutes did their business in Japanese appearance. Despite the contempt of the French, they looked popular.

In Saigon, there was a Japanese Garrison Street, “*Rue Boresse*”, which is today’s Yersin Street. There were at least 60 garrisons and over 120 Japanese prostitutes at the early 20<sup>th</sup> century. Japanese prostitutes held their competitive business with the people such as the whites, Indians, and natives.

The prostitution abandonment in the 1920s was managed quickly by Japanese consulates. According to the official data in 1923, the abandonment was completed in French Indochina.

Future studies should be positioned as Japanese prostitutes in French colonial governance. It is necessary to clarify the situations in the places besides Saigon in detail to get actual examples of prostitutes.

- 1 Takekoshi. 1909. 194.
- 2 Chohosha ed. 1911. 40-41.
- 3 Suzuki. 1910. 60-61., Chohosha ed. 1911. 32., Great Japan Invention Association ed. 1914. 534., etc..
- 4 Morisaki. 1976. 17-18.
- 5 Shimizu. 1997. 95.
- 6 Suehiro. 1891. 132.
- 7 Kikokusei. 1913. 54., Yashiro. 1915. 34., Tazawa. 1922. 344., Nanyo oyobi Nihonjinsha ed. 1938. 134., Hiramatsu. 1965. 120., etc..
- 8 Mori. 1959. Table of Contents.
- 9 Miyaoka. 1968. Table of Contents.
- 10 Miyaoka. 1968. 15.
- 11 “娘子軍” was used in Japanese title, but it was read as “*Karayuki-san*”.
- 12 Fujime. 1997. 53, 79.
- 13 Irie. 1942. 231-233.
- 14 Kim. 1997. 171.
- 15 Nishida. 1977. 48.
- 16 Kim. 1997. 171-172.
- 17 Kim. 1997. 173., Nishida. 1977. 54.
- 18 Kim. 1997. 232.
- 19 Goto. 2010. 8-9.
- 20 Yoshida. 2008. 14.
- 21 Kim. 1997. 184-189.
- 22 Jiji Shimpō. January 18<sup>th</sup>, 1896. 3.
- 23 Kurahashi. 2006. 4.
- 24 Nakai. 1914. 31.
- 25 Kajiwarra. 1913. 346.
- 26 Nanyo oyobi Nihonjinsha ed. 1938. 153.
- 27 Shimizu & Hirakawa. 1998. 53.
- 28 Egawa. 1913. 122.
- 29 Warren. 2003. tran.159.
- 30 Nanyo oyobi Nihonjinsha ed. 1938. 148-149.
- 31 Kashiwagi. 1990. 87., Shimizu. 1985. 17.

- 32 Warren. 2003. tran.162-163.
- 33 Japan Immigrant Association ed. 1923. 229., Irie. 1943. 174, etc..
- 34 Kashiwagi. 1979. 211., Kashiwagi. 1990. 86.
- 35 Takekoshi. 1944. 94.
- 36 Hiramatsu. 1965. 120.
- 37 Hayashi. 2021. 365.
- 38 Bancel et.al. 2003. tran.89.
- 39 JACAR-C15120226300.
- 40 Kajiwara. 1913. 323., Kashiwagi. 1979. 214 (described about a retired prostitute), JACAR-B03050447900.
- 41 Kajiwara. 1913. 323., Kashiwagi. 1979. 211.
- 42 Editorial Committees of Biography of Admiral of the Navy Yusaku Uehara ed. 1938. 145., Ike. 1911. 48.
- 43 Kashiwagi. 1979. 211., Tazawa. 1922. 383.
- 44 Ennis. 1936. tran.164-165.
- 45 Ide. 1941. 71-73.
- 46 Ide. 1941. 74-77.
- 47 Ide. 1941. 79, 80, 84., Robequain. 1939. tran.308, 310.
- 48 Tanaka. 1939. 222.
- 49 Ide. 1941. 68-69.
- 50 Tazawa. 1922. 383.
- 51 Aoki. 2009. 59.
- 52 Aoki. 2009. 64-65.
- 53 JACAR-B13080352700.
- 54 Ennis. 1936. tran.162.
- 55 Robequain. 1939. tran.262.
- 56 Editorial Committees of Biography of Admiral of the Navy Yusaku Uehara ed. 1938. 145.
- 57 Ishikawa. 1922. 19.
- 58 Murayama. 1917. 148.
- 59 Aoki. 2009. 69.
- 60 Ike. 1911. 51.
- 61 Kikokusei. 1913. 57.
- 62 Murayama. 1917. 149.
- 63 Ochiai. 1992. 149-151.
- 64 Kaba. 2008. 19.
- 65 Tsurumi. 1917. 387-388., Ike. 1911. 48-49., Shimazaki. 1918. 49., Takagaki. 1938. 131., etc..
- 66 Oba. 1917. 342.

- 67 Tsurumi. 1917. 387-388.  
68 Hiramatsu. 1965. 120.  
69 Kim. 1997. 238.  
70 JACAR-B03051072300.  
71 Takagaki. 1938. 129.  
72 Tokyo Foreign Language School ed. 1922. 142., Kashiwagi. 1990. 96.  
73 Mizutani. 1942. 34.  
74 Mizutani. 1942. 35.  
75 Ministry of Foreign Affairs ed. 1911. 84-85.  
76 JACAR-B16080466300.  
77 Kobayashi. 1910. 94.  
78 Due to “*Chart*”(data ended in June, 1918), Japanese population in French Indochina was 539 in total, but in the category of “*Trader*” and “*Company employee and Bank clerk*” were zero.  
79 In 1921, this category had 27 people.  
80 JACAR- B03051072300.  
81 Official Gazette. March 2<sup>nd</sup>, 1920. 3.  
82 Takagaki. 1938. 129.  
83 Takagaki. 1938. 129-133.  
84 Matsumura & Otsuka. 2012. 145.  
85 Takada. 2005. 440.  
86 Matsumura & Otsuka. 2012. 145, 149.  
87 JACAR- B07090992000.  
88 Tsuboya. 1917. 204.  
89 Takada. 2005. 437.  
90 JACAR- B07090992000.  
91 Two persons were added after the list was completed, so the total was 124.  
92 Kashiwagi. 1990. 91.  
93 Kashiwagi. 1979. 214.  
94 Kashiwagi. 1990. 92.  
95 Osada. 1917. 325.  
96 Kurahashi. 1991. 33.  
97 JACAR- B07090992000.  
98 Kajiware. 1913. 280.  
99 Maeda. 1924. 146.  
100 Kashiwagi. 1979. 214.  
101 Kashiwagi. 1979. 214., Nagata. 1932. 20., Miyashita. 1929. 46.  
102 Kajiware. 1913. 277., Murayama. 1917. 150.

103 Warren. 2003. tran.89.

104 In “*Plan de Saigon-Cho Lon*” (French) and “*Bản đồ mới Đô-thành Saigon-Cholon*” (Vietnamese), Pierre Street can be seen but these issued years are unknown.

## Reference

Anonymous. 1885. Nihon Fujin 日本婦人[Japanese Women]. *Choya Newspaper* 朝野新聞. April 5<sup>th</sup>, 1885: 3.

Anonymous. 1896. Jinminno Ijuto Shofuno Dekasegi 人民の移住と娼婦の出稼[People's Emigration and Overseas Work of Prostitutes]. *Jiji Shimpō* 時事新報. January 18<sup>th</sup>, 1896: 3.

Anonymous. 1940. “Chide Kizuita Keneki - Sugunimo Hikikaesu” Hikiage Hojin, Senchuni Kanki “血で築いた権益—すぐにも引返す”引揚邦人、船中に歓喜[“Interests Built with Blood - We will Back to French Indochina Anytime” The Salvaged Japanese Delighted]. *Yomiuri Newspaper* 読売新聞. September 24<sup>th</sup>, 1940: 7.

Ando, Sakan 安藤盛. 1932. *Sokokuwo Maneku Hitobito - Onna Horoshano Koe* 祖国を招く人々—女放浪者の声[People Who Invite Their Mother Country - Voice of Female Drifters]. Tokyo: Senshinsha.

Aoki, Sumio 青木澄夫. 2009. *Horono Sakka Ando Sakanto “Karayuki-san”* 放浪の作家 安藤盛と「からゆきさん」[Drifted Writer, Sakan Ando and “Karayuki-san”]. Nagoya: Chubu University.

Bancel, Nicolas, Blanchard, Pascal & Vergès, Françoise (tran. Hirano, Chikako 平野千果子 & Kikuchi, Keisuke 菊池恵介 2011). 2003. *La république coloniale: Essai sur une utopie* 植民地共和国フランス. Paris: Albin Michel.

Chohosha 朝報社 ed. 1911. *Risshin Chifu - Kaigai Toko Annai* 立身 訓書 海外渡航案内[Social Success and Wealth - Guide for Going Overseas]. Tokyo: Rakuseisha.

Department of Official Gazette ed. 1883-. *Kampo* 官報[Official Gazette]. Tokyo: Department of Official Gazette.

Editorial Committees of Biography of the Admiral of the Navy Yusaku Uehara 元帥上原 勇作伝記刊行会 ed. 1938. *Gensui Uehara Yusaku Den jokan* 元帥上原勇作伝 上巻[Biography of the Admiral of the Navy Yusaku Uehara 1]. Tokyo: Editorial Committees of Biography of Admiral of the Navy Yusaku Uehara.

Egawa, Kaoru 江川薫. 1913. *Nanyowo Mokutekini* 南洋を目的に[Set the South Seas as Target]. Tokyo: Nambokusha.

Ennis, E. Thomas (tran. Oiwa, Makoto 大岩誠 1941). 1936. *French Policy and Developments in Indochina* 印度支那・フランスの政策とその発展. Chicago: University of Chicago Press.

Fujime, Yuki 藤目ゆき. 1997. *Seino Rekishigaku - Kosho Seido, Dataizai Taiseikara Baishun*

- Boshiho, Yuseihogoho Taiseie* 性の歴史学—公娼制度・隋胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ[*History of Gender - From Public Prostitution System and Structure of Abortion Crime to Anti-Prostitution Law and the Structure of Eugenic Protection Law*]. Tokyo: Fuji Shuppan.
- Goto, Kenichi 後藤乾一. 2010. *Kindai Nihonto Tonan Ajia - Nanshinno "Shogeki" to "Isan"* 近代日本と東南アジア—南進の「衝撃」と「遺産」[*Modern Japan and Southeast Asia - "Shock" and "Legend" of Advance Southward*]. Tokyo: Iwanami Shoten.
- Great Japan Invention Association 大日本発明協会 ed. 1914. *Kokusaiteki Gendai Nihon* 国際的現代日本[*International Contemporary Japan*]. Tokyo: Great Japan Invention Association.
- Hayashi, Hirofumi 林博史. 2021. *Teikoku Shugikokuno Guntaito Sei - Baishun Kiseito Gunyo Seiteki Shisetsu* 帝国主義国の軍隊と性—売春規制と軍用性的施設[*Armed Forces and Sex of Imperialist Nations - Regulations of the Prostitution and Sex Facilities for the Armed Forces*]. Tokyo: Yoshikawa Kobunkan.
- Hiramatsu, Kairo 平松崑郎. 1965. *Betonamuno Danso* ヴェトナムの断層[*Dislocation of Vietnam*]. Tokyo: Kadokawa Shoten.
- Ide, Asaki 井出浅亀. 1941. *Futsuin Kenkyu - Shigenno Okokuto Annan Teikoku* 仏印研究—資源の王国と安南帝国[*Research of French Indochina - Kingdom of Resource and the An-Nam Empire*]. Tokyo: Japan Youth Education Association.
- Ike, Ryokichi 池亨吉. 1911. *Shina Kakumei Jikken Ki* 支那革命実見記[*Record of Actual Observation of China Revolution*]. Tokyo: Kanao Bunendo.
- Irie, Toraji 入江寅次. 1942. *Hojin Kaigai Hatten Shi* 邦人海外発展史[*History of Japanese Overseas Development*]. Tokyo: Ida Shoten.
- Irie, Toraji 入江寅次. 1943. *Meiji Nanshin Shi Ko* 明治南進史稿[*Manuscript of History of Advance Southward of the Meiji Era*]. Tokyo: Ida Shoten.
- Ishikawa, Sanshiro 石川三四郎. 1922. *Horo Hachi Nen Ki* 放浪八年記[*Record of Eight Years Wandering*]. Tokyo: Santokusha.
- Japan Immigrant Association 日本移民協会 ed. 1923. *Kaigai Iju* 海外移住[*Overseas Emigration*]. Tokyo: Japan Immigrant Association.
- Jikemura, Wasuke 寺家村和介. 1897. *Futsuryo Indoshina Haihei Hyo* 仏領印度支那配兵表[*Chart of Arrangement of the Troops in French Indochina*]. *Kakkoku Haihei Hyo Meiji 30-31 Nen* 各国配兵表明治30-31年[*Arrangement of the Troops Meiji 30-31*]. Submission: unknown. Owned by National Institute for Defense Studies. Japan Center for Asian Historical Record National Archives of Japan (JACAR) Ref. No. C15120226300.
- Kaba, Melek. 2008. Pieru Lochi "Okikusan" no Japonizumu - 1887 Nen Furansugoban Sashienikeru Nihon Joseiwo Kangaeru - ピエール・ロチ『お菊さん』のジャポニズム—1887年フランス語版挿絵における日本女性を考える—[*Japonism*

- in Pierre Loti's "Madame Chrysanthème" - Representation of Japanese Women in Illustrations of 1887's French Edition -]. *Tsukuba Studies in Literature* 文学研究論集. 26: 19-36.
- Kajiwar, Yasuto 梶原保人. 1913. *Tonan Yuki* 図南遊記[*Memorial of Travel to the South*]. Tokyo: Minyusha.
- Kashiwagi, Takuji 柏木卓司. 1979. Betonamuno Karayuki-san ベトナムのからゆきさん [Karayuki-san in Vietnam]. *History and People* 歴史と人物. 9(10): 208-215.
- Kashiwagi, Takuji 柏木卓司. 1990. Senzenki Furansuryo Indoshinani okeru Hojin Shinshutsuno Keitai - "Shokugyobetsu Jinko Hyo" wo Chushin toshite 戦前期フランス領インドシナにおける邦人進出の形態—「職業別人口表」を中心として—[Japanese Advancement to French Indochina before World War II - Through mainly "Chart of Occupational Population of Overseas Japanese" -]. *Asian Economy* アジア経済. 31(3): 78-98.
- Kikokusei 鬼哭生. 1913. Kaigai Enseino Roshigun(Odorokubeshi - 1 ko Shidan Ijono Nihon Shugyofu 海外遠征の娘子軍(驚くべし—一箇師団以上の日本醜業婦) [Japanese overseas Prostitutes (We Should be Surprised - The Number of Japanese Prostitutes are More than One Division)]. *Shin Koron* 新公論. 28(4): 54-57.
- Kim, Il Myeon 金一勉. 1997. *Yujo, Karayuki, Ianfuno Keifu* 遊女・からゆき・慰安婦の系譜[*Genealogy of Prostitute, Karayuki and Comfort Woman*]. Tokyo: Yuzankaku Shobo.
- Kobayashi, Keiichiro 小林敬一郎. 1910. Annanni oite Yoga Mitaru Seikoshato Nihonjin Hatten Saku 安南に於て予が視たる成功者と日本人発展策[Successful People and Strategies for Japanese Development that I Saw in An-Nam]. *The World of Commerce and Industry - The Pacific* 濠洲太平洋. 9(8): 93-96.
- Komura, Jutarō 小村寿太郎. 1904. Juppei Kennokin Tenson Ken 恤兵献納金転送ノ件 [About Transfer of Contributed Money]. *Nichiro Senekini saishi Juppeikin Kenno Zakken/Zatsuno bu* 日露戦役ニ際シ恤兵金献納雑件／雑ノ部[*Others of Money Transfer for the Russo-Japanese War/Others*]. Submission: Gombée Yamamoto & Masatake Terauchi. Owned by Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. JACAR Ref. No. B07090992000.
- Komura, Jutarō 小村寿太郎. 1909. Suzuki Ryoji, Kobayashi Honyakukanho Futsuryo Indoshina Tsusho Jijo Shisatsuni kansuru Ken 鈴木領事小林翻訳官補佐領印度支那通商事情視察ニ関スル件[About the Inspection of Trade in French Indochina of Consul Suzuki and Apprentice Translation Officer Kobayashi]. *Teikoku Kanri Shuccho oyobi Junkai Zakken/Honshono bu/Kaigaino bu dai 1 kan* 帝国官吏出張及巡廻雑件／本省之部／海外之部 第一卷[*Others of Business Trips and Patrols of Civil Officers/Main Ministry/Overseas vol.1*]. Submission: French Ambassador in Tokyo. Owned by Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of

- Japan. JACAR Ref. No. B16080466300.
- Koshimura, Choji 越村長次 ed. 1919. *Nanyo Toko Shuchi 南洋渡航須知*[*All About Going to the South Seas*]. Taipei: Nanyo Association Taiwan Branch.
- Kurahashi, Masanao 倉橋正直. 1989. *Kitano Karayuki-san 北のからゆきさん*[*Karayuki-san in the North*]. Tokyo: Kyoei Shobo.
- Kurahashi, Masanao 倉橋正直. 1990. *Karayuki-sanno Uta からゆきさんの唄*[*Song of Karayuki-san*]. Tokyo: Kyoei Shobo.
- Kurahashi, Masanao 倉橋正直. 1991. Karayuki-sanno Iseki - Shimabarano Taishido からゆきさんの遺跡—島原の大師堂[Remain of Karayuki-san - Taishido in Shimabara]. *Bulletin of the Faculty of Literature, Aichi Prefectural University 愛知県立大学文学部論集 一般教育編*. 40: 1-37.
- Kurahashi, Masanao 倉橋正直. 2006. “Karayuki” to Fujin Kyofu Kai (1) - Kyushuno Ichi Chiiki Joseishino Shikakukara 「からゆき」と婦人矯風会(1) —九州の一地域女性史の視角から[“Karayuki” and the Tokyo Women’s Temperance Union (1) - From the View of One Regional Women’s History in Kyushu]. *Research of Social Issues of Christianity キリスト教社会問題研究*. 51: 1-62.
- Loti, Pierre (tran. Nogami, Hoichiro 野上豊一郎 1915). 1893. *Madame Chrysanthème お菊さん*. Paris: Calmann-Lévy.
- Maeda, Hojiro 前田宝次郎. 1924. *Futsuryo Indoshina 仏領印度支那*[*French Indochina*]. Tokyo: South Research Association.
- Matsumura, Komei & Otsuka, Naoki 松村公明・大塚直樹. 2012. Gaihozukara Yomu Shinkyu Saigon Ekino Ricchito Toshi Kukanno Saihen 外邦図から読む新旧サイゴン駅の立地と都市空間の再編[Relocation of Saigon Station and the Changing Landscape of Ho Chi Minh City: Based on the Analysis of Japanese Military and Colonial Maps]. *Rikkyo University Bulletin of Studies in Tourism 立教大学観光学部紀要*. 14: 143-158.
- Ministry of Foreign Affairs 外務省 ed. 1911. *Unnan Jijo 雲南事情*[*The Situation in Yunnan*]. Tokyo: Ministry of Foreign Affairs.
- Ministry of Foreign Affairs 外務省 ed. 1913-. *Kaigai Kakuchi Zairyu Hompojin Shokugyobetsu Jinko Hyo 海外各地在留本邦人職業別人口表*[*Chart of Occupational Population of Overseas Japanese*]. Tokyo: Ministry of Foreign Affairs.
- Miyaoka, Kenji 宮岡謙二. 1968. *Shofu - Kaigai Ruro Ki 娼婦—海外流浪記*[*Prostitutes - Record of Overseas Wandering*]. Tokyo: Sanichi Shobo.
- Miyashita, Takuma 宮下琢磨. 1929. *Hojin Katsuyakuno Nanyo 邦人活躍の南洋*[*Successful Japanese in the South Seas*]. Tokyo: Okada Nichieido.
- Mizutani, Otokichi 水谷乙吉. 1942. *Futsuin 30 Nen Ki 仏印三十年記*[*Record of 30 Years in French Indochina*]. Tokyo: Ikuei Shoin.
- Mori, Katsumi 森克己. 1959. *Jinshin Baibai 人身売買*[*Human Trafficking*]. Tokyo:

Shibundo.

- Mori, Shinichi 森新一. 1923. Chakunin irai Kanso Hokokuno Ken 2 着任以来感想報告ノ件 2[About Impressions and Report after Appointed 2]. *Kakkoku Jijo Kankei Zassan/Kaibo dai 2 kan 各国事情関係雑纂／海防 第二卷[Others of About Each Country/Coastal Defence vol.2]*. Submission: Kosai Uchida. Owned by Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. JACAR Ref. No. B03051072300.
- Morisaki, Kazue 森崎和江. 1976. *Karayuki-san からゆきさん[Karayuki-san]*. Tokyo: Asahi Newspaper Company.
- Murakami, Sukesaburo 村上助三郎. 1912. *Tokyo Ankoku Ki zokuhen 東京闇黒記 続編 [Record of Tokyo Darkness continued]*. Tokyo: Kobunkan.
- Murayama, Kimpei 村山金平. 1917. *Nanyo Kiko 南洋紀行[Travelogue of the South Seas]*. Utsunomiya: Kimpei Murayama.
- Nagata, Shigeshi 永田綱. 1932. Ryobei San Jun 兩米三巡[Visiting the North America and the South America Three Times]. Tokyo: Nihon Rikikokai.
- Nakai, Kinjo 中井錦城. 1914. *Nanyo Dan 南洋談[Talk about the South Seas]*. Tokyo: Sugar Industry Study Group Publishing.
- Nanyo oyobi Nihonjinsha 南洋及日本人社 ed. 1938. *Shingaporuwo Chushinni Doho Katsuyaku - Nanyono 50 Nen シンガポールを中心同題活躍 南洋の五十年[Achievement of the Fellows around Singapore - 50 Years in the South Seas]*. Tokyo: Shokasha.
- Narushima, Choichi 成島朝一. 1913. Kochishina oyobi Kambojiani Zairyusuru Hongo Jinin Hyo Teishutsuno Ken 交趾支那及び東塞埔ニ在留スル本邦人員表提出ノ件 [About Submission of Chart of Japanese Residents in Cochinchina and Cambodia]. *Kaigai Zairyu Hongojin Shokugyobetsu Jinko Chosa Ikken dai 13 kan 海外在留本邦人職業別人口調査一件 第十三卷[About the Research of Occupational Population of Overseas Japanese vol.13]*. Submission: Nobuaki Makino. Owned by Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. JACAR Ref. No. B13080352700.
- Nishida, Taketoshi 西田長寿. 1977. Kaigaini okeru Nihonno Baishofuni tsuite - Meiji 20 Nendaino Jotai - 海外における日本の売笑婦について—明治二十年代の状態—[About Japanese Overseas Prostitutes - The Situations in the Meiji 20s -]. *L'esprit d'aujourd'hui 現代のエスプリ*. 114: 47-59.
- Oba, Kako 大庭柯公. 1917. *Sekaiwo Ie toshite 世界を家として[Regard the World as My House]*. Tokyo: Shiseido Shoten.
- Ochiai, Takayuki 落合孝幸. 1992. *Pieru Roti - Hitoto Sakuhin ピエール・ロティ—人と作品[Piere Loti - Person and the Works]*. Tokyo: Surugadai Shuppan.
- Onozawa, Akane 小野沢あかね. 2010. *Kindai Nihon Shakaito Kosho Seido - Minshu Shito Kokusai Kankei Shino Shitenkara 近代日本社会と公娼制度—民衆史と国際関係史の視点から[Modern Japanese Society and Public Prostitution System - From*

- the Viewpoint of People's History and International Relationship History*]. Tokyo: Yoshikawa Kobunkan.
- Osada, Shuto 長田秋涛. 1917. *Tonan Roku 図南録*[*Record of Going to the South*]. Tokyo: Jitsugyono Nihonsha.
- Robequain, Charles (tran. Matsuoka, Koji 松岡孝児 & Okada, Tokuichi 岡田徳一 1955). 1939. *L'evolution economique de l'Indochine francaise 仏印経済発展論*. London: Oxford University Press.
- Shimazaki, Toson 島崎藤村. 1918. *Umie 海へ*[*Go to the Sea*]. Tokyo: Jitsugyono Nihonsha.
- Shimizu, Hajime 清水元. 1985. Senzenki Shingaporu, Malayani okeru Hojin Keizai Shinshutsuno Keitai - Shokugyobetsu Jinko Chosawo Chushin toshite 戦前期シンガポール・マラヤにおける邦人経済進出の形態—職業別人口調査を中心として[Form of Japanese Advancement in Singapore and Federation of Malaya before World War II - Discussion Mainly on the Chart of Occupational Population of Overseas Japanese]. *Asian Economy アジア経済* 23(3): 13-32.
- Shimizu, Hajime 清水元. 1997. *Ajia Kaijinno Shisoto Kodo - Matsura To, Karayuki-san, Nanshin Ronja アジア海人の思想と行動—松浦党・からゆきさん・南進論者* [Thought and Behavior of the Sea People in Asia - Matsura Party, Karayuki-san, Disputants of Advance Southward]. Tokyo: NTT Shuppan.
- Shimizu, Hiroshi & Hirakawa, Hitoshi 清水洋・平川均. 1998. *Karayuki-santo Keizai Shinshutsu - Sekai Keizaino nakano Shingaporu-Nihon Kankei Shi からゆきさんと経済進出—世界経済のなかのシンガポール—日本関係史*[*Karayuki-san and Economic Advancement - History of Singapore-Japan Relationship in World Economy*]. Tokyo: Komonz.
- Shiraishi, Kenji 白石顕治. 1981. *Zanjibaruno Karayuki-san ザンジバルの娘子軍* [Karayuki-san in Zanzibar]. Tokyo: Tojusha.
- Suehiro, Teccho 末広鉄腸. 1891. *Oshino Ryoko zokuhen. 啞之旅行 続編*[*Travel of the Muted continued*]. Tokyo: Kozando Shuppan.
- Suzuki, Eisaku 鈴木栄作. 1909. Hokokusho Shintatsuno Ken/3 dai 16 goyori dai 28 go Hokoku/dai 25 go Futsuryo Indoshinani okeru Nihonjin 報告書達連ノ件/3 自第十六号至第廿八号報告ノ第二十五号仏領印度支那ニ於ケル日本人 [About Report Submission/3 from No.16 to 28/No.25 The Japanese in French Indochina]. *Shinkoku Unnansho Koseisho oyobi Futsuryo Indoshina Chiho Jijo Chosano tame Toadobun Kaiin Yamaguchi Noboru Haken Ikken 清国雲南省広西省及仏領印度支那地方事情調査ノ為メ東亜同文会員山口昇派遣一件* [About Dispatch a Member of Toadobun Association Noboru Yamaguchi for the Inspection about Yunnan Province, Guangxi province and French Indochina]. Submission: Tetsukichi Kurachi. Owned by Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan. JACAR Ref. No. B03050447900.

- Suzuki, Eisaku 鈴木栄作. 1910. Futsuryo Indoshina Shisatsu Hokoku sono 1 仏領印度支那視察報告 其一 [French Indochina Inspection Report No.1]. *Imin Chosa Hokoku dai 4 移民調査報告 第4*[*Report of Immigrants Research vol.4*]. Tokyo: Ministry of Foreign Affairs.
- Takada, Yoko 高田洋子. 2005. Furansuryo Indoshinano Shokuminchi Toshi Kenkyu Josetsu - Hanoito Saigon, Cho Lon フランス領インドシナの植民地都市研究序説—ハノイとサイゴン・チョロン[Prologue to the Study about Colonial Cities in French Indochina - Hanoi and Saigon, Cho Lon]. *Colonial City Study 植民地都市の研究*. 8: 423-443.
- Takagaki, Kinnosuke 高垣勤之助. 1938. *Saigon Kankensho 西貢管見抄*[*Saigon Collection*]. Tokyo: Kinnosuke Takagaki.
- Takekoshi, Yosaburo 竹越与三郎. 1909. Fukkoku Shokuminchino Konjaku 仏国植民地の今昔[Past and Present of French Colonies]. *The Sun 太陽*. 15(5): 191-194.
- Takekoshi, Yosaburo 竹越与三郎. 1910. *Nangoku Ki 南国記*[*Memorial of Tropical Countries*]. Tokyo: Niyusha.
- Takekoshi, Yosaburo 竹越与三郎. 1944. *Dokugaro Zuihitsu 読画楼隨筆*[*Essays of Quaint House*]. Tokyo: Great Japan Eloquent Association Kodansha.
- Takemoto, Niina 嶽本新奈. 2015. “Karayuki-san” - Kaigai <Dekasegi> Joseino Kindai 「からゆきさん」—海外〈出稼ぎ〉女性の近代[“Karayuki-san” - Modern Era of Female <Overseas Workers>]. Tokyo: Kyoei Shobo.
- Tanaka, Akamaro 田中阿歌麿. 1939. Futsuin Ryokono Kanso 仏印旅行の感想[Impression of the Travel in French Indochina]. *Bungei Shunju 文芸春秋*. 17(5): 216-223.
- Tazawa, Shingo 田沢震五. 1922. *Nangoku Mitamamano Ki 南国見たまゝの記*[*Record of Tropical Countries Exactly I Saw*]. Taipei: Shinkodo Shoten.
- Tokyo Foreign Language School 東京外国語学校 ed. 1922. *Tokyo Gaikokugo Gakko Ichiran Taisho 11 Nyenori Taisho 12 Nen 東京外国語学校一覧自大正十一年至大正十二年* [Directory of Tokyo Foreign Language School Taisho 11-12]. Tokyo: Tokyo Foreign Language School.
- Tsuboya, Zenshiro 坪谷善四郎. 1917. *Saikinno Nangoku 最近の南国*[*Current Tropical Countries*]. Tokyo: Hakubunkan.
- Tsurumi, Yusuke 鶴見祐輔. 1917. *Nanyo Yuki 南洋遊記*[*Memorial of the South Seas Travel*]. Tokyo: Great Japan Eloquence Association.
- Virtual Saigon.net. <https://virtual-saigon.net/Maps/Source?pn=9>
- Warren, James Francis (tran. Fujisawa, Kuniko 藤沢邦子 2015). 2003. *Ah Ku and Karayuki-san - Prostitution in Singapore 1870-1940 阿姑とからゆきさん—シンガポールの売買春社会 1870-1940年*. Singapore: Singapore University Press.
- Yamada, Hoten 山田放天. 1912. *Nanyono Seifukusha - Kaikokuno Roshigun 南洋の征服者—海国の娘子軍*[*Invaders of the South Seas - Roshigun of Maritime Nation*].

*Travel 旅行*. 2(1): 33-36.

- Yamazaki, Tomoko 山崎朋子. 1974. *Sandakanno Haka* サンダカンの墓[Graves in Sandakan]. Tokyo: Bungei Shunju.
- Yamazaki, Tomoko 山崎朋子. 1978. *Ameyuki-sanno Uta - Yamada Wakano Sukinaru Shogai* あめゆきさんの歌—山田わかの数奇なる生涯[Song of Ameyuki-san - Hapless life of Waka Yamada]. Tokyo: Bungei Shunju.
- Yamazaki, Tomoko 山崎朋子. 2008. *Sandakan Hachi Ban Shokan* サンダカン八番娼館 [Sandakan Number Eight Garrison]. Tokyo: Bungei Shunju.
- Yashiro, Hideo 八代英雄. 1915. *Himitsu Bakuro - Rimennen Nanyo* 秘密裏面之南洋[Reveal the Secrets - The Back Side of the South Sea]. Tokyo: Oya Shobo.
- Yoshida, Makoto 吉田信. 2008. Bunmei, Ho, Jinshu - “Nihonjinho” Seitei Kateiwo meguru Gironkara - 文明・法・人種—「日本人法」制定過程をめぐる議論から— [Civilization, Law, and Race - The Drafting Process of the “Japanese Law” and the Debate over Civilization]. *Southeast Asia - History and Culture* 東南アジア—歴史と文化. 37: 3-27.

### Acknowledgement

I am grateful that “*Annual Bulletin of the New Humanities*” gave me a chance to submit my article. I also really appreciate the reviewer who gave me meaningful advices.

# 環北太平洋の後期完新世における海洋航海の発展と複雑化した狩猟採集社会との関係

---

手塚 薫

---

## 1. 海洋航海の再検討

本論文では環北太平洋に位置する3つの複雑化した海洋狩猟民を取り上げ、その異同を探ることを試みる。それらの海洋狩猟民は大陸と島嶼間の往復が必要であり、船に関する卓越した技術を有していることが共通点である。

2023年11月3日から5日までの期間、国立民族学博物館を会場として国立民族学博物館共同研究会が国際シンポジウム形式で開催された。この研究会は岸上伸啓氏が研究代表者を務め、研究課題は「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究—人類史的視点から—」である。期間中に国内外の研究者が集い、それぞれの研究発表の後で活発な議論が交わされた。筆者は11月3日のセッション2で“The Interaction of Complex Hunter-Gatherer’s Societies with the Development of Seafaring Technology in the Late Holocene in the North Pacific Rim”と題した口頭発表を行ったが、本論文は、

そのときの内容に多くを負っている。Complex Hunter-Gatherer を本論文では、複雑化した狩猟採集民と翻訳している。北米北西海岸地方の首長制社会にみられるようなポトラッチなどの慣習を有する階層化した社会は、これまでの狩猟採集民の枠組みから逸脱しており、農業による食料生産をとまわずに定住性の高い暮らしを実現していた。

おおよそ 3000 年前以降の後期完新世には、北米北西海岸以外にも世界の各地で類似した事例が見いだされるようになっていく。そうした複雑化した狩猟採集民の成立の背景に、これまであまり注目されてこなかった発達した海洋技術、とりわけ船による経済活動の重要性があることを明らかにしようとするものである。

近年、研究者の間で、このような特徴を seafaring 「海洋航海」という用語を用いて説明しようとする傾向が顕著になってきている。そこで、この「海洋航海」のフレームワークを用いながら、環北太平洋諸地域間の異同を探ってみることにする。しかし、個々の地域の詳細な文化の変化を検討することまでは、筆者の力量を超えていることもあって、意図していない。

また、関らが明らかにしているように、約 3000 年前のアンデス文明の権力形成に、貴重な荷役用の動物として飼育されたリャマが大きな役割を果たしたことが議論されている（関編 2017）。これは陸地の事例であるが、海上でも交通手段の進化が社会の複雑化に同様のインパクトを与えていることも追求されてしかるべきであろう。島嶼環境へ進出するなど、優れた海洋技術を駆使した複雑化した狩猟採集民として以下の 3 つを比較対象とする。

アラスカ先住民の代表としてアラスカ南西部のコディアック島 (Kodiak) のパシフィック・エスキモーを、北米北西海岸の先住民の代表としてハイダ・グワイ諸島 (Haida Gwaii) のハイダ族を、筆者も現地調査参加した北東アジア先住民の代表として千島列島 (Kuril Islands) のアイヌを考察する (図 1)。千

島列島、アラスカ南西部コディアック島、ハイダ・グワイ諸島の海上生活、とりわけ船を比較の中心に据える。なお、筆者はアイヌ文化研究を専門としているために、3地域の中でアイヌの船の構造と歴史について重点的にとりあげることをあらかじめお断りしておく。

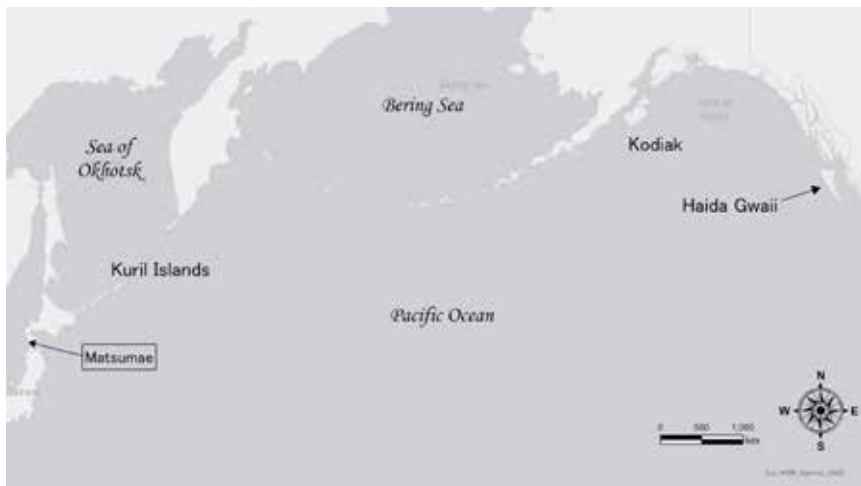


図1 北太平洋沿岸地域と本論文で扱う3島嶼の位置

## 2. サケが複雑化した社会の基盤なのか

縄文時代の東高西低の状況を示す遺跡数の差、すなわち人口の格差を説明するものとして山内が提唱したいわゆる「サケ・マス論」がある（山内 1964）。これは秋に大量に遡上するサケ・マス資源と同じ時期に結実するドングリ等の堅果類を集中的に採捕し、貯蔵することで集落を形成し、安定的な定住生活を営み、人口規模を大きくすることを可能にしたとするものである。また、同じ論考のなかで、太平洋を挟んだ東と西の対比をこのように記す。「北米の

Indian には、サケの遡上する地帯で、これをとって保存食料とする処もある。Salmon Area といわれる。南はカリフォルニアから北はアラスカに至る。これに対応するアジアの東岸もこれに似ていて、各地の原住民はサケを主食とするといってよい。その南端が北海道アイヌであり、日本の東北部である。カリフォルニア Indian は北部ではサケとドングリの両者を保存食料としている。南半ではドングリが主食である。Acorn Area といわれている。これと似て縄紋式文化圏の西南半は木の実を主食とし、東北半は木の実とサケの二本建になっていたと考えられる」。民族誌と考古学資料に依拠しながら、カリフォルニア・インディアンとアイヌから縄文社会までの豊かな食料資源に恵まれた安定的な定住社会の姿を比較して描写した。この「サケ・マス論」は実際に遺跡からサケ・マスの魚骨が出土しないことが多く、国内では大きな論争となった。近年、いるま野市前田耕地遺跡、石狩紅葉山 49 号遺跡などで、徐々に考古学的な裏付け資料も確認されつつあるが、貝塚からの出土例が少ないなどの問題点もはらんでいる。

2012 年にコロンビとブルックスが編者となり、サンタフェ高等調査研究所が主催したセミナーの成果本が刊行された (Colombi and Brooks eds. 2012)。サケは先住民族の生存と文化的アイデンティティの源泉となるキーストーンであり、先住民とサケが、歴史的にみても、特別に深く結びついていることを再認識させてくれる優れた研究である。しかし、サケだけが複雑化した社会を支えるのではない。モンクスは、サケを強調しすぎるあまり北西海岸の先住民の経済に重要であった他の資源を見落とすことを、サーモン病 (Salmonopia) と批判した (Monks 1987)。

サケが入手できるだけ、あるいはその捕獲が集中的に実行されるだけで、定住的な生活や複雑化した社会が出現するわけではない。食料が欠乏する季節に備え、捕獲貯蔵できる技術と保管場所の確保が重要である。効率的な捕獲と貯

蔵の技術が、複雑化した社会の進展には不可欠になるからである。しかし、サケが遡上したとしても、複雑化した狩猟採集民に特徴的な高度な定住性が保証されるわけではない。サケと生活の安定度との関係は、季節的に遡上するサケを、どの程度恒常的なエネルギーに変換できるかにかかっている。

### 3. 海洋航海技術にフォーカスする研究史

この方面の研究史としてまず取り上げるべきなのは、渡辺による環北太平洋文化の集中的な通文化比較研究の成果であり、その特徴が紹介されている（岸上 2015）。渡辺は環北太平洋の東と西の文化の共通点を体系的に分類した（渡辺 1988）。この論文は、同地域における船の重要性をも比較検討し、遠距離航海による異民族間交易にも言及した初期の業績として、アーノルドの海洋狩猟民における海洋技術の革新を取り扱った論文と並び、高く評価できる（Arnold 1995）。しかし残念ながら、渡辺のこの研究の続編は提出されず未完に終わっている。船は食生活関連要素の中で論じられ、社会生活や戦争とのかかわりや、遠距離航海による異民族間交易についてはごく簡単に扱われているだけである。とはいえ、環北太平洋諸文化の共通性の背後には大型の船が存在し、その存在がこれらの特徴を強化する働きを果たしていることを示唆している点で画期的な研究といえよう。

また、渡辺の 1992 年の論文では北太平洋沿岸の階層化した狩猟採集民社会に普遍的にみられる 4 つの共通点を取り上げている（渡辺 1992）。それらは、生業分化（狩猟の特殊化）と階層化、貧富差（財宝の蓄積）、行動域と知識の階層化、礼儀・作法と言葉の階層化から構成される（渡辺 1992）（図 2）。

まず、狩猟採集民社会に普遍的にみられる階層化は基本的に生業分化にもとづいており、大型獣の狩猟に特化した生業パターンを持つグループ（大型獣狩



図2 北太平洋沿岸狩猟採集民の社会的階層化にみられる共通性

獵者)と非専門者のグループ(非狩獵者)に区分される。前者は富者(指導者層)に相当し、宝物類(威信財)は、エリート階層の身分の指標であったばかりでなく、結婚関係の支払い(結納・持参金)と紛争(戦争・殺人)解決の賠償の手段として重要な社会的・政治的機能を果たしたと述べている。

行動域・知識の階層化現象については、大型獣狩獵者の行動域が非狩獵者の行動域を凌駕し、彼らが技術的・儀礼的に複雑で高度な知識を保有して地域社会の知識階級を形成した。富者(上層、指導者層、貴族)と平民の知識の差は、両者が従事する生業の差による行動域の差に一致し、行動域の格差は知識・経験の格差をともなっていると主張している。平民は旅行嫌いで考えも偏狭なのに対し、高位の人は通文化的相互作用のスペシャリストであるという。そのことから、当然の帰結として、船は行動域やそれを運用する知識、入手する資源の多寡に直接関与していることが窺い知れるのである。

礼儀・作法と言葉の階層化については、政治的・儀礼的特権とそれに起因す

る経済的余剰を支配する者は、他の人々とは異なる、複雑で洗練された礼儀作法と言葉遣いを維持していたとする。

一方、渡辺のこの2つの研究成果については、歴史的な変化を把握する枠組み（時間軸）が提示されず、もっぱら過去の伝統文化に焦点をあてており、現代の先住民諸文化と彼らの将来に触れていないとの批判がある（岸上 2022）。この問題については本稿の終盤で取り上げる。

その後も個々の地域、たとえば、千島列島のアイヌ文化期の船による長距離交易を扱った研究も公表されたが、環北太平洋の他地域との比較はまだ未着手であった（Tezuka 1998）。また、世界中の海洋航海の発展が、移動手段における技術的な進歩だけではなく、移住や地域間交易の拡大を通じ、社会や経済の変革に結びついていることを証明した画期的な研究成果が1冊の図書として刊行された（Anderson, Barrett, and Boyle eds. 2010）。この本の中では、本稿とも関係する北米北西海岸の3つの地域の複雑化した狩猟採集民の比較検討が行われており、北米の海洋に適応した社会における海洋航海の重要性が論じられている（Fitzhugh and Kennett 2010）ものの、環北太平洋の西側の地域は含まれていない。

コディアックとハイダ・グワイでは、身分格差の出現は重要な捕鯨活動の発展と一致しているとの見解がある（Acheson 2005; Fitzhugh 2003; Sampson 2023）。千島アイヌの場合も、社会階層の上部が生業・情報・交易を管理しており、先住民社会階層内の身分・立場によって、外部社会からの移入品にアクセスする度合いは異なっていることが知られている（手塚 2011）。

2024年にはファウヴェルらによるカリフォルニアと北海道の海洋技術と海洋アイデンティティに関する論文が発表された（Fauvelle, Sasaki and Jordan 2024）。アイヌの縄綴船と同種の準構造船の特徴を持つチュマシュ（Chumash）の海洋航海船トモル（tomol）の2つを比較している。結論部分では、進化し

た船の出現と社会の階層化の相関関係を、技術革新、交易の拡大、人口増加、アイデンティティの確立という4つの現象と関連させて弁証法的に論じている。

#### 4. 島嶼への適応パターン

大陸と島嶼の関係については、生物地理学理論や社会生態システムの研究の蓄積から一般に以下のような各段階からなるモデルを提示できる (Holling and Gunderson 2002)。

- ①島は資源の連続性のある大陸と違い、高度な航海技術が要求され、低い人口支持力に加え、大陸の源流地で培った知識が通用しないなど、その環境に適応するのは困難である。そこで本土（出発地）との経済的・社会的交流が維持される必要がある。本土との間を行き来する一定の手段は存在していた。
- ②島の環境に適応し、内陸だけでなく海洋の資源をうまく活用することが可能になる。島での適応がうまくいけば人口が増加する。環境収容力の高い島では、本土との交流は減少し、航海手段は周囲の資源開発、近隣地への移動が中心となる。
- ③生息地が飽和状態になり、人口が拡大し、重要な資源をめぐる競合は激化し、同盟関係、交易、戦争を助長する。一部の人々が、他人を排除しつつ重要な資源の排他的な支配と外来品へのアクセスから利益を得るような象徴経済・威信経済の段階に移行する。複雑な狩猟採集社会への移行（階層性）が特徴であり、特定の身分・地位に富が集中する。この段階では本土などの他地域との交流が鍵となる。
- ④効率的な資源・資本の集約が行われ、資源利用が安定しているものの、新規性や柔軟性は失われ、そこに外部からの何らかの攪乱や衝撃によって崩壊が

生じ、諸資源やエネルギーが消費され、古い適応システムは崩壊し、新たなシステムが再構成される。

つまり、島嶼環境へ進出した当初は、島外の資源を持ち込んで利用するが、その後、新しい環境に適応するなどして「自給自足」の度合いが高まれば、島外よりも島内の資源への依存を深めることが予想される。③のような政治的な競合が発生する段階に移行すれば、以前よりも広範囲で長距離の交流が行われるなどして、再び島外の物資を用いる可能性が高まる。この形態は、種々の要因（環境変化、移住規模・頻度、島嶼サイズ、島と本土の距離、生業・造船技術）によっても影響を受ける。

## 5. 島嶼地域の拡散と適応

千島列島への人の移住は、現地調査の結果、おおむね以下のような段階をへて行われたと考えられている（手塚 2011）。続縄文文化期に中部千島列島までの一時的な進出がみられるものの、オホーツク文化期に入るまで千島列島全域に居住域を拡大することはできなかった。アイヌ文化に先行するオホーツク文化の船の利用に関して、大井は集中的な調査の結果、「それらの船はけっして長途の、少なくとも数日以上の、航海を想像せしめるものではなかった」と、総括している（大井 1976）。千島列島の多くの地域では、造船に適した木材利用は難しかったため、日常の生業活動での使用がメインであったと考えられる。

ハイダ・グワイ諸島では、後期更新世に最古の遺跡が形成されるが、およそ 12000 年前には本土と地続きになっていたことから、船による植民が行われたかどうかは判然としない。北米の西部沿岸では、全球的（ユースタティック）な海水準変動によって、中期完新世以前の移住の証拠は見えないことが多

い。北米北西海岸では、中期完新世以降にスギ林の自然拡大によって大型カヌーの建造に適した木材が供給されるようになると、海岸の広大な範囲における航海と社会的交流が増加したことが示唆されている (Ames and Maschner 1999) もの、本格的な大型船の建造が始まるのは、後期完新世をまたなければならなかった。

コディアック島では、タンギナク・スプリング遺跡から得られた証拠から、7500 年前に人々が列島に移住しており、大陸に住む集団との定期的な接触を維持していた (フィッツヒュー 2002, Fitzhugh 2003)。コディアック島やさらに北方地域では、流木の骨組みに海棲哺乳類の皮を張った大型の皮船が出現する。

## 6. 後期完新世における 3 地域の共通性

これら 3 地域の考古学的な成果に依拠すれば、初期の居住から数百年～数千年の期間、現地の資源に依存を深める自給自足の期間があったことを示唆している。また、それぞれの地域の長期の文化編年 (表 1) にもとづくと、共通した特徴が後期完新世に登場していることがわかる。それらは主に、人口増加、社会階層化 (奴隷の存在)、狩猟・交易・戦争の集中 (威信活動による地位向上の欲求)、専門化 (生業活動の強化) と技術革新 (大量の荷物を運び、長距離航行が可能な大型船の建造) であった (図 3)。

中期完新世では、以上の特徴がすべて出そろっているわけではないことに注意を向けなければならない。北米北西海岸地方では、狩猟採集民における世襲的地位の不平等性といった特徴は、4000 年前以降に生じ、それらは後の同地域の複雑化した狩猟採集民の形成へとつながっていくとされている (Prentiss 2011)。

表 1 3 地域の完新世に関する文化編年  
Ames and Maschner 1999, Fitzhugh and Kennett 2010, 手塚 2011 から作成

|        | 文化期      | およその暦年代          | 地質学年代    |
|--------|----------|------------------|----------|
| コディアック | 後期コニアク   | 500-Conatct      | 後期完新世    |
|        | 前期コニアク   | 700-500BP        | 後期完新世    |
|        | 後期カチェマク  | 2600-700BP       | 後期完新世    |
|        | 前期カチェマク  | 3800-2600BP      | 中期完新世    |
| ハイダグワイ | 後期バシフィック | 1800/1500-接触期    | 後期完新世    |
|        | 中期バシフィック | 3800-1800/1500BP | 中期/後期完新世 |
|        | 前期バシフィック | 6400-3800BP      | 中期完新世    |
|        | アーケイック   | 12500-6400BP     | 前期完新世    |
| 千島列島   | アイヌ      | 500-Contact      | 後期完新世    |
|        | オホーツク    | 1300-600BP       | 後期完新世    |
|        | 続縄文      | 2500-1300BP      | 後期完新世    |
|        | 後期/晩期縄文  | 5000-2500 BP     | 中期完新世    |
|        | 早期/中期縄文  | 8000-5000 BP     | 早期/中期完新世 |

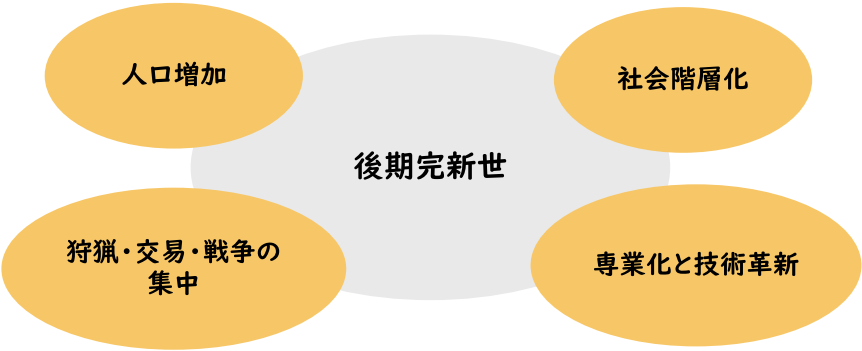


図3 後期完新世と3地域の共通点

大型の船の登場に関し、千島列島ではその証拠は、後期完新世のアイヌ文化期になるまでみつかっていない。オホーツク文化期には千島列島全域に遺跡が広がる一方で、カムチャツカ半島に遺跡の存在は確認されていない。千島列島では船製作に必要な大型木材の取得は困難であるが、15世紀からロシア人との接触の直前に相当する17世紀前半までアイヌ文化に関連する遺跡の分布は、カムチャツカ半島南部地方にまで広がるために、大型船制作にふさわしい木材が調達できたと考えられている（高瀬 2015, 2023）。

アイヌのいわゆる「縄綴船」は、イタオマチエ（itaomacip）とも呼ばれ、北海道本島でも使用されたが、千島列島で使用されたものは一般により大型で走破性も高い（図4）。その構造・技術と歴史には多くの先行研究があるので、構造、歴史、慣習を簡潔に紹介する。

船底に一本を刳りぬいた丸木舟を置き、両舷および船首と船尾に複数の板を縄で綴じつけて積載容量を増やし、波除の機能を持たせることから準構造船の



図4 18世紀の千島アイヌに利用された大型縄綴船  
（大塚和義編著・国立民族学博物館編 2001）

特徴を有する。また、蓆でつくった帆と木製の櫂が使用されている。帆の利用について北米では、ヨーロッパ人との接触期以降に普及するとされるが、アイヌの場合は古くから用いられていることが確認されており、これが和人の製作技術の影響なのかどうかは不詳である。両舷に突起のついた櫂座(タカマチ)を設け、車櫂の基部に空いた穴に通して前後に動かし推進具とする。甲板は設置しない。1890年に北海道を旅したランドーは、アイヌのこうした船の長さについて記している。それによると全長3～4.6m、全幅0.9～1.1mと小型であり、ちょっとしたスコールでも転覆するような代物であったという(ランドー1985)。

一方、秦檜庵の『蝦夷島奇観』には大船図があり、「キイタップ、クナシリ邊の夷」が船を飾りつけ、松前藩主や箱館奉行に「お目見え」(ウイマム)する際に、「7尋半許」とあるので一尋を五尺とするか六尺とするかで異なるが、全長11.3m～13.6mの大型船が存在したことを記している。また、千島列島中部に位置するラショア島からアイヌ14人が1805年にロシア人の命によりエトロフ島の様子を探るために船で来航し、津軽藩士に捉えられ、シャナ会所に拘禁された事件があり、『休明光記』に記録されている。この際に乗船1艘が吟味され、「長六間半 深三尺餘」(『休明光記』)とあることから、全長約11.7m、深さが約90cm余りあり、14人の乗員が乗船できたことになる。

大船を建造する際に、10mを越すような舟數以外にも大型の板の確保が欠かせない。近代のアイヌの物質文化の特徴として、鋸の存在は希薄であり、かつては鋸を多用したか、和人地で板材を直接入手した可能性もある。18世紀にはこうした船は誰もが製作できるわけではなく、首長層が制作と使用を独占し、首長またはその妻が所有し、それを一定期間貸付け、漁獲物を賃料とする慣習もあった。また、旅に出た長老が長い航海から帰還すると、船上と陸地の双方で、人びとは槍と刀を振り上げ、叫びつつ地面を踏みしめながら行進す

るという儀礼を行った。これは遠来の客人を迎え入れるための儀礼とされ、18世紀後期には和人とロシア人により千島列島でたびたび目撃されている（瀬川 2013）。海上からの侵入者との戦闘を演劇化しており、その背景には船による襲撃の記憶が反映しているかもしれない。

歴史に関しては、札幌市 K30 遺跡からは9世紀の地層（擦文文化期）から舟敷舷側部片が出土し、最古の縄綴船の事例とされている（鈴木 2003）。1520年から1620年代まで北海道の近世史で「城下交易」と呼称されるアイヌと和人が松前城下で活発な交易活動を展開する時期には、アイヌが千島海域から北海道南西端の松前城下まで片道約千キロを90日間かけて移動する長距離交易を実施していたことがイエズス会士の記録から知られている（チースリク 1962）（図1）。民族誌や明治期に記録される小型の縄綴船とは全くことなる、積載容量と航海性能を高めるための大型縄綴船の存在が知られていた。航海の途中でボートを陸地に引き上げ、船体を解体して板材を乾かすなどのメンテナンスをおこなう必要があった。

以上のことから、北海道では縄綴船の出現は9世紀代に遡り、アイヌと和人の交易活動が進展する元和年間頃には、アイヌが大型の縄綴船に乗って自由に往来する時代があった。しかし、商場知行制に移行し、アイヌが蝦夷地内にその活動を限定されるようになると、次第に大型の縄綴船が使用される機会は減少するようになったと考えられる。

本土から遠く隔たった島々に住むハイダ族は、必然的に海と陸地を往来する民族であった。全長18.3メートルもある大型カヌーで交易船団を組み、ビクトリアまでの往復1600キロを航海した（Stewart 1984）（図5）。ハイダ族は、バンクーバーからコッパ・リバーに至る北米北西海岸の他のすべての民族と、彼らの巧みに作られたカヌーを取引した。クイーン・シャーロット諸島の巨大なレッドシーダーから積載量6～8トン、長さ60フィート以上のカヌーを製

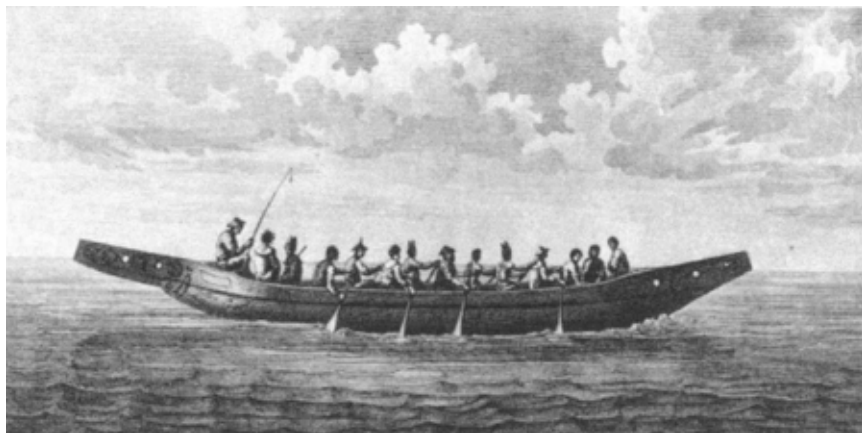


図5 ハイダ族の大型カヌー (Emmons 1991)

作することができた。取引の際、先住民の時間観念に従って、交渉に長い時間を費やすことが往々にしてあった。先住民の儀式、歌、踊り、富の披露は、通常、交易のプロセスの一環であったことを、欧州からやってきた航海者が記録している (Fisher 1996)。北西海岸の先住民は大型の戦争用カヌーを漕ぎ出し、奴隷を確保するために遠隔地の村々を襲うハイダ族の存在を知っており、その対策も講じていたという (Reid 2015)。

後期完新世の初期、約 2000 ～ 2500 年前から、コディアック島では政治的競争の証拠が増加する。地域的な社会的階層化の兆候が見られ、戦争で捕虜とされた奴隷も存在した。以前は使用されていなかった外来材料の使用が見られるようになる (Steffian and Saltonstall 2001)。クジラの捕獲や、局地的な防御施設の充実など、政治的な競合の証拠が増加した (Fitzhugh 2003)。

ダヴィドフによれば、アラスカ海域では、一度に数十人を運べる規模の大型ボートが作られ、これらの航海は片道 900km にも及んだ (Davydov 1976)。こうした皮舟はアングヤック (angyag) (複数形は angyat) と呼ばれ (ロシア語

ではバイダーラ baidara とという), 長距離の交易遠征や戦争, 村落間の移動に使われた大型のオープンボートである (図 6)。アングヤックは軽くて丈夫な木製のフレームを持ち, そのフレームは鯨のヒゲで結わえ付けられている。このため柔軟性に富み, 荒波の中でも折損を防ぐことができた (Crowell, Steffian, and Pullar eds. 2001)。ステファンソンは, 皮船は, 縫い目を締めて腐敗を防ぐために, 数日ごとに乾燥させる必要があったという (Stefansson 1913)。陸地で野営する際にはこの船をひっくり返して小屋として使うことも一般的であった。

北アメリカの太平洋岸では, ボートの容量は後期完新世の後期に拡大し, 戦闘行為の激化にも関与している (Fitzhugh and Kennett 2010)。航海の安定性とはともかく, ボートは国内生産だけでなく, 威信をかけた交流や戦争にも使われるようになった。ボートの大型化は, 生業経済から象徴経済・威信経済への移行にも密接に関与していることを示している。

これは, 3 地域の船の名称, 全長, 構造, 装飾塗装, 素材, 継ぎ目加工, 推進具, 出現期, 航続距離, 主要目的をまとめたものである (表 2)。考古学的証拠にもとづくならば, 北海道では縄綴船の出現はもっと早い。



図 6 アングヤックの模型 (Crowell, Steffian, and Pullar eds. 2001)

表2 3地域の船の比較

|       | コディアック                | ハイダグワイ                      | 千島列島         |
|-------|-----------------------|-----------------------------|--------------|
| 名称    | Angyaq                | Thlu-kah-ku-uke             | Itaomacip    |
| 全長    | 12m                   | 18m                         | 14m          |
| 構造    | 木製桹, 平底, 皮革, 二股船首     | 削舟、木製船尾、木製船首、<br>綴じ合わせた側板   | 削舟, 綴じ合わせた側板 |
| 装飾塗装  | 可能性あり                 | 有                           | 有            |
| 素材    | 木桹, クジラ髭              | レッドシーダー                     | カツラ, シナノキ    |
| 継ぎ目加工 | アザラシ皮またはアシカ皮でできた防水カバー | 炭とアザラシ油の混合物, トウ<br>ヒまたはスギの根 | 苔, シナノキ繊維    |
| 推進具   | 櫂                     | 櫂                           | 車櫂 / 帆       |
| 出現期   | 1000BP                | 1900BP                      | 500BP        |
| 航続距離  | 900km                 | 1600km                      | 1000km       |
| 主要目的  | 交易, 移動, 搬送            | 遠征, 戦闘                      | 交易, 戦闘       |

Crowell, Steffian and Pullar eds. 2001, Emmons 1991, Fitzhugh 2003, Miller 2010, Stewart 1984, 大塚和義編著・国立民族学博物館編 2001, 小林 1988, チースリク 1962 などから作成

## 7. 複雑化した狩猟採集社会の歴史的展開過程

環北太平洋の諸民族の文化的共通性を生態人類学的視点と伝播論的視点を組み合わせて解明しようとした渡辺の先駆的な業績（渡辺 1988, 1992）に対して、歴史的な変化を把握する枠組み（時間軸）が提示されていないとの批判があることを先述した（岸上 2022）。この欠点を克服するためには、図7に示したように、具体的にいつの時期を指すか不明なことの多い「民族誌現在」の観点から脱却し、各文化要素間の相互作用を歴史的なプロセスとして理解する必要がある。各要素は同時に出現するわけではなく、それぞれが相互に影響しながら変化してきた流れを動的に捉えることができる。この図では時間は左から右に経過する。

大陸から島嶼部への移住のあとに、特定生息地内の資源を効率的・安定的に

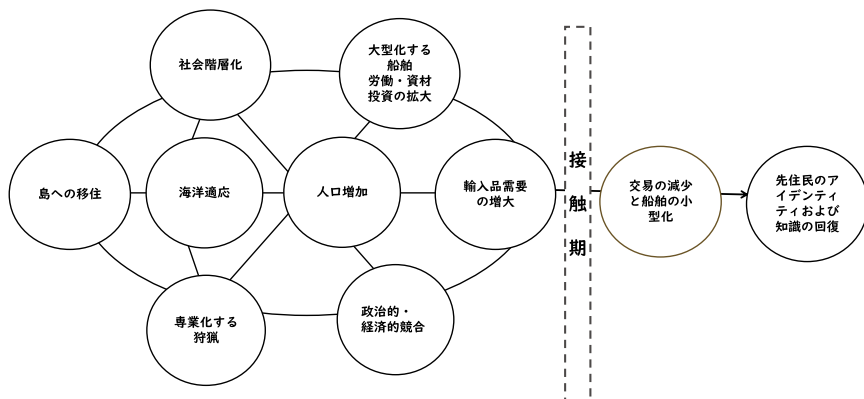


図7 複雑化した狩猟採集社会の歴史的展開過程

利用する手段を確立できれば、人口増加につながる。多くの場合、それらは安定した海洋適応による食料の獲得を意味している。

いずれの地域でも、海洋資源の効率的な開発により、定住化が進み、人口は増加し、余剰が蓄えられやすくなるという状況が生まれた。海水準が安定し (Fladmark 1989)、航海に適した環境が整ったことも大きい。また、素材が入手できる環境に居住域を拡げる試みも無視できない。外部社会から流入した珍しい移入品が、階層化した社会の発展を支えた側面もあるだろう。

交易価値の高い資源を生産するためには、特殊な技術と投資が必要であり、すべての人が狩猟活動に従事できるわけではない。大型の準構造船と皮舟は技術革新の結晶であり、小型のものから徐々に発展していった。建造には特殊な技術と原料が必要であり、労働や制作に多大なコストがかかった。環北太平洋において、こうした船の使用は、社会的・政治的な複雑さの増大と一致しており、技術的により複雑な船の設計は、造船のスポンサーとなる首長の威信を高めることにつながった。また、海を利用した狩猟・交易・戦争・儀礼が可能に

なったことで、社会階層化、安定した定住化、首長制社会の形成を促した。

狩猟が専門化するようになると、その結果として知識・儀礼が特殊化する。交易や略奪のための航海を支援できる富裕な首長層や、クジラ、海獣類、大型魚類など危険な獲物を外洋で狩猟できる首長層は、威信を高め、外来の物資をより多く入手するための長距離航海を企て、社会内部での序列に基づき、富の蓄積は次第に非対称の様相を呈しはじめる。政治的・経済的な競合は一段と高まり、より長距離を、より大量の交換品とより多くの戦士を載せて移動するために、さらなる技術革新が船の大型化を促進させる。交易は単に経済活動の側面からのみ説明されるべきではなく、精神文化ともかかわる種々の精巧な儀礼が付随する。したがって、接触期後しばらくたって人口が減少し、交易が衰退すると、そうした儀礼もまた消失することになる。

技術革新は外部からの略奪を誘発しやすくするなどの副作用もある。本格的な接触期を経て、長距離交易は衰退し、船体は小型化し、近海や河川での狩猟が中心になる。しかしながら現代は、海洋航海の記憶が文化復興や伝統的知識の継承に貢献している。

1875年の日露間で締結された樺太・千島交換条約によって、千島アイヌは残念ながら、千島列島内における北から南への移住を促され、海洋航海の伝統はいったん途絶えたかに見えた。しかし北海道では1980年代頃からこのアイヌの優れた民俗知を現代によみがえらせ、そこに込められた祖先たちの知恵のエッセンスを学び取り、そこからアイヌ民族のアイデンティティを再興するというプロジェクトがイタオマチを中心にして実施されてきた（大塚 1995）。これらの製作物は日本国内の博物館に納入されることも珍しくない。同様に今日のコディアック島でも、アングヤック民族プロジェクト（Angyaq Tribal Project）を通じ、伝統的な大型皮船を復元し、実際に航走する取り組みが行われ、若い世代を含む地域コミュニティの再生・復興の原動力となっている。いずれ

の地域でも伝統的な船や航海に関する知識の拡充が先住民のアイデンティティの基盤になっていることを確認できる。現代ではこうした船を再現し、実際に海上を走らせることにより、知識伝承や文化の復興への機運が高まっている。

(てづか かおる・北海学園大学人文学部教授)



図8 2002年に新ひだか町で復元された  
イタオマチブ  
(石川県立歴史博物館・小樽市総合博物館  
編 2022)



図9 コディアックのアキアックの若者が  
2016年に復元したアングヤックを漕走  
(パーク博物館で筆者撮影)

## 謝 辞

本稿の作成において、野口泰弥氏（国立民族学博物館）と査読者から建設的な助言を多数いただいた。末筆ながら感謝申し上げる。

本稿の執筆に当たり、令和6年度学術研究助成費（一般研究）を使用したことを付記する。

## [引用参考]

Acheson, S.R.

2005 Gwaii Haanas Settlement Archaeology. In D.W. Fedje, and R.W. Mathewes (eds.) *Haida Gwaii: Human History and Environment from the Time of Loon to the time of the Iron People*, pp. 303-336. Vancouver: UBC Press.

Ames, K.M. and, H.D.G. Maschner

- 1999 *Peoples of the Northwest Coast: Their Archaeology and Prehistory*. London: Thames and Hudson.
- Anderson A., J. H. Barrett, and K.V. Boyle (eds.)  
2010 *The Global origins and Development of Seafaring*. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research.
- Arnold, J. E.  
1995 Transportation Innovation and Social Complexity among Maritime Hunter-Gatherer Societies. *American Anthropologist* 97 (4):733-747.
- Blackman, M.B.  
1990 Haida: Traditional Culture. In S. Wayne (ed.) *Handbook of North American Indians Northwest Coast* 7, pp.240-260. Washington D. C.: Smithsonian Institution.
- Colombi, B.J. and J.F. Brooks (eds.)  
2012 *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*. Santa Fe: School for Advanced research press.
- Crowell, A.L.  
1997 *Archaeology and the Capitalist World System: A Study from Russian America*. New York and London: Plenum Press.
- Crowell, A.L., A.F. Steffian, and G.L. Pullar (eds.)  
2001 *Looking Both Ways: Heritage and Identity of the Alutiiq People*. Fairbanks: University of Alaska.
- Davydov, G.I.  
1976 A Selection of G.I. Davydov: An Account of Two Voyages to America. *Arctic Anthropology* 8:1-30.
- Emmons, G.T.  
1991 *The Tlingit Indians*. Vancouver: Douglas and McIntyre.
- Fauvelle, M, S. Sasaki, and P. Jordan  
2024 Maritime Technologies and Coastal Identities: Seafaring and Social Complexity in Indigenous California and Hokkaido. *Indigenous Studies and Cultural Diversity* Vol.1 (2): 30–52.
- Fisher, R.  
1996 The Northwest from the Beginning of Trade with Europeans to the 1880s. In B. G. Trigger and W.E. Washburn (eds.) *The Cambridge History of the Native Peoples of the*

- Americas* Vol. 1 Part 2, pp.117-182. New York: Cambridge University Press.
- Fitzhugh, B.
- 2002 Residential and Logistical Strategies in the Evolution of Complex Hunter-Gatherers on the Kodiak Archipelago. In Fitzhugh, B and J. Habu (eds.) *Beyond Foraging and Collecting: Evolutionary Change in Hunter-Gatherer Settlement Systems*. New York: Kluwer Academic/ Plenum Publishers.
- 2003 *The Evolution of Complex Hunter-Gatherers: Archaeological Evidence from the North Pacific*, pp.257-304. New York: Kluwer Academic and Plenum Publishers.
- Fitzhugh, B. and D. J. Kennett
- 2010 Seafaring Intensity and Island-Mainland Interaction along the Pacific Coast of North America. In A. Anderson, J.H. Barrett, and K.V. Boyle (eds.) *The Global Origins and Development of Seafaring*, pp.69-80. Cambridge: University of Cambridge.
- Fladmark, K. R.
- 1989 The Native Culture History of the Queen Charlotte Islands. In, G.G.E. Scudder and N.T. Gessler (eds.) *The Outer Shores*, pp.199-222. Queen Charlotte City: Queen Charlotte Museum.
- Holling, C.S. and Gunderson, L.H.
- 2002 Resilience and Adaptive Cycles. In L.H. Gunderson, and C.S. Holling (eds.) *Panarchy: Understanding Transformations in Human and Natural System*, pp.25-62. Washington D.C.: Island Press.
- Monks, G.G.
- 1987 Prey as Bait: The Deep Bay Example. *Canadian Journal of Archaeology* 11:119-142.
- Miller, G.A.
- 2010 *Kodiak Kreol: Communities of Empire in Early Russian America*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Prentiss, A.M.
- 2011 Social Histories of Complex Hunter-Gatherers. In Sassman, K.E. and D.H. Holly (eds.) *Hunter-gatherer Archaeology as Historical Process*, pp.17-33. Tucson: The University of Arizona Press.
- Reid, J.L.
- 2015 *The Sea is My Country: The Maritime World of the Makahs*. New Haven and

- London: Yale University Press.
- Sampson, C.P.  
 2023 Introduction. In Sampson C.P. (ed.) *Fisher-Hunter-Gatherer Complexity in North America*, pp.1-19. Gainesville: University Press of Florida.
- Stearns, M.L.  
 1990 Haida since 1960. In Wayne, S. (ed.) *Handbook of North American Indians Northwest Coast* 7, pp.261-266. Washington D. C.: Smithsonian Institution.
- Stefansson, V.  
 1913 *My Life with the Eskimo*. New York: The MacMillan Company.
- Steffian, A.F. and P.G. Saltonstall  
 2001 Markers of Identity: Labrets and Social Evolution on Kodiak Archipelago. *Alaska Journal of Anthropology* 1(1): 1-27.
- Stewart, H.  
 1984 *Cedar: Tree of Life of the Northwest Coast Indians*. Vancouver and Toronto: Douglas and McIntyre.
- Tezuka, K.  
 1998 Long-distance Trade Networks and Shipping in the Ezo Region. *Arctic Anthropology* 35(1):350-360.
- 石川県立歴史博物館・小樽市総合博物館編  
 2022『アトウー海と奏でるアイヌ文化』札幌：公益財団法人アイヌ民族文化財団。
- 大井晴男.  
 1976「オホーツク文化の船」『北方文化研究』10：1-30。
- 大塚和義  
 1995『アイヌー海浜と水辺の民』東京：新宿書房。
- 大塚和義編著・国立民族学博物館編  
 2001『ラッコとガラス玉ー北太平洋の先住民交易』大阪：千里文化財団。
- 岸上伸啓  
 2015「環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学研究の歴史と現状ー日本人による文化人類学的研究を中心に」『国立民族学博物館調査報告 132：7-77。  
 2022「環北太平洋地域の先住民文化に関する比較研究ー大林太良、渡辺仁と国立民族学博物館の研究プロジェクト」北海道立北方民族博物館編『大林太良・学問と北方文化研究ー大林太良先生没後20年記念シンポジウム』(第35回北方民族文化

シンポジウム) pp.41-46, 網走：北方文化振興協会。

小林真人

1988「蝦夷船について」北海道・東北史研究会編『北からの日本史』(函館シンポジウム) pp.260-268, 東京：三省堂。

鈴木信

2003「擦文～アイヌ文化期の準構造船」松藤和人編『考古学に学ぶ』2 (同志社大学考古学シリーズ刊行会) pp.709-720.

瀬川拓郎

2013『アイヌの沈黙交易－奇習をめぐる北東アジアと日本』東京：新典社。

関雄二編

2017『アンデス文明－神殿から読み取る権力の世界』京都：臨川書店。

高瀬克範

2015「カムチャツカ半島南部出土内耳土器とその千島アイヌ史上の意義」『論集忍路子』4：17-45。

2023「千島アイヌの成立と展開」高瀬克範編『北海道考古学の最前線－今世紀における進展』pp.143-145.

チースリク, H. 編

1962『北方探検記－元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書』東京：吉川弘文館。

手塚薫

2011『アイヌの民族考古学』東京：同成社。

フィッツヒュー, ベン

2002「北太平洋における海洋狩猟採集民の起源－コディアック島の事例から」『国立民族学博物館調査報告』33：49-82.

山内清男

1964「日本先史時代概説」『日本原始美術1 縄文土器』講談社。

ランドー, A.S.

1985『エゾ地一周ひとり旅－思い出のアイヌ・カントリー』東京：未来社。

渡辺仁

1988「北太平洋沿岸文化圏－狩猟採集民からの視点 I」『国立民族学博物館研究報告』13(2)：297-356。

1992「北洋沿岸文化圏－狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」宮岡伯人編『北の言語－類型と歴史』pp.67-107, 東京：三省堂。

# 笹井宏之の短歌の研究 その二

―第二歌集『てんとろり』における身体語彙「ゆび（指）」を中心に―

大村 勅夫

一、はじめに（問題の背景）

稿者は前稿となる拙稿（二〇二四）において、小中高の児童生徒を短歌初学者とし、短歌初学者にとつての現代短歌、中でも、笹井宏之の第一歌集『ひとさらい』（書肆侃侃房、二〇〇八）の歌を評釈・考察した<sup>〔一〕</sup>。ここでは、『ひとさらい』の歌には身体語彙「手」が多用されており、それらは「変成」そして「希求」の歌であることを考察し、笹井短歌は短歌初学者にとって価値や魅力のあるものであることを述べた。本稿は前稿の継続研究として、第二歌集『てんとろり』（書肆侃侃房、二〇一一）の歌を評釈・考察

するものである。なお、『てんとろり』には、歌誌などに掲載されたものだけでなく、佐賀新聞に掲載された三七首も併せて収録されている。ただし、『ひとさらい』編纂にあたり、笹井自身が佐賀新聞掲載のものを収録せずにいるため、そのことを踏まえ、これらについては本稿での対象の外とし、本稿ではこれら以外の四一四首を対象とする。

笹井宏之、そして、笹井の短歌は、今また、注目されている。テレビ番組で特集されたり、笹井の名を冠した短歌賞も6回を数えたり、高校国語教科書に掲載されたりなどである。特に、高校国語教科書の掲載は、必修科目「言語文化」の1冊だけであつたものが、その発展的選択科目である「文学国語」の1冊にも一首ではあるが、掲載された<sup>(2)</sup>。すなわち、笹井の歌は、必修科目の教科書という人口に膾炙するレベルのものであり、かつ、選択科目という追究を到達とする教科書に適した材である、という証左ともいえよう。現代短歌としての笹井の歌が、穂村弘や俵万智の歌に比肩するのとらえ方がなされている、と考えるのもそれほどおかしいものではないだろう。笹井宏之の短歌を研究することはそれほど価値があるのである。

前稿では、『ひとさらい』の特徴として、身体語彙「手」の多用を明示した。二六九首中、実に、十五首十八回用いられている。身体語彙の中では最多であつた。では、『てんとろり』ではどうかだろうか。『てんとろり』での四一四首のうち、身体語彙「手」使用の歌は、十一首であつた。「手」使用の歌は第一歌集・第二歌集どちらもほぼ同じ数であり、やはり、笹井の歌にとって「手」が重要であり、特徴であることがわかる。ただし、『てんとろり』には、もう一つの特徴があつた。それが、身体語彙「ゆび（指）」の多用である。『てんとろり』において「ゆび（指）」を使用している歌は十四首十四回である。三%強

の歌に使用されており、「手」の歌よりも多い。また、『ひとさらい』においては「ゆび（指）」の用いられているのは四首四回であったことと比べても非常に特徴的である。そこで本稿では、まず、『てんとろり』における「手」の歌を評釈・考察し、『ひとさらい』における「手」の歌と比較・考察する。次に、『てんとろり』における「ゆび（指）」の全歌を評釈・考察し、笹井短歌における「手」と「ゆび（指）」について考察するものとする<sup>(3)</sup>。

前稿において、稿者は現代短歌における「手」の歌を、「手」を通しながら作中主体の気づきや想いを表現したもの、すなわち、今そこにあるものやことについての改めての発見や、そこから以降を想像して詠んだものが多いと考察した。では、「ゆび（指）」の現代短歌はどのようなものなのだろうか。

まず、近代短歌と比較する。掲載歌数が一五万首超である「近代短歌データベース」からとらえると、ここでは、「ゆび（指）」は四一六件である。これは、「手」の二三五一件に比べ、大きく様相を異にしている<sup>(4)</sup>。同じく、比較として、野浪正隆（二〇一〇）より、近代小説における「ゆび（指）」の出現率を調べたところ、十四位であった<sup>(5)</sup>。これも、「手」が出現率一位であり、かつ、二位以下を大きく引き離しており、大きく異なっているのである。これらのことから、「ゆび（指）」の使用は、近代短歌・近代小説のいずれにおいても、「手」と比べて少ないことがわかる。

次に、現代短歌による「ゆび（指）」の使用をとらえる。前稿と同様に、山田航（二〇一五）および東直子ら（二〇一八）を用い、笹井宏之と同世代の歌人作品を参照する<sup>(6)</sup>。すると、ここでは「ゆび（指）」の歌がそれぞれ、二二人四〇首・十四人十六首であり、併せると、二九人四三首であった。両書併せると三〇〇〇首近くが掲載されているため、一％強に使用されていることがとらえられる。

これらのことから、『てんとろり』における「ゆび（指）」の歌は、近現代短歌においても顕著に多いということが出来るだろう。単に『てんとろり』の中で多いだけでなく、笹井短歌そのものの特徴といえるのである。

ところで、河路由佳（一九九九）は、「現代では指を扱った秀歌は少なくない」とし、「ゆび（指）」を歌語としたものとして、吉野秀雄・春日井建などの作品を例歌としてあげている<sup>(7)</sup>。そして、その例歌に共通するのは「命」「生」であることがとらえられる。

## 二、『てんとろり』における「手」の歌

『てんとろり』において「手」の歌は十一首ある。ここでは、そのうちの三首を抽出し、評釈を試みる。

### 49 カフェオレの匂いのなかでいちまいずつ恋人に手のひらを渡した

五七六五九である。

三句の六音により、その「いちまいずつ」がかかる「渡した」行為のぎこちなさや丁寧さなどがとらえられる。「カフェオレの匂いのなか」とあり、そこには「匂い」だけでなく、温かさも満ちているだろう。また、「カフェオレ」からは、苦みが抑えられたまろやかさがある。そのような状況での「恋人に手のひらを渡す」行為を作中主体はしている。すなわち、この行為自体が、温かなもので、まろやかなものだ

ということである。「手のひらを」「いちまいずつ」は奇妙も感じるものではあるが、いくつかのこととらえられる。まず、「いちまいずつ」から、その「手のひら」が薄っぺらであり、そのため、「渡」す行為や「手のひら」を握む行為に丁寧さが感じられる。次に、「ずつ」から、「手のひら」は何枚もあり、そのいくつをも繰り返し、「恋人に」「渡した」のであり、「恋人」への確かな思いが感じられる。すなわち、この歌の各所から、「恋人」に対する作中主体のポジティブな思いが表されているのである。中でも、「渡した」ものが、手そのものや手の甲などではなく、「手のひら」であることから、何かを受け取ろうというベクトルが感じられる。「恋人」の全てを肯定しよう・受容しようとの思いがとらえられる。「渡し」つつも受け取ろうとの双方向的ベクトルがとらえられるのである。「手のひら」が非常に効果的な歌語となっているといえよう。「認識」の歌である。

#### 194 手のひらのはんぶんほどを貝にしてあなたの胸へあてる。潮騒

五七五七七、あるいは、五七五十四である。初句での「h」音から導かれ、二句に「h」音、「ん」音、濁音を連続させることにより、リズムカルなものが生まれている。結句に句点を使い、切れ目をつくっている。

巻貝などを耳にあて、そこから海の音Ⅱ「潮騒」が聴こえる、といった言説を想起させる。この歌では、その巻貝に模して「手のひらのはんぶんほど」を用いている。手の指が巻貝の文様になぞらえられているのである。その上で、耳にあてるのではなく、作中主体は「あなたの胸へ」その「手のひらのはん

ぶんぽど」を「あてる」。ただし、貝に模しているのはあくまでも「はんぶん」であり、残りの半分は「手」のままで作中主体の耳に当てているのだらう。作中主体には「あなた」の命の鼓動が聴こえているのである。その鼓動がまるで「潮騒」のように聴こえるのである。波とは決して一定ではない。その一定でないところが、「h」音、「ん」音、濁音の規則的ではない並びの音にも表されている。

ところで、句点について考えたい。先に「潮騒」は「あなたの胸」の音と書いたが、それは句点という切れ目により、別のものもとらえられるのである。すなわち、この「潮騒」は「あなたの胸」のものだけでなく、作中主体の鼓動でもあるのである。「あなたの胸」に触れるという行為には、親密性を感じられる。かつ、その「あなたの胸」と作中主体の顔とは、「手のひら」のみが間に存するだけである。命と命とが、人と人とが、まさに相対しているのである。そこには独特の緊張感があるだらう。それが、「あなた」にも作中主体にも、「潮騒」となって表れていることを気づいたのである。「認識」の歌である。

## 297 耳のうらからはえてきた菩提樹の若葉をなでているあなたの手

五七五七七、あるいは、七五五九五である。初句や四句に句またがりかとらえられる。「耳」で始まり、「手」で終わる体言止めとなっている。また、「菩提樹の葉」を軸として、その前後が「体言」「の」「体言」「動詞」、「動詞」・「体言」「の」「体言」と相似的になっている。

まず、「あなた」についてはつきりとらえられるのは、「手」があることと、「菩提樹の若葉をなでている」ことの2つのみである。次に、「菩提樹」が「はえてきた」のは誰であるかを考えると、「あなた」、作中主体、

この二者以外の誰か、である。「はえてきた」のが「あなた」であれば、自身に「はえきてきた菩提樹」を自身の「手」で「なでている」景を作中主体が見ていることとなる。自讃・自愛のような情景であろう。また、作中主体であれば、作中主体の「耳のうら」に「菩提樹」が「はえてきた」のであり、それを「あなたの手」で「なでている」情景を作中主体が直接に見ることはできない。あるいは、作中主体が自身の「耳のうら」に「はえてきた」「若葉」を知覚しており、それを「あなた」が「なでている」ならば、「菩提樹」という特定は、鏡でも見て気づいたのでもないだろう。自身を確認しつつ客観視していることとなる。そのいずれもが、その景や行為からの、「自」への想いであったり、満足感のようなものであったりなどが浮かび上がる。いずれも可能性はあるが、ここでは、いずれでもなく、第三者、すなわち、「あなた」と作中主体以外の誰か、としたい。それは、「耳のうらから」「菩提樹の若葉」が「はえてきた」という驚くべき情景だからである。そこからは満足感のような調和はとらえられず、意外性がとらえられる。第三者としたい。そして、ここでは、「菩提樹」が「耳のうらからはえてきた」誰かに対して「あなた」が「なでている」行為を、作中主体が見ているととらえたい。「菩提樹」からはその名前の由来などから、ブッダやその悟りなどがとらえられる。悟りを得たような誰かの「若葉」をなでているあなた」である。「若葉」ということから悟りを得たのは最近のことなのだろう。その誰かに対し、慰労するかのように、肯定的に、「若葉をなでている」のである。ただし、ここで作中主体が目しているのは、その誰かではなく、「なでているあなた」であり、「なでている手」である。すなわち作中主体もまた、「あなた」に、かつ、「あなたの手」で、「なで」られたい、と希求しているのである。その心情に気づいてしまった「認識」の歌である。

これらの「手」の三首の「手」はいずれも、「あなた」「恋人」といった他者との関係の仲立ちとなるものである。あるいは、その他者への思いを気づかせられたり、強くさせられたりのためのものである。「あなた」や「恋人」といった何かを求める心、すなわち、「希求」が「手」により表されている。このことは、前稿にて示したものと通じている。つまり、第一歌集『ひとさらい』、および、第二歌集『てんとろり』には「希求」が通底しているのである。

### 三、『てんとろり』における「ゆび（指）」の歌

笹井宏之第二歌集『てんとろり』には、「ゆび（指）」を用いた歌が十四首ある。ここでは、その全首を評釈する。

#### 19 二千円札をひとさしゆびに巻く 平和つてどこから平和なの

八七二五九、ないし、五七五七七であろう。初ゝ二句、二ゝ三句、四ゝ結句への句またがりが見えらる。二二「一（ひと）」三「さ」四「し」といった数詞を詠み込んでいる。上の句と下の句の間に一字空けがある。

紙幣を「ひとさしゆび」に巻いている動作から、その「ひとさしゆび」はまっすぐに伸ばされており、

必然的に、作中主体の注目も「ひとさしゆび」、および、そこに「巻」き付けられている「二千円札」に向かっている。伸びた「ゆび」は、ベクトルを持ち、いずこへかの方向を指し示しているようである。かつ、立てられた「ゆび」は「この指とまれ」とばかり、人々を募集しているかのようである。「二千円札」には首里城が描かれている。第二次大戦において激戦のあつた地であり、平和を噛みしめる地である。「ゆび」にぐるぐると「巻」き付いている「二千円札」は、その辺縁により紙幣の絵図が区切られてもいる。すなわち、紙幣という経済的な「物体」により、描出しようとしている平和の「観念」が分断されているのである。誰しもに求められる平和の象徴でもあるはずの首里城が、紙幣そのものにより断たれている転倒がそこにある。全ての人で全ての国を平和にしていこう・平和を大事にしようと、「平和」をうたうがごとく編まれたはずの「二千円札」が、その「二千円札」自身によって断絶されるという矛盾がそこに見えてとらえられる。数詞にも、昇順・降順の混乱がある。非常に皮肉な混迷の状態を詠った「認識」「比喩」の一首である。

60 はじまりのことばがゆびのあいだからひとひらの雪のように落ちた

五七五八六、ないし、五七五五九である。「h」音や「y」音を多用している。「雪」と「落」のみが漢字表記である。

二つの景が考えられる。一つは、手指をもって「ことば」をすくおうとしたけれど「ゆびのあいだから」こぼれ「落ちた」様子、もう一つは、「はじまりのことば」を発そうとするにあたって口元を手指で

隠したその隙間が「ゆびのあいだ」である様子である。後者を中心に考える。「はじまりのことば」は「雪」に喩えられているともとらえられる。白く、あつさりと溶けてしまい、ひらひらと落ちる。白く、かつ、ひらひらと落ちるものとして例えば、花びらも考えられるが、それは溶けてしまうものではない。儚さのような、その分、貴重なものでもあるのが「雪のよう」な「はじまりのことば」であるのだろう。その「はじまりのことば」だが、「ゆびのあいだから」こぼれるように「落ちた」とある。口元を手指で隠していたならば、それは「はじまりのことば」そのもの、ないし、その行為への躊躇や逡巡である。発したくなかった、発するのをためらった、ということである。その躊躇や逡巡の形容が「雪のよう」なひらひらなのである。ただし、ここでは「はじまり」をしたくなかったのではない。「はじまり」が「雪のよう」なのではなく、「ことば」が「雪のよう」だからである。その躊躇や逡巡が込められた「ことば」を発してしまった・発せられてしまったのである。ただし、それは「雪のように」すぐに消えてしまうほどのものであり、受ける相手に届く間もなかったのであろう。また、この「はじまり」は何を開始しようとしたものであるかは判然としない。ただし、「ことば」なのであり、かつ、「ゆびのあいだ」という手指が表されている。これらからは、他者性がとらえられよう。手指というベクトルを逆向きにしつつも、相手へと発せられてしまった「はじまりのことば」なのである。それは、白く美しいほどの純水を感じさせながらも、届かせたい相手にも届かない、すぐに消えてしまう儚い「ことば」なのである。そのことへの悲しみが喩えられた歌である。「比喩」の歌である。

85 きょうは下駄っつけて豆腐屋へゆく 遠慮なくよろこべあしのゆび

五五七五九、ないし、五五七九五である。二句と三句、および、四句と結句に句またがりがある。上の句と下の句の間に一字空けを用い、読み手の視線を「豆腐屋へと行く作中主体そのもの」ないし「下駄」から「作中主体の一部分」あしのゆびへと転換・移行している。

上の句は、豆腐屋へ行こうとする作中主体の行動をそのまま詠んだものである。その行動は、「きょう」という平仮名表記から、気取ったところのない、普段の行為でもあることがとらえられる。そして、その後の一字空けは、視線誘導の意味のみならず、「だから」といった順接の接続語などの省略を含んでいる。ただし、そのことにより、この歌は難解となる。「あしのゆび」に対し「よろこべ」、しかも、「遠慮なく」と作中主体は呼びかけているが、その根拠は何であるのか、ということである。「下駄っつけて」行つたからなのか、「豆腐屋へ」行つたからなのか、ということである。二つのことが考えられよう。一つは、普段なら「下駄」ではなくて靴を履いていくので、靴に閉じ込められる窮屈さから解放されたことによる「あし」そして「ゆび」の喜び、である。もう一つは、「あしのゆび」にできて困らされているまめを消費するかのよう「豆腐屋へゆく」ということである。句またがりにより「豆腐屋」と「よろこべ」に注目が集められていることから、この二つは関連ととらえてもよいのではないか。ところで、この一首は、わざと平仮名表記にされているものが多い。反対をいえば、漢字表記のものは、漢字のものとして残されているといえる。すると、「駄」「腐」「遠（慮）」と、ネガティブなものが残されていることがわかる。漢字表記にもできたはずの「きょう（今日）」「っつけ（突っ掛け）」「ゆく（行く）」「よろこべ（喜べ）」

「あし(足)」「ゆび(指)」のいずれもは、ネガティブなニュアンスを持つとはいえない漢字ばかりである。一字空けによる展開が上の句と下の句にあると考えるならば、そのネガティブが無くなっていたと考えられよう。特に、下の句の冒頭にそのまま「遠(慮)」が「なく」なったということからもそうである。解放や歓喜を、「下駄」を「つっかけて」走っていくように感じられる一首である。「展開」の歌である。

### 103 限りなく浅いかなしみの行為としてグリーンピースをつぶすゆびさき

五八六八七である。字余りを多用している。「かなしみ」を平仮名表記にすることで、その程度の「浅い」ことが表されている。

この歌の注目は「限りなく」と「ゆびさき」にあると考える。まず、ここでの「グリーンピース」とは、茹でた柔らかなものにとらえたい。柔らかさを持ちつつも、はつきりした球体の形をした緑の茹で豆である。その「グリーンピース」を、作中主体はその「ゆび」で「つぶす」のであるが、ところで、その着目点は「ゆび」ではなく「ゆびさき」にある。「ゆび」で「つぶす」のではなく、「ゆびさき」で「つぶす」のである。「ゆび」そのものではなく、「ゆび」の「さき」を意識させられている。それは「グリーンピース」を「つぶす」際のいくらかの感触からである。形がはつきりしているため、一見、手応えがありそうで、硬さを持ちそうなその球体は、ここではまさに緑の地球である世界がイメージされるが、外部からの力にぐちゃりと壊され、元に戻るようなものではなくなってしまう。それを為している、すなわち、「つぶ」しているのは、「ゆびさき」という、人々による外部からの力なのである。地球を人々が壊

してしまうことを認識させられるのである。かつ、そのことの「かなしみ」が「ゆびさき」の感触により顕在化されるのである。そして、「限りなく」を考えたい。この「限りなく」は連用形である。一見、「浅い」を修飾しているようであるが、その際の「限りなく」のニュアンスは何であろうか。「非常に・ほんのわずかな」ほどのニュアンスなのか、それとも、「いつまでも・ずっと」なのかである。この「限りなく」は双方のニュアンスであると考えたい。しかも、この連用形は「浅い」だけでなく「つぶす」をも修飾していると考えたいのである。すなわち、「ほんのわずかな悲しみではあるが、その代償的行為としてのくり返しグリーンピースを潰すことをしているが、その「ゆびさき」の感触によりはつきりとその悲しみがいつまでも続いてしまうことを気付かされてしまう」といった歌意なのである。そして、やはり「グリーンピース」の「グリーン」と「ピース」にも注目したい。「ピース」とは「平和」であり「断片」であろう。さらに、「グリーン」とは「自然環境」であろう。戦乱が世界各地でくり返されること、そして、そのことによる「平和」や「自然環境」が「断片」となってしまうことへの悲しみも、それが余りにも日常的になってしまい、「かなしみ」すらも「限りなく浅い」「断片」的なものになってしまっていることへの諦念が詠まれている。さらには、そのことの身体的自覚が「ゆびさき」の感触により詠まれている。「認識」「比喻」の歌である。

### 137 ゆびさきのするどいひとに握られてさわらをさばく春の包丁

五五五七七である。「s」音「さ」音を繰り返したり、「h」音を多用したりすることで印象をつくって

いる。体言止めにより「包丁」へと注目をさせている。

「さわら」自体が「包丁」のような、鋭さを持つ銀色の魚体である。そして、漢字表記（鯖）を考えたなら、それを切り分けたとき、「春」が浮かび上がる魚でもある。これらのようなウィットを感じさせる下の句である。そして、上の句である。ここにおいて「ひと」もまた「するどい」ものを持っていることがわかる。鋭さを持つものが「ひと」「さわら」「包丁」と三者も登場する物騒な歌である。しかも、その「するどい」「ゆびさき」を持つ「ひと」が「握」る鋭い「包丁」により鋭い「さわら」は解体される。平仮名表記が多用される丸みを帯びた歌のように見えるが、その実、鋭さばかりが際立った一首なのである。さて、「ゆびさきのするどいひと」とはどのような人なのだろう。これも一見、全てが平仮名表記のため、例えば、「するどい」を「鋭い」と表記しての人物よりも、のんびりした鷹揚な人のように感じさせるが、「するどい」「ゆびさき」を持つ者なのである。指にはさまざまな機能があるが、指先となるとその機能も制限される。例えば、対象を示す・対象に触れる、といったようなものである。この対象とは、もちろん、自分自身に向かうこともあるだろうが、この歌では「さわら」という明確な対象がある。すなわち、この「ゆびさき」の鋭さも「さわら」を意識してのものである。「さわら」ととつてのこの「ひと」は自身をばらばらにしてしまう、残酷な者である。魚にも魂と魄があるとすれば、魂が戻るべきその魄を微塵にしてしまう者である。「さわら」の未来を指し示す「ゆび」を持つ者、今後をどうするかを「さばく（裁く）」者ともいえるだろう。相手の運命や先行きをも左右するものとしての「ゆびさき」や「鋭さ」を詠ったものである。「比喩」の歌である。

五七七七七である。「ひ」音をくり返すことでリズムをつくっている。

「そのゆび」は「世界を」「失くす」ほどのものであり、「火」である、という歌である。すなわち、それほどの脅威である「ゆび」であり、その「火」もまた「世界を」「失くす」ことのできる脅威なのである。さて、この歌で注目したいところが二つある。それは「気づかずに」「その」である。誰が「気づかずに」「いたのか」「その」の指示対象は何であるのか、である。作中主体は歌末を「うね」とすることに、自身以外の対象に言葉を投げかけていることがわかる。このことから、この対象が「気づかずに」いたのであろう。そして、「この」ではなく「その」という語から、「そのゆび」とは作中主体のものではなく、この対象ないし別の者の「ゆび」である。この二者のどちらの「ゆび」であるかは判然としないが、ここでは作中主体が言葉をかけた対象の持つ「ゆび」とする。すると、歌末の「うましたね」という表現が単なる指摘ではなく、対象に対する若干以上の非難や侮蔑のような、あるいは、失意といったネガティブな感情であることがとらえられる。ところで、「世界を失くし」ということは誰にわかるのだろうか。その「世界」が、地球上の実世界を指すならば、それは誰しもに認知されることだろう。「世界」を滅ぼすほどの「火」が、例えば、戦火や原爆のようなものであるならば、この「ゆび」は、それを為すことのできる者の「ゆび」であろう。しかし、そうではなく、この「ゆび」が大衆の誰かのものであったならば、この「世界」とは地球規模のものではなく、その個人にとつてのいくつかの「世界」のうちのひとつ、すなわち、そのひとつとつての環境や関係であろう。ただし、その環境や関係の消滅は、それ

らを持つ者以外に知覚できるもののだろうか。とすれば、この認知もまた作中主体自身によるものとなるだろう。つまり、作中主体自身が、自身を客体視した歌である。作中主体自身が、自身に対し、お前は気づかなかつたな、と突き放すように自身の過ちを詠っているのである。「想起」の歌である。

## 206 感傷のまぶたにそつとゆびをおく 救われるのはいつも私だ

五七七七七である。上の句と下の句の間に一字空けをしている。

「ゆびをおく」ことをしたのは誰であろうか。一字空けによる効果を考えたい。一字空けという区別が無ければ、それは作中主体である「私」ともとらえられよう。しかし、一字空けにより、その主語が変わり、作中主体ではない誰かだと考える。「感傷」の語から、「私」が涙したことなどが想起される。その涙の浮かんだ「まぶた」に誰かが「そつとゆびをおく」いたのである。その行為によって、作中主体には「救われる」との想いをもつ。しかも、その「救われる」は「いつも」である。「感傷」や涙のあるたびに、作中主体はこの誰かに「救われる」のである。この「まぶたに「ゆびをおく」という行為を考える。「まぶたに「おく」ということは、「おく」ことができる状態になっているということ、すなわち、その「まぶた」は閉じられているということである。この「感傷」とは「まぶた」を閉じてしまうようなもの、かつ、「救われる」と感じてしまうようなものである。決して、ポジティブなものではない。そして、そのようなときに、その誰かは「まぶたに「ゆびをおく」ことのできる距離にいる。ごく身近な距離、ごく身近な関係なのである。さらに、「まぶたに「おく」ことができる状態に作中主体がある、とい

うことである。「おく」とは、上から下へのベクトルをもつ。作中主体は横たわって涙しているのであろう。その涙を押さえるかのように、「ゆびをおく」身近な誰かがおり、それもまた、何度も繰り返しなされているものなのである。最後に、「そっと」に注目したい。閉ざされている「まぶた」に「ゆび」が「おかれるのであるが、それを作中主体は「そっと」と感じているのである。「まぶた」が閉ざされているため、この「そっと」は感触として作中主体はとらえている。「そっと」とは、その行為が相手を思いやっていることが表される。相手のために「そっと」「おく」のである。作中主体の「感傷」をとらえ、それに同情・共感などをしているのである。その同情のベクトルを想起させるものとしての「ゆび」なのである。「ゆび」の「そっと」の感触・ベクトルにより、作中主体は「救われる」。つまり、くり返しくり返し、作中主体は「感傷」的となり、くり返しくり返し、身近な誰かの同情により作中主体は「救われる」のである。しかし、とすれば、それは作中主体がセンチティブであるというだけではないのではないだろうか。この身近な誰かによる同情と作中主体の「救われる」思いは、繰り返し返され、瞬間瞬間に解消されているだけに過ぎない。「救われるのはいつも私」であり、作中主体は「いつも」受け手にいるばかりになつてしまっているが、「救」いを求めているものは、「私」だけなのだろうか。「救」うことを作中主体こそがしたいのではないだろうか。にもかかわらず、「救われる」ばかりの「私」なのである。そこには、悲しみややりきれなさの永遠的循環がある。「認識」「展開」の歌である。

五七七七七である。

「感覚のおこりとともに」「気づく」とある。すなわち、「感覚のおこり」までは「ゆびさきが葉でも花でもない」ことに「気づ」いていない、ということであり、それまでは「ゆびさきが」葉であり「花」であるのとらえていたということである。その「ゆびさき」をもつ作中主体が、自身に「葉」「花」があると思っていた、「葉」「花」があるような草木と自身をとらえていた、ということであろう。ここで、考えたいことが二つある。一つが、「感覚のおこり」とは何かということである。「おこり」はいくつか考えられるが、ここでは「起り」とする。すなわち、「感覚のおこり」は、「感覚」が「おこ」った、「感覚」が醒まされたということであろう。眠りや夢から醒まされた状態をとらえてよいだろう。もう一つが、では、この「気づ」きに対し、作中主体はどのような評価をしているか、ということである。夢の中で、作中主体は、「葉」や「花」のある草木のようなものとして自身を感じていた。「花」の語用から、その変成している自身にポジティブな評価をしていたととらえられよう。とはいえ、夢から醒めると、「ゆびさき」に「葉」「花」はなく、「ゆび」のままだったのである。そこには、残念といったネガティブな感想もとらえられるだろう。一方、「ゆびさき」以外はどうだったのであろう。夢の中では、「ゆびさき」は「葉」「花」に変成している。とすれば、その腕や体は枝や幹への変成であろう。すなわち、動かすことのできないものである。「葉」や「花」のように、そよ風にひらひらと揺れるようなものではなく、散つては芽吹くような変化のあるようなものでもない。「感覚のおこりとともに」「気づ」いたものは、「ゆびさき」が、変成なく、指でしかないことだけでなく、その体もまた、変成なく、動かすことのできないものであることに作中主体は「気づ」いてしまったのではないか。だからこそ、「ゆびさき」だけへの言及なのである。

「認識」の歌である。

289 ゆびさきのきれいなひとにふれられて名前をなくす花びらがある

五七七七七である。「な」音を繰り返し、また、「h」音を繰り返し、リズムを生み出している。平仮名ばかりであり、「名前」「花」のみ漢字表記である。

「名前をなくす」に表現の難解さがある。慣用的なフレーズでもない。「名前」という、それをそれたらしめているものを「なくす」のであるから、それ自体の混乱や存在の危うさなどを表しているのだろう。「正体をなくす」「我を忘れる」に近いニュアンスだろう。自身を自身たらしめている「名前」を、「きれいな」「ゆびさき」をもつ「ひと」に「ふれられ」たことにより、「花びら」は「なく」したのである。すなわち、「花びら」は、その「ひと」の「ゆびさき」が「きれい」だったからこそ、「名前をなく」したことになる。ここでは、その「ひと」が何によって「花びら」に「ふれ」たのかは明確ではない。単に、身体はどこかがかすただけのような「ふれ」かたもあるからである。ただし、「ふれ」という行為が意図的であったならば、「花びら」という、その大きさにさほどのものをほとんどがもたないものに「ふれ」るには、その大きさに合わせるように、「ゆびさき」によって「ふれ」たのはそれほど違和感のないことである。そして、この「きれいな」「ゆびさき」をもつ「ひと」というのは、「花びら」が「名前をなくす」などというほど稀有なものなのだ、ということである。「ゆびさきのきれいなひと」は全て平仮名での表記である。それは幼さすら感じられる。無垢や純粋といった「ひと」なのである。この無垢である「ひ

と」に「ふれられ」たことにより、その「花」は、その「名」を「なく」し、我を忘れたのである。その「花」の「名前」は勿忘草である。「認識」の歌である。

323      てのひらに縫いつけてある冬の日をあなたのほそいゆびがほどいた

五五五七七である。「ほそい」と「ほどい」と似た音韻をくり返している。

『てんとろり』において、「手」と「ゆび（指）」のどちらもが詠まれた唯一の歌である。「あなたのほそいゆびが」作中主体の「てのひらに縫いつけてある冬の日を」「ほどいた」のである。語順を考えたい。「ほそい」「あなたの」「ゆび」ではなく、「あなたのほそいゆび」である。「あなたがどのようなスタイルなのかはわからないが」「あなたの」「ゆび」は「ほそい」のである。「縫いつけ」られたものを「ほど」くことができるような細さをもつ「ゆび」なのである。針や縫い針のような、硬さや鋭さをもつ「ほそい」「ゆび」であり、「あなた」はそのような確としたベクトルをもっているのである。あるいは、その「ゆび」そのものの「ほそ」さには限界があるため、「縫いつけ」られているものを単純に「ほど」くことができるほどの「ほそ」さではないかもしれない。ただし、その際には、その「ほど」くとしている「あなた」には、何度も何度もくり返しトライする熱心なベクトルが感じられよう。いずれにせよ、そのベクトルは作中主体に向けられていると考えてよからう。一方、この「てのひら」は作中主体のものであろう。そして、手ではなく「てのひら」であることから、それは受け止める行為や性向を示している。さらに、ここで注目したいのが「縫いつけてある」「ある」「ある」「ある」ではなく、「ある」なのであ

る。この「ある」により、「冬」という人の身には過酷なものが、作中主体の「てのひら」には既に確たるものとしてあることがとらえられる。ある程度以上の経過がとらえられるのである。すなわち、もう長い間、「冬の日」を「縫いつけてある」ことにより、作中主体は「てのひら」を使うことができず、何ものをも受け止めることができないのである。このことにより、作中主体の心身の双方も「冬」なのであろう。それを「ほどい」てくれた・解放してくれたのが「あなた」のまっすぐに厳然とした意志である。その困難からの解放の様子は、「縫」「冬」「日」と使われている漢字の画数が減じられていくところからもとらえられよう。その「冬の日」から「縫いつけてある」ほど作中主体と一体的であつた暗く寒い「冬の日」が、明るく暖かい春の日のように一変したことを示した歌である。「比喩」の歌である。

354 ゆびさしたほうにかならず星がある それだけがよく、それだけの日々

五七七七七、あるいは、八四五七七である。上の句と下の句の間に一字空けがある。「日々」と体言止めをしている。平仮名ばかりであり、「星」「日」だけが漢字である。「それだけ」を反復させている。「かならず星がある」に「a」＋「a」＋「r」音をくり返すことにより、耳馴染みをつくっている。

深い意図もなくどちらかに向けて「ゆび」を「さ」すと、そのどちらにも「かならず星がある」のを見つける。それは一見、「星」という輝きやきらめきを意識せずとも感じられる素晴らしさのように思える。しかし、では、その「ゆび」をもつ作中主体はどこにいいのかを考えたい。「星」は常に遠くにある。作中主体とは遠く離れた位置にある。そして、「星」を見ることができるのは、闇の中である。自身の身

近が煌々としているとき、「星」は見えない。作中主体は暗い中にいる。いずれの方向にもきらめく「星」を感じられる作中主体は、その「星」のきらめきに比して暗い中にあるのである。そして、そのきらめきは自身とは遠い存在であり、かつ、自身以外はいずれもきらめいているのを見つけてしまうのである。その状況に、ひと息をつくかのように、一字空けを用い、作中主体は「それだけの日々」と、体言止めにより、確認しているかのように歌を終わらせるのである。見つけることができるよさは、自身以外のきらめきであり、「それだけがよ」いものである。ただし、ここで留意したいことが一つある。それは、この歌に用いられる漢字の二つである。その漢字の一つは、「日」であり、かつ、それが「々」により「日々」と繰り返されていることから、その毎日のみが続いていつていることを表わされているが、もう一方の漢字に注目したいのである。その漢字は「星」である。「星」は分解すると、「日」と「生」となる。つまり、きらめきを発見するばかりの「日々」は続いているがただし、それらの「日」により作中主体は「生」を実感している。「それだけ」で、そのきらめきだけで、作中主体は「生」きていくことができるのである。「それだけ」の反復と「日々」の体言止めによりきらめきの存在を、そして、「日」「星」だけの漢字使用により「生」を表しているのである。「認識」の歌であり、「展開」の歌でもある。

356 本棚に戻されたなら本としてあらゆるゆびを待つのでしょうかね

五七五七七である。

「ゆび」とは、その「本」を読もうとする人々の喩えである。「ゆび」をもつ者、すなわち、人のニュ

アンスであろう。この「本」は単なる「本」ではないのだろう。「本として」ということは、そうでないものが「本」という役割「として」ということだからである。ただし、同時に、「本棚に戻」すということから、元々、「本棚に」あるものであるため、やはり、「本」ではある。そして、「本棚」から取り出したのが作中主体なのである。「本」でありながらも、「本」ではない役割ないし「本」としてだけではない役割となっている「本」が、本来あった「本棚に戻」と、「あらゆるゆびを待つ」ことになるというのである。ところで、この歌にはいくつかの留意したいところがある。それが、「ゝなら」「あらゆる」「ゝでしよう」「ゝね」である。「ゝなら」は假定である。「本棚に戻されたなら」というのは假定であり、「戻され」ることがないことを逆説的に表している。「本棚に戻されたなら」その「本」は「本」としての本来的役割となるものの、そうはならないことを示している。「ゝでしよう」は、推量、かつ、敬体である。この推量は「ゝなら」と呼応しているため、有り得ないだろうことを推量しているニュアンスとなる。この敬体は、丁寧語であるため、特定の誰かに対しての敬意であるというより、不特定の誰か・誰か達への敬意と考えられよう。「ゝね」は、呼びかけや念押しである。不特定の誰か・誰か達への呼びかけ・念押しであるが、それは、「本」が「本棚に戻され」ないことを逆説的に示す宣言のニュアンスといえる。そして、「あらゆる」は、全てというニュアンスであり、「あらゆるゆび」とは全ての人々ということになる。つまり、作中主体による、全ての人々に対しての、この「本」は全ての人々に求められるだろうが、それらの「ゆび」に渡すつもりはない、という宣言なのである。作中主体にとって、この「本」は単なる「本」ではなく、「本」以上の存在なのである。「認識」の歌である。

五七七七七、ないし、五七七五七七である。三句・四句に句またがりがあるととらえたい。そのことにより、上の句と下の句の区別が薄れ、連続性が生まれている。

「栓抜き」はガラス瓶の王冠に使うものである。ガラスは「翡翠」の質感や色に通ずるものである。砕けてしまうような透明感をもつ質感である。「星が降るのを」見ることでできる夜空もまた、透明感をもつ。そして、「星が降る」その軌跡は、夜空を両断するような一条の線である。かつ、「星が降る」とは、その「星」の燃えつきる終焉の姿である。すなわち、この歌には、透明感やその喪失が歌全体にとらえられるのである。そして、それを「翡翠少年」は「待っている」のであるが、同時に、それは「翡翠少年」を「翡翠少年」たらしめる「待っている」行為の終わりを意味している。「栓抜き」とは、ガラス瓶の封を開けるものである。それは、ガラス瓶の役目を終わらせるものでもあるが、その中身を解放するものでもある。すなわち、「翡翠少年」もまた、その硬質さゆえの身動きのとりづらさからの解放を「待っている」のではないだろうか。「栓抜き」の使用を、「ゆび」という意志の感じられるベクトルと併せつつ、「待」ち望んでいる姿がそこにはとらえられる。

ところで、「翡翠」に強く注目したい。「翡翠」はどう読むのがよいのだろうか。もちろん、「ヒスイ」ではあるが、ここでは「カワセミ」とも読むことができるのではないか。「カワセミ」は、その羽の色が「ヒスイ」色であるために、「翡翠」との漢字があてられている鳥である。そして、「翡翠」にくり返し使われている「羽」はまさに鳥のものである。すなわち、「翡翠少年」を「カワセミ少年」と読むならば、その

とき、この「少年」は、「カワセミ」の真つ直ぐなくちばしのように、そして、そのくちばしの真つ直ぐさは、真つ直ぐにのびる「ゆび」にまさに表され、夜空に「星が降るのを」一心に「待っている」景が浮かぶ。さらには、その心持や姿勢の美しさを「ヒスイ」のようなきらめく美しさとして表されていることすら感じられる。さらには、その「少年」や未来への真摯な態度のきらめく美や彩が感じられるのである。そして、未来へ羽ばたくことへの予兆すら示されているのである。自由へ飛び立つことへの期待や熱望、そして、その美しさを感じさせる「展開」の歌である。

### 398 未明。いちごつぶしの達人のゆびの舐り方のうつくしい

三七五九五である。初句の三音による字足らずであり、四句・結句に句またがりがある。初句が三音十句点であり、一字空けとはまた異なる余白を用いている。「の」音が繰り返されている。

「未明。」という、三音の破格、かつ、句点での句切れにより、読み手に違和感と期待が与えられる。しかも、この「未明」は、時制についてのものだけでなく、判然としない意識といったものでもあるだろう。そのような、ぼんやりした時間帯に、一体どんなことがあるのか、と読み手は二句目以降に引き込まれるのである。そして、そこで「いちごつぶし」、かつ、「いちごつぶしの達人」という不明の語句に驚かされるのである。作中主体は、「未明」の時間帯に、ぼんやりとした意識でいたが、覚醒したのである。その理由が、二句目以降に詠まれる。ここで、二つのことに注目したい。一つは「いちごつぶし」は何によってなされるのか、ということだ。これは、道具などではない。「舐り方」ということから、「達人」

の「ゆび」によって「いちごつぶし」がなされ、その「ゆび」を「舐」っていると考えられる。その景は、「つぶ」された「いちご」により、「ゆび」が鮮やかに赤に彩られている。ただし、その赤の彩が「うつくしい」ではなく、あくまでも、「うつくしい」のは「舐り方」である。赤にまみれた「達人のゆび」の「舐り方」が「うつくしい」のである。作中主体は、この「達人」を「達人」たらしめている「いちごつぶし」という技に対して「うつくしい」としていないところもとらえておきたい。その技の結果への行為である「舐り方」、その技を為させる「ゆび」をきらりと磨き上げるかのような「舐り方」を賛美しているのである。その「ゆび」で「いちご」を破壊したことへの舌なめずりといったような「達人」の達成感・満足感を受け、それを賛美しているのである。もう一つは、四句終わりの「の」である。この「の」には二つのことがとらえられる。まず、主格的ニュアンスということである。すなわち、「舐り方」が「うつくしい」というニュアンスになる。「が」であるところを「の」とすることによる違和感が出される。次に、連体修飾格ととらえられることである。すると、「うつくしい」の後に、例えば「姿がある」といったような省略が考えられよう。その省略が何であるのかを読み手は考え続けることになり、かつ、「の」がくり返されることにより、永遠的循環が感じられるのである。すなわち、作中主体の気づいた「うつくし」さは永遠に忘れられないほどのものだったのである。「認識」「展開」の歌である。

ところで、「ゆび」にて「つぶ」す行為の歌が先にもあった。103歌である。そこでも、「ゆびさき」により「つぶ」す行為が詠まれており、両歌に共通している。他にも共通がいくつもある。くり返されることが詠まれていること、野菜食べ物が「つぶ」されていることなどである。すると、398歌の「いちご」も、103歌の「グリーンピース」と同様に、地球を喻えたものだと言わなければならないだろう。

か。ほぼ球体の「グリーンピース」と異なり、「いちご」は球体とは単純には言い難い。しかし、球体ではないその歪さこそが、地球が「つぶ」されつつある現況ととらえることができるのではないか。すでに、球を保てずに歪になりつつあるこの世界を、「達人」が「つぶ」してしまう、とどめをさしてしまうのである。これは「いちご」だからこそ、とらえたい。すなわち、「いちご」の果肉・果汁である赤にまみれた「ゆび」は、血まみれを表すかのようなものである。かつ、「いちご」を漢字表記すると「一期」ともとらえられ、「いちごつぶし」とは、生涯を終わらされるともとらえられるからである。地球の終わり、世界の終わりをほんの小さな事物・事象からもうくり返し感じずにいられない作中主体の姿がそこにはある。やはり、「認識」「展開」の歌であり、「比喩」の歌である。

#### 四、小考

『てんとろり』における「ゆび（指）」および「手」の歌を評釈した。先にも述べたように、「手」の歌については、『ひとさらい』の「手」の歌と同様の特徴があり、このことからやはり、笹井宏之は「希求」の歌人である、といつてよいだろう。

「ゆび（指）」の十四首は、いくつかに分けられる。まず、19歌・362歌は、「手」の歌と同じように「希求」の歌である。19歌は「ゝなの」と「平和」への疑問を提示しつつ、読み手を含めた他者にその答えを求めている。362歌では、「翡翠少年」が「待っている」。「星が降るのを」希み、求めているのである。「ゆび（指）」の歌からも、笹井の短歌には「希求」をとらえられるのである。

次に、「変成」の歌があることをあげる。前稿において、笹井の歌には「希求」や「変成」がとらえられるとした。その「変成」の歌が、19歌・85歌・146歌・206歌・242歌・323歌である。特に、85歌と323歌は、「解放」を詠っている。不自由や窮屈からの「解放」といった「変成」である。『ひとさらい』における「手」の歌と通ずるのである。

さらに、19歌・137歌・146歌のように、「ゆび（指）」を道具に見立てたものである。19歌は、「ゆび」を人を集めるものや象徴たらしめるものとして詠っている。137歌は、「ゆびさき」をそのまま、何らかの道具として扱っているわけではないが、「包丁」と同様に「するどい」ものとしている。146歌は、「ゆび」を「火」としている。356歌も、道具ではないが、「ゆび」を人々としている。これらの歌に共通するのは、大きな対象を扱うものとしての「ゆび（指）」ということである。それぞれ、「平和」「命」「世界」「人々」である。これらの大きな対象を、わずかで小さな「ゆび（指）」により、考えさせることを為している。小さな存在により大きな概念を浮かび上がらせているのである。また、先に述べたように、河路由佳（一九九九）が現代短歌における「ゆび（指）」の秀歌をあげている<sup>⑧</sup>が、それらには「命」「生」が共通している。笹井短歌もそれらの秀歌に連なるものであるといえよう。ただし、笹井短歌は、共通しつつも、「命」「生」にとどまらず、その対象をより拡充していることもとらえられよう。

そして、力をもつものとしての「ゆび（指）」が詠われている。103歌・146歌・206歌・289歌・323歌・398歌である。103歌では、「ゆびさき」は「ピースをつぶ」していた。平和をも壊してしまう「ゆび」なのである。146歌では、「ゆび」は「世界を」「失く」す「火」である。206歌の「ゆび」は、「私」を「救」うものである。289歌において、「きれいなひと」の「ゆびさき」により、「花び

ら」は「名前をなく」してしまうほどである。「てのひらに縫いつけてある」ほどのものを、「ゆびがほしい」ているのが323歌である。そして、作中主体の「冬の日」を一変させている。398歌は「いちごつぶし」を「ゆび」がしている。「いちご」を「いちご」たらしめなくするほどの力を「ゆび」がもっている。いずれも、「ゆび（指）」は、何らかの力をもつ。

力をもつものとしての「ゆび（指）」には、このようなことにも留意したい。つまり、その「ゆび（指）」の力に向ける対象である。「ゆび（指）」は、19歌・60歌・103歌・137歌・146歌・206歌・289歌・362歌・398歌と実に九首に詠まれているように、その力が大きな対象に向けられている。19歌・103歌では、「平和」を分断したり「つぶ」したりしている。60歌では、「はじまり」がこぼれ落ちるように始まるための関門となっている。137歌の「ゆび」は「さわら」の運命や未来を決めるものとなっている。146歌における「ゆび」は「世界を」「失く」すべく力が向けられている。206歌の「ゆび」により、「私」は「救われる」ことを実感する。289歌において、「名前をなくす」という「自身」を失うことへ、「ゆびさき」が向けられている。362歌には、未来へのベクトルとしての「ゆび」が表されている。398歌での「いちご」を「つぶ」すのも「ゆび」である。「未明」という判然としない何かを覚醒させ、明らかにするのである。いずれも、何らかの大きな対象へ「ゆび」は力行使している・しようとしている。先に述べたように、「ゆび（指）」は力をもつ、すなわち、「解放」「変成」を「希求」するものであるが、その力は「平和」「はじまり」「運命」「世界」「救い」「自身」「未来」などといった哲学的概念、すなわち、人間課題の本質や真理の「希求」に向けられている。「自身とは何か」「平和は実現できるか」などといった莫大な命題につながる対象に差し向けられた、強大な力である。つま

り、「ゆび（指）」は課題からの解放・課題の解消を「希求」「懇求」する「ベクトル」である。笹井短歌は、真理の究明の「希求」「懇求」を詠ったものである。

## 五、おわりに

本稿では、前稿に続くものとして、笹井宏之第二歌集『てんとろり』における「ゆび（指）」の歌を中心に考察を進めた。短歌初学者が笹井短歌を読むときにやはり、「希求」を、かつ、人間課題解消の「懇求」を視点のひとつとして解釈ができるだろう。その代表的な歌が、323歌「てのひらに縫いつけてある冬の日をあなたのほそいゆびがほどいた」である。先述のように、「冬の日」という人間の誰しにも必ず巡り来てしまう、そのような辛く厳しい課題を、対照的な「あなたのほそいゆび」が解消したことの感激が詠われている。「ゆび（指）」は、それほどの大きな辛さすら解くことのできる力なのである。この課題に対する力としての「ゆび（指）」は、146歌「そのゆびが火であることに気づかずに世界をひとつ失くしましたね」にも詠われている。すなわち、146歌における「ゆび」は「火」という「エネルギー」である。力なのである。そして、その「ゆび」を行使することは、「世界を」「失く」すことのできるほどの圧倒的な「ベクトル」なのである。こういった課題解消の「懇求」を「ゆび（指）」という力をもつ「ベクトル」に仮託しているのである。ただし、この課題解消の「希求」の片鱗は、すでに『ひとさらい』において詠まれていた。高校国語「言語文化」教科書に掲載された「えーえんとくちからえーえんとくちから永遠解く力を下さい」である。「永遠」という課題を打破するほどの強大な「力を下さい」

と笹井はまさに「希求」「懇求」している。笹井短歌は課題を注視し、詠もうとしている。この「えーえんとう」に続き、高校国語教科書に掲載された二首目の笹井短歌がそれである。「砂時計のなかを流れているものはすべてこまかい砂時計である」である。『てんとろり』からの歌である。高校国語選択科目「文学国語」の教科書に掲載されたこの歌もまた、「砂時計」の中に「こまかい砂時計」があるとし、「永遠」の循環および「時間」を詠っている。どちらも、「永遠」「時間」という哲学的課題が詠われているのである。それは一見、単に観念的アプローチをしているだけのようにも見える。しかし、そうではない。笹井短歌はそういった哲学的対象を、「ゆび（指）」といった身体性によって対峙することで、より現実的なものとし、かつ、その解消を本気で「懇求」しているのである。このことは、自身の身体という現実と世にある課題との接地点やせめぎ合いを模索する日々を過ごす青少年である短歌初学者にとっても、親和性や親近性をもつものとなるだろう。また、意識的に、あるいは、無意識に、体験―体感―体得と身体感覚を通じて学び深めていく青少年には、評釈への一視点になると考える。ときには、笹井短歌の「希求」「懇求」の姿勢が、短歌初学者の生きる道を勇気づけることもあるだろう。生きていくための支えになることもあるのではないだろうか。そして、そういった姿勢がさまざまな文学に表されていることを知るための導入材ともなることだろう。つまり、笹井短歌は実学としての一首であり、文学初学者のための一首ともなるといえるのである。

〔註〕

- (1) 大村勅夫 (二〇二四)「笹井宏之の短歌の研究 その一」北海道大学大学院文学研究科『新人文文学 vol.20』
- (2) 『新文学国語』三省堂 二〇二三年検定済
- (3) 『てんとろり』に収録されている佐賀新聞掲載歌三七首の中にも、「みづうみに沈んでゐたる秋空を十の指もて壊してしまふ」(二〇〇六、一〇、一二)と、漢字の「指」表記ではあるが、「ゆび(指)」を用いた作品もあった。
- (4) 村田祐菜「近代短歌データベース」kindaikanakadatabase.com 二〇二四、六、四閲覧
- (5) 野浪正隆 (二〇一〇)「近代小説に使われた身体語彙について——大量語彙検索することによって得られるもの——」『学大国文』53 大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座 七五頁
- (6) 山田航 (二〇一五)『桜前線開架宣言』左右社、東直子・佐藤弓生・千葉聡 (二〇一八)『短歌タイムカプセル』書肆侃侃房
- (7) 河路由佳 (一九九九)「指」岡井隆監修・三枝昂之ら編『岩波現代短歌辞典』岩波書店
- (8) (7) に同じ

# 『宝物集』における天皇

伊藤 翔太

はじめに

『宝物集』は作者の平康頼が「鹿ヶ谷の謀議」に参加した罪で流罪となった後、流刑地であった鬼界が島から京に帰洛したという治承三（一一七九）年以降数年間の成立とされている。

内容は、人間にとってこの世における最勝の宝は仏法であるとし、苦の世界である六道から脱け出して成仏すべきであるということを、様々な例証や和歌を利用して示していくものとなっている。

『宝物集』では天皇に関する様々なエピソードも例証として使用されている。筆者が数える限りでは、

○○天皇のほか、帝（御門）・院・法皇などの語も合わせると、作品内に天皇の語は一○○カ所ほどみられる。本稿では『宝物集』において天皇がどのように語られているか、ということを考えてみたい。

なお『宝物集』には内容の異なる伝本が多く存在しているが、小泉弘氏の伝本研究<sup>(1)</sup>を承けた山田昭全氏によれば、康頼は「最初に一卷本を書き、次に大幅な増補を加えて片仮名古活字三卷本」を書き、「さらに例証歌の補充整備を中心とする第二次増訂を行って第二種七卷本」を作ったとする<sup>(2)</sup>。本稿では特に断らない限り、第二種七卷本系の吉川康雄氏蔵本を底本とする新日本古典文学大系本<sup>(3)</sup>を使用して検討を進め、他の諸本<sup>(4)</sup>は必要に応じて使用していきたい。

はじめに、『宝物集』における天皇を検討する意義に関して、一二世紀に成立した作品ということと、作者康頼の特性について述べておきたい。

まず一二世紀という時代であるが、この時期に天皇に関する言説の新たな展開がみられている。吉原浩人氏は院政期往生伝において天皇の伝が収載された意義について検討され、次のように述べている。

撰関期すなわち『日本往生極楽記』の時代においては、天皇も人界の一員であり、輪廻転生する存在であるとはつきり述べることは、タブーであった。初めて天皇を往生伝に登載することによってその禁忌を破り、天皇をも輪廻転生の枠の中においてとらえたのが大江匡房なのである。（中略）罪障の有無までも論じられるということは、裏返せば往生できない天皇も存在するということである。これは、「現人神」として全く別の論理体系の中にあつた天皇が、完全に仏教的世界観の体系に組み込まれたこと意味し、院政期に天皇観そのものが大きく変貌したと軌を一にする<sup>(5)</sup>。

吉原氏は大江匡房が『続本朝往生伝』(一一〇一〜一一一一年成立)において、一条天皇と後三条天皇伝を登載し、両天皇の往生を明確に記述して天皇を輪廻転生の枠の中であらえたことの意義について、「現人神」として全く別の論理体系の中にあつた天皇が、完全に仏教的世界観の体系に組み込まれたこと意味」するものとしている。そして、天皇が仏教的世界観に組み込まれたことは、「院政期に天皇観そのものが大きく変貌した」と軌を一にする「現象である」とされた。

匡房以降も往生伝類には、三善為康の『後拾遺往生伝』(一一三七〜一一三九年成立)において、下巻の冒頭に清和天皇伝が収録され、蓮禪の『三外往生記』(一一三九年以降の成立)には、白河上皇が死後に生前の善悪二業が同量だったために次の生所が定まらないとの記述がある(源雅俊伝)。一二世紀は天皇の往生が論じられる時代であつたといえよう。

さらに天皇と輪廻転生ということでは、一二世紀は天皇の前世についても語られる時代であつた(6)。匡房の『江談抄』(一一〇四〜一一〇八年頃成立)には、清和天皇の前世が内供奉十禪師職を望んだが伴善男に任命を阻まれた僧だつたとする説話が載っており、後述のように『宝物集』にも採られている。また、『扶桑略記』(一一〇九四年以降の成立)や『東大寺要録』(一一〇六年成立)には、聖武天皇の前世を震旦の流沙の船師とする説話が存在する。

このように、吉原氏が指摘した天皇が往生伝へ記載されることや天皇の前世説話がみられることを併せて考えるならば、確かに一二世紀は天皇観の変化によつて天皇が仏教的世界観に組み込まれた時代であるといえよう。こうした天皇観の変化がみられる一二世紀の末に成立した『宝物集』において、天皇がどのように語られているのかを検討することは、当時の天皇観を考えるうえでも意味のある作業にな

ると考える。

もう一つ、著者の康頼について少し述べておきたい<sup>(7)</sup>。

康頼の出自は不明な点が多いが、建武四（一三三七）年成立の『勅撰作者部類』によれば、康頼の父は中原顕季だという。中原氏は太政官の外記を世襲し、明経博士・直講・助教に任じられる者が多い学問の家柄とされる<sup>(8)</sup>。この中原氏出身説は、他の史料で傍証できるものではないため確定し難いが、『宝物集』において多様な資料を用い、それらを適宜『宝物集』の筋書きに合うように切り継ぎ・縮小をしている<sup>(9)</sup>。ことを考えれば、学問の家系とされる中原氏出身でなくとも、康頼は相当の学識ある人物であつたといえよう。

官人としての康頼は、仁安三（一一六八）年に左衛門尉となり、承安四（一一七四）年には検非違使を兼官した。また、後白河上皇の近臣としても活動していたとされる。しかし安元三（一一七七）年の六月の「鹿ヶ谷の謀議」に参加した罪で流罪となり、『平家物語』によれば配所に赴く途中に周防の室積で出家し、法名を性照としたという。その後、赦免されて治承三年の春に帰洛したとされ、これ以降の数年間に『宝物集』が成立する。

康頼は官人として朝廷に仕え、院近臣としても活動し、さらには多様な資料を利用して『宝物集』を形成できるほどの学識を有する人物であつた。そして、流罪となり出家した後には『宝物集』を成立させた。こうした作者の特性から、『宝物集』における天皇について検討することで、一二世紀後半の知識人貴族が有する天皇観を知ることができると思われる。

## 一 『宝物集』の国王観

『宝物集』における天皇をとりあげる前に、本章では『宝物集』の基本的な国王観について検討してみたい。

『宝物集』は、この世の人間にとって仏法こそが最勝の宝である、ということを様々な例証や和歌を用いて読者に示す内容となっている。そのため、天皇を含む国王に関する説話も基本的にはこうした『宝物集』の筋書きに合うように利用されているといえよう。

新日本古典文学大系の小見出し目次を参考に、『宝物集』の構成の項目を示すと次のようになる。

- (一) 鬼界が島から帰ってきた隠士 (巻一)
- (二) 嵯峨清涼寺釈迦堂参詣の道行 (巻一)
- (三) 釈迦像の由来 (巻一)
- (四) この世における宝物は何かという議論 (巻一)
- (五) 仏法こそが宝であるという論証 (巻二)
- (六) 六道とその苦の諸相 (巻二～三)
- (七) 成仏のための十二門開示 (巻四～七)

このように『宝物集』は、鬼界が島から帰洛した男による清凉寺釈迦堂の参詣に舞台が設定され（一）（二）、参詣者たちによってこの世における宝とは何かという議論が交わされる（四）。その後「声少しなまりたる」法師によって、仏法こそが最勝の宝であることが論じられ（五）、六道の苦の諸相や成仏のための十二の道が説かれる（六）（七）構成となっている。

仏法の価値を説き、成仏のための道を示していく筋書きであるため、『宝物集』の本題は（五）以降に始まると考えるが、（五）の冒頭に「普安王のさとし」の話を置いていることに注目したい。その内容は次のようなものである。

昔、天竺に普安王という国王がいた。また、普安王の国の周辺にも四人の国王がいたが、彼らは慙愧の心が無く、普安王はそれを悲しんでおり一策を講じることにした。

普安王は四人の国王を招いて宴を催し、物語のついでに四人に「どのようなことを好ましく思うか」という質問をする。すると四人は、「常に国王として人々に仰がれること」、「常に父母六親に添うこと」、「常に美しい人に対面して遊び戯れること」、「常に春の野に出て小松を引き花を見ること」とそれぞれ答えた。

そして四人の国王は普安王に同じく「どのようなことを好ましく思うか」と質問を返す。すると普安王は次のように答えた。

つねに十善の位にありて、たのしむはめでたけれども、妻子珍宝及び王位、後世まで身につく事にあらず。つねに父母六親にそはばやおもへば、孝養のこゝろざしふかけけれども、生死無常心にか

なふべからず。つねに形よきものにむつれたはぶるゝはよけれども、つゐには病のためにくづをれ、老のためにやつさる。つねに春の野に出て、花にたはぶれ、霞にうそぶくはおもしろけれども、春をとゞむるにとゞまらず。花をおしむにおしまれず。一旦の興に侍るべし。我、生々世々の宝となるゆへに、仏法と申物ぞ、このもしく侍る。

ここで普安王は、四人の国王が現世における楽しみを語ったことに對し、国王として現世の樂を享受するのは立派なことであるが、妻子・珍宝・王位は後世まで身についているものではないため、永遠の宝となる仏法こそ好ましく思うと語った。これを聴いた四人は普安王に歸して仏のもとへ向かったという。この普安王のことばに『宝物集』の基本的な国王觀が示されていると考える。それは、前世に十善を守った功德によつて生まれる国王だとしても、あくまで現世のはかない存在であり、仏法に歸依して成仏を目指すべきである、というものである。

ちなみに、この普安王説話の後には、仏法には遭ひ難いことを語り、その後諸法空・諸行無常について語る部分が続くのであるが、そこでは、

蜉蝣のあだなる命也。無常なりと觀ぜよ。渴鹿のあだなる命也。是生滅法とおもへ。出る息入息をまたず。石火の光のうちにいくばくたのしみかあらむ。昔のたのしみは今はなし。今の榮、後に有べからず。金輪聖王の位を経し事、いくばくぞ。

として、仏教の理想的帝王である金輪聖王であっても、あくまで現世におけるはかない地位にすぎないとされ、普安王説話の国王観に通ずる記述といえよう。

これらの国王観が語られる説話が、先の構成に示した(五)の冒頭やそれに続く部分に置かれていることを考えれば、『宝物集』における天皇の記述を分析する際には普安王説話にみられる国王観を念頭に置く必要があると考える。

次章以降、ここで確認した国王観を念頭に置きつつ、『宝物集』の天皇について検討していきたい。

## 二 六道部における天皇

『宝物集』では釈迦堂における宝の議論に居合わせた法師によつて、人間にとつて最勝の宝が仏法であるとされ、六道とその苦の諸相が語られて成仏するべきことが論じられていく。

『宝物集』では六道について論じる部分において、様々な苦の例証として天皇に関するエピソードが利用されていることがみられるため、本章ではそれらの天皇の記述について検討していく。

### ①地獄道部における天皇

地獄について説く部分(巻二)では、醍醐天皇と白河法皇の説話が語られている。

醍醐天皇の説話は、金峯山の修行僧日蔵が地獄で醍醐天皇に会ったというものである。

金峯山の日藏上人は、無言斷食にて行じけるほどに、秘密瑜伽の鈴をにぎりながら死いり侍りける。地獄にして延喜の聖主にあひ奉る。御門、上人を見給ひてのたまはく、「地獄に来るもの、ふたゝび人間に帰る事なし。汝はよみがへるべきものなり。我、父寛平法皇のために不孝なりき。また、無実をもつて菅原右大臣を流罪したりき。この罪科によりて、今地獄に落て苦患をうく。かならず皇子にかたりて苦患をとぶらふべし」と仰事ありければ、かしこまりてうけ給ければ、「冥途にば罪なきをもつてあるじとす。上人われをうやまふ事なかれ」と仰られけるこそかなしく侍りつれ。

醍醐天皇の墮地獄説話は、すでに一〇世紀半ばの『道賢上人冥途記』（『扶桑略記』天慶四（九四一）年三月条所引）と『日藏夢記』において登場していたものであるが、『道賢上人冥途記』には「冥途には罪なきをもつてあるじとす。上人われをうやまふ事なかれ」にあたる部分が存在せず、『日藏夢記』には「不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>敬、冥途無<sub>レ</sub>罪為<sub>レ</sub>王、不<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>貴賤<sub>一</sub>」とあることから、『宝物集』の醍醐の墮地獄説話は後者の記述に拠ったものと考えられる。

『宝物集』ではこの後に『俊頼髓腦』を出典とする歌を載せ、次のように述べる。

高丘親王

いふならく奈落の中に入りぬれば刹利も首陀もかはらざりけり

この歌こそおもひあはせられてあはれに待つれ。

ここまでが『宝物集』において醍醐天皇の墮地獄を語る部分<sup>(10)</sup>といえよう。醍醐の「冥途には罪なきをもつてあるじとす。上人われをうやまふ事なかれ」ということばと、高丘親王の「地獄に入ったならば身分の上下は関係なく苦をうける」という意味の歌を併せて示すことで、誰にも容赦はない地獄の苦の恐ろしさを強調しているのではないだろうか。

そして、地獄の語りは次の白河法皇に関する記述を含む話で締められている。

ちかくは、よみがへりの若狭守国忠も、かやうの物がたりし侍りけり。

「右衛門権介重高（号二条衛門介）、地獄にして冥官にまじりて居たりけるが、国忠を見て、座を立て、かたらひむつびていふ、『白河の法皇の、功德も大に、罪も大にて、いまだ生所もさだまり給はぬを見奉れ』とて見せたり」とぞかたりける。

すなわち、「若狭守国忠」が地獄の冥官にまじっていた藤原重隆から、「白河法皇は生前に功德も大いに、罪も大いに作つたために生まれ変わる場所が定まっていらいっしやらないのを拝見してください」と語られ、白河の様子を見せられたとする話である。

この説話が地獄の語りの最後にあり、死後の白河のことを語っているのが地獄の「冥官」となっていた重隆だったということを考えると、『宝物集』は白河も先の醍醐と同様に地獄に堕ちて苦しむ可能性があったと考えているのではないだろうか。片仮名古活字三卷本<sup>(11)</sup>（以下三卷本）の上巻では「とぞかたりける」の後に、「返々モ地獄ハイトヒ侍ルベキ物也」とある。

また、出典と考えられる『三外往生記』の源雅俊伝には、「太上法皇去年帰泉。以来生所未定。善悪二業同分難量之故也。善業者引善趣。悪業者引悪趣」とあり、もし悪業の量が善業の量を上回っていた場合は、白河は悪趣に堕ちることになるのであろう。

地獄の語りの部分においては醍醐と白河の説話があり、醍醐は地獄に堕ちた天皇として、白河は地獄に堕ちる可能性があった天皇としてそれぞれ語られていた。醍醐の「冥途には罪なきをもつてあるじとす。上人われをうやまふ事なかれ」ということはや、高丘親王の「いふならく奈落の中に入りぬれば刹利も首陀もかはらざりけり」という歌がみられることから、『宝物集』では前世における十善の功德がある天皇であっても、現世で罪を作れば他の衆生と同様に地獄に堕ちる存在としているといえよう。

## ②人道部における天皇

人道部では、生老病死の四苦と怨憎会苦（巻二）・愛別離苦・求不得苦・五盛陰苦（巻三）について述べられていく。

四苦では、病苦の部分で病に苦しんだ者の例を挙げていく先頭に、

病はまことにたえがたく、かなしき事にてぞ侍なり。国王大臣にもところををきたてまつらず。  
とをき国を申に及ばず。冷泉院・三条院などの、十善の位をさらせ給ひしも、御悩めへところうけたまはりしか。

として、冷泉天皇と三条天皇の退位は病によるものだったことを述べる。病苦は高貴な「国王大臣」であつても関係なく悩まされるものであることを説いている。

次に死苦では、

ゑんま王の使は、高貴をもきはらず。無常の殺鬼は賢愚をもえらばず。堯帝・舜帝の賢主音にのみきこえ給ふ。延喜・天曆の聖の御門、かげをだにものこし給はず。三平・三道の臣、またかくのごとし。

として、理想的な治世を行ったとされる「聖の御門」たる村上天皇・醍醐天皇であっても、閻魔の使いや無常の殺鬼は容赦なく死をもたらし、死後にはその姿を少しも残さないとする。

また怨憎会苦では、他人を怨んだり、他人から怨まれたりした者の事例を語る部分で、

一条の摂政伊尹と朝成の中納言とは、藏人頭争ひに、中納言はおそろしきものになりて、一条殿の御族をばほろぼしたまふぞかし。

御孫花山院も、いまだ御歳十九と申しに、位をすてて修行に出おはしましにき

として、藤原朝成の祟りと花山天皇の退位を結びつける記述がある。

『栄花物語』や『大鏡』では、朝成は藤原行成などの藤原氏の伊尹の子孫に祟ったとするが、朝成の

崇りと伊尹の孫にあたる花山天皇（冷泉天皇と伊尹女懷子の所生）の退位を明確に結びつける記述はみられない。しかし『宝物集』では、朝成の崇りが花山の退位にも影響したとする。伊尹が朝成の怨みを得たために、後にその外孫の花山は若くして天皇の地位から降りることになったというのであろう。

他人を怨んだ・他人から怨まれた人物の事例の後は、怨んだ・怨まれたことで流された事例（藤原伊周・隆家兄弟、菅原道真など）が語られる。

その後には次のように、

これまでは命ながらふれば、又古郷へかへる事侍るめり。天竺・震旦・我朝おろく／＼申し侍るべし。  
先、耳ちかき吾朝より申し侍らん。

として、次のように怨まれたことにより命を失うことになった者の事例を語っていく（<sup>12</sup>）。

上宮太子の御時、崇峻天皇、曾我大臣におかされ給ふ。

孝徳天皇の御代に、入鹿の臣・曾我の山田石川丸右大臣、二人ながら天智天皇に誅せられたてまつる。

大伴の王子は、天武天皇のいまだおほうみの王子と申ししおりころされたまふ。

左大臣長屋の王は聖武天皇にころされたまふ。

恵美押勝は高野の天皇にころされたてまつる。

伊与親王は平城天皇にころされ給ふ。

平城天皇は嵯峨の御門にまけ、御子真如親王は、春宮の位をおりて天竺へわたり、道にてうせたまひにき。

このように六世紀から九世紀の怨憎会苦によつて命を失うに至つた者の事例として、天皇が関係する事例が並べられている。

この後には一〇世紀の事例として、平将門や藤原純友などの武士の名がみられ、最後には、救世観音の垂迹である聖徳太子も物部守屋を討ち、第三地の菩薩である空海も守敏を調伏したことを語つて日本の事例を終えている。

怨みによつて命が失われることは、怨憎会苦による現象においては最も過酷なものといえよう。『宝物集』は怨憎会苦による死の事例で、天皇を武士や菩薩の垂迹とされる人間とともに語ること、いかなる人間であつても怨憎会苦から免れることはできないことを示していると考える。

### 三 十二門部における天皇

『宝物集』は二章で示した項目(六)で六道について述べた後、「声少しなまりたる」法師が苦の世界である六道から「仏にならざらんかぎりは、いかでかはなれ侍るべき」として、巻四以降の項目(七)

で「仏になる道」の十二門について説いていく。

法師は項目（六）の末で、この後に詳細に説いていく「仏になる道」の十二門の概要を次のように語る。

第一には道心をおこして出家遁世し、

第二には深く三宝に信をいたし、

第三には如来の禁戒をかたくたもち、

第四にはもろくの行業をつみ、

第五には仏にならんと願をおこし、

第六には業障をさんげし、

第七にはもろくの施を行じ、

第八には観念をもつばらにし、

第九には善知識にあひ、

第十には臨終の悪念をとめ、

第十一には法花経をおこなひ、

第十二には弥陀仏を恭敬するなり。

これらの十二門部においても、天皇に関するエピソードが多く存在しているが、結論を先に述べれば、十二門部において天皇は、他の人間と同様に成仏のための十二門の道を行うべき存在とされており、輪

廻転生の世界に組み込まれていると考えられた。

そのため本章では、十二門部における天皇の前世・現世・来世に関する記述をとりあげて検討していきたい。

### ①天皇の前世について

十二門部では天皇の前世について語られていることがみられる。

十二門第三「持戒」(巻五)では、五戒の最後に不妄語が語られた後に次のような説話がある。

恵心院の源信僧都の、年のはじめには、かならず首楞嚴院の洞より出て、朝覲の行を見たまひければ、御妹に安養の尼と申ける人の、此事を怪しみて、「君は無極の道心の人なり。何の料に、年ごとに朝覲の行幸をみたまふぞ」と問ひたまひければ、「昔の戒力によりて、今、十善の位に生たまへるがなつかしさに、見たてまつる也。又、大臣公卿よりはじめて、あやしのからかさもてるものゝいたるまで、前世の戒力によりて差別あるを見るに、過去遠々の流転の観ぜらるゝなり」とぞのたまひける。

天皇の行幸を見た源信が妹の安養の尼に、現世に「十善の位」、つまり天皇として生まれるのは前世の戒力によるとし、現世における身分の差は、前世に積んだ戒力の差に起因していると語ったという説話である。

この説話が不妄語の直後に置かれている意味は分かりにくい部分があるが、この説話の直前に「五戒の大意とす」とあり、説話内でも「戒力」について述べられていることから、おそらく持戒による功德の力を示す話として置かれていると思われる。二巻本『宝物集』では、この源信の説話の後に「今世後世のめでたき事は、ただ五戒をたもつに過ぎたる事なし」とある。

ここでは、天皇が過去遠々に流転してきたという点では、「大臣公卿」や「あやしのからかさもてるもの」と同じ輪廻の中の衆生とされているといえよう<sup>(13)</sup>。

しかし、「前世の戒力によりて差別ある」ともしており、前世の戒力が優れているという点では、他の人間から差別されているともみられる。

もう一つ天皇の前世については、十二門第十一「法華経」(巻七)に清和天皇の前世説話が存在する。

文徳天皇の御時、法花経三千部よみたる沙門、内供奉を申。大納言伴善男、是をうけずして申とめつ。沙門、惡念をおこして、「三千部の経を三つにわけて、一千部をもては難行苦行して、後世の資糧にせん」とちかひてうせが力をもては伴大納言を罰し、一千部が力にて難行苦行して、後世の資糧にせん」とちかひてうせぬ。願力たがふ事なし。清和天皇とむまれて、伴大納言を伊豆国へながしつかはす。

このように清和天皇の前世を「法花経三千部よみたる沙門」とする説話である。清和の前世とされる僧は「内供奉」に任じられることを望んだが、伴善男にその願望を阻まれたという。このことを怨んで「惡心」を發した僧は、『法華経』三千部を読んだ功德を三つに分け、そのうち一千部の功德によって天皇に

転生することを願ひ、その願に違ふことなく清和となつたとする。なおこの説話は、細部は多少異なる部分があるが『江談抄』にすでにみられているものである<sup>(14)</sup>。

この説話では、僧は「悪念」という一種の執着心を抱いたことをきっかけとして天皇に転生することを願つたとされている。僧であれば現世における執着心を無くして輪廻の世界から解脱すべきところを、『法華経』の功德を廻向してまで再び人間世界に生まれたのである。

これらの天皇の前世に関する記述からは、天皇が過去世の業によつて人間世界に生まれた存在として明確に位置づけられていることが分かる。

ただし、次節の検討に関連して、他の人間よりも前世の戒力が優れているという点で差別もされていることにも注意しておきたい。

## ②現世における天皇

前節では、十二門第三で源信の口から語られる天皇観について確認したが、そこで天皇は、大臣公卿以下の人間と同じく過去遠々に流転してきた存在とされながらも、最も優れた前世の戒力を持つ存在として差別されていることにも注目した。

この点に関係して、次の十二門第二「三宝」(巻四)にみられる説話を取り上げたい。その概要は次のようなものである。

後一条天皇の時代に行われた法成寺金堂供養の日に、とある河内国の聖人が上京して出席した。

聖人は関白藤原頼通が多くの官人らのほか、兄弟の公達以下の様々な人々に奉仕されている様子を見

て「一の人」こそが素晴らしいと感じた。

しかし、その後一條が鳳輦の御輿に乗り、左右の近衛の陣が引かれ、乱声の演奏とともに出御する様子を見て鳥肌が立ち、「公こそめでたき事なりけれ」と感じ、「うら山しく」もなった。

ところが後一條は御輿から降り、極楽のように荘嚴された堂の「金色の御仏」の前を両袖をかきあわせて畏まりながら通過した。これを見た聖人は最終的に仏こそが最も素晴らしいと思ったという。

そして、「はやく彼の聖人のおもひをなして、諸仏にたのみをかけ奉りて、仏道をねがひ給ふべき也」として、帰依仏を説く部分が締められる。

この話で河内国の聖人は最勝たる存在を、関白頼通↓後一條天皇↓仏の順で思いなおしていく。最終的には仏に帰依して成仏すべきことが説かれているのだが、当然ながら仏を除けば、最も「めでたき」存在は天皇ということになる。ちなみにこの河内国の聖人の説話は、『大鏡』にもみられるもので、そこでは関白頼通↓大殿道長↓天皇↓仏の順で聖人は最勝たる存在を思いなおしている。

前節の源信の説話と併せ、『宝物集』では天皇を現世では最も優れた存在としていると考えたい。

ただし、『宝物集』の筋書きにおいては当然ながら、こうした存在である天皇も十二門を實踐し成仏すべき存在として語られていると考えられる。

例えば、「道心をおこし、出家遁世して仏道をもとむ」べきことが説かれる十二門第一「道心」(巻四)では、日本の出家遁世した者の事例の先頭に、

寛平法皇、出家遁世して、所々に修行し給ひけり。(中略)

花山の法皇は、十善の位、万機の政をすてて、清涼紫宸の玉のすだれを出て、はるかに那智の山にこもり給ふ。

として、宇多法皇と花山法皇の事例を挙げる。

この説話の前には、天竺の事例として「十善の位」を捨てて仏道を求めた善無畏三蔵と「天竺の国王」の話、続いて仏法に帰依した震旦の国王の話があり、それらに続いて宇多と花山から始まる日本の出家遁世者の事例が語られている。両法皇の話は、日本の出家者の模範的事例の先頭に位置づけられていると考える。

この他にも、「もろくの行業をつみて仏になるべし」とし、「心ある人は皆、仏像をあらはし、堂をつくらぬやは侍る」として造仏・造寺の事例が語られる十二門第四「行業」では、東大寺建立説話の後に、「仏を申せば十六丈、金銅の盧舎那なり。これを宮みたまひけん、いかゞ行業とならず侍らん」とあり、聖武天皇の東大寺建立が成仏のための行業の例証とされている。

十二門部では、模範的な事例として天皇の事績が語られていることがみられるが、現世で最も優れた存在である天皇ですら成仏を目指しているとするので、十二門を實踐して成仏すべきという『宝物集』の思想を強調する効果があったと推測しておきたい。

### ③天皇の罪業について

第二章で確認したように、『宝物集』ではすでに六道部の地獄について語る部分（巻二で醍醐天皇や

白河上皇の罪業が語られていたが、十二門部第六「懺悔」(巻六)にも、本節で確認するように醍醐天皇が自身の罪業を恐れているとみられる説話が存在している。

十二門第六では、人間の様々な行為や思いは悉く罪業となるとし、それらの往生の妨げとなる罪業を懺悔して成仏すべきことが説かれている。懺悔を説くために、『宝物集』は「刹利居士の懺悔」を利用しており、これは『観普賢菩薩行法経』にみられるもの<sup>15</sup>とされるが、『宝物集』では、正法による治国↓六斎日の不殺生↓深く因果を信じることの順で説かれることになる。

ここでは、正法による治国を説く部分で醍醐が「政すなほならざる」罪を恐れていることを確認したい。ただし、確認のためには、醍醐の説話に至るまでの筋書きを示す必要があると思われるので、多少長くなってしまうが、醍醐の説話に至るまでの大筋を示してから醍醐の説話をみていきたい。

まず、正法による治国については、「政、正法ならざれば、天下みだれぬ。天下みだれぬるは民の歎き、則、罪業なり」とし、正法によつて国を治めなければ結果として罪業となることが述べられる。そして、政を改めて正しく行うことは懺悔になるといい、中国の事例が語られていく。

中国の事例では、まず周の文王が太公望を得たことや殷の高宗が傳説をもとめて政をとらせたことなど、優秀な臣下を用いた国王の事例が語られる。その後には、唐の玄宗が一行阿闍梨を楊貴妃に近づいた疑いで流罪にし、その後に安祿山になやまされたことを語る。

さらに、「屈原、罪なくしていましめられしかば、汨羅の淵に身をなげ、邦術、犯しなくして罪をかぶりしかば、五月天に霜くだりき」など、讒言により失脚した臣下や、「夫差の五員をうしなふ末に、越王勾践にほろぼさる」など、臣下の諫を聞き入れなかった国王の事例が語られる。

このような事例を述べ、「政すなほならざるは、現当二世のたゞりに侍る事なり」として、正法によらない政によって現世・来世で罪報を受けることを説く。

その後、日本にもそのような事例は多くあるとして、僧位をめぐつて怨みを抱いた観算が雷となって藤原清貫と平希世らを殺したことを語り、続けて醍醐の説話となる。

又、公忠の弁よみがへりて、急ぎ参内して、「閻魔王宮にして、政をうらみて、延喜の帝をめして給ひ候へ」といふ声なん侍りつる」と奏しければ、俄かに延長と云ふ年号にかはりてこそ、とは申て侍るめれ。

閻魔王宮は醍醐天皇の政を正法ならざるものと判断したのであろうが、その政に不満を抱き冥界に召喚しようとしたという。このことを源公忠から聞いた醍醐は、延喜から延長に改元したという。

ちなみに、延長の改元は『日本紀略』の改元当日条によれば「水潦疾疫」が理由とされる（延長元（九二三年）閏四月十一日条）。しかし、改元前の同年三月二十一日に醍醐皇子保明親王の死について、「拳世云、菅帥靈魂宿<sup>レ</sup>忿所<sup>レ</sup>為也」ともされ、改元後の四月二十日には道真の本官復位と正二位の追贈がされているため、道真の怨霊へ対処する意味もあったと考えられる。

『宝物集』では道真の姿はみられない説話となっているが、本話は『宝物集』以前には『江談抄』にみられており、そこには道真とされる冥界の人物が登場している。類聚本『江談抄』三においては次のように始まる説話となっている。

急死した公忠が家中の者たちに「私を参内させよ」と、やたらと熱心に告げたので、家人たちに扶助されながら参内し、醍醐に閻魔庁で見聞きしたことを奏上することになった。そして公忠が奏したことは、

初め頓滅の剋、覚えずして冥官に至る。門前に一りの人有り。一丈余り、紫の袍を衣て、金の書札を捧げ、訴へて云はく、『延喜の主の所為、尤も安からず』といへり。堂上に朱と紫を、紆へる者三十ばかりの輩有り。その中の第二座の者咲ひて云はく、『延喜の帝はすこぶるもつて荒涼なり。もしくは改元有るか』と云々。事了りて夢のごとく、たちまちに蘇生す<sup>(16)</sup>。

とのことであり、紫の袍を着た人物（新大系の注では『水言鈔』の説話配列からこの人物を菅原道真とする）、つまり道真が「延喜の帝が自分を左遷したことは実におもしろくない」と言つたという。さらに冥官の「第二坐の者」が「延喜の帝はすこぶる思慮にかけた振舞いをする。ひよつとすると改元があるか」と言つたという。この引用部の後に、醍醐がたちまちに改元したとして本話は終わっている。

『宝物集』では「閻魔王宮」の声の主について細かく記さないが、『江談抄』に拠つたならば道真となろう。また『宝物集』では、公忠の説話以前には中国において臣下が適切に処遇されなかった事例が語られていた。そして、すでに醍醐は地獄道部で墮地獄説話が語られており、地獄に墮ちた理由として「無実をもつて菅原右大臣を流罪」とした罪が述べられていた。

とすれば、『宝物集』では声の正体は明確ではないが、閻魔王宮が「政をうらみて、延喜の帝をめして給ひ候へといふ声」を発した理由も、罪の無い道真を誤つて左遷したことに関わることを考えられる。

醍醐は政を改めなければ死亡して閻魔王宮で罪が問われ、最悪の場合には地獄に墮ちるかもしれない。本話における醍醐はこのような事態を恐れて改元したといえよう。

説話の解釈が長くなってしまったが、このように本話からは罪業による報いを恐れる天皇の姿が語られて、いることを確認しておきたい。

#### ④天皇の往生について

『宝物集』が天皇の墮地獄や罪業について語っていることは確認してきたとおりであるが、同じく来世に関わることで天皇の往生に関する記述があることも確認したい。

まずは、一節で示した十二門第十一「法華経」(巻七)の清和天皇の説話を取り上げる。再度の引用は省略するが、ここでは先行する『江談抄』の類話にはみられない次の部分を示す。

さて後に、丹波国水の尾と云ふ所にこもりゐて、難行苦行し給ひき。悪念をもて廻向する、猶し、たがふ事なし。いはんや、往生極楽のために廻向せん人、たがふ事あるべからず。

第一節で引用した説話に続く部分であるが、清和は後に水尾山で「難行苦行」したといい、『法華経』の功德を廻向した三つ目の願であった「難行苦行して、後世の資糧にせん」ことが叶えられたことを語る。そして、「悪念」をもって法華経の功德を廻向したとしても全て願が叶うのだから、ましてや極楽往生のために功德を廻向する者の願が叶うことはいうまでもない、とする。

清和の「難行苦行」の記述は、おそらく『日本三代実録』元慶四（八八〇）年一二月四日条が基になっていると考えられる<sup>(17)</sup>。ここでは、清和は山林修行や巡礼、酒酢塩豉を断つなどの厳しい食事制限を行い、臨終には金剛陀羅尼を誦して西方を向き、結跏趺坐して定印を結び崩じたとされている。後に三善為康は本条を基にして『後拾遺往生伝』の下巻冒頭に清和天皇伝を載せている。

清和の「難行苦行」の記述が『日本三大実録』の記事に拠っているならば<sup>(18)</sup>、『宝物集』は明確には記していないものの、『後拾遺往生伝』と同様に清和は「難行苦行」により往生を遂げた人物として想定していると考える<sup>(19)</sup>。

次に十二門第十二「称念弥陀」（巻七）の記述を取り上げる。

ここには、日本において「弥陀を称念して極楽に往生したる人」の名前を挙げる部分があるが、そのなかに「花山院」と「先一条院」の名がみられる。

一条天皇は、すでに十二門第六「懺悔」（巻六）で往生を遂げた人物とされていた<sup>(20)</sup>。一条が往生したと語られる前には、魏の文帝について「政すなほにして他の善なしといへども、往生の素懷をとげ給へり」とし、政が正法であつたため他の善は無かつたが往生を遂げたとしている。その後にも「政すなほ」であり民をいつくしんだ天皇が多く存在したといい、その例として仁徳天皇と一条を挙げ、一条については往生を遂げたとする。ここでは、『続本朝往生伝』にみられる一条朝に活躍した親王や大臣公卿以下の人物の記述があり、『宝物集』の一条の往生についての記述は同伝に拠っていると考えられる。一方で、花山天皇に関しては、院政期の往生伝の類にはその伝は見られていない。しかし、摂関期にあたる一一世紀前半の『楞嚴院廿五三昧結衆過去帳』<sup>(21)</sup>の中に、花山法皇伝が存在していることに注目

しておきたい。

『楞嚴院廿五三昧結衆過去帳』はその名の通り、比叡山横川の楞嚴院で催された廿五三昧会の会衆の過去帳で、五十一名の会衆を没年順に並べて生没年を記し、往生業が顕著な十七名の会衆についてはその行業が記されている。廿五三昧会は源信の『往生要集』に影響されて発足した念仏集団とされる<sup>(22)</sup>。なお、この過去帳について書写者の慶政は、源信が書き始め、その没後に覚超が書き継いだものとする説を記している。

この過去帳に収録されている花山法皇伝には、

花山法皇〈寛弘五年二月八日崩御生年四十一〉

捨金輪位、作沙門形、忝至尊之叡質、暫為一結之等侶、彼時結衆扞一勝地、各立一卒堵婆、以占墳墓之处、降綸旨云、現世昇沈上下雖隔、菩提依正、彼我何異、我与汝等、欲同事矣、即依宣旨、二十五中心、立御願卒堵婆了、今依遣詔、以御骨奉安置彼处也、仙骨俗骨共契東山之暮雲、聖靈凡靈同期西方之曉月、御願之旨深以隨喜、抑聖靈歸花城、而遷化、御臨終事難知、和光同塵、形迹不定、示善現惡、凡情叵測、大権方便、不可輕議者也、

とある。ただし、往生したかどうかについては、「而遷化、御臨終事難知、和光同塵、形迹不定、示善現惡、凡情叵測、大権方便、不可輕議者也」とあり、凡人には測り難く軽々しく論じてはならないとして明言を避けている<sup>(23)</sup>。

しかし、花山は念仏集団廿五三昧会の「一結之等侶」となり、過去帳に往生業が顕著であった人物とみなされてその伝が記されていた。この事実に拠って『宝物集』は花山を「称念弥陀」によって往生した人物と明記したのではないだろうか。源信の『往生要集』は『宝物集』に強く影響を与えているとされている<sup>(24)</sup>。康頼はその源信の著とされた『楞嚴院廿五三昧結衆過去帳』を見て花山を往生者とみなしたと考える。

おわりに

以上、本稿では『宝物集』における天皇の記述について検討してきた。本稿での各説話の検討を総合し、次のようにまとめておく。

『宝物集』では天皇も六道において苦を受ける存在とされ、成仏のための十二門の道のいずれかを行うことで成仏・往生するとされていた。人間として苦を受け、十二門のいずれかで仏となるとされることは、他の者と区別はなかった。こうした天皇観は、卷二の先頭の「普安王のさとし」にみられる、「前世に十善を守った功德によって生まれる国王だとしても、あくまで現世のはかない存在であり、仏法に帰依して成仏を目指すべきである」という国王観に通ずるといえよう。

一方で、日本の人間の中では最も前世の戒力があるとされ、最も「めでたき」存在ともされ、他の人間とは一線を画す存在とされているようにもみられた。

本稿で検討してきた天皇に関する記述が、「人間にとってこの世における最勝の宝は仏法であり、苦の世界である六道から脱け出して成仏すべきである」ことを示すための例証として『宝物集』で用いられている意味を次のように考えておきたい。

現世で最も優れた存在である天皇も生老病死の苦を受け、生前に罪を作れば来世では地獄に堕ちる。だからこそ天皇の地位を捨てて修行したり、造寺造仏を行ったり、正法によつて国を治めたりして、功德を積んで六道を離れて成仏しようとする。日本の人間の中で最勝の存在である天皇ですらこのようであるから、それ以下の人間はいうまでもなく仏法に思いをかけて成仏のための道を行うべきである、と読者に説く意味があったと考える。

また、『宝物集』は作品の筋書きに合わせて天皇の前世、現世における功德や罪業、来世に関するエピソードを採り込み、天皇を輪廻転生の世界の中に完全に組み込んでいた。管見の限りこれまで『宝物集』という一つの作品内において、天皇の三世が漏れなく語られ、明確に輪廻転生する存在と位置付けられていることは注意されていなかったように思われる。

天皇を輪廻転生する存在として明確に語り始められるのが院政期、特に大江匡房（一〇四一—一一一一年）の時代であるとすれば、天皇を輪廻転生する存在として捉えることが、約一世紀を経て貴族の間に浸透していた<sup>(25)</sup>ことを『宝物集』の記述は示しているのではないだろうか。こうした天皇観を有する作品が平安時代から鎌倉時代に移行する時代の転換期に成立したことの意味については、今後の課題として考えていきたい。

〔註〕

- (1) 小泉弘編『宝物集 中世古写本三種』(古典文庫、一九七一年)、同『古鈔本寶物集 研究編』(角川書店、一九七三年)。小泉氏は著者平康頼はまず「一巻本を書いたとする。さらに第二種七巻本も康頼自身の改稿によるもので、これは『千載和歌集』の成立(文治四(一一八八)年四月二十二日)以前に完成していたとする。
- (2) 山田昭全『宝物集 解説』(小泉弘ほか校注『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』所収、岩波書店、一九九三年)。
- (3) 前掲注(2) 小泉弘ほか校注文獻。
- (4) 一巻本は宮内庁書陵部蔵本を翻刻した小泉弘「宮内庁書陵部蔵『寶物集』翻刻」(『国学院女子短期大学紀要』六、一九八八年三月)、二巻本は北海道大学付属図書館蔵本を翻刻した追塩千尋・北海道説話文学研究会「北海道大学付属図書館蔵 二巻本『宝物集』校訂本文」(『北海学園大学人文論集』三七、二〇〇七年一〇月)、片仮名古活字三巻本は静嘉堂文庫蔵本を底本とする山田昭全ほか編『宝物集』(おうふう、一九九五年)による。
- (5) 吉原浩人「日本往生極楽記と院政期往生伝―天皇の往生をめぐる―」(本田義憲ほか編『説話の講座 第四巻 説話集の世界―古代―』所収、勉誠社、一九九四年、一三三頁)。
- (6) 筆者は吉原氏の論などに導かれながら、一二世紀に天皇の前世についての説話が展開することに注目し、それが天皇権威の変化に関わる現象と考えたことがある(拙稿「院政期の天皇前世説話について」(『北海学園大学人文論集』七一、二〇一二年八月)。
- (7) 以下、康頼については、橘純孝「平康頼伝考」(『大谷學報』二二―一、一九三二年一月)、山田昭全「平康頼伝記研究」(同「山田昭全著作集 第2巻 宝物集研究」所収、おうふう、二〇一五年、初出一九七五年) 参照。
- (8) 『国史大辞典』「中原氏」の項参照。
- (9) 山田昭全「平康頼の資料蒐集と処理方法―『宝物集』の場合―」(前掲注(7) 山田昭全文献所収、初出一九八〇年)。
- (10) 醍醐天皇の墮地獄と高丘親王の歌をセットで語るのは、中世の説話集では『十訓抄』と『沙石集』に継承されている。
- (11) 以下、三巻本は静嘉堂文庫蔵本を底本とする山田昭全ほか編『宝物集』(おうふう、一九九五年) による。
- (12) 三巻本上巻では、「是迄八命アラバ、又古郷へ帰ル事モ有ヌベシ。永命ニ及フ恨ミモ多ク侍メリ」とする。
- (13) 田中徳定氏はこの源信の説話から、「現世の天皇を、前世の戒行による転生と捉える視点」と「現世においてこそ

身分の差はあるものの、それは前世における戒行の結果であつて、前世にあつては天皇は大臣公卿以下の人々と差別がない」とする考えを読みとつている（田中徳定「十善の君」考―天皇の前世をめぐる問題と関連させて―）（水原一編『古文学の流域』所収、新典社、一九九六年）。

(14) 類聚本『江談抄』三によれば、「清和太上天皇、先身は僧為り。件の僧、内供奉十禅師を望む。深草天皇は補せしめんと欲ひたまふ。しかるに善男奏してもつて停む。件の僧、悪心を発し法華經三千部を読み奉る。願に云はく、「千部の功力をもつて、当生によりしく帝王と為るべし。千部の功力をもつて、善男のためにその妨げを成すべし。残りの千部の功力をもつて、まさに妄執を蕩して苦を離れ道を得べし」と。この僧、命終して幾程もなく、清和天皇誕生したまふ。童稚の齡為りといへども、先世の宿縁に依り、事に触れて善男を悪ましめたまふ。善男その気色を見て修験の僧を語らひ得て、如意輪法を修せしむ。よりてすなはち寵を成せり。しかれども宿業の答ふところ、事に坐して罪に至る」とある。

(15) 前掲注(2) 小泉弘ほか校注文獻二六〇頁注四。

(16) 『江談抄』の引用は新日本古典文学大系本（後藤昭雄ほか校注『江談抄 中外抄 富家語』（岩波書店、一九九七年）による。

(17) 前掲注(6) 拙稿。

(18) 『後拾遺往生伝』の成立は、同じく為康著の『拾遺往生伝』の成立後一一一三年から為康の没年一一三九年の間とされる。そのため、『後拾遺往生伝』は『宝物集』の成立時には存在していたと考えられるが、巻七の「称念弥陀」で挙げられる「弥陀を称念して極樂に往生する事」を記した書名の中には「三善為康拾遺往生伝」とあるが、『後拾遺往生伝』の名はみられない。

(19) 一巻本では十二門第一「道心」に、「清和天皇ハ、十善之位、万機之政ヲステ、山林流浪シテ、水尾丹後之国ニ有トイフトコロニコモリキタマヒニキ」とある。また、三巻本では清和の前世の僧の三つ目の願を「我終ニ仏道ヲ成サン」とし、清和の修行とその評を次のように記している。「御門未ダ若クヲワシマシケレドモ、道心ヲ発シ、御出家有テ、水尾ト云処ニ籠リ居サセ給テ、イミジク行ナヒスマサセ給ヒケリ。彼御誓ヒ三ニ別テ、廻向シ給ヒケル。一モ不違遂サセ給ヒケル事ヲ思ニ、法華經ノイミシキタメシ云ハカリナシ。カ、ルタメシ多ク侍レドモ、難申尽。

トク／＼此經ヲ修行シテ仏道ヲ遂サセ給フベキ也」。三卷本によれば、清和は前世の願に違ふことなく修行を積んで仏道を成就した人物になっているといえよう。

(20) 『続本朝往生伝』から一条朝に活躍した親王や大臣公卿以下の人物の記述が引用されており、『宝物集』の一条の往生についての記述は同伝に拠っているといえる。

(21) 序文は長和二(一〇二二)年に記されており、最末の伝は長元七(一〇三四)年没の覺超である。

(22) 平林盛徳「資料紹介 楞嚴院廿五三昧結衆過去帳」(『書陵部紀要』三七、一九八六年二月)。花山法皇伝の引用もこれによる。

(23) 前掲注(5) 吉原浩人文献。

(24) 前掲注(9) 山田昭全文献。

(25) 大隅和雄氏は時期について明言していないが、「貴族の中には、因果と輪廻の思想をもとにして、自分のありかたを考えようとする者が現れ(中略)貴族社会に仏教の教えが浸透するにつれて、天皇だけが因果と輪廻の外にあるという考え方、つまり天皇だけは仏教の理法の外にあるという主張を高く掲げることがむづかしくなった」(大隅和雄「総論―因果と輪廻をめぐる日本人の宗教意識―同編『大系 仏教と日本人 四―因果と輪廻』所収、春秋社、一九八六年)とする。



# 歴史的風致として選定された 小樽の祭礼文化

—水天宮多賀神社例大祭と「歴史まちづくり法」—

蟬塚 咲衣

## 1. 研究の背景と目的

### 1-1. 研究の背景

北海道の小樽市では、現在、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（以後、「歴史まちづくり法」）」に基づき、「小樽市歴史的風致維持向上計画」の策定に取り組んでいる。策定に向けたスケジュールは、2023年4月から歴史的風致の検討や資料収集を開始し、2025年2月下旬の認定申請、同年3月の認定を目指している<sup>1)</sup>。

「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」は2008年11月4日に施行され、国土交通省、文部科学省（文化庁）、農林水産省が共管している法律である。2. で詳述するが、歴史的風致維持向上計画の2024年7月17日時点の認定状況は、40府県97都市であり、そのうち1期で計画を終了したのが3都市、計画期間の終了を見越し、2期計画が認定済みなのが42都市である<sup>2)</sup>。なお、

これまで北海道における認定事例はなく、小樽市が認定された場合は道内初認定となる。

小樽市の策定体制として、学識経験者や重要文化財関係者、まちづくり団体などに携わるメンバーで構成された「小樽市歴史的風致維持向上協議会委員」のほか、小樽市の職員で構成される「庁内検討会議委員」がある<sup>3)</sup>。「庁内検討会議委員」の事務局は、建設部新幹線・まちづくり推進室、産業港湾部観光振興室、教育委員会生涯学習課の3部署が務め、委員は事務局以外の11部署の課長および主幹が務めている<sup>4)</sup>。11部署のうちの1つが小樽市総合博物館で、主幹が委員として参加しており、事務局からの依頼に応じる形で筆者も「歴史まちづくり法」の歴史分野の監修に携わっている。小樽市の歴史的風致のうち、市内全域に人々の営みが最も反映されていると考えるのが「祭りの賑わいにみる歴史的風致」であることから<sup>5)</sup>、小樽市内の祭礼を調査テーマとしている筆者は、事務局の要請に対して日頃の調査研究成果を提供する役割を担っている。小樽市のなかで策定の中心的な役割を担っているのは、建築物や景観などのハード面を担当している建設部新幹線・まちづくり推進室であり、博物館はソフト面やその他の文化的な事柄に関する貢献が求められている。



図1 祭礼のイラストが表紙に掲載されているパンフレット<sup>7)</sup>

## 1－2. 研究の目的

歴史的風致維持向上計画が認定されている国内97都市のうち、「維持向上すべき歴史的風致」の項目およびその内容に地域の祭礼を挙げている都市は、97都市全てであった<sup>6)</sup>。パンフレットの表紙が示すように、歴史的風致を定めるうえで、祭礼がソフト面（人々の活動）を示す代表的な事例となっていると言える（図1）。したがって、小樽市の歴史的風致維持向上計画においても、2024年10月時点で「祭りの賑わいにみる歴史的風致」として神社例大祭4件と、小樽市民によって生み出された祭り1件が挙げられている<sup>8)</sup>。人々の営みの内容として、神社の神輿渡御といった移動ルートが可視化できるものと、祭礼で伝承されている民俗芸能が中心である。筆者は2022年から小樽市総合博物館に勤務し小樽の祭礼調査を始めたが、「歴史まちづくり法」では重点区域や歴史的風致の範囲などの子細なデータが求められることから、必要な情報を提供している。

以上のことから、本稿では、下記2点を目的とする。1点目は、「歴史まちづくり法」において計画書に盛り込まれる伝統的な祭礼の1つである水天宮多賀神社例大祭について詳細を明らかにすることである。2点目は、歴史的風致維持向上計画の策定にあたって今回のように博物館の日常的な調査研究の成果が必要とされたように、博物館が果たすことのできる役割について考察することである。

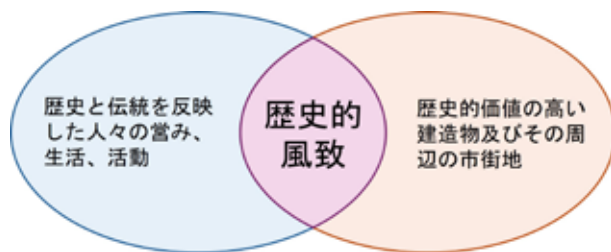


図2 歴史的風致の概念図<sup>9)</sup>

## 2. 「歴史まちづくり法」と博物館に関する法令

「歴史まちづくり法」における歴史的風致とは、「歴史まちづくり法」第1条において「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義される。図2のとおり、ハード（建造物）とソフト（人々の活動）が一体化した概念であることが特徴で、歴史的風致を維持及び向上させることにより、個性豊かな地域社会の実現、都市の健全な発展と文化の向上に寄与することを目的としている<sup>10)</sup>。自治体が歴史的風致維持向上計画を作成し国から認定されることで、社会資本整備総合交付金等における各種事業による支援や法律上の特例措置といった、重点的な支援を受けることができる<sup>11)</sup>。本計画のなかでは、歴史・文化を活かしたまちづくりを進めるため、核となる国指定文化財とそれと一体となって歴史的風致を形成する周辺市街地を「重点地区」として設定する<sup>12)</sup>。「重点区域」とは、「歴史まちづくり法」第2条において「歴史的風致の維持及び向上を図るための施策を重点的かつ一体的に推進することが特に必要であると認められる土地の区域」とされ、「重要文化財、重要有形民俗文化財又は史跡名勝天然記念物として指定された建造物の用に供される土地」、「重要伝統的建造物群保存地区内の土地の区域」、「その周辺の土地の区域」という条件に基づき明確に範囲を定める必要があることから、本稿で扱う祭礼についても地理的な情報が要求される<sup>13)</sup>。

「歴史まちづくり法」は、自治体が文化財を活用して地域振興を実現しようとする狙いがあり、共通した方向性を有する文化財や地域振興に関する法令は少なくない。互いに影響を及ぼしあっているために、それらを総合的に取り扱い概観する。「歴史まちづくり法」の背景には、日本における文化財保護に関する最初の措置である1871年の「古器旧物保存法」や、都市の風致や美観保全の

最初の都市計画関連法規である「広告物取締法（1911年）」といった明治期の制度にはじまり、戦後の「文化財保護法（1950年）」、「都市計画法の全部改正（1968年）」などがある（歴史まちづくり法研究会2009：5-13）。しかし、「古都保存法（1966年）」、「文化財保護法」、「景観法（2004年）」や「都市計画法（1968年）」といった歴史的なまちなみの保全などに関する既存の法律では対象とする範囲や内容に限界が生じ、地域の文化財を周辺環境を含めて総合的に把握し、保存・活用する地方公共団体中心の取り組みの必要性や、現存する歴史的風致の保存・継承・再生を図るまちづくりを積極的に推進するための制度構築が求められたことから、「歴史まちづくり法」が制定された（歴史まちづくり法研究会2009：20）。

小林は2018年の「文化財保護法」の改正に関する議論のなかで、文化財保護行政が国からのトップダウンであった時代から主体を地域（市町村や所有者）に置くという移行が法的に表面化されたのは、2007年に提唱された「歴史文化基本構想」であると述べている（2022：138-140）。「歴史文化基本構想」は、地域の文化財を幅広く捉え、的確に把握し、周辺環境も含めて文化財を総合的に保存・活用することを目的とした提言で、この構想に見られる「指定の有無に関わらずという捉え方」、「点から面へという発想」、「地域づくりに資するという考え方」は、「歴史まちづくり法」や「日本遺産」の認定<sup>14)</sup>などその後の施策に大きな影響を与えたことが指摘されている。また小谷は、文化財の活用について論じるなかで、歴史的風致維持向上計画と「歴史文化基本構想」の差異について、歴史的風致維持向上計画は目に見える文化財に力点が置かれており、無形民俗文化財も要素に含まれるが比重が小さい点を指摘している（2021：250-251）。

本稿で取り上げる祭礼に直接関わる法令として、1992年制定の「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律

(以後、「お祭り法」)」がある。「お祭り法」の目的は、第2条にあるように「地域の民衆の生活のなかで受け継がれ、当該地域の固有の歴史、文化等を色濃く反映した伝統的な芸能及び風俗慣習」を活用し、国内外の観光旅客に対する観光の魅力増進や、商工業の振興を図ることである。小谷は、仙台市で行った民俗芸能の上演イベントの事例から、「通常のイベントには関心のない民俗芸能好きな人たちも集めつつ、一方で民俗芸能に関心のない人たちを集めるイベント」が、「お祭り法」で実現しようとしている活用の在り方であると述べている(2021: 248)。

また、文化に関わる法令として「文化芸術基本法(2017年)」がある。この法令は、もともとの「文化芸術振興基本法(2001年)」が、少子高齢化やグローバル化などの社会変化によって、観光やまちづくり・国際交流など関連分野と連携した総合的な政策が求められたことを背景に改正されたものである<sup>15)</sup>。文化芸術そのものの振興に加えて、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業等文化芸術に関連する分野の施策についても新たに法律の範囲となった<sup>16)</sup>。この「文化芸術基本法」の精神に基づき、2022年に約70年ぶりに改正されたのが、「博物館法」である。これまで博物館が求められていた、「収集・保管」、「調査研究」、「展示・教育」の役割に加え、まちづくり、観光、福祉、国際交流などの様々な分野との連携による地域振興への貢献が期待されている。そして新たな事業として、デジタルアーカイブの作成と公開の取り組みが明確に位置づけられた<sup>17)</sup>。

### 3. 歴史的風致の抽出に至るまでの小樽市の取り組み

小樽市の歴史的風致維持向上計画の第2章では、維持及び向上すべき歴史的風致として、4点挙げている。1つ目は「海に関わる営みにみる歴史的風致」、2つ目は「まちづくりの変遷にみる歴史的風致」、3つ目は「祭りの賑わいに

みる歴史的風致」，4つ目は「景勝地の行楽などにみる歴史的風致」である<sup>18)</sup>。これらの選定にあたり，基礎となった小樽市の取り組みについて，文化面，景観および建築物，観光面の3点から述べる。

文化面について，歴史的風致の抽出には，各種文献や資料のほか，2019年に策定された「小樽市歴史文化基本構想」を参考に行われた<sup>19)</sup>。この構想では，「地域を構成する多様で価値が高いと考えられる文化財（指定，未指定を含む）のみならず，その周辺環境との関係のもとに形成されるさまざまな価値を総体的に組み入れながら，市民が暮らしのなかで大切に受け継いできた歴史的，文化的，自然的遺産を含むもの」を，「小樽文化遺産」と定義し，多様な文化遺産を基盤としたまちづくりや人材育成に重要な役割を果たすマスタープランとして策定された（小樽市2019：4）。また，「歴史まちづくり法」第2条では，重点区域の要件として，「重要文化財，重要有形民俗文化財又は史跡名勝天然記念物として指定された建造物の用に供される土地」または「重要伝統的建造物群保存地区内の土地の区域」か「その周辺の土地の区域」であることが定められている。小樽市には，国指定重要文化財が3件（「旧日本郵船株式会社小樽支店」，「旧手宮鉄道施設」，「旧三井銀行小樽支店」），国指定史跡が2件（「手宮洞窟」，「忍路環状列石」）があるが，後者の周辺ではそれを伝承している人々の活動が見られないため除外され，小樽市により重要文化財3件を中心とした重点区域が設定された。

景観および建造物について，小樽市では歴史的建造物や景観地区の保全などを目的に，1983年に北海道で初めての景観条例である「小樽市歴史的建造物および景観地区保全条例」が制定された（小樽市2009：13）。1992年には「小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観条例」を制定し，歴史的景観のみならず自然景観や眺望景観を守り，新築される建物の景観誘導や緑化の推進が行われた。2009年には「小樽市景観計画」が策定され，「景観計画区域（市域全域）」

のなかで、歴史、文化等からみて小樽らしい良好な景観を形成している重要な区域を「歴史景観区域」として指定している（小樽市2009：1）。良好な景観形成への具体的な取り組みとして、「小樽市指定歴史的建造物」や「小樽市登録歴史的建造物」<sup>20)</sup>、「小樽市都市景観賞」<sup>21)</sup>、「保存樹木等の指定」<sup>22)</sup> などがある。

観光面については、2006年に「小樽市観光基本計画」が策定され、2017年には持続可能な観光都市としてさらに発展するため、「第二次小樽市観光基本計画」が策定された（小樽市産業港湾部観光振興室2017：1）。このなかの主要施策の1つとして、文化庁が2015年より開始した「日本遺産」の認定に向けた活動も推進しており（小樽市産業港湾部観光振興室2017：10）、2024年現在で小樽市には2件のシリアル型（複数の市町村にまたがる）の日本遺産があり、地域型（単一の市町村で完結）の認定も目指している<sup>23)</sup>。

上記の取り組みを背景に抽出されたのが小樽市の4つの歴史的風致である。次章では、小樽市の歴史的風致の1つである「祭りの賑わいにみる歴史的風致」について、重点区域に唯一社殿が含まれている水天宮多賀神社について取り上げる。

#### 4. 水天宮多賀神社例大祭

水天宮多賀神社（以後、水天宮）は、小樽市相生町に鎮座する神社である。水天宮の境内は約56mの高台に位置し、小樽港や街並みを見渡すことのできる眺望景観に優れた場所であることから、「重要眺望地点」<sup>24)</sup> に指定されている（小樽市2009：30）。祭神は、弥津波能売神、保食神、伊邪那岐神、伊邪那美神の4柱で、由緒については、1859（安政6）年の創祀と伝えられる（北海道神社庁誌編輯委員会1999：388）。現在の社殿は1919年に建設され、1920年9月22日には改築に伴い住吉神社に奉移してあった御霊代を新築の社殿に移す移霊式

が行われた記録がある（小樽市総合博物館2012：144）。本殿及び拝殿は、1994年に小樽市指定歴史的建造物となっている<sup>25)</sup>。創祀150年を迎えた2007年には、老朽化が進んでいた社殿を修繕するために協賛金を募り、集まった2,000万円で修繕が行われた<sup>26)</sup>。2024年現在、神職は常駐しておらず、小樽市内にある高島稲荷神社の兼務社となっている。

例大祭は、毎年6月14～16日の3日間に日付を固定して行われる（写真1）。水天宮の例大祭のほか、龍宮神社例大祭（6月20日～22日）と住吉神社例大祭（7月14～16日）と合わせて「小樽三大祭り」と称され、人々に親しまれている。水天宮の参道を少し下ったところにある建物には、牛車と鳳輦が保管されており、例大祭の期間中はシャッターが開いており見学することができる（写真2）。牛車と鳳輦の渡御については、かつては牛が曳いていたが（写真3）、その後は馬が曳くようになり（写真4）、現在はトラックに載せて行われている<sup>27)</sup>。渡御は本来毎年行われるものだったが、人手不足や金銭的などの理由から2008年からは2年おきに行っており<sup>28)</sup>、2020年初頭の新型コロナウイルス感染症の影響で2020年と2021年の休止を経た2024年現在は、3年に1度となっている<sup>29)</sup>。

2022年の例大祭のスケジュールは、6月14日18時から宵宮祭、15日10時から本祭大祭式、16日9時から発御祭、20時から還御祭と終了奉告祭であった<sup>30)</sup>。そのほか境内で行われるイベントについては、2022～2024年はカラオケ大会が行われたほか、2023年は6月16日18時30分より結成32年目の「銭函創作太鼓童夢」による太鼓演奏が行われた。

直近の渡御である2022年のルートについて、水天宮より提供いただいた「水天宮多賀神社例大祭渡御行列予定」の地図と、渡御に参加した関係者が記録したデータ、「北海男塾」の関係者からの証言をもとに作成したのが、図3である。北は豊川町、南は奥沢まで、約21.5kmであった。なお、2022年は6月16日の午前9時に発御祭が行われ、10時に渡御が発出し、15時前には水天宮に戻り<sup>31)</sup>、



写真1 例大祭時の境内の様子  
(2023年筆者撮影)



写真2 牛車と鳳輦の保管場所  
(2023年筆者撮影)



写真3 大正～昭和初期頃の牛による渡御  
(小樽市総合博物館所蔵 小野コレクション)



写真4 1973年の馬による渡御  
(個人提供)

20時から還御祭が行われた。

また、水天宮の渡御のほかに、小樽の神輿会「北海男塾」が取り仕切る担ぎ神輿がある（写真5）。1987年に設立された「北海男塾」は40代を中心に男女を含め60人ほどで活動しており、水天宮の創祀150年であった2007年に初めて担ぎ神輿を実施し、それ以降、水天宮の例大祭に合わせて行われている<sup>32)</sup>。2024年は6月15日に「北海男塾」が所有する神輿1基が、本妙寺から小樽の歓楽街である公園通りやスパル通り、花園銀座商店街を通り、花園交番までの約



図3 水天宮多賀神社例大祭で行われる神輿渡御のルート



写真5 2023年の北海男塾による渡御  
(北海男塾提供)



写真6 山田町会事務所の神輿  
(2024年筆者撮影)

710mを、19時30分から20時30分まで練り歩いた<sup>33)</sup>。ルートを見ると、水天宮の渡御ではカバーしきれていない、露店が立ち並ぶ参道や、スナックなどが軒を連ねる細い道を進んでいることがわかる。年間25箇所ほど小樽市内外で神輿を担ぐ「北海男塾」の関係者によると、「この神輿は、飲み屋街である花園を盛り上げるために始めたもの。飲み屋の人が神輿の上に乗ることもあり、他のところにはない、珍しい神輿」だという<sup>34)</sup>。毎年同じルートで行われるこの担ぎ神輿は、水天宮の渡御とは別に実施されており、神様が乗っていない「から」神輿である。しかし、市内外から担ぎ手が集まり、多くの人で賑わう参道や商店街、飲み屋街を練り歩く光景は、祭礼文化の重要な一場面と言えるだろう。

調査を続けるなかで、コロナ禍の1年ほど前まで水天宮の例大祭時に担がれていたという、山田町会による神輿<sup>35)</sup>(写真6)やそれとは別にあったという子ども神輿<sup>36)</sup>、花園銀座商店街が例大祭に合わせて開催する「水天市」のスタンプラリーやワゴンセール、ビアガーデンといった催しなど<sup>37)</sup>、町会や商店街といった単位でも地域を盛り上げるイベントが多数行われていることが判明し



写真7 小樽稲荷神社の渡御と旧日本郵船株式会社小樽支店(2024年筆者撮影)



写真8 龍宮神社の渡御と旧第一銀行小樽支店(2024年筆者撮影)



写真9 龍宮神社の渡御と旧国鉄手宮線(2024年筆者撮影)



写真10 恵美須神社の渡御と旧白鳥家番屋(2024年筆者撮影)



写真11 高島稲荷神社の渡御と旧高島町役場庁舎(2024年筆者撮影)



写真12 住吉神社の渡御と旧三井銀行小樽支店(2024年筆者撮影)



写真13 住吉神社の渡御と旧共成株(2024年筆者撮影)



写真14 天満宮の渡御と旧岡川薬局(2024年筆者撮影)

た。このような活動は、神社単体を調査するだけでは見えてこない人々の営みであり、神社周辺で行われている人々の活動やそれに携わる組織の存在も、祭礼文化を構成する重要な要素であると考えられる。

本稿では、市内の神社のなかで唯一社殿が重点区域内に含まれる予定の水天宮多賀神社例大祭を取り上げたが、重点区域外にも数々の祭礼が存在しており、歴史的風致維持向上計画のなかで歴史的風致として挙げられている。写真に見られるように歴史的建造物などの周辺で人々の営みが行われており、これらの活動も数々の組織やコミュニティによって支えられている実態があることを忘れるわけにはいかない（写真7～14）。

## 5. 博物館が果たすことのできる役割と課題

今回の歴史的風致維持向上計画の策定へ向けた取り組みを通じて認識された博物館の役割について、2点述べる。1点目は、デジタルアーカイブについてである。「博物館法」の改正で、データの公開やそれを用いた創造的活用が求められているが、どのように取り組めばよいのか戸惑いを抱える博物館の現場は少なくない。小樽市では、歴史的風致を示すにあたり、地理的な情報を踏まえた祭礼調査の蓄積不足が課題として見えてきた。小樽市には祭礼の実質的な地理情報を記録した先行研究は存在せず<sup>38)</sup>、筆者が渡御ルートの経年変化を把握しようと毎年渡御への同行や聞き取り調査を行いながらGIS（地理情報システム）上にデジタルアーカイブしてきたデータが、図らずも役に立った。資料のデジタル化が情報提供時の速やかな対応につながり、歴史的風致を可視化する際の地図化にも有効だったことから、祭礼などの人々の営みに関する個別具体的な事柄を、位置情報とともにアーカイブする必要性を再認識した。

2点目は、地域振興への貢献である。「まちづくり」という視点を持って祭礼

調査を行うなかで、地域の商店街や町内会、神輿会といった周辺のコミュニティと祭礼との密接なつながりが判明した。このなかには、50年以上の継続を立証<sup>39)</sup>することの難しさや、「歴史まちづくり法」第1条にある歴史的風致の条件であるハード（建造物）とソフト（人々の活動）の一体化という特徴に当てはまらず、歴史的風致維持向上計画への記載が見送られる事象も存在する。過去の祭礼の様子を知る証言者の高齢化や、聞き取り調査を行っても人によって回答が異なるなど、情報は散逸しがちである。しかし、本計画ではカバーされない組織や団体も、地域の歴史的風致を支えていることは、まぎれもない事実である。祭礼文化を存続させ次世代に継承する基盤となるのは、種々の組織の存在と活動である。活動計画が認定されれば重点区域を中心に支援が行われるが、一過性の金銭的支援ではこれらの営みは維持できない。

小林は、文化財の捉え方が大きく変化した理由として地域というキーワードを挙げ、文化財をはじめとする地域文化の継承活動を通じて、コミュニティの活性化、地域振興、地域アイデンティティの醸成などの効果が期待されていることから、このような場面に、民俗学がこれまで培ってきた地域研究の見識が活かされてしかるべきと述べている（2022：143-144）。また、既に歴史的風致維持向上計画が認定されている自治体において、第1期でハード整備を中心に行い、第2期では「担い手・後継者の確保・育成」などのソフト事業の増強を行う傾向が顕著であることが指摘されている（宮下ほか2021、永田ほか2022）。小樽市においても、これまでハード面が重要視されてきたが、歴史的風致維持向上計画に取り組むなかで、ソフト面の重要性に遅まきながら気が付いた側面があるのではないか。計画の策定時の調査で完結させず、祭礼をはじめとするソフト面の地域文化について長期的な見通しを持って現状と課題を把握し続けることが、歴史的風致を維持向上するための有効な支援に資すると考える。ハード偏重にならないためにも、改正された「博物館法」で求められている様々な

分野との連携について、博物館として祭礼といった地域に根差した活動への調査研究を継続することが、地域振興への1つの貢献の形となるだろう。

今後の課題として、祭礼の調査や年ごとに変化する渡御ルートなどの地理情報のアーカイブを継続することで、歴史的風致の背景や祭礼文化の今後についての対応策も見えてくるだろう。また、祭礼に携わる市民との交流を通じて、大切な地域文化であることを人々が意識し、これからも守り伝えようとする意識を醸成することが、「博物館法」第3条に記載されている「地域の活力の向上に寄与」することにつながる。地域住民や祭礼文化を支える組織と協働しながら小樽市の地域振興と向き合っていきたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、聞き取り調査へのご協力と貴重な情報や資料をご提供いただきました、水天宮多賀神社の関係者の皆様、北海男塾の皆様、山田町会の皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

(せみづか さきえ・文学研究科日本文化専攻博士課程2年／  
小樽市総合博物館学芸員)

## [注]

(証言者に関する情報は、性別／年齢／祭礼での役割／調査年、不明な箇所は一で記す)

- 1) 第5回小樽市歴史的風致維持向上協議会「小樽市歴史的風致維持向上計画の策定について」[https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2023081500021/file\\_contents/20241031-siryou1.pdf](https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2023081500021/file_contents/20241031-siryou1.pdf)
- 2) 国土交通省「歴史的風致維持向上計画認定状況（R6年7月17日時点）」<https://www.mlit.go.jp/toshi/rekimachi/content/001754095.pdf>

- 3) 第4回小樽市歴史的風致維持向上協議会「令和6年度 小樽市歴史的風致維持向上計画 策定体制」[https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2023081500021/file\\_contents/20240521\\_siryoun1-1.pdf](https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2023081500021/file_contents/20240521_siryoun1-1.pdf)
- 4) 3に同じ。
- 5) 第5回小樽市歴史的風致維持向上協議会「協議会及び三省庁の意見等に対する対応状況」[https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2023081500021/file\\_contents/20241031-siryoun2.pdf](https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2023081500021/file_contents/20241031-siryoun2.pdf)
- 6) 国土交通省国土技術政策総合研究所「『歴まち』情報サイト—歴史的風致維持向上計画『認定都市』アーカイブ」の「全国の歴まち都市」に掲載されている各都市の「歴史的風致維持向上計画概要版」より集計。「概要版」で祭礼に関する情報が得られなかった都市については、「歴史的風致維持向上計画」を参照した。
- 7) 国土交通省「歴史まちづくりパンフレット（2023年3月）」<https://www.mlit.go.jp/toshi/rekimachi/content/001597421.pdf>
- 8) 5に同じ。
- 9) 国土交通省「歴史まちづくりパンフレット（2023年3月）」<https://www.mlit.go.jp/toshi/rekimachi/content/001597421.pdf>の概念図をもとに作成。
- 10) 7に同じ。
- 11) 国土交通省都市局 公園緑地・景観課 景観・歴史文化環境整備室「『歴史的風致維持向上計画』策定に向けた手引き—事例からみる計画策定の意義・効果—（2020年3月）」<https://www.mlit.go.jp/toshi/rekimachi/content/001352089.pdf>
- 12) 7に同じ。
- 13) 松本ほか（2018：624）は、すでに認定を受けている自治体における「重点区域」と祭礼の関係について、祭礼の巡行区間など線上に展開する市街地の区域が一部の「重点区域」に組み込まれていることから、有形資源だけでは重点的に施策を展開する区域としての位置づけが難しかった区域を、歴史的風致維持向上計画の対象にすることができている点を指摘している。
- 14) 日本遺産は、文化庁が2015年から開始した制度で、地域に点在する遺産を「面」として活用および発信し地域活性化を図ることで、地域住民のアイデンティティの再確認や地域のブランド化、地方創生に資するとされる。文化庁「日本遺産ポータルサイト」<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/about/>（最終閲覧：2024年12月19日）
- 15) 文化庁「文化芸術基本法」[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/)

shokan\_horei/kihon/geijutsu\_shinko/index.html（最終閲覧：2024年12月19日）

- 16) 15)と同じ。
- 17) 文化庁博物館総合サイト「法改正の概要」<https://museum.bunka.go.jp/law/>（最終閲覧：2024年12月10日）
- 18) 5)と同じ。
- 19) 第1回小樽市歴史的風致維持向上協議会「歴史的風致，重点区域及び事業の検討について」[https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2023081500021/file\\_contents/shiryou6-1.pdf](https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2023081500021/file_contents/shiryou6-1.pdf)
- 20) 「小樽市指定歴史的建造物」とは，歴史的建造物の実態調査をもとに，保全すべき建物を「小樽市登録歴史的建造物」として登録し，そのなかで特に重要であり，所有者の同意が得られたものが指定される（小樽市2009：2）。
- 21) 「小樽市都市景観賞」とは，1988年に創設され，小樽の歴史と風土に調和した都市景観をつくり出している建築物やイベントなどを表彰することで，都市環境の向上とまちづくりへの関心を高めることを目的とするもの。令和5年度までの受賞は74件で，そのうち8件は現存していない。建設部新幹線・まちづくり推進室「小樽市都市景観賞ガイドマップ」[https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2020112000239/file\\_contents/2024gaidomapweb.pdf](https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2020112000239/file_contents/2024gaidomapweb.pdf)
- 22) 保存樹木等の指定は，地域的美観風致を維持し都市景観の形成を図るため，保存樹木，保全樹林または保全緑地として指定される。建設部新幹線・まちづくり推進室「保存樹木等の一覧」<https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2020101500092/>（最終閲覧：2024年12月19日）
- 23) 産業港湾部観光振興室「日本遺産の認定について」<https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2021031700095/>（最終閲覧：2024年12月19日）
- 24) 「小樽市景観計画（小樽市2009：73）」によると，「重要眺望地点」とは，特に小樽を代表する眺望の場所として広く市民に親しまれている公園，山頂等で，市長が指定する場所を指す。
- 25) 小樽市建設部新幹線・まちづくり推進室「小樽市指定歴史的建造物第50号水天宮本殿，拝殿」<https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2020101500757/>（最終閲覧：2024年12月10日）
- 26) どうしん記事データベース「創祀150年で修復，小樽の水天宮，例大祭催し多彩に，14日から3日間，商店街も関連行事」2007年6月9日，北海道新聞朝刊地方（小樽・後志）28ページより。

- 27) A氏（男性／70歳代／水天宮の元関係者／2024年）のご教示。
- 28) どうしん記事データベース「鳳輦78年ぶり人力巡行、きょうまで水天宮例大祭、小樽」2019年6月16日、北海道新聞朝刊地方（小樽・後志）17ページより。本記事によると、元号が新しくなったことを記念して、1923年に作成された鳳輦が78年ぶりに人力で担がれたという。
- 29) A氏（男性／70歳代／水天宮の元関係者／2024年）と、B氏（男性／一／水天宮の関係者／2023年）のご教示。
- 30) 例大祭時に社殿の脇に設置されていた「令和四年水天宮多賀神社例大祭日程」より。
- 31) B氏（男性／一／水天宮の関係者／2023年）のご教示。
- 32) どうしん記事データベース「「みこし渡御」初お目見え、水天宮150年例大祭、男女200人練り歩く」2007年6月16日、北海道新聞朝刊地方（小樽・後志）30ページと、C氏（男性／30歳代／北海男塾の関係者／2024年）のご教示。
- 33) C氏（男性／30歳代／北海男塾の関係者／2024年）のご教示。
- 34) 33に同じ。
- 35) どうしん記事データベース「小樽・水天宮例大祭あす本祭、山田町会みこし10年ぶり復活、地元と札幌から担ぎ手16人、「興奮再び」」2014年6月14日、北海道新聞朝刊地方（小樽・後志）30ページより。
- 36) D氏（男性／一／山田町会の関係者／2024年）のご教示。
- 37) どうしん記事データベース「射的、かき氷…露店にぎわう、小樽三大祭り、水天宮例大祭始まる」2023年6月15日北海道新聞朝刊地方（小樽・後志）15ページ、花園銀座商店街ホームページ「はなぞのさんぽ」<http://www.hanagin.org/?p=1783>（最終閲覧：2024年12月19日）
- 38) 小樽の祭礼に関する先行研究として、史料にもとづき明治中期の祭礼の様子を検討した菅原（2018）が挙げられる。そのほか、『おたる潮まつり第50回記念誌』や『小樽総鎮守住吉神社鎮座百五十年記念誌』のような記念誌は発行されているものの、研究としてはほとんど見られない。
- 39) 11に同じ。

## 【参考文献】

小樽市総合博物館

2012『稲垣益穂日誌 第30巻』小樽市総合博物館、小樽。

小樽市

2009『小樽市景観計画』小樽市，小樽

小樽市

2019『小樽市歴史文化基本構想』小樽市，小樽.

小樽市産業港湾部観光振興室

2017『第二次小樽市観光基本計画』小樽市産業港湾部観光振興室，小樽.

おたる潮まつり実行委員会

2016『おたる潮まつり 第50回記念誌』小樽潮まつり実行委員会，小樽.

小谷竜介

2021『地域をつくる民俗文化財』日高真吾編『継承される地域文化—災害復興から社会創発へ』240-263.

小林稔

2022『改正文化財保護法と民俗学』『日本民俗学』(310)：131-149.

佐藤圭樹

2024『小樽総鎮守住吉神社 鎮座百五十年記念誌』住吉神社，小樽.

菅原慶郎

2018『明治中期の小樽における神社の祭礼』『小樽市総合博物館紀要』(31)：23-29.

永田優河，川崎興太

2022『歴史的風致維持向上計画の中長期的な運用の実態と課題』『都市計画報告集』20（4）：341-347.

北海道神社庁誌編輯委員会

1999『北海道神社庁誌』北海道神社庁，札幌.

松本邦彦，澤木昌典

2018『歴史的環境保全の観点でみる歴史的風致維持向上計画における重点区域の特徴』『ランドスケープ研究』81（5）：619-624.

宮下拓也，松井大輔

2021『歴史的風致維持向上計画の第一期から第二期への展開にみられる変化と課題』『都市計画論文集』56（3）：1092-1098.

歴史まちづくり法研究会

2009『歴史まちづくり法ハンドブック』国土交通省都市・地域整備局 公園緑地・景観課 景観・歴史文化環境整備室，東京.

# 芥川龍之介『河童』の一考察

―「対」と「ずらし(ずれ)」の視点から―

太田 幸夫

キーワード

芥川龍之介 ジャーナリスト 詩人 詩的精神 触覚 対 ずらし ずれ  
『河童』 『文芸的な、余りに文芸的な』 『西方の人』 ヴィゴツキー 寓話

## ○はじめに

芥川龍之介（一八九二―一九二七）の晩年の創作態度は「詩的精神」「詩人」という視点で語られることが多いが「ジャアナリスト」として捉えると異なった一面が見えてくる。この時期に書かれた小説『河童』について「ジャアナリスト」の視点を軸に検討し、新たな『河童』像を見出したい。

## ○第一章 『河童』とは

芥川龍之介の小説『河童』は、昭和二（一九二七）年三月一日発行の雑誌「改造」（第九卷第三号）に掲載された。精神病院の患者「第二十三号」（「序」以降は「僕」とも名乗る）が、河童の国で経験した様々なことを「僕」（「序」にのみ登場する人物）に語ることから物語が展開していく。

上高地から穂高山への山登り<sup>①</sup>の途中、穴に落ちて河童の国に迷い込んだ「僕」（後の「第二十三号」）は「特別保護住民」として生活することを許され、多くの河童と交友を深める。やがて憂鬱を感じて人間世界に戻るが、事業の失敗後に再び河童の国に戻ろうとする。駅で捕まった「僕」は精神病院の患者「第二十三号」として生活することになり、そこを訪れた者に対して河童の国での出来事を話し続ける。その内容は、多くの研究者が語るようにスウィフト『ガリバー旅行記』のパロディーの体裁を取る現代社会批評、と理解することが可能である。

助川幸彦は「対語的世界のガリヴァー―芥川龍之介『河童』試論―」<sup>②</sup>の中で、現実世界と「対語」

的關係で「河童の世界」が対置されていると論じている。

さて、今まであまり指摘を受けずにいたことであるが、「河童」を含めた最晩年の作品に於ては、対語關係が重要な役割を果たしている（略）問題はこうした対語的世界が「河童」に於て、異常と言えるほど多く見出せることである。たとえば、主人公が狂人であること、架空の動物である河童の国を訪れ、やがて帰国するという設定からだけでも、正常／異常、意識／無意識、現実／超現実、故郷／異郷、等の対語的世界を導き出すことが可能である。そして、これらの対語が「或阿呆の一生」中の一文のように反転するとすれば、ここでも限りなく相対的で不安定な認識、精神状態を指摘することができるのである。（略）今まで述べてきた反転する対語的世界は、「河童」の構成システムとしても重要な役割を果たしている。

助川論は、『河童』から『或阿呆の一生』までを貫く「相対的で不安定な認識、精神状態」という解釈を導くことに主眼が置かれている。とりわけ『河童』については「意識／無意識」の反転という構図で読み解く前提で論が進められ、最終的に「狂人」芥川龍之介の実際の人生と軌を一にする精神状況を『河童』は描いた、という読み方に至る。「意識／無意識」はフロイトの心理学の援用で作品を読むことが一般化された頃の、時代の産物ともいえる手法であり、現時点の私の目指すところではない。また「対語」の対象が内容・場面に限定されている点も不徹底さを感じる。とはいえ「対語」という概念に着目することは、『河童』という作品の分析において、極めて有効な視点と思われる。

そこで、全十七章の各章におけるトピックを「※」を付けて紹介した上で、今回は「対」となっている登場人物を取り上げ、「↑↓」で示してみたい。

□序 ※東京市外の精神病院、患者第二十三号の紹介

精神病院の患者 第二十三号    ↑↓    僕（ここでの語り手）／面会する人全般

□第一章 ※第二十三号が河童の国に迷い込む経緯

僕（第二十三号）    ↑↓    聞き手（読者）／河童（第三章でバッグと判明）

□第二章 ※患者二十三号が河童の国で「特別保護住民」となる経緯

僕    Ⅱ    「特別保護住民」    ↑↓    チャツク（医者）・バッグ（漁夫）・ゲエル（硝子会社の社長）・

#### 他の河童

□第三章 ※河童の特徴を、読者に向けて説明、特に着物を着る↓着ない

僕    ↑↓    バッグ

□第四章 ※河童の風俗・習慣の紹介。中心は産児制限

僕    ↑↓    チャツク・バッグ・バッグの妻と子供

僕    ↑↓    チャツク・ラップ（学生）・或る河童（万年筆のスリ）／ポスター「遺伝的義勇隊・

健全な男女の河童・悪遺伝の撲滅・不健全な河童との結婚の推奨

□第五章 ※芸術論が中心。芸術家は善悪を超越した「超人」でなくてはならないと力説。

僕    ↑↓    ラップ・バッグ・トック（詩人）・超人倶楽部

トツク ↑↓ 雄雌の河童十子供二、三匹

## □第六章

※河童の国での恋愛の概念

雌が雄を追う／時には雄が雌を追う・・・雌に仕向けられる／

雌が、小さい雄を捨てて、大きい雄を選ぶ／

取り締まり対象ではない・・・官吏の中に雌が少ないため

僕 ↑↓ ラップ・・・雌に抱き付かれ、やがて嘴が腐れ落ちる

僕 ↑↓ マツグ（哲学者）

## □第七章

※河童には耳がない↓音楽は「風俗を壊乱する曲」でもわからない

※検閲・・・どの国よりも進歩↑↓日本（「現につひ一月ばかり前にも、」と濁す）

僕・マツグ・トツク・トツクの雌の河童・クラバツク（音楽家） ↑↓ 巡査

クラバツク ↑↓ トツクの雌の河童（一〇何年か前にクラバツクを掴まえ損ねた）

## □第八章

※ゲエルに導かれ河童の国の工場を巡る。僕は話を聞き嘔吐を吐き続ける。

僕 ↑↓ ゲエル（・チャツク・ベツプ（裁判官））

人間Ⅱ第4階級の娘たちが売笑婦 ↑↓ 職工の肉を食う

## □第九章

※河童の社会の支配関係

※新聞⇨労働者の味方 ⇨ゲエル（の支配）

※柳田國男「山島民譚集」：「水虎考略」の引用で使用

※雌の河童が生命保険をかけた夫（雄の河童）を殺そうとして青酸加里を飲物に混入  
来客の獺が死亡・・・戦争・・・河童の勝利、三十六万九千五百匹の死亡

（日露戦争が八万四千人）

僕・ゲエル（・マツグ） ⇨ ロツペ（政治家）

ゲエル ⇨ クイクイ（新聞社社長）・ロツペ・ゲエル夫人

河童 ⇨ 獺

僕 ⇨ ゲエル ※ゲエルの家⇨火災保険 ∴ 軽蔑も憎悪も出来ない

## □第十章

※批評家の判断…トツク ⇨ ロツク（音楽家） ⇨ クラバツク

※僕…クラバツク ⇨ ロツク 「近代的情熱」

∴ クラバツクは納得せず、『阿呆の言葉』を投げつける

※トツク…クラバツクは神経衰弱、冷や汗を流し「緑色の猿が一匹首を出した」

※僕…トツクにチャツクへの診察を勧める・・・トツクと別れる

僕・ラツプ・クラバツク ⇨ トツク ※家族との関わり

ラツプ ⇨ 妹・おふくろ ∴ 虫取り葦

## □第十一章

※僕・マツグ『阿呆の言葉』を読む・・・『侏儒の言葉』を思わせる内容

阿呆、自然、生活、習慣、誇り、偶像（阿呆・悪人・英雄）、思想、意識、超越、幸福、平和、弁護、罪（矜誇、愛慾、疑惑）、欲望、不幸、成す、白痴、天才、理性、ヴォルテエル

\*対となる概念は示されていない

## □第十二章 ※河童の国の刑罰

僕・巡查 ↑↓ グルツク（万年筆を盗んだ河童）・グルツクの子（1週間前死亡）

僕・マツグ・ベツプ ↑↓ 巡查 \*刑法第二百八十五条

人間（日本）の刑法 ↑↓ 河童の国の刑法

絞罪 ↑↓ 犯罪の名を聞かせる √ 電気

僕 ↑↓ ベツプ

## □第十三章

※トツクのピストル自殺

※マツグ「河童の生活を全うする」∴「河童以外の何ものかの力を信じること」

僕（第二十三号）∥「特別保護住民」・トツクの雌の河童・ゲエル・チャツク・

マツグ ↑↓ ベツプ

マツグ ↑↓ クラバツク

## □第十四章

※僕はラツプと近代教の大寺院に向かう

※ラツプ…宗教でも「近代教」が強いことを示唆

※近代教…「生命の樹」の教え。

「旺盛に生きよ」。神は最初に雌の河童を造り、雌の脳髓で雄の河童を造った。

「食へよ、交合せよ、旺盛に生きよ」と祝福

※聖徒にストリンドベリイ・ニイチエ・トルストイ・国木田独歩・ワグネル・

仏蘭西の画家（ゴーギャンか）・第七の龕（人物不明）。

※長老…トツクは「気の毒な詩人」、我々の神を信ずるわけにいかない

…雌の河童に投げられる

僕・ラツプ・長老    ↑↓    宗教

## □第十五章

※トツクの家が写真館となるが、そこで写真を撮るとトツクも写っている。

心霊学協会の調査が行われ、新聞記事となる。

僕・チャツク    ↑↓    トツクの幽霊

僕    ↑↓    心霊学協会（の記事）

※ホツプ夫人（元俳優）― 心霊学協会？

## □第十六章

※心霊学協会の新聞記事を読んだ後、河童の国にすることを憂鬱に思う僕。  
人間の国に帰ることを決意。

※「後悔などはしません」↑↓「出て行つて後悔しないやうに」

僕 ↑↓ 百一五六（歳）の河童（見た目は二三（歳）…生まれた時に年寄りだった

## □第十七章

※人間の世界に帰ってきた「僕」。

事業に失敗したため河童の国に帰りたいたいと思ひ出したが、精神病院に入れられる。

※ベツプは裁判官の職を失った後、発狂―精神病院に入れられる

僕 ↑↓ S博士

僕 Ⅱ バツグ（夜のみチャツク・ゲエル・マツグ・ラツプ・クラバツク来訪）

ここまでを総括すると、助川論で言う、現実世界―河童の国―だけでなく、登場人物（動物）においても「対語」を前提として筋が展開している。だが、登場人物間において生活心情・理念という点で対立している人物・動物は、第九章でのゲエルと第十七章のS博士（精神病院の医師）、そして精神病院に第二十三号を訪ねる来客に限定されるのだ。少なくとも、敵役のような関係は『河童』には登場しないと言える。

「僕」こと患者第二十三号は、河童の国で「特別保護住民」として厚遇され、河童たちとの関係も良好であった。本作での「対」は対立軸ではなく、むしろ「組」（ペア）に近い。

とすれば、登場人物間における「対語」は、理念の対立を示すものというよりも、むしろ両者の間に存在する「ずれ」を示すためにあるのではないか。加えて、それによって両者の差異を浮かび上げらせようとする意図を持っているのではないだろうか。この点を改めて次章以降で検証してみたい。

## ○第二章 『河童』はどう評価されてきたか

ここでは『河童』が従来どのように読まれてきたかを概観したい。まず、芥川龍之介の書簡から、自身の評価を確認しよう<sup>(3)</sup>。

執筆当時、芥川龍之介にとって『河童』という作品はそれほど期待していなかった向きがある。昭和二年二月二日、斎藤茂吉に宛てた書簡では

唯今『海の秋』と云ふ小品を製造中、同時に又『河童』と云ふグアリヴァの旅行記式のものをも製造中、その間に年三割と云ふ借金（姉の家の）のことも考へなければならず、困憊この事に存じ居り候。

と述べており、むしろ『海の秋』に注力する姿が窺える。しかし、二月十六日の佐々木茂索宛書簡では書き終わった直後の感想として、「河童百六枚脱稿、聊か鬱懷を消した」と述べ、二月二十七日の瀧井孝作宛書簡では「近年にない速力」で書かれたと伝えている。

更に同年三月二十八日の斎藤茂吉宛書簡を見ると、

度々御手紙頂き、恐縮に存じ候。『河童』などは時間さへあれば、まだ何十枚でも書けるつもり。唯婦人公論の「蜃気楼」だけは多少の自信有之候。但しこれも片々たるものにてどうにも致し方無之候。何かペンを動かし居り候へども、いづれも楠正成が湊川にて戦ひをるやうなものに有之、疲労に疲労を重ねをり候。

と述べ、『河童』よりも『蜃気楼』に期待を寄せる一方で、『河童』という作品への気安さ・親しみが垣間見える。

次に、研究史上の主要な論文を紹介したい。

吉田精一（一九〇八―一九八四）は芥川本人の書簡・小文を踏まえ、『芥川龍之介』<sup>④</sup>において、『河童』は「グアリヴァの旅行記式のもの」として書かれ、「あらゆるものに對する、就中、彼自身に對するデグウから生れた」寓意的な小説だ、と述べる。そして『河童』の世界の問題は、すべて彼自身にとつて痛切な問題」だった遺伝、家族制度、恋愛を扱う「自画像」のようなものであり、「彼自身狂人になることを恐れていなければ、こうした想像も浮かばなかったかも知れない」と、自殺と関連づけた上で、「龍之介は生涯の総決算という気持ちで、この篇を書いた」と結論づけた。

関口安義（一九三五―二〇二二）は、論文『「河童」から『西方の人』へ』で、芥川は病氣と家庭と時代にかんがりの不安を感じつつ『玄鶴山房』、『河童』を発表し、谷崎潤一郎と「小説の筋」論争をたたかわす中「話らしい話のない小説」を説き、詩的精神を主張することで「彼の鋭く細い神経はかなり痛

めつけられていた」とする。「人間的な誠実な歩みへの願いと、その阻まれる現実とのギャップ」は深くなるばかりで、彼の苦悩は、まさに「刃のこぼれてしまった、細い剣」の状態だったとし、そういう中で、芥川は「天上から地上へ登る」キリストの姿に動かされ、そこに自己の姿を見、さらには彼に呼びかけるキリストの姿を感じ、彼自身のキリスト論を書いたのである。」と述べる。『河童』前後の創作に芥川の不安が反映され、それがイエス・キリストの評伝（の体裁をとった）小説『西方の人』の執筆につながったとする<sup>(5)</sup>。

平岡敏夫（一九三〇～二〇一八）は、『河童の構造』<sup>(6)</sup>の中で、河童が「莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、図々しい、うぬ惚れ切った、残酷な、虫の善い動物」ではないとした上で、「轢死した人足の心もちをはつきり知つてゐた詩人」独歩が河童の寺院にまつられているように、芥川は、独歩もふくめた河童たちの生き方に親近感を持ち、憧憬を抱いていた、と論じる。北村透谷・国木田独歩と続く詩人の系譜の延長に芥川がいる、とする平岡氏独自の、抒情の系譜<sup>(7)</sup>からの論点である。

福田和也（一九六〇～二〇二四）は、『芥川龍之介の『笑い』』<sup>(8)</sup>の中で、芥川の実人生と切り離す視点で、次のように語る。

少なくとも『河童』は自嘲の作品ではないし、文明批評といった穏健な作でもない。『河童』は直接的な憎悪を基調とした作品であり、罵りが快感をもたらし「鬱を散じ」ている、わが国では類例のない作品である。（略）ここには、セリーヌやL・ブローを思わせるような罵倒のリズムが、息づいている。

妊婦の生殖器に口をつけて、胎児に生まletたいかと尋ねる儀式、失業した労働者をガスで殺して食用に供する職工屠殺法、悪遣伝を撲滅するために不健全な結婚を推進する遣伝的義勇隊といったエピソードは、風刺でもなんでもなく、悪意に満ちた世間への憎悪の表明であり取りつく島もない嘲笑である。「たとへば我々人間は正義とか人道とか云ふことを眞面目に思ふ、しかし河童はそんなことを聞くと、腹をかかへて笑ひ出すのです。」

『河童』の憎悪を、われわれが自嘲と見做すのは、この嘲りが自分に向けられていることを認めるのが恐ろしく、また真摯な敵意がもたらす爽快感に耐えられないからである。

芥川の作家としての最も重要な特質は、彼がこうした読者や周囲の甘えを予測していただけでなく、自ら仕組んでいる処にある。彼の作品は読者を甘えさせることで、読者を彼の描いた劇に取り込む構造を持っている。彼の枕元に集まった知友たちと同様に、彼の作品に感動するもしくはたかをくくる読者は、芥川龍之介によって仕組まれた筋書きの中で静かに笑われている。

福田の論は従来の研究史を俯瞰し、とりわけ吉田精一論を土台から批判した上で、言表主体・芥川龍之介の表象の意図を明らかにするべく論を進める。印象批判にすぎないという見方もできるが、読者への表現効果を計算して書いていると指摘することで、「グアリヴァの旅行記式のもの」の要素を言語化する、としたところに特徴がある。

小林洋介（一九七七）は執筆当時の医学の空間・言説を援用して、この作品の「語り」を分析する<sup>(8)</sup>。

大正から昭和初期にかけては、鋭敏な感受性や正義感ゆえに、社会の矛盾や人間の醜悪さに耐えきれずに〈狂気〉へと追いやられた（と信じられた）〈狂人〉の手記が広まった時代であったのだ。（略）同時代的背景を考慮すれば、河童の国の物語は、〈狂人〉によって語られることによってこそ、人間に対する〈告発〉〈啓示〉としての効果を決定的に増しているはずなのである。（略）

文学における〈狂人の一人称語り〉は多くの場合、〈健常者〉とその社会が本質的に抱え込む欺瞞・矛盾を炙り出し、そうすることで時代の多くの人々が共有していたはずの不安を表出するために、戦略的に仕組まれた言説装置なのだ。芥川「河童」は、〈狂人の一人称語り〉の持つそのような性質が最大限に発揮された代表的な小説として、文学史上特権的な位置を占めるのである。

この小林論に至って、『河童』は作者・芥川龍之介の実人生と完璧に袂を分かち、一時代の文化空間が生み出した言説として、新たな解釈を持ちうることになったといえよう。

しかし論者は、ここまで紹介した諸説に与するつもりはない。

晩年の芥川龍之介は、「自殺」や「敗北」、「狂気」という語句に収斂する方向で評価されることが多かった。しかし、仮に死が前提にあったとしても、自己の欲望の充足（この場合は、自死の正当化）のために言表主体・芥川が小説をしたためるとは考えづらい。

芥川の実生活を結びつけることなく、『河童』の表現そのものに対して的確な評価を行う術はないものだろうか。私は、その方向で論を進めたい。

### ○第三章 同時代批評としての『河童』

『河童』について、三つの章を詳しく見てみたい。まずは七章である。

クラバックは全身に情熱をこめ、戦ふやうにピアノを弾きつづけました。すると突然会場の中に神鳴りのやうに響渡ったのは「演奏禁止」と云ふ声です。僕はこの声にびつくりし、思はず後をふり返りました。声の主は紛れもない、一番後の席にある身の丈抜群の巡查です。巡查は僕がふり向いた時、悠然と腰をおろしたまま、もう一度前よりもおほ声に「演奏禁止」と怒鳴りました。それから、――

それから先は大混乱です。「警官横暴!」「クラバック、弾け!」「弾け!」「莫迦!」「畜生!」「ひつこめ!」「負けるな!」――かう云ふ声の湧き上つた中に椅子は 倒れる、プログラムは飛ぶ、おまけに誰が投げるのか、サイダアの空爆や石ころや嚙ぢりかけの胡瓜さへ降つて来るのです。僕は呆つ氣にとられましたから、トックにその理由を尋ねようと思いました。が、トックも興奮したと見え、椅子の上に突つ立ちながら、「クラバック、弾け!」「弾け!」と喚きつづけてるます。のみならずトックの雌の河童もいつの間に敵意を忘れたのか、「警官横暴」と叫んでゐることは少しもトックに変わりません。僕はやむを得ずマッグに向かひ、「どうしたのです?」と尋ねて見ました。

「これですか?これはこの国ではよくあることですよ。元来画だの文芸だのは……」

マッグは何か飛んで来る度にちよつと頭を縮めながら、不相平靜に説明しました。「元来画だの

文芸だのは誰の目にも何を表はしてゐるかは兎に角ちゃんとわかる筈ですから、この国では決して発売禁止や展覧禁止は行はれません。その代りにあるのが演奏禁止です。何しろ音楽と云ふものだけはどんなに風俗を壊乱する曲でも、耳のない河童にはわかりませんからね。」

「しかしあの巡査は耳があるのですか？」

「さあ、それは疑問ですね。多分今の旋律を聞いてゐるうちに細君と一しよに寝てゐる時の心臓の鼓動でも思ひ出したのでせう。」

かう云ふ間にも大騒ぎは愈盛んになるばかりです。クラブバックはピアノに向つたまま、傲然と我々をふり返つてゐました。が、いくら傲然としてゐても、いろいろのものの飛んで来るのはよけない訣に行きません。従つてつまり二三秒置きに折角の態度も變つた訣です。しかし兎に角大体としては大音楽家の威厳を保ちながら、細い目を凄まじく赫やかせてゐました。僕は——僕も勿論危険を避ける為にトックを小楯にとつてゐたものです。が、やはり好奇心に駆られ、熱心にマッグと話しつづけました。

「そんな検閲は乱暴ぢやありませんか？」

「何、どの国の検閲よりも却つて進歩してゐる位ですよ。たとへば日本を御覧なさい。現につひ一月ばかり前にも、……」

丁度かう言ひかけた途端です。マッグは生憎脳天に空罎が落ちたものですから、quack（これは唯間投詞です）と一声叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまいました。

「警官横暴」「演奏禁止」「風俗を壊乱する」「検閲」「乱暴」という言葉から、背後に強い権力を持つ組織の存在が感じられる。しかし、それが河童の国で行われているという設定によって、どこかユーモアを感じさせてしまう雰囲気をつくることに成功している。警官と河童たちとのやり取りはその真骨頂といえよう。そしてその中に、ちゃっかりと「日本」の「検閲」についての言及を挟む。これを見ると、研究史において指摘されてきた「社会批評」という評価は、あながち間違いではなさそうに思えてくる。ところで、この章には不可解な表現が隠されている。

「元来画だの文芸だのは誰の目にも何を表はしてゐるかは兎に角ちゃんとわかる筈ですから、この国では決して発売禁止や展覧禁止は行はれません。その代りにあるのが演奏禁止です。何しろ音楽と云ふものだけはどんなに風俗を壊乱する曲でも、耳のない河童にはわかりませんからね。」

この作品の設定は、患者第二十三号と河童たちとの交流・意思疎通にある。だが、この章の「耳のない河童」とはどういうことだろうか。文字面通りに取れば、何を演奏しても河童には耳がないから、価値が理解できないことになる。では両者の意思疎通の方法は何なのか。本文では第二十三号と河童たちの意思疎通の手段は明示されていない。超能力で相手の心を読み取っている可能性は否定できない（実際、後の章には霊媒師のような超常現象に係る河童たちが登場する）が、それをここに当てはめるのは無理がある。我々読者は、両者が何らかの手段で理解しあっていることのみを追認するにとどまるのだとすれば、こういう見方もできまいか。「耳のない河童にはわかりません」と言い切ることで、何がど

のように検閲されているかが臆化されてしまう。この書き方ゆえ『河童』は当時の日本社会の検閲体制を巧みに批判することに成功した。そして、少なくとも発行禁止を免れることを可能とした、と言えないだろうか。

続いて、九章を見てみよう。

「それは——どうか怒らずに下さい。それは戦地にある河童たちには……我々の国では醜聞ですかね。」

「この国でも醜聞には違いありません。しかしわたし自身かう言つてゐれば、誰も醜聞にはしないものです。哲学者のマググも言つてゐるでせう。『汝の悪は汝自ら言へ。悪はおのづから消滅すべし。』……しかもわたしは利益の外にも愛国心に燃え立つてゐたのですからね。」

丁度そこへはひつて来たのはこの倶楽部の給仕です。給仕はゲエルにお時宜をした後、朗読でもするやうにかう言ひました。

「お宅のお隣に火事がございます。」

「火——火事！」

ゲエルは驚いて立ち上りました。僕も立ち上ったのは勿論です。が、給仕は落ち着き払つて次の言葉をつけ加へました。

「しかしもう消し止めました。」

ゲエルは給仕を見送りながら、泣き笑ひに近い表情をしました。僕はかう云ふ顔を見ると、いつ

かこの硝子会社の社長を憎んでゐたことに気づきました。が、ゲエルはもう今では大資本家でも何でも無い唯の河童になつて立つてゐるのです。僕は花瓶の中の冬薔薇の花を抜き、ゲエルの手へ渡しました。

「しかし火事は消えたと言つても、奥さんはさぞお驚きでせう。さあ、これを持つてお帰りなさい。」  
「難有う。」ゲエルは僕の手を握りました。それから急ににやりと笑ひ、小聲にかう僕に話しかけました。

「隣はわたしの家作ですからね。火災保険の金だけはとれるのですよ。」

僕はこの時のゲエルの微笑を——輕蔑することも出来なければ、憎惡することも出来ないゲエルの微笑を未だにありありと覚えてゐます。

「哲学者のマツグも言つてゐるでせう。『汝の惡は汝自ら言へ。惡はおのづから消滅すべし。』』という言葉葉を軸に分析すれば、にやりと笑つたあとに「隣はわたしの家作ですからね。火災保険の金だけとはとれるのですよ。」と第二十三号に語るゲエルは、まさに「汝の惡は汝自ら言へ」の実践者なのだ。そしてここに「僕はかう云ふ顔を見ると、いつかこの硝子会社の社長を憎んでゐたことに気づきました」という語りが付与されている。後にも先にも、第二十三号が河童たちに憎惡を感じると表明しているのは、このゲエルに對してだけなのだ。

實在の人物としての芥川龍之介は、義兄が放火による保険金詐取の疑いによつて自殺し、その事後対応で肉体的にも精神的にも疲弊していた。

しかし言表主体・芥川はそんな事実はお構いなしに、社会問題の一つ「保険金詐取」を出来事そのものとして取り込み、まんまと保険金を手に入れるゲエルを描き出す。しかも「僕」は「この時のゲエルの微笑を——軽蔑することも出来なければ、憎悪することも出来ない」と語る。實在の「芥川龍之介」をパロディとするかのような書き振りで、保険金詐取を許容するかのような姿勢を見せる、意地の悪い「第二十三号」像をちらつかせるのだ。

もうひとつ、第十四章を見てみたい。

自殺したトツク（詩人）の家を訪れた第二十三号は、マツグ（哲学者）との会話で「宗教」のことを考える。

僕は勿論物質主義者ですから、真面目に宗教を考へたことは一度もなかったのに違ひありません。が、この時はトツクの死に或感動を受けてゐた為に一体河童の宗教は何であるかと考へ出したのです。

そして第二十三号は、ラツプ（学生）と共に、「河童の国」で一番勢力を持つ「近代教」（生活教ともいう）の寺院を訪れる。そこにいた「長老」（「近代教」の教祖と考えられる）に寺院内を案内され、礼拝対象の『生命の樹』に向かう途中「聖徒」の像の紹介を受ける。ストリンドベリイ、ニイチエ、トルストイ、国木田独步、ワグネル、「商売人上がりの仏蘭西の画家」（ゴーギャンと考えられる）が紹介され、第七の聖徒を紹介する手前で、像の説明は終わる。詩人トツクの話題に及び、トツクに深い共感を抱く長老はこう

語る。

「わたしも実は——これはわたしの秘密ですから、どうか誰にも仰有らずに下さい。——わたしも実は我々の神を信ずる訣に行かないのです。しかしいつかわたしの祈禱は、——」

丁度長老のかう言つた時です。突然部屋戸があいたと思ふと、大きい雌の河童が一匹、いきなり長老へ飛びかかりました。僕等がこの雌の河童を抱きとめようとしたのは勿論です。が、雌の河童は咄嗟の間に床の上へ長老を投げ倒しました。

「この爺め！ けふも又わたしの財布から一杯やる金を盗んで行つたな！」

十分ばかりたつた後、僕等は實際逃げ出さなければかりに長老夫婦をあとに残し、大寺院の玄関を下りて行きました。

「あれではあの長老も『生命の樹』を信じない筈ですね。」

宗教というものに、そもそも救いを見出していない第二十三号。トツクの死によつて宗教への接近を試みたものの、その最大勢力である「近代教」の長老夫婦の在りようを目の当たりにし、若いラツプと共に近代教へ接近を中断する。おそらくこれは、キリスト教を始めとする、当時の日本での宗教界の状況を念頭に表現されたものに違いない。

第二十三号は勿論、実生活者の芥川龍之介も、宗教とは無縁の生活を送った。キリスト、そして聖書というものに接近を試みた芥川が、ついぞキリスト教への入信を果たさなかったことは、これまでも研

究者から指摘されてきた。

これらの事実を差し引いても、自分自身の存在に不安を抱きながらも、宗教というものに安易に身を委ねることができなかった近代日本人の在りようが、カリカチュアのように描かれているのが第十四章である、と言えるのではないか。

ここまでを振り返ると、『河童』の言説の表層には、社会批評・現実社会へのパロディが散りばめられていることに気づく。折しも当時の日本の出版物への検閲が、時を追うごとに厳しさを増してくる中、人間社会の窮屈さを笑い飛ばす河童たちの姿が見えてくる。

とはいえ、人間社会の窮屈さをそのまま描き、体制批判と受け取られる内容を書いてしまったのは、この作品の出版は許されなくなってしまう。

そこで小説の言表主体・芥川は、巧みな筆使いでこの危機を打開するのだ。一言で言えば、『ずらし』の手法である。

#### ○第四章 「ずらし」と『河童』の視点

佐々木健一（一九四三）は、日本の詩歌を研究対象として論じた『日本的感性』<sup>⑨</sup>の中で、対象と距離を取る西洋的世界観（バラ型）に対し「日本的感性は直接の接触性を求める」と指摘し「サクラ型」と定義する。そして「けしき」「なつかし」「なごり」という語彙にその特性を見出す。更にその接触性により「世界の動性」は「風と天体の動きを基本とする」循環が基本形だと述べる。これに対し「意識の

動性」は「ここに粘着したイメージや記憶などをずらす想像力のはたらき」を生む。また「日本的感性は、触覚性を本質的要素とし、『世界―われ』の基軸上の位置と、宇宙と意識それぞれの動性という二つのパラメーターが、触覚性を多様化することによって展開」した上で、「ずらしを基本とする意識の動性は、感性の知的領域を展開してゆく。」とも述べている。

具休例を一つ挙げよう。佐々木は、万葉集の山部赤人の歌、

ぬばたまの夜のふけぬれば久木おふる清き河原に千鳥しばなく

を取り上げ、この歌が「心中にあるもの（昼間見た河原の久木）を、遠くの場所へずらす」ことで「夜のふけぬれば」という表現を可能にしていると述べる。久木という「粘着した像や思いがあるとき、それを展開する基本的な操作がずらしである」と言うのだ。

目の前にあるものに対して実際のありようから「ずらす」ことで、想像力が広がり、感性の発動による豊かな芸術的表現が可能になる、と言うのが佐々木の見立てである。これを『河童』に当てはめると、どのようなことが言えるだろうか。

前章末にも述べたが、『河童』の中に出てくる登場人物（動物）に、明確な対立軸を持つものはほとんどない。近代以前であれば理想の一つであった宗教的存在も、第十四章の「近代教」のように、理想の対象とは言い難い姿で第二十三号の前に現れる。現実の人間社会と「河童の国」にあるものは、明確な対照関係にあるのではなく、似ていて、かつ差異があるものばかりが存在している。「対」と言えなくも

ないが、むしろ同じようなものの差異、ずれが、第二十三号を通して語られるのだ。

これは別の見方をするのが可能である。「ジャーナリズム」の仕事である。

風刺、社会批評という表現行為は、「理想―現実」という対の存在が設定され、表現意図を持った者Ⅱジャーナリストが、理想と現実との落差を指摘することで、初めてその行為を完結する。その意味で『河童』における患者第二十三号は、河童の国の現実を伝えることで、自分の住む国（おそらく日本）への問題提起を、あたかもジャーナリストのような立場で行うのである。しかし、先に述べたように『河童』を詳細に分析すると、基本的にどの章も「理想―現実」を匂わせる「対」の関係を構築するものは存在しない。人間社会の現実を匂わせる事実を紹介されながらも、比較対象となる「理想」はついで登場しない。あるのはただ、作中の架空の存在である「河童」の国の現実である。読者はそこに現代日本とのずれを感じ取る。理想との比較軸こそ表現されてはいないが、ずれを描くこと自体も、ジャーナリズムの行為の一形態と言えるのではないだろうか。しかも作中では精神病院の患者、第二十三号の言うことであるから、それ自体は社会の現実に対する明白な抗議ではない。このような周到な表象装置を仕込んでいたことで、『河童』は昭和二年の日本において何らの支障もなく出版され、読まれたに違いない。

とはいえ、これが一般的なジャーナリズムだ、とは言い切れない。この作品が明快な「社会批評」を行ったのではないとすれば、『河童』の目指した表現は何だったのか。

その一つの可能性として『寓話』、寓喩の表現、という選択肢が浮かび上がる。

## ○第五章 『河童』と寓話一般との比較

旧ソ連の発達心理学・教育心理学者であったレフ・ヴィゴツキー（一八九六―一九三四）は、二九歳の時に『芸術心理学』（一九二五）を著した。

芥川が小説家として活躍した時期、ヴィゴツキーは日本において無名の存在だった。そもそも『芸術心理学』は書かれた時期こそ一九二五年だが、実際にソ連（旧）で出版されたのは一九六五年であった。この書の中で、ヴィゴツキーは「寓話」について、レッシングやポチエブニャらの先行研究を下敷きとして、次のように語る<sup>10</sup>。

寓話が生じるにおいて疑いなく二元的であったこと、それがもつ教訓的部分と描写的部分、換言すれば詩的部分と散文的部分とが闘つて来たもので、その発展の歴史の中で互いに勝ったり、負けたりしてきたことを知っている。こうして主にビザンチンの土壌の上では、寓話は芸術的な性格をほとんど失つて、もっぱら道徳的、教訓的な作品になってしまったのである。これとは逆にラテン的な土壌の上では、詩で書かれた文学として成育したのである。（略）

イソップ、レッシング、トルストイなどの寓話は散文的な寓話と言ふべきであり、ラ・フォンテーヌ、クルイローフ、および両者の流れを汲む人たちの寓話は詩的な寓話である。

そして、古代ギリシャ・ホメロスの『イーリアス』を引き合いにしてこう続ける。

もし『イーリアス』からその散文的な部分を、この叙事詩の中の出来事の経過をぬき出し、これらの事件を魅力あるものにしていくものすべてを捨て去るとすれば、旦那方がけんかすりや、百姓どもの額が割られるというテーマの寓話が得られるだろう。つまり詩的な作品からそこにある詩的なものを取り去れば寓話になるのだ。寓話と散文作品の間の等式が全面的に貫かれていることが、ここでは全く明白となる。(略) 寓話の中には抒情詩、叙事詩、ドラマの萌芽が蔵されていること、そして寓話の人物たちは、寓話を構成する他の要素すべてと同様、物語文学やドラマの一切の主人公たちの原型であることを示そうと努めるつもりである。

つまり、寓話と詩は一続きの創作営為であり、かつ、寓話には「物語文学やドラマの一切の主人公たちの原型」が存在するというのだ。

これに続けてヴィゴツキーは、登場するものが人間ではなく「動物」が圧倒的に多いことに着目する。ラ・フォンテーヌやクルイローフの寓話を踏まえて、登場する動物たちをこのように分析する。

かくてわれわれは、ラ・フォンテーヌなりクルイローフなりの作品のどれでも一つをよく読むなら、主人公への、作者と読者の決して冷淡ではない態度をいたる所に見つけ出すだろう。そしてまた人間が呼び起こすのとは本質的にちがう感情を呼び起こしつつも、これらの主人公たちは終始、われわれの態度の中に強い情動を生じさせることがわかうし、寓話で詩人たちが動物や不活動体

の描写に頼る最大の理由の一つは、こうした手法から生じる一つの可能性、すなわちそのような象徴的な主人公の中にある情動的な要素だけを隔離して、濃縮する可能性にほかならないと言えるだろう。

寓話の多くに動物が（人間の代わりに）登場することの意味とは何か。人間で描いてしまうと普遍性に走ってしまったり、逆に登場人物そのものへの強烈な感情を伴って理解してしまう。それを避け「情動的な要素」の「濃縮」によって、「個別の事例」を物語るためだ、と説明する。

更にヴィゴツキーは、イソップ作として伝わる、猿と二匹の子供の話を用いる。

猿は二匹ずつ子どもを生むということだ。うちの一匹を母猿は可愛がるが、他の一匹は憎むという。母猿は可愛がつている方を抱きしめて窒息死させてしまうので、生き残って大人になるのは憎まれている方だそうである。

そして、以下のように検証を進める。

個別的な事例として物語られたこの寓話は当然読者の考えを、往々にしておのれの子どもを溺愛する人間の親との類似に向わせるのである。（略）だが実際には、詩的な寓話では同じ特性―物語の個別性と簡潔性―が全くちがった意味と使命をもつ（略）この特性が詩的な物語全体に、全く別

の思想傾向、ちがった目の向け所を付与し、美的反応に不可欠な、前述の現実の刺戟からの隔離を保証することである。事実猿一般の話を聞けば、筆者の思考は当然のように現実に向けられる。この話を筆者は、新しい思想を自分のものにするときいつも助けとなる知的器官を動員して、真実か真実でないかという点から考えるのである。(略)この事例を話全体から隔離して、通例美的反応を可能にするような関係でこの事例に対するのだ。(略)前述のように詩的な物語は一般にラ・フォンテーヌが言ったごとく魂を犠牲にして、寓話の肉体を強くしようと努め、したがって描く対象の具体性と現実性を強めようと努めることだということになる。寓話はこうしたときにのみ読者への情動効果をもちうるからである。(略)これは独特の、条件付きの現実性、読者が自己を入れるために自ら作る幻覚の持つ現実性なのである。

繰り返しになるが、芥川が活執筆動を行っていた頃、ヴィゴツキーの研究は日本に伝わってはいなかった。「芥川龍之介文庫目録増補改訂版」<sup>①</sup>を見る限り、ヴィゴツキーの著作は芥川の手元に所蔵されていない。そもそも今回紹介した著作『芸術心理学』が旧ソ連国内で出版されたのは、死後から遥か後の一九六五年であった。おそらく童話作家でもあった芥川という言葉表主体が、自身の童話創作から経験的に童話・寓話の文法を身につけていたのではあるまいか。

河童という動物を用いることで、事実そのものを直接的に読者にぶつけるのではなく、まして説教めいた普遍性を語りかけるのでもなく、河童たちが人間の読者に個別の具体的な事例―「条件付きの現実性」を示したのである。

また、ヴィゴツキーは動物を登場させて物語（寓話）を描くことについて、ラ・フォンテーヌの言葉を引用してこう紹介する。

彼は「これらの寓話は単に道徳的なものではない。別のいろいろな知識も与える。動物たちの性質とさまざまな性格などがそこに表されている」という。

詩的な寓話で動物たちの性格についての博物学的な知識とモラルがラ・フォンテーヌが正しくも言ったように、同じ位置を占めている、言いかえればいかなる位置も占めていないことは、それらを比較するだけでわかるだろう。

描かれた動物の性格・性質一般が読者の理解にもたらされ、新たな発見につながることに寄与する、とヴィゴツキーは述べる。キツネがはずる賢い、とか、ライオンは権威的な存在だが思慮深いとは限らない、といった種類の説明がここで言う「博物学的な知識」である。それは「モラル」と等価ではない。つまり「寓話」はモラルありきでは無いのだ。読者が二次的に「この作品にはどんなモラルが隠されているのだろうか」と考えることはあっても、作者の側は最初からモラルを託しているわけではないのだ。

改めて、河童を「博物学的」に見ると、どのような存在になるのだろうか。古くは『古事記』『日本書紀』の記述に遡ることができるこの動物は、人間に害を及ぼす危険な存在として忌み嫌われる存在だが、人間の世界と付かず離れずの距離感の中で暮らしている。近現代に生きる私たちにとっては、むしろ親近感すら感じさせる存在でもある。

斎藤次男は『河童アジア考』<sup>12</sup>の中で「河童は一種の矛盾を解決するために機能する社会システムであり、それゆえに実は人間として立派に実在しながら、一方で実在しないという形をとらねばならない」と述べ、河童によって社会の矛盾が解消されるという社会システムを担っているのだ、と説明する。実在の芥川龍之介はしばしば河童の絵を墨で描いているが、あの絵に凶暴性が託されているようには見えない。川、あるいは「河童の国」に近づいた人間にのみたずらを仕掛けてくる、親しげな存在として『河童』は描かれている。これは前述した平岡敏夫の、河童が「莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、図々しい、うぬ惚れ切った、残酷な、虫の善い動物」ではない、という指摘にも重なり合う。

ここまでの論点を、改めて『河童』に当てはめて整理しよう。

河童（Ⅱ動物）の世界に患者第二十三号（Ⅱ人間）が迷い込むことで物語世界が展開する『河童』という作品は、純粹な「寓話」としての成立要件を欠いている。とはいえその作品世界の大半は、河童の世界である。不十分とはいえ「寓話」作中の「動物」の持つ表現効果が發揮されている、と考えることができる。

また、物語世界を展開するために人間を使って直截的に表現すると、特定の感情表出が過剰に行われたり、逆に普遍的な読み方を読者に（無自覚に）要求してしまったりする。ともすると道徳・教訓的な一面的な読み方の促進にもつながりかねない。それらを巧みに避けるために動物を登場させて描くと、「個別」に提示しようと目論んだ場面設定と表現効果を適切に示すことが可能となる。

加えて、人間世界をそのまま描いてしまうと風刺の要素が強く出てきてしまう。ともすると発行禁止と判断される事態にも繋がりがかねない。しかし「河童」の世界として物語を展開することで、現実世界

の描写は希薄となる。しかも、それは（ヴィゴツキー説の範囲内では）「詩」と紙一重の「寓話」の世界なのだ。「詩人兼ジャアナリスト」を標榜する芥川にとって、この「寓話」的な手法は、願ったり叶ったりのものであったに違いない。

これまでの研究史において「寓話」か否かと議論されてきた『河童』だが、ヴィゴツキーの「寓話」の定義を重ねてみると、本作が寓話の要件を十分に満たすものではないにせよ、寓話の持つ特殊な表現効果によって、芥川の表象意図が効果的に支えられていることに気づかされる。

では、もう一つ別の視点を加えてみよう。「河童の国」で見聞きしたことを人間世界で語った患者・第二十三号は、精神病院に閉じ込められてしまった。これを芥川最晩年の小説『西方の人』『続西方の人』のクリストと重ねてみよう。

自らの信念に従って行動しただけの殉教者「クリスト」は、己の信念に従って「福音」を述べることで、多くの受苦・受難を被ることになる。それは、「河童の国」で見聞きしたことをただ述べているだけなのに、人間の現実世界に帰ってきて精神病院に閉じ込められてしまった第二十三号と重なりはしまいか。

「河童の国」の真実を伝えようとする『河童』の第二十三号と、『西方の人』で伝記的に語られるクリストは、共に「受難」の人だ。社会にとって有益である思想・事実を伝える「ジャアナリスト」は、第二十三号やクリストのように「受難」の憂き目に遭う。

実在の芥川は発行禁止処分をまともに受けることのなかった作家だが、その周囲には常に検閲・発行禁止の危機が迫っていた。日本人特有の「ずらし」の視点や、寓話の手法を経験的に援用した描写によって、あからさまな現実批判＝風刺となることを巧みに回避した。その上でユートピアならぬ「河童の国」

との比較から、当時の日本社会の現実を感じさせるという戦略が『河童』には盛り込まれていた。これこそが言表主体・芥川龍之介の目指した「ジャアナリスト」の有りようだったのだ。

小説として人間の世界をそのまま描いてしまうと、社会批判という解釈をされかねない極めてデリケートな話題・思考が『河童』には盛りられている。「寓話」の装いをまとうことで、発行禁止にも繋がりがねない内容を巧みに回避して描くことが可能となる。そのような表現の指向が『河童』を『河童』たらしめたのではないか。

以上のように、芥川という言葉表主体は自身を取り巻く厳しい状況の中で、『河童』の執筆にあたって様々な文学的方法論を（無自覚な事項も含めて）駆使した。それにより当時の日本社会にあつて問題提起の必要を感じられていた社会課題について、「河童」と狂人「第二十三号」の視点を通した「ずらし」の方法で表現し、「ジャアナリスト」のように公に流布しようと努めたのだった。

### ○結論　「ジャアナリスト」の視点から

芥川龍之介の小説『河童』は、これまでスウィフト『ガリバー旅行記』のパロディ、社会風刺、芥川龍之介の「狂人」としての実人生と結びついた狂気・憎悪の表象、憎悪の寓意の表象、といったような読み方がなされてきた。

しかし、作中の登場人物の関係を「対語」として捉え、そこに見出される「ずらし」の視点に注目すると、動物を多用した「寓意」の表現を援用し、特定の批判的メッセージを持たせない表現を可能とし

たことが見えてくる。これは見方を変えれば、検閲制度を巧みにすり抜ける社会批評としての表象である。それこそが芥川龍之介の実生活と創作を切り離し、純粹に作品としての読みを可能とする。

言表主体・芥川龍之介は、その時代状況を踏まえ、「ずらし」や「寓意」といった多彩な表現方法を用いて『河童』を描き、新たな表現を目指したのだった。

（おおたゆきお 文学研究科日本文化専攻修士課程）

# 【註】

- （1）ウェブ雑誌「PEAKS」(<https://funq.jp/peaks/article/600979/>) 二〇二〇年四月八日号を参照した。文を書いた森山健一によると「槍ヶ岳の初登頂は19世紀前半（1828年、播隆上人によって）。（略）けわしい岩壁で囲まれた剣岳の山頂で平安時代の錫杖などが発見されていることを考えると、穂高ももっと早くに修験者や獵師などによって登頂されていた可能性もある。ただし、少なくとも記録に残っているものとしては、1893（明治26）年、測量士の館澤彦と山案内人の上條嘉門次による前穂高岳初登頂が最初となる。その後、1906（明治39）年に奥穂高岳と西穂高岳が登られ、次々にその後、1906（明治39）年に奥穂高岳と西穂高岳が登られ、穂高山城は次々に「開山」されていく。19世紀から20世紀に移るこのころに、穂高岳の登山の歴史は始まったといっている」と述べられている。このように『河童』における第二十三号の登山は、極めて近代的な行爲だったこととなる。

- （2）芥川龍之介『芥川龍之介全集』第二十卷、岩波書店（一九九六）より引用。

この後、特に示さない限りは芥川龍之介の執筆した内容はすべてこの全集に依る。

- (3) 助川幸彦「対語的世界のガリヴァー―芥川龍之介『河童』試論―」(『芥川龍之介作品論集成第六卷河童・函車―晩年の作品世界』所収) 翰林書房(一九九九)。特に九六〇九八頁を参照した。
- (4) 吉田精一『芥川龍之介』三省堂(一九五二)。ここでは新潮文庫版(一九五八)を参照した。
- (5) 関口安義『河童』から『西方の人』へ『日本文学』昭和四〇(一九六五)年五月号。
- (6) 平岡敏夫『河童の構造』(『抒情の美学』大修館書店(一九八二)所収)の四四四頁を参照した。
- (7) 福田和也『芥川龍之介の『笑い』』(『甘美な人生』新潮社、平成七年(一九九五)所収)。
- (8) 小林洋介「方法としての〈狂人の一人称語り〉」(『狂気』と〈無意識〉のモダニズム』笠間書院(二〇一三))。
- (9) 佐々木健一『日本的感性 触覚とずらしの構造』中公新書(二〇一〇)の「結び」および十二章より引用。
- (10) L・ヴィゴツキー(峯俊夫訳)『寓話・小説・ドラマ その心理学』国文社(一九八二)第一章(一〇三頁)より引用。原典は『芸術心理学』(一九二五)。峯俊夫訳の本書は、原典の第二版(一九六八)から〈美的反応の分析〉の部分のみを訳出したものである(「あとがき」より)。
- (11) 公益財団法人日本近代文学館「日本近代文学館所蔵資料目録三五 芥川龍之介文庫目録 増補改訂版」(二〇二三)。
- (12) 大野芳『河童よ、きみは誰なのだ』中公新書(二〇〇〇)一二二頁より引用。

# 宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』

——タイトル「銃口」をめぐる一考察——

林 香苗

序、タイトル「銃口」をめぐる二つの対談

三浦綾子（一九二二—一九九九、以下綾子）「最後の小説」<sup>(1)</sup>にして「遺言」<sup>(2)</sup>とも言われる『銃口』は、小学館の月刊誌「本の窓」に、一九九〇年一月号から一九九三年八月号まで三年八カ月、計三七回に渡り連載され、翌一九九四年三月一〇日に上巻と下巻が単行本として同社から刊行された。原稿用紙一一一〇枚、デビュー作『氷点』（一九六五）の長さを超える長編<sup>(3)</sup>である。昭和も暮れなずもうとしていた一九八八年九月に、同誌編集長の眞杉章から「昭和を背景に神と人間を書いて欲しい」<sup>(4)</sup>、と新

連載のテーマが提示される。綾子は故郷旭川と、初任地の炭坑街歌志内（小説では幌志内）、そして満州を舞台に据え、大正天皇の御大葬から昭和天皇の御大葬までを背景に、北海道綴方教育連盟事件に巻き込まれていく主人公北森竜太の半生を描いた。

この小説の特色の一つに、「銃口」というタイトルが挙げられる。連載終了直後の対談<sup>⑤</sup>で、文芸評論家の黒古一夫は逸早く、「銃口」というタイトルが、ぼくは非常におもしろいと思った」「戦争の時代の象徴ということでも十分にいいのですが、その銃口が誰によつて誰に向けられているのか、三浦さんの深い思いがこめられたタイトルだ」と述べる。すると綾子は、「昭和を三浦さんの立場から総括してほしい」と連載を依頼され、「昭和といえば戦争」「戦場で火を噴く銃口もあるけれども」「あなたにも私も、銃口がいろんなところから向けられている」「目に見えてくる形もあるし、見えない形もある。敵も味方もわからない、気味の悪さ」と答える。続いて眞杉も、「それまでたくさん書いてこられた作品の中で、このタイトルだけが硬質」「例えば野間宏が『銃口』といったつて、ぼくは別に驚かない。三浦綾子さんがこの昭和という時代を書く小説に、『銃口』というタイトルをつけた。しかも、きつぱりとこれはすごいぞ、とまず思いました」と、やはりタイトルを告げられた時に抱いた強い印象について言及する。

一方、その翌年の対談<sup>⑥</sup>で、教育運動家の碓田のぼるは、「銃口」連載中である一九九二年刊、小林多喜二の母を描いた小説『母』と比較し、「作品の表題としては非常に対照的で、三浦さんの作品の中でも『銃口』というような表題は、あまりない」「この作品を読むと、三浦さんが、長い時間、『銃口』という言葉にこだわっていらつしゃったという気がする」と述べる。すると綾子は、先の対談や単行本の「あ

とがき」では述べていなかった次の言及をする。「宮本百合子の小説に出てきますね、『銃口』が。何でしたっけ?」。これに対し碓田が、「三浦さんが書かれていますよね、『十二年の手紙』を読まれた感想に。『あの軍国主義時代、天皇を神とする時代にあつて、天皇制反対、侵略戦争反対となえることが、どれだけの勇気を要するか、言ってみれば銃口の前に飛び出すにひとしいことであつた』と。」と答える。つまり、碓田は、綾子がかつて、宮本顕治・百合子の書簡集『十二年の手紙』の読後感<sup>⑦</sup>で、喩えとして「銃口」を使ったことを述べたわけだが、綾子はさらに、「それだけじゃないんです。百合子の小説の中に『銃口だけが長い間、光って土の中に埋もれていた』というような感じの文章が何回か繰り返し出てくるんです。それを讀んだとき、非常に心ひかれたんですね」と述べる。

この「百合子の小説」とは、宮本百合子（一八九九—一九五一、以下百合子）最後の小説『道標』を指し、この点に佐藤将寛<sup>⑧</sup>や上出恵子<sup>⑨</sup>も着眼するものの、「銃口」が、『道標』と『銃口』両作品のどの場面でどのように描かれているか、という詳しい考察は為されていない。つまり、管見の限り、先行研究において、三浦綾子『銃口』のタイトルが宮本百合子の『道標』に由来する説明はあつたが、宮本百合子と三浦綾子との接点については考察されていなかった。

そこで、本稿では「銃口」というタイトルに着目し、その由来とされている小説『道標』の作者宮本百合子を綾子を知るいきさつ、及び受けた影響を検証する。ついで、『道標』と『銃口』両作品における「銃口」の描写を分析する。

## 一、前川正から渡された『きけわだつみのこえ』と『十二年の手紙』

本章では、綾子が百合子を真に<sup>(10)</sup>知るに至った経緯を確認する。主な典拠を「三浦綾子年譜」<sup>(11)</sup>、「自作年譜」<sup>(12)</sup>及び、自伝小説『道ありき』<sup>(13)</sup>、前川正と堀田（旧姓）綾子の往復書簡集『生命に刻まれし愛のかたみ』<sup>(14)</sup>、『わが青春に出会った本』<sup>(15)</sup>とし、時系列に沿い初出順に次に挙げる。なお、年齢は満年齢で統一し、傍線は筆者が施した。以下同。

### ・一九四五（昭和二〇）年、綾子二三歳。

八月一五日。玉音放送を聴き、奉安殿にひれ伏し泣く。日本、無条件降伏。九月、生徒たちに墨塗り（教科書の軍国主義的部分の削除）をさせる。

### ・一九四六（昭和二一）年、綾子二四歳。

三月、敗戦までの国家の欺瞞、教育の過ちに気付き、七年間務めた教職を辞す。不信と虚無の荒廃した生活が始まる。四月一三日、昏倒。六月、肺結核にて療養所に入る。一三年間に及ぶ療養生活が始まる。

日本の勝利を信じて疑わず、全身全霊を捧げ軍国主義教育を行っていた綾子が敗戦で抱いた屈辱感、

自責の念は大きく、翌年結核に倒れるが、もはや悲しみも絶望もなかった。

・一九四八（昭和二三）年、綾子二六歳、前川二八歳。

二月二七日、幼なじみで二歳年上のクリスチャン、肺結核で休学中の北海道大学医学部生前川正と、互いに結核患者の会の会員として一七年ぶりに再会する。二月二八日、同日付前川正からの葉書を受け取る。延べ、千余通に及ぶ書簡の往復が始まる。だが、前川からの葉書に対し、「たいくつな人」という印象しかなかった。

・一九四九（昭和二四）年、綾子二七歳、前川二九歳。

療養所での療養態度に注意を促す前川に、「だからわたし、クリスチャンって大きらいなのよ。何よ君子ぶって……」などと悪態をつく。一方、自分の命があと何年ももたないことを知っていた前川は、その命を綾子に注ごうとする。四月、退院するが、依然として生きる喜びを見出せない。六月初旬、オホーツク海沿岸の斜里町に住む婚約者に婚約の解消を伝える行き、その夜入水自殺を図る。六月下旬、前川は綾子を旭川市の春光台に誘い、綾子を救えない自身の無力さ、信仰心の薄さを嘆き、自らの足を石で打ちつける。その姿に心打たれた綾子は、「前川正の、わたしへの愛だけは、信じなければならぬ」と思い、酒も煙草もやめる。前川の勧めで英語を学び歌を詠み、聖書を読み、教会に通い始めるが、「クリスチャンの祈る祈りにも、（略）疑いを持」つ。一〇月二〇日、『きけわだつみのこえ』が刊行される。一〇月二六日、前川はその扉に、「かつての自分たちの声を聞こう」<sup>(16)</sup>と記し綾子に

贈る。十一月八日、前川は、綾子宛書簡でその読後感四枚の宿題を課す。十一月二一日、綾子もすぐ返事を送る（以下、『生命に刻まれし愛のかたみ』『わが青春に出会った本』本文の要約）。私はこの声を聴いたと言えるか（略）これは生命全体で読むべきものだ。戦争を徹底的に批判し、否定すべきものを持たせてくれるものは何か。学徒の中にはクリスチャンがいたが、私のほしい神を感じさせなかった。神国日本<sup>①</sup>の言葉は、耳にたこのでできるほど聞きはした。しかし、生命<sup>②</sup>については、一つも触れてはいなかった。学徒の聲が、決して日本のみにある声には思えなくなつた。私は世界の若い魂の死際の声を聴く。偽わらねばならぬ言葉、本当の事を言いたい言葉がはつきりとわかれてある。十一月二二日、前川は、『きけわだつみのこえ』読後感、綾ちゃんがこんなにも神を求めているのかと思うと、本当に私は心から嬉しく―うれし涙を流しながら読みました。満点を差し上げます。本当に一晩中嬉しくて、涙を一晩中床の中で流し、感謝の祈りを捧げたと申したら、偽りになるでしょうか？ 私の心を本当にわかつて頂けるか―この私の喜びを……11、23朝」と返信する。

ここで、『きけわだつみのこえ』が刊行されたわずか六日後に、前川がそれを綾子に渡した点に着目したい。また、前川が綾子に与えた使命も、扉の言葉に確認することができよう。前川は、「わだつみ」は「かつての自分たち」なのだと伝えた。そして、わだつみには、発したい「声」があるはずで、それを「きけ（聞こう）」と綾子の心に風穴を開けた。つまり、前川は「声を聴こうとする意志」を、綾子に授けたのである。とはいえ、この時点での綾子は、まだキリスト教の神を信じ切つてはいない。だが、自問自答しながらも綾子の中に、「戦争を徹底的に批判し、否定すべきものを持たせてくれるもの」への希求と、「世界」と

いう視点が生まれ始める。また、この綾子からの書簡を受け取った翌日に、前川がすぐさま返信を送り、しかも翌朝まで筆をたたためていた姿が浮かび上がってくる。

なお、土屋文明を敬愛し、アララギ誌に投稿をつづけていた前川は、この年に次のような歌も詠んでいる。この作品への思いの深さを、改めて確認できる。

夜更けて「きけわだつみのこえ」を読む母なりみれば泪ぐみゐるつ<sup>(17)</sup>

(前川正)

・一九五〇（昭和二五）年、綾子二八歳、前川三〇歳。

前川は五月二七日付の日記に、宮本顕治・百合子の往復書簡（「世界評論」誌掲載）の感想を、「百合子の顕治あての手紙は、深い信頼と依存が美しい響きで語りかけている」「『離れ住む』という点では私達と似ているが、その内容の高さの点ではどうか？」と記し、自身と綾子の姿に重ねる。六月、自分の体を大事にするようになった綾子は、前川と共に北海道大学医学部附属病院にて受診。同書簡集が『十二年の手紙』として筑摩書房より刊行される。秋、三七度四分の熱が続く体が次第に瘦せていくが、神経質による発熱、と決めつける医師と現代の科学に不信感を抱く。一〇月、前川は『十二年の手紙』を綾子へ贈る<sup>(18)</sup>。これを機に、綾子は百合子の作品を真剣に読み始める。一二月、『道標』連載終了（「展望」誌に一九四七年一〇月から）。綾子は初めて、作家（百合子）に手紙を書き、その感動を綴る<sup>(19)</sup>。

前川との親しさが増したこの年の五月に、綾子は恋愛に関する歌を詠んでいる。

導かれつつ叱られつつ来し二年何時しか深く愛して居りぬ<sup>(20)</sup>

(堀田綾子)

また、前川の影響で、平和という問題も切実に考え始めた中で『十二年の手紙』を読み進め、宮本百合子という人物とその生き様を、ここで綾子は真に知ることとなる。一方、前川も、一対の男女の在り方の理想として顕治と百合子を捉えていることが、その日記に表れている。

・一九五一(昭和二六)年、綾子二九歳、前川三一歳。

一月二二日、百合子急逝。ラジオで聞き、綾子思わず泣く<sup>(21)</sup>。二月二七日、前川は『十二年の手紙その二』を綾子に贈る<sup>(22)</sup>。その扉に「私達も」と綾子が記し、二人は拇印を捺す。四月三〇日、前川は『十二年の手紙その二』を贈る。扉には同じく二人が拇印を捺し、前川が「勉強！勉強！」と記す。一〇月、体がますます痩せていき、前川の勧めで旭川赤十字病院に入院する。

・一九五二(昭和二七)年、綾子三〇歳、前川三二歳。

二月、脊椎カリエスの疑いが強まり、札幌医科大学附属病院(以下、札幌医大病院)に転院。三月、前川の依頼を受けた日本基督教会札幌北一条教会員西村久蔵(『愛の鬼才』の主人公)の見舞いを受ける。四月、体が一層痩せていく。五月末、脊椎カリエスと診断される。以後七年間ギプスベッドに病臥し、絶対安静を強いられる。七月五日、綾子、西村の導きで小野村林蔵牧師により病床受洗。二月一七日、前川、肋骨切除胸郭成形手術(二回目の手術)。

百合子の訃報に嘆き悲しむ綾子に、前川は『十二年の手紙』(その一、その二)を続けて贈っている。また、西村に綾子の見舞いを依頼し、自身も変わらず手紙も送り続け、独り離れ住む綾子を懸命に支える。戦後、一切のものを信じることをやめ自殺まで図った綾子が、ついに受洗するに至る。その過程には、前川が、綾子その時々心の叫び声を聴き、それに応え導くかのように『十二年の手紙』を渡していたことが窺える。

・一九五三(昭和二八)年、綾子三一歳、前川三三歳。

七月一二日、西村急逝。一〇月、札幌医大病院をギブスベッドのまま退院。自宅療養に入る。一月、前川が綾子を訪問。これが最後の訪問となる。その後まもなく前川の病状悪化。『十二年の手紙その三』の扉に、「祝クリスマス 綾ちゃん」と記し、綾子に贈る<sup>(23)</sup>。これが、前川から贈られた最後の本となる。

・一九五四(昭和二九)年、綾子三二歳。

五月二日、前川召天(享年三三)。綾子、悲しみが深く、一年間ほぼ人に会わずに過ごす。と同時に、前川の死の直後、綾子は二人の書簡集を出したいと思う(一九年後の一九七三年に実現し、『生命に刻まれし愛のかたみ』が新潮社から刊行)。

西村の急逝に続き、かけがえのない前川も去り、再び奈落の底に突き落とされた綾子の悲しみの深さは果てしなかっただろう。だが、綾子がこれからなすべきことを『きけわたつみのこえ』に託し、更に

は『十二年の手紙』に描かれた百合子の生き方をこれからの〈生〉の道標にしてほしいと願い、前川はこれを最期に手渡したのではないだろうか。そして、その想いが伝わったからこそ、悲嘆にくれながらも「二人の書簡集を出したい」と綾子は決意したのだと思われる。

この翌年、三浦光世と出逢った綾子は、一九五九（昭和三四）年に結婚する。一九六一（昭和三六）年、雑貨屋を開店し、二年後に『氷点』を書き始めるこの時期は、綾子の人生の新たな幕開けとも言えよう。だが、前川の死後に「出したい」と決意した二人の書簡集が、一九九年の時を経て一九七三年に出版された。これは、前川から渡されたものを、綾子がこの間に想い温め続けていたことを物語っているのではなからうか。その手がかりを、次章で探ってみよう。

## 二、三浦綾子作品にみる宮本百合子とその影響

一九五〇年に、宮本百合子の小説『道標』の連載が終了した。綾子は、そこに繰り返し出て来た「銃口」に、「非常に心ひかれた」と語っていたが、そこから一四年の時を経て<sup>24</sup>、自身も『氷点』で作家デビューする。以後書かれた作品において確認することのできる「宮本百合子」に関する言説、「きけわだつみのこえ」、「銃口」という言葉）を、初出順（連載作品は、連載開始年で記す）に辿る。（なお小説・自伝小説には「小」、エッセイには「エ」、インタビューには「イ」、対談には「対」と付し、初出時のタイトルを「」内に

記す。)

二一、作家歴一〇年（一九六四〜一九七三年）

・一九六五（昭和四〇）年、綾子四三歳。

奈緒実は、三日がかりで、戦没学生の手記「きけわたつみのこえ」と、はらたみき原民喜の「夏の花」を読み終えた。そこには、なまなまとした戦争の匂いがあった。戦争に押しひしがれた、いたましい命のうめきがあった。

〔小〕ひつじが丘<sup>(25)</sup>

・一九六六（昭和四一）年、綾子四四歳。

わたしの尊敬する夫婦像は、宮本顕治・百合子夫妻（中略）顕治が思想犯として捕らわれ、以来、実に十二年の歳月を、ほとんど獄の内と外に離されて暮らした。この二人には、この世的な夫婦の条件は何もなかった。／夫は獄にいるわけだから、経済的な力はないのと同様である。同居もできず、自由に面会もできない。金網をへだてて、監視つきで話をするしかない。手紙も検閲される。／しかし、この夫婦の尊敬と信頼に満ちた愛情は、なんとすばらしいものだったろう。実に男らしくみごとく、九つ年下の夫と、賢く愛情ゆたかな妻との姿を、わたしは夫妻共著の『十二年の手紙』（筑摩書房）に見て、深い感動に打たれた。十六年前のことである。／（中略）／これこそ、最も重要な共通点だとわたしは思うのは、この三夫妻には、夫婦に共通の生きる目的があったということだ。／宮本夫妻は同じ思想によって生きていた。

〔エ〕「性生活のない夫婦の愛情」<sup>(26)</sup>

・一九六七（昭和四二）年、綾子四五歳。

① 彼（筆者注、前川正のこと）は、わたしを少しでも成長させることに、喜びを感じていたようだった。ゲオルギューの「二十五時」、リルケの「マルテの手記」、宮本百合子・顕治の「十二年の手紙」など、次々に買ってきては、わたしに感想文を書かせるのだった。（「小」「道ありきーわが青春の記」<sup>(27)</sup>）

② 彼の影響もあって、わたしは本をつとめて多く読むようにした。「きけわだつみのこえ」もそのひとつである。（略）わたしはこの本を読み終えた時、この世には読み終えたということのできない本のあることを感じた。いかに感動して読んだからと言っても、それだけでは読んだことにはならないのだ。読んだ者の責任として、その後の生き方において、この本に応えなければならないという本もあるはずである。／この「きけわだつみのこえ」には、若い学徒たちの遺書や日記やノートが載っていた。／（中略）／いかに涙して、この「きけわだつみのこえ」を読んだとしても、戦争はまたくり返されることだろう。／（中略）／「きけわだつみのこえ」の学生たちが、若く清潔であればあるほど、わたしは戦争否定のために、どうしても必要な、神のことを考えずにはいられなかった。ともあれ、この本を読んだことは、わたしの信仰への生活に、大きな刺激となったことは確かである。

（「小」「道ありきーわが青春の記」<sup>(28)</sup>）

③ 「みどり、つけ上がるな」／ぴたりと銃口をつきつけたような、冷酷な声であった。

（「小」「積木の箱」<sup>(29)</sup>）

・一九六八（昭和四三）年、綾子四六歳。

私が素晴らしい夫婦だと思っているのは、宮本顕治・百合子夫妻、（略）相手は刑務所に入ってしまった生活力はゼロ。名誉も何も無い。年齢は百合子の方が九つ上です。この世的に考えるなら、とても耐えられることではないのですが、こういう状態の生活が十年間続き、素晴らしい夫婦愛が生まれました。それは、顕治と百合子の生きる目的が同じだったからだと思います。（「エ」恋愛と結婚（三））<sup>30</sup>

・一九六九（昭和四四）年、綾子四七歳。

① この療養の時期はわたしの最も本を読んだ時代である。宮本百合子、伊藤整、川端康成、太宰治、茂吉歌集をはじめ、三木清や、モンテーニュその他、いろいろと読んだ。

（「エ」『パンセ』につよい感動）<sup>31</sup>

② 今度、宮本百合子選集が刊行されることを聞き、私は宮本百合子の死を思いだした。（略）ちょうど『展望』に載った「道標」が終わった直後だったからだ。／私自身療養中であつたというせいもあつてか、私はその死を実に残念無念に思ったのである。／私は小説を書き始めてから、血漿板減少症となり、紫斑が体のあちこちに出るようになった。（略）尊敬する宮本百合子の病氣と同じなのはありがたいが、肝腎かなめの小説が、似ても似つかぬものでは、まだ死ぬにも死ねないと苦笑している／とにかく、百合子も顕治も、刑務所の高い塀などには、少しも距てられることなく、劣等感も持たず、伸々と自由に、堂々と生きていた。生きる目的を持った人間というものは、投獄されようが、夫と長い間別れていようが、その歩みに揺るぎのないことを私はこの夫婦から知らされた。／<sup>12</sup>

年の手紙」には、名作「道標」が生まれるのも道理と思わせる、確固たる人間顕治・百合子が生きていた。それから私は、さかのぼって「伸子」「風知草」「二つの庭」「播州平野」等々、吸い取るように読んで行き、あらためて心うたれたのであった。今、この選集の刊行を機に、現在の時点で、私はもう一度読み返してみたいと思っている。

〔エ〕『宮本百合子選集』に想う『道標』『十二年の手紙』のことなど<sup>(32)</sup>

・一九七〇（昭和四五）年、綾子四八歳。

「この赤レンガの建物、宮本百合子のおとうさんが建てたんですって？」

〔小〕「続氷点」<sup>(33)</sup>

・一九七二（昭和四七）年、綾子五〇歳。

当時の神風特攻隊の中には、十七歳の少年たちがいたと聞いている。神風特攻隊とは、爆弾を抱えて飛行機に乗って、単身敵の軍艦を求めて飛び立つ。飛び立ったが最後、彼らは永久に帰らない。なぜなら、爆弾を抱えて、飛行機もろとも敵艦に向って自爆するのが特攻隊の定めだったからである。

〔小〕「石ころのうた」<sup>(34)</sup>

・一九七三（昭和四八）年、綾子五一歳。

「十時ね、また西部劇ね」／スイッチを入れると、草木のない赤い山肌を、裸馬に乗った男が、あとをふりむいて銃口を向けた。

〔小〕「足跡の消えた女」<sup>(35)</sup>

この時期の言説にみる特徴の一つ目は、主にエッセイにおいて「宮本百合子」の名を挙げ、「尊敬する夫婦像」、「素晴らしい夫婦」と率直に讃えていることである。夫妻の「生きる目的を持った人間」の「歩みに揺るぎのないこと」に、結婚して間もない綾子が理想を重ねている様が浮かび上がってくる。

二つ目は、『ひつじが丘』の主人公に『きけわたつみのこえ』を読ませ、『続氷点』中のセリフに「宮本百合子のおとうさんが建てた」赤レンガ、などと実名や史実を作中にそのまま用い、リアリティを持たせている点である。

三つ目は、作家デビュー後まもなく、「銃口」という言葉を二つの小説で用いている点である。例えば、「銃口をつきつけたような、冷酷な声」は、「声」の形容として「銃口」を用いる不自然さが否めず、「裸馬に乗った男が、あとをふりむいて銃口を向けた」西部劇の場面は、小説の流れからやや唐突に出て来る印象をぬぐえない。「銃口」という単語のイメージや用い方に思いを巡らせながら、既に実験的に使用しているようにも思われる。

二二二、作家歴一一二〇年（一九七四～一九八三年）

・一九八〇（昭和五五）年、綾子五八歳。

① ここにわたしは『きけわたつみのこえ』という本を持って来ています。ご存じのように、日本戦没学生の手記です。

（「小」「青い棘」<sup>36</sup>）

② 今、私の机の上に、三冊の本がある。背表紙が手ずれしていて、私の、この本に対する愛着がそ

こに語られている。この本は、「十二年の手紙」その一、その二、その三である。(略)／宮本百合子は次のように書いている。／(略)／いかが？ 私の手紙は。私の手紙には私の声が聞こえますか？私のころころした恰好が髣髴いたしますか。(略)／実に百合子の声も、顕治の声も、そしてその二人の姿も、心のこまやかなひだも、これを読む私たちの胸にはつきりと聞え、鮮かに見えてくるのである。(略) 私は「十二年の手紙」こそは、宮本文学のすべての鍵がかくされている豊穡な土壌だと思う。百合子のどの小説を読んだとしても、「十二年の手紙」を読まなければ、それは本当に宮本百合子を読んだことにはならないような気がする。私自身はキリスト信者で、立場は全くちがうが、しかし百合子が真摯に生きた姿勢だけは、決して見失ってはならぬものだと思う。

〔エ〕『十二年の手紙』と私〔37〕

③ 図書館といつても、私の通っていた女学校にある小さな図書館で、それは冊数もまことにささやかであつた。／(中略)／その中には中條百合子の著書もあつて、それが私の目にはひどく眩しく映つたものだ。後の宮本百合子であるこの中條百合子が、十代で世に認められたことを、国語の時間に聞いたことがあつたからだ。

〔エ〕眠られぬ夜のために」 ヒルティ〔38〕

・ 一九八一（昭和五六）年、綾子五九歳。

① このタンカイ堂から、私は「風と共に去りぬ」を買った覚えがある。(略) 夏目漱石や宮本百合子のものも、目録の中にあつたと記憶している。

〔エ〕「枕草子」 清少納言〔39〕

② 今、私の前に背表紙のぼろぼろになった本が一冊置かれてある。それがこの「きけわだつみのこえ」

である。／（中略）／こうした過去を持つ故に、自分の同年代の男たちの書いたこの「きけわだつみのこえ」は、私の心を揺り動かさずには置かなかったのである。／この本を読んだ私は何かをしなければならなかった。が、何をすべきかがわからなかった。私にこの本をくれたのは、私をキリストに導いてくれた前川正であった。／（中略）／もし高学年を受け持っていたら「きけわだつみのこえ」は、私の胸を更に鋭く突き刺していたにちがいない。／（略）／この「きけわだつみのこえ」は、何を聞けと言っているのか。それは正しく、再び戦争を起してはならぬという叫びであり、戦争こそは自国を真の意味で亡ぼすものであるという叫びなのではないか。私たちが真に祖国を愛するなら、高い理想を抱きつつ、無惨にも戦火の中に散って行ったこの若い学徒たちの声に、永遠に耳を傾けつづけ、平和を叫びつづけるべきではないかと思うのである。

（「エ」「きけわだつみのこえ」<sup>(40)</sup>）

③しかもこの二人の手紙は、まことに豊かな内容と、美しい人間愛、夫婦愛に満ちたものである。更に言えば、人間としての誇りに満ちた美しい姿が、全編をつらぬいていとも言えよう。／（前略）  
顕治も百合子も、生きる目的が一つであったということであり、二人の結婚生活が茨の道であることとを、充分承知していたということである。投獄も死も恐れず、同じ理想に生きたこの二人は、その理想を持ちつづける限り、官憲にも、時間にも、引き離されることはなかったのである。／思想への好き嫌いは別として、私はこの二人の生き方に深い敬意を表さずにはいられない。立場がちがっても、賞讃すべきものを私は賞讃せずにはいられないのだ。あの軍国主義時代、天皇を神とする時代であって、天皇制反対、侵略戦争反対をとなえることが、どれほどの勇気を要するか、言つて見

れば、銃口の前に飛び出すに等しいことであつた。しかし二人は、それを人間の理性の声として従い、苦難を避けようとはしなかった。〔エ〕十二年の手紙 宮本顕治、宮本百合子往復書簡<sup>(41)</sup>

・一九八二（昭和五七）年、綾子六〇歳。

それは、宮本百合子の人間性に、その小説を通して心魅かれていたからだつた。この度尾崎ふささんの講演記録を読み、私の感じ取っていた以上の宮本百合子像を知らされた。／（略）／さて百合子の誕生パーティの日のことである。幾人かの客の前で、尾崎さんは半熟の卵のべつたりついたりした皿をなめた。貧しい親から、皿は隅々までなめろと言われて育つたためである。（中略）とたんに百合子も自分の皿をぺろぺろなめ出した。／「今時卵なんて貴重品だから、もつたないよね」／（前略）何というあたたかさであろう。何という大きな心であろう。（中略）私はこの記録を読んで、胸が詰まつた。許すということはこういうことなのだ、と初めて知つた。この時百合子は、尾崎さんの不作法を咎めるよりも、何とかして救おうとした。（中略）／皿をなめる生活というものを、百合子は思いやることが出来たのだ。これが本当のゆるしである。〔エ〕「あやまちをゆるすのは人の誉である」<sup>(42)</sup>

この時期の特徴の一つ目は、尾崎ふさのエピソードも加わり、綾子の宮本百合子観が一層深まっている点である。『十二年の手紙』こそは、宮本文学の「土壌」、宮本百合子の人間性に、その小説を通して心魅かれていた」と、作品への言及も見られ、「人間」百合子への敬意から、百合子の「文学」へと視点が広がっている。また、『眠られぬ夜のために』や『枕草子』を綴った読書エッセイにまで、百合子に関

する記載が見受けられる。

二つ目は、やはりこの時期にも、小説の主人公に、「わたしは『きけわだつみのこえ』という本を持っています」と語らせていることである。かつて教え子たちに、「大きくなったらね、あなたがたも、み国のために死ぬのよ」<sup>(43)</sup>と語っていた自身の胸を同書が突き刺すものであり、だからこそ、戦火の中に散っていた学徒たちの声に永遠に耳を傾け続けるために、繰り返し語らせているように思われる。

三つ目は、「銃口」という語の用い方である。軍国主義時代に天皇制反対を唱えるのは「銃口の前に飛び出すに等しいこと」でもあり、投獄や死に至ることさえあった。それでも勇氣ある顕治・百合子夫妻は異を唱えた。これは、「銃口」を向けられる側へとイメージを膨らませる用い方と言えよう。

二一三、作家歴二一〇三〇年（一九八四～一九九三年）

・一九八六（昭和六一）年、綾子六四歳。

① 宮本百合子は、／「想像力とは愛である」／という言葉を残している。

（「エ」間がぬけているのは、気が利き過ぎるよりもいい。」<sup>(44)</sup>）

② 日本戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』を初めて手にとったのは、一九四九年の秋であったろうか。私はその時、肺結核を病んでいた。この本の贈り主も肺を病む医学生だった。私と同年代の、戦没した学生たちの手紙を、日記を、手記を、私はこの本を読みながら、あらゆる頁で涙を流した。さぞ生きていたかったであろう若い命を思つて泣いた。（中略）／六十三歳の今日まで、あらゆる頁で嗚咽し、見返しの絵にさえ泣いたのは実にこの一冊であった。戦争の恐ろしさ、酷さを、こ

で告発した本を私は知らない。

〔エ〕「思い出の一冊『きけわだつみのこえ』」<sup>(45)</sup>

・一九八九（昭和六四・平成元）年、綾子六七歳。

① 戦後、「きけわだつみの声」<sup>ミナ</sup>という本がベストセラーとなった。戦いに死んでいった人たちが、本当は何を言いたかったか、私たちは食べるように読んだものだ。好きな学問をつづけたかった、と切々と訴える遺書もあった。どんなに生きて学問をしたかったかと、若い私は涙をこぼした。「きけわだつみの声」に遺書を残した人たち、学業半ばに果てていった多くの学生たちが、もし無事に帰って来たとしたら、きっとあの丸善の、あるいは他の書店の店先に立って、／「ああ、帰り着いた」／と、胸の詰まる思いで、立ち尽くしたにちがいない。

〔エ〕「私の中の丸善」<sup>(46)</sup>

② ○月○日／朝、床の中で、ふっと今度の連載小説の題名が浮かんだ。／「銃口」／という題である。担当者の眞杉氏が、激動の昭和を背景に、神と人間の問題を書いて欲しいと言われた。その昭和の一面を、この「銃口」は象徴してはいまいか。

〔エ〕「生かされてある日々」<sup>(47)</sup>

・一九九一（平成三）年、綾子六九歳。「銃口」連載中。

上流階級の百合子の家は、一流ホテルにも似た格式があった。（略）客たちの中に尾崎ふさという貧しい家の娘がいた。常々、皿は隅々までなめると言われて彼女は育った。で、半熟卵のべつたりとついた皿を、彼女はぺろぺろとなめた。客たちはハッとし、うつむいて声を発する者もない。とその時、

百合子は尾崎ふさと同じように、自分の皿をぺろぺろとなめ、「今どき卵なんて貴重品だから、もったいないよね」と言っただのである。(中略) それは、人の非を咎める<sup>とが</sup>よりも、人を許し、愛そうとする姿勢である。

(「エ」森繁久彌夫人を思う)<sup>(48)</sup>

・一九九三(平成五)年、綾子七一歳。「銃口」連載中(「本の窓」八月号で最終回)。

本はよく読みました。学徒出陣で戦死した学生たちの手記「きけわだつみのこえ」もその一つ。私は戦争中に自分が教えたことが正しかったのか、墨で塗りつぶした教科書の方が正しいのかが分からなかったけど、これを読んで戦争は間違っていたと確信しました。そして戦争を否定するためには決定的な何か、つまり神の存在が必要だと痛感したのです。(「エ」肺結核で十三年間の闘病生活に)<sup>(49)</sup>

『銃口』の執筆が開始されるこの時期の特徴の一つ目は、『きけわだつみのこえ』をエッセイで取り上げ、「さぞ生きていたかったであろう」と学徒たちの胸中に繰り返し想いを馳せ、「生きて学問をしたかった」「ああ、帰り着いた」と、発せられたであろう声を聴こうとしている点である。

二つ目は、「銃口」を、新連載のタイトルに使うことを思いついた日記抄の箇所である。『道標』に繰り返し出て来た「銃口」に「非常に心ひかれ」て読んでいた、あの療養時代からずっと温め続け、作家になった後にも、多用とまでは言えないものの、「銃口」という言葉を思慮深く自身の作品に用いては、この言葉から膨らむイメージを問い続けてきた果てに、新連載のテーマと合致したということになる。

三つ目は、一九八二年に綴ったが、九年の歳月を経てもなお、書かずにはいらなかった尾崎ふさの

エピソードを、正に『銃口』連載中（一九九一）に再びしたためている点である。貧しい家の娘（尾崎）が皆の前で思わず皿をなめた行為をかばうべく、百合子も咄嗟になめた。この実話に表れた百合子に対する綾子の想いは、先に確認してきた「百合子のゆるぎない生き方」と併せて綾子が見ている、弱い立場の者への百合子の思いやりや愛の深さである。この百合子への共感とは、『銃口』では、主人公竜太の家族や担任の坂部が中原芳子に温かく接する筋書きと繋がっているようにも思われる。一例を挙げれば、芳子が病気の父親の世話をし、納豆売りをしてから毎朝遅刻して小学校に通っていた場面である。

二四、作家歴三一〜三六年（一九九四〜一九九九年）

・一九九四（平成六）年、綾子七二歳。単行本『銃口』上下巻刊行。

①三浦 私は『銃口』の中でこんなことを書いていたんです。（中略）そのとき日本人は手を縛られて、たくさん朝鮮兵の銃口に囲まれながら、その人の前に据え<sup>す</sup>られる。朝鮮の人は名前を聞いたときに恩人の息子だと分かつて、日本人を助けるんです。（「対」生命・愛が問いかけるもの<sup>(50)</sup>）

② 昭和を書いてほしいというところで、タイトルを考えた時に、割とスツと出てきたのが『銃口』だったんです。（略）そして戦場で火を噴く銃口もあるけど、もちろん、それだけじゃない。実は、あなたにも私にも、銃口がいろんなところから向けられているんですよ。横から前からそして後ろから目に見える形もあるし、見えない形もある。敵も味方もわからない、気味の悪さ……。厳しい思想統制化の戦時中に起こった「綴方教育連盟事件」はまさにそうなんです。一生懸命に生きてきた人たちが、何の故もなくやられちゃったのですから。

「イ」戦場の恐怖よりも、見えない銃口<sup>ぐ</sup>の恐怖を伝えたい」<sup>(51)</sup>

③三浦 あの当時の日本の国は、どこを見ても『銃口』が国民を狙っていた（後略）戦争の時代の神は天皇ですから、この人のために死ぬと思わされて、何も知らずに素直に戦争に連れて行かされた。その時に、こっちへも向けられていたものが銃口<sup>ぐ</sup>だったんです。

〔対〕『銃口』——国民狙う時代の狂気<sup>(52)</sup>

・一九九五（平成七）年、綾子七三歳。

①三浦 私、宮本百合子と顕治の『十二年の手紙』を読んで、じつに感心したのは、（後略）自分が刑務所に入っているあいだ、奥さんは外でいじめられながら、小説を書いて、そしてほとんど共に棲んだことのない夫婦でいながら獄中の彼のために一生懸命やってあげるでしょ。それに対して、顕治から「すまない」という言葉は、ほとんど返ってきてないのね、手紙のなかでは。これは、自分たちが受けている苦しみがどこから来ているかということをしつかり把握<sup>はあく</sup>した、人生観のひとつになった夫婦だからできることで、こういう見事な亭主ぶりを発揮できる男というのは、私、すばらしいと思った。そこに、あなたもどこか似ているところがあるのよね。

〔対〕「対談・結婚して三十六年いま思うこと」<sup>(53)</sup>

②紫斑病は宮本百合子<sup>みやもとゆりこ</sup>を死に至らしめた病気である。宮本百合子は私の好きな作家だった。いや、好きというより尊敬の念を抱いていた。前川正<sup>まへかわただし</sup>という幼馴染<sup>おきななじ</sup>みが、療養中の私をよく見舞に来ては本を貸してくれた。その中に宮本顕治<sup>けんじ</sup>・百合子の「十二年の手紙」があった。（中略）／当時は共産党

・一九九七（平成九）年、綾子七五歳。

員というだけで、死刑に処せられかねない時代である。そんな中で顕治は東京から網走刑務所に移される。それを聞いた百合子が、住み馴れた東京を離れて、寒さのきびしい網走に自ら移り住むことにした。／（中略）この一事にも、百合子の顕治に対する愛の高さと深さを感じないではいられないのだ。／そんなわけで私は療養中、百合子の小説をよく読んだ。そして、訪ねて来る前川正と、百合子の話をよくしたものだ。百合子は獄中の夫に心を遣いながら小説を書いていたのだ。が、私がその小説等を愛読している頃、百合子は突然死んだ。／（中略）／（これからの日本に、最も必要な人が死んだ）／そう思つて私は泣いた。前川正も百合子の死を知つて間もなく、私を見舞に來た。／（中略）／宮本百合子は大作を書いたあと、あつけないほどに早くこの世を去つて行つた。（中略）心の底で、（宮本百合子さえ死んだ紫斑病なら、まあ諦めてもいいわ）という思いもあった。俗に言えば「あの方と同病で光榮です」と言うところか。／（中略）／（やはり宮本百合子と同じ病氣になつてしまった）／（中略）／「先生、わたしも宮本百合子のように紫斑病ではないでしょうね」

〔エ〕「紫斑病の心配」<sup>(54)</sup>

① 前川さんの影響もあつて、わたしは本をつとめて多く読むようになった。『きけわだつみの声』<sup>マ</sup>も

そのひとつ。（略）この世には読み終えたと言うことの出来ない本があることを感じた。如何に感動して読んでも、それだけでは読んだことにはならない。読んだ者の責任として、その後の生き方において、この本に応えなければならないという本もあるはずだ。／（中略）／如何に涙して、『き

「けわだつみの声」を読んだとしても、戦争はまた繰り返されるのではないか。／（中略）／『きけわだつみの声』の学生たちが若く清潔であればあるほど、わたしは戦争否定のために、どうしても必要な神のことを考えずにはいられません。

（イ）「きけわだつみの声——戦争と平和」<sup>(55)</sup>  
②わたしは昨年出版した新しい小説『銃口』の中で戦前を舞台に軍隊や警察が持つ「銃口」が何時国民に向けられるか、という問題について書いたが、戦争が終わって五十年以上たつ現代でも同じだ、という実感を持っています。

（イ）「永遠の平和を求めて——小説『銃口』の背景」<sup>(56)</sup>

最晩年の一九九七年になってもなお、綾子が『きけわだつみのこえ』に言及していることには、着目せざるを得ない。「この世には読み終えたと言うことの出来ない本がある」「その後の生き方において、この本に應えなければならない」という言葉は、一九六七年発表の『道ありき』に既に綴られているからである。以来、『きけわだつみのこえ』及び「戦争否定」と「神」を描き続け<sup>(57)</sup>、綾子はまさに「この本に應える生き方」をしてきた。だが、それにもかかわらず三〇年の時を経てなお、同じ想いを述べるほどに、同書が綾子の作家人生、信仰生活の核となっていたことが窺える。

二つ目は、一九九五年のエッセイで宮本百合子について述べる際、そこに前川のことが一体化して綴られている点である。同様の記載は一九六七、及び八一年の引用にも見られるものの、このエッセイからは、綾子が百合子について前川と共に語り、「これからの日本に、最も必要な人が死んだ」時、やはり前川と共にその死を悼んでいた様子が浮かび上がってくる。

三つ目は『銃口』の執筆を既に終えた一九九四年発表の、仏教思想家ひろさちやとの対談である。『銃

口』の中で「日本人（竜太）」が「たくさんの朝鮮兵の銃口に囲まれ」たが、敵であるはずのその「朝鮮人（金俊明）」により助けられた場面を、綾子はここで取り上げている。綾子は国境を越えて心は通じることを描いた。つまり、「世界」という視野で生命を尊んでいたと言えるよう。

では、かつて療養中に綾子が読んでいた百合子の『道標』に繰り返し出て来た、かつ綾子が「心ひかれた」銃口は、どのように描写されていたのだろうか。次章では、『道標』における「銃口」描写について考察する。

### 三、『道標』における「銃口」描写

宮本百合子の自伝的小説『道標』は、綾子がまさに、生死の境を逡巡していた一九四七年一〇月から一九五〇年一二月にかけて「展望」に連載された。綾子はそれを、ただ『道標』を読むために人から借りていた。「毎号深く感動し、完結した時はあたかも自分が書き終えたかのような充足感すら味わった」と後に記している<sup>(58)</sup>。

この小説には、女性解放の志向を持つ主人公佐々伸子が、人類史上初の社会主義社会への道を踏み出したばかりのソヴィエトに一九二七年末から三〇年秋まで滞在し、その民衆の生活を深く観察し信頼を寄せていく過程が描かれている。伸子は、第一次世界大戦の激戦地ヴェルダンを訪れ、

「モルト・ブール・ラ・フランスのために死せり」と記された兵士たちの墓標を見て、「フランスの誰のためだというのだろうか？」と問いかける。さらに、苛烈な戦闘が行われたドウモン要塞で、いらくさの蔭に「キラリと光って落ちているもの」を発見する。

① 震えが伸子の背筋を走った。それは、一つの銃口であつた。地面にのぞいているその小さい一つ口は、そこに在<sup>あ</sup>つた命を訴え、彼が生きていたことを訴え、だが今は死んで久しくなつたことについて訴えている。伸子は、おもわずその金色の口を撫<sup>な</sup>でた。金色の口は小さく、円く、あわれにかたかった。伸子は、しばらくそこにかがんでいた。この金の口が光っているわけがわかった。ここへ来て、いらくさの間におちているこの一つの輪を見つけたとき、おそらく、どこの国の女でも、彼女が平民の女であるならば、思わずかがんでそれを撫でずにはいられないであらう。

『道標』第三部第三章二六〇—二六一頁

この、物語終盤で初めて「銃口」が登場する。伸子を震撼させた「銃口」の正体は、戦闘中の爆撃で土の下に生き埋めにされた兵士が持っていた銃の筒口であつた。その銃の「口」は、「小さい」「金色の」「円く」「光っている」とその有り様が視覚的に捉えられている。且つ、「撫でた」「かたかった」と触覚的にも描写されている。また、生を訴えている銃の口への惻隱の情<sup>(59)</sup>に、百合子が既に国境を越えた視野を持っていたことを確認できる。

二カ所目の「銃口」描写は、伸子がこの日を回想する以下の文章である。

② 晩秋のヴェルダンの日暮、ドウモン要塞ようざいの霜枯れはじめた草むらの中に、落ちてゐる小さな金の輪のように光っていた一つの銃口。その無言の小さな金の口が伸子に訴えた、そのような生の訴えが、常識のつりあいのこわれた芸術家のふるまいのうちにも疼うずいているように思われて、伸子は苦しいのだった。

『道標』第三部第三章三〇三頁

銃口が、「小さな」とその大きさや、「金の」と色彩により視覚的に捉えられ、生を訴える口としてメタフォリカルに描写されている点は、一カ所目と共通している。また、「晩秋の」「日暮」と薄暗い景色で回想されることにより、「光っていた」口が一層際立たせられてもいる。だがここでは、「小さな金の輪のうに」と直喩され、形容された「(一つの) 銃口」の存在が、一層映像的に浮かび上がっている。

続く三カ所目の「銃口」描写においても、この直喩法は「銃口」を際立たせると同時に、「銃口」を形容する「嬰兒の円くした唇」をも鮮烈に印象付ける。

③ 嬰兒えいじの円くした唇のように西日をうけて光っていた小さな銃口。限りなく寂しい訴えをもっているその円い小さい金の輪は、伸子の瞳のまわりに、はまりこんで、もう伸子は、戦争という文字を、その金の輪をとおしてでなければ読むことができない者となった。

『道標』第三部第四章三六五頁

ここで「銃口」は、戦争の象徴として明確に位置付けられている。ところで、一カ所目の本文に、「どこの国の女でも」とあったが、なぜ「女」とされているのか。この箇所とその理由が示唆されている。つまり、生き埋めにされた兵士が持つ銃の口に「嬰兒」の「唇」を見る眼差しこそ、その生命を生み育んだ「母」のそれだからであろう。そしてこの目を機に、自分の為すべきことを見出した伸子は、母国へ帰ることを決意するのである。

続く四カ所目の「銃口」描写には、視覚・触角的描写と、直喩・隠喩表現の全てが用いられている。

④ おとしモスクワの赤い広場の、外国人のための観覧席で、行進を見ていたときの伸子は持つて

いなかった一つの小さい金の輪が、ことしは伸子の黒い瞳の底に沈んで光っている。それは一つの銃口であった。ヴェルダンの霜枯れそめたいら草のかげにすっかり埋められた口金のところだけを金色の小さい指環ゆびわのように見せていて、あるおそい午後の西日に光り、思わず肩膝かたひざをついてそこに指先をふれた伸子に、生きたい、とささやいて告げた銃口だった。

『道標』第三部第四章三八九—三九〇頁

二カ所目では「生の訴え」と描写されていた内容がここに至り、「銃口」から「生きたい、とささやいて告げた」声として、聴覚的にも描写される。こうして段階を経て伸子の五感に染みわたった「金の輪（銃口）」は、三カ所目では「伸子の瞳のまわりに、はまりこん」でいただけだったが、この四カ所目では「伸子の黒い瞳の底に沈」み、伸子と一体化する。

以上、『道標』における四つの「銃口」描写を挙げ、その特徴を確認した。序に挙げた碓田との対談で、綾子が「それを読んだとき、非常に心ひかれた」と語ったのは、伸子が聴いたこの兵士の「生きたい」という声なき声が、『きけわだつみのこえ』の読了後に綾子が聴いた「世界の若い魂の死際の声」と重なったからだろう。また、『きけわだつみのこえ』は、綾子に、『道標』の中の「銃口」が訴える声を聴こうとする意志を育んだ書である、とも言えよう。

この『きけわだつみのこえ』や『道標』を読んでいた時から約四〇年後に手掛けた『銃口』で、綾子はその題材に北海道綴方教育連盟事件を据えた。事件の被害者たちに取材を重ね、その無念の声を丹念に聴き、登場人物の声として作中に蘇らせ、『銃口』を書き上げていくのである。

#### 四、『銃口』における「銃口」描写

次に、『銃口』における「銃口」描写を辿る。物語終盤の第三章「逃避行」に六カ所、第三四章「羅津まで」に一カ所、そして第五章「祖国の土（一）」に一カ所の計八カ所に確認できた。

一カ所目は、満州に侵入してきたソ連軍の進撃から逃れるために、脱走の罪に処せられてでも逃げることを決意し、それを一同に告げた山田曹長に対する次の場面である。

① 言い終るや否や、突如激怒した一人の古年兵が立ち上がった。

「山田曹長殿！ それが畏れ多くも天皇陛下の軍人の言う言葉でありますか。場合によっては、自分が天に代つて、曹長殿の命をもらう！」

古参兵は銃口を山田曹長に向けた。一同が息をのんだ。

〔銃口〕下「逃避行」二二七頁

「銃口」が敵からではなく、味方の日本兵から向けられたことがまず描かれ、皇軍に背を向けることが罪、とされた昭和の戦争の本質が強く印象付けられる。これこそが、黒古の言う「その銃口が誰によって誰に向けられているのか、三浦さんの深い思いがこめられたタイトル」を象徴する最初の場面と言えよう。

二カ所目は、竜太が夜の闇の中を先頭で歩きながら思いを巡らせる、次の場面で描かれる。

② 竜太は、きょう山田曹長に銃口を向けた古参兵の精悍な顔を思い出した。太い眉がきりりと上がって、

「命をもらう！」

と、山田曹長に向かって言った時、山田曹長の傍にいた竜太は、思わず恐れおののいて、あとずさりしたのだった。目の眩みそうな恐ろしさだった。爆撃機の襲来よりもずっと恐ろしかった。

〔銃口〕下「逃避行」二二〇頁

竜太の回想という形で、山田曹長が味方から「銃口」を向けられた場面が繰り返し描かれる。だが、

竜太の視線がここでは古参兵の表情にまで及んでいる。それは、山田の傍にいたことで、この時の竜太は、自身も銃口を向けられたも同然だったからである。銃口を向けられる恐怖は、我が身がその立場になってこそ、初めて真に知り得ることを訴えようとした作者の意図が浮かび上がる。

この想像を超えた思いは、「銃口」が描かれる三カ所目の次の場面でも描写されている。

③ 竜太は山田曹長を敬愛していた。この人のためには、いざという時、代って死ぬると思ったことが幾度かあった。そしてそれが自分の本心だと思っていた。山田曹長のためなら、敵の銃口の前に

仁王立ちにさえなることも、可能のように思っていた。

だが古年兵が、獣めいた目で銃を構えた時、竜太は思わずあとずさりしてしまったのである。竜太は、自分がそんな人間に過ぎなかったのかと、情けなかった。

『銃口』下「逃避行」一二〇—一二二頁

ここで竜太が発見した想像を超えた思いの二カ所目は、「銃口」を向けられ死の恐怖を感じた時、山田への敬愛や自身の勇気が瞬時に碎かれた情けなさである。このように、竜太は実は何も見えていない人物として造型されているが、この時の竜太の恐怖が想定外の大きさだったのは、「敵」ならぬ「味方」から「銃口」を向けられたが故の恐ろしさがあったからかもしれない。

四カ所目に「銃口」が描かれるのは、竜太が夜明けに発見した、開拓団の集団自決の場面である。草原の中で銃を抱え死んでいた男、目隠しをされた子供と母親、老夫婦など総勢二十数人が銃で撃たれ死

んでいた。しばらくは誰も言葉が出なかったが、山田の言葉で死体を仰向けに臥せてやった。

④ 恐怖に引きつった顔もあった。無表情に目を大きく開けている少年もいた。笑っているような女の子の、あどけない顔もあった。乳呑児も死んでいた。この一人々々に銃口を向けて、一人また一人と射殺し、最後に自分ののどもとを射抜いた男の気持はどんなであつたろうと、竜太は思いやつた。誰の胸も大きく血が滲<sup>にじ</sup>んでいた。自決は昨日、陽が沈んでからのことであつたろうか。女兒の傍らにオカッパ頭の日本人形がころがつているのを見た時、竜太は堪えられなくなつて、声をしのばせて泣いた。

〔銃口〕下「逃避行」一二三—一二四頁

一カ所目、二カ所目の場合と同様に、ここでも「銃口」は日本人から日本人に向けられる。しかも、一家の長が自身の家族に向けるものとして描かれ、最後には自身にも向ける。綾子は「あとがき」の中で、「合田一道氏による『満州国開拓団27万人の逃避行』なる一文を見出し、作中に集団自決の一場面を挿入することができた」と典拠と共に言及している。綾子はこの集団自決の場面を描くに際し、誰が誰に「銃口」を向けたかを描くことで、この史実を印象付けようとしているように思われる。また、「逃避行」なる章題は、歴史の闇に埋もれた、兵士ではない一般民衆の凄惨な最期を想起させる役割も担っていると言える。

五カ所目に「銃口」が描かれるのは、八月一五日の朝の場面である。この時点で、竜太と山田は、共に敗走していた他の三人と袂を分かつていた。それは、食糧も水も尽き、鮮満国境に近付けない状況下

で、銃を捨て丸腰になることで敵から狙われることを避けようと提案した山田の言葉に耳を傾けたのが、竜太だけだったからである。

⑤「なあ、北森。おれはたった今夢を見た。正夢か逆夢か知らないが、軍服姿のおれが、銃を持って、もう一人のおれに銃を向けた。銃口がおれのすぐ目の前にあった。あ、殺られる！　と思ったとき、その銃は小さな骨箱になった。謎めいた夢だと思わないか」  
（『銃口』下「逃避行」二二七頁）

「軍服姿のおれ」は、銃を向ける日本兵山田であり、「もう一人のおれ」は、軍服も銃もまとわぬ丸腰の人間山田であろう。日本人が日本人に銃口を向けるこれまでの「銃口」描写の行きつく先として、銃を持つ者は、やがてはその銃口を向けられる側になること、そして、銃を持つ者はいずれは、気付かぬうちに「死」に辿り着く結末である、という綾子の想いを暗示するような場面である。六カ所目に「銃口」が描かれるのは、朝鮮人抗日分子の目を掻い潜りながら朝鮮を目指し逃避行していた山田と竜太がついに取り囲まれる、「逃避行」の章の最終場面である。

⑥「しまった！　感づかれたかな」

一隊がばらばらと、土塀の裏口から、竜太たちのいる斜面へと駆け上がった。驚くべき速さだった。思わず立ち上がった竜太と山田曹長に、ぴたりと銃口が向けられた。

（『銃口』下「逃避行」二二九頁）

ここで初めて、竜太自身が実在の銃口を向けられる。朝鮮人の抗日義勇軍が、日本兵に銃口を向けるという構図で、綾子は「銃口」を用いている。と同時に、竜太たちが日本兵だというだけで銃口を向けられる事実を読者に印象づける。ここまでの計六カ所の「銃口」描写をもって、「逃避行」の章が終わる。そのいずれの場面においても、向ける・向けられる「銃」そのものとして描かれていることが、特徴と言えよう。

七カ所目の「銃口」描写は、かつて日本で竜太の父に命を助けられた抗日義勇軍隊長の金俊明が、ソ連軍の本部に行き、竜太と山田を朝鮮から無事出航させるために、特別旅行許可証を発行してもらう交渉に命を懸けて出かけた際、それを心配しながら待つ、俊明の叔父金秋日の次のセリフに見られる。

⑦「機雷は、われわれ焼玉エンジンで走る者たちには、恐ろしくも何ともないが、ソ連軍に脱出が見つかると、これは大変だ。いきなりばくられる場合はいい。すぐさま銃口から火が噴くこともあるでしょう。そんな話をこのところ何度か聞いていますよ。それもこれも承知の上で、俊明は動いているんですが……」

〔銃口〕下「羅津まで」二二六二頁

この場面で初めて「銃口」は、「敵（ソ連軍）」から向けられる物として描かれている。しかも、銃口が「敵」から向けられる物として描かれる唯一の場面であることに加え、これは金秋日の想像上の場面ゆえに、銃口から火は噴かれていない。

八カ所目の「銃口」描写は、『銃口』のほぼ最終場面である。ついに旭川に帰還した竜太が、出迎えた芳子と家路につく。巡査に呼び止められ、竜太が交番の中で荷物まで調べられた時、芳子が告げる。

⑧「お巡りさん、北森質店をご存じでしょう。時々何かと交番には協力しているあの質屋さんよ。この人はその息子さんよ」

途端に巡査の態度が変わった。何かを思い出すような感じで竜太の顔を窺い、それから顎で行くように示した。

外に出た竜太は、まだ自分の背後に銃口が向けられているような、いやな気持ちだった。

（『銃口』下「祖国の土（二）」二八〇頁）

この一文で「祖国の土（二）」の章が結ばれている。瀕死の思いで辿り着いた祖国で竜太を待ち受けていたものは、「銃口を向けられているような、いやな気持ち」だった。戦争が終わってもなお、竜太は綴方教育連盟事件の被疑者として扱われ、忌まわしい記憶が晴れない。この描写は、『銃口』の最終場面と繋がるものであり、戦後と、更には昭和と地続きの現在を読者に印象付けようとする綾子の意図が表れていると言えよう。

以上、『銃口』における「銃口」描写を挙げ、その特徴を確認した。全八カ所中、実に四カ所ものの場面で、日本人が日本人（味方）に、さらには自身の家族にまで向けた「銃口」が描かれていた。逆に、敵（ソ連軍）から「銃口」を向けられる場面は一カ所のみであり、しかも実景としては描かれず、あくまでも想像上

での描写にとどめられている。小田島本有<sup>(60)</sup>も『銃口』で描かれた「銃口」に着目し論をまとめているが、「銃口は実際のもの」であるとともに「比喩的な意味合いを帯びてくる」ものとして捉えている。

綾子が黒古との対談で、「銃口がいろんなところから向けられているんですよ」に続けて語った、「敵も味方もわからない、気味の悪さ」こそ、綾子が伝えようとした昭和の戦争の実相であろう。そしてそれを伝えるために、「銃口」を使い分けながら効果的に描写していったと思われる。

## 結

本研究は、宮本百合子と三浦綾子の接点を論証した、初の試みである。

まず、三浦綾子最後の長編小説『銃口』のタイトルが、宮本百合子最後の長編小説『道標』に描かれた「銃口」に由来していることを確認した。

そこで、綾子が百合子を知るいきさつを調査した。綾子は療養中に『道標』を読むために掲載誌「展望」を人から借りて読んでいた。だが、百合子の人間性と作品をより深く知っていくきっかけは、前川正から贈られた宮本顕治・百合子の書簡集『十二年の手紙』であった。その前年には、前川から『きけわだつみのこえ』も授けられていた。ついで、綾子の作品から「宮本百合子」「きけわだつみのこえ」「銃口」の記載を掘り起こした。すると、綾子は作家デビュー後から晩年までの約三〇年に渡り、これらを

自身の作品で繰り返し取り上げ続けていたことが明らかになった。百合子及び『きけわだつみのこえ』が、綾子の作品と生き方に大きな影響を与えていたのである。

次に、タイトル「銃口」に戻り、それが『道標』と『銃口』においてどのように描写されているかを分析した。その結果、百合子は「銃口」を、第一次世界大戦で生き埋めにされた兵士が持つていた「銃」の「(生を訴える) 口」としてメタフォリカルに捉え、視覚的、触覚的、聴覚的に計四カ所で描写していた。一方綾子は「銃口」をあくまでも「銃」そのものとして捉えつつも、実際にその銃口から火が噴く場面は、銃口描写計八カ所中一カ所、第二次世界大戦終結直後の満州における日本人の集団自決の場面のみであり、いずれもその銃口が誰から誰に向けられているのかを使い分けながら描写していた。

従って、両者の「銃口」描写には、差異を確認することができた。しかし、百合子も綾子も『きけわだつみのこえ』を重要視し<sup>(61)</sup>、民衆の叫び声を聴こうとする意志を持ち、共に、国境を越えた視野を得ていたという共通点が浮かび上がった。

なお、日本文学研究者のフィリップ・ガブリエルが、二〇一三年出版の論文集<sup>(62)</sup>の中で、「タイトル『銃口 (muzzle)』は『銃 (rifle)』と『口 (mouth)』という二つの漢字から成る」とした上で、「声を抑圧する銃」に対し、『口』は「抑圧への抵抗から起こる人間の声」の象徴」と述べた。これは、綾子が『銃口』で描写した「銃口を向けるもの」と、百合子が『道標』で用いた「銃口」の描写法とが融合した捉え方と言えよう。ついで、「個人の声」を「抑圧する声」のあつた時代を語る綾子自身の「声」を聴くことができる『銃口』は、内容と文体の一致が効果的な「声の文学」である、と論じた。本研究の結果は、この「声の文学」と繋がり得るものであろうか。その検証を、今後の課題としたい。

凡例

- ・底本として、『三浦綾子全集』（全二十巻、主婦の友社、一九九一年七月―一九九三年二月）を使用した。ただし、同全集に収められていない作品からの引用は、註に記す通りである。
- ・宮本百合子『道標』第三部の引用は、『宮本百合子全集 第八巻』（新日本出版社、二〇〇二年五月）に拠った。
- ・三浦綾子『銃口』上下巻の引用は、小学館（一九九四年三月）に拠った。また、『銃口』の引用のみ章タイトルも明記した。
- ・各作品引用の際、改行箇所には／を付し、適宜傍線を施した。
- ・作品名を作品として記載する際は、雑誌掲載作品であっても『』の表記に統一した。
- ・初出の副題等で現物を確認できなかったものは、監修黒古一夫 著 岡野裕行『三浦綾子書誌』（勉誠出版、二〇〇三年四月）に拠った。
- ・文芸評論家等の敬称は略した。

〔註〕

- (1) 三浦光世「十五『銃口』——綾子最後の小説」(『三浦綾子創作秘話』小学館文庫、二〇〇六年七月、二二一頁。)
- (2) 赤木国香「『銃口』 韓国公演と光世さん」(監修 上出恵子 編集 小泉雅代、梶浦浩子、山田美穂『三浦綾子生誕一〇〇年+α 記念文学アルバム増補版』三浦綾子記念文学館、二〇一三年二月、八八頁。)
- (3) 註(1)に同じ、二二五頁。
- (4) 『銃口』下「あとがき」三二四頁。この一文は、小学館「本の窓」編集長眞杉章からの三浦綾子宛書簡(一九八八月九月一二日発信、三浦綾子記念文学館所蔵)に由来するものであり、その書簡は二〇二〇年度同館企画展「連載開始『銃口』三〇年／『青い棘』四〇年を記念した「アノ日、空ノ下デ君ハ何ヲ想フ」で展示されていた。同書簡には、「氷点」にはじまる先生の「神」と「人間」という基本的なモチーフを軸として、混沌の二十世紀が、二十一世紀へ贈るメッセージとしていただきたいということです。／舞台背景は、激動と混沌の「昭和」という時代です。過去の何世紀分にも相当するこの昭和も、やがて暮れなずもうとしているいま、ここには二十世紀の文化と文明が、科学技術の進展と共にめまぐるしくせめぎあいつつ、人類を先の見えない袋小路へと追い込みつつあります。／この、先の見えない世紀末の先に、どんな人類の未来があるのか。私たち二十世紀を生きた人間は、二十一世紀を生きるいまはまだ若い次の世代に何を残し、何を手渡すことができるのか。／科学技術文明の行きつくところに、何があるのか。不条理な人間はそこに何を得、何を喪ってきたか。その時、「神」は何であるのか。／本当の『人間のドラマ』をお願いします。トルストイやドストエフスキーを超える、二十世紀末の、人間の金字塔を!!」／一年間、熟成してください。連載開始は来年秋。」と記されている。なお、タイトルは当初「黒い河の流れ」と構想されていたことが、三浦綾子「この病をも賜ものとして生かされてある日々2」(日本基督教団出版局、一九九四年、二九頁)に記されている。
- (5) 黒古一夫との対談が、眞杉章の司会により一九九三年七月五日、旭川市の三浦綾子宅にて行われた。対談 黒古一夫・三浦綾子、司会 眞杉章「特別連載小説『銃口』を完結して」(『本の窓』九・一〇月合併号、小学館、一九九三年一〇月一日、七五頁。) 本稿では単行本『希望、明日へ三浦綾子対談集』北海道新聞社、一九九五年二月所収を使用、二二一―二四一頁。この段落の引用はすべて上記からのものである。

(6) 確田のぼるとの対談が、一九九四年四月二八日、旭川市の三浦綾子宅にて行われた。「私と生徒たちとの個人的な出会い 三浦綾子さん、『銃口』を語る」(「エデュカス」第五号、大月書店、一九九四年七月、八一―一二頁)。本稿では『希望、明日へ 三浦綾子対談集』(北海道新聞社、一九九五年二月、一五三―一八三頁。)を使用し、この段落の引用はすべて上記からのものである。なお、本対談は『三浦綾子対話集 人と自然』(旬報社、一九九九年二月、一九〇―一九一頁)にも再録されている。

(7) 初出、「私の出会った本」十二年の手紙 宮本顕治、宮本百合子往復書簡「主婦の友」一一月号、主婦の友社、一九八一年十一月一日。本稿では、三浦綾子「わが青春に出会った本」(『三浦綾子全集 第十八巻』註(15) 同書を使用、九七―九九頁。三浦綾子「書簡集」十二年の手紙) 〓宮本顕治・百合子「わが青春に出会った本」新潮文庫、一九九〇年七月、二三九頁)にも再録されている。

(8) 佐藤将寛『三浦綾子最後の小説「銃口」を読む―綴方事件とそのモデルたち―』柏艚舎、二〇〇六年八月、一二四―一二九頁。

(9) 上出恵子「三浦文学のゆくえ―三浦綾子『銃口』再考―」(森下辰衛、遠藤優子、日吉成人編『三浦綾子読書会紀要 綾果』三号、三浦綾子読書会、二〇二四年二月、五四頁。)なお、本稿では『三浦綾子研究』の著者名「上出恵子」を用いる。

(10) 三浦綾子『宮本百合子選集』に想う『道標』十二年の手紙のことなど「読書の友」日本共産党中央委員会、一九六九年四月七日)に、「私が宮本百合子のことを知ったのは、女学校の頃、中条百合子の『貧しき人々の群』によってであった。しかしそれは、ただ天才少女の文壇へのデビューというエピソードに心を奪われただけで、本当に宮本百合子を読む気になったのは、昭和二十五年十月、リーベから『十二年の手紙』をもらった時以来である。」と記されていることに拠る。

(11) 三浦綾子年譜 三浦綾子記念文学館編『生きること ゆるすこと 三浦綾子 新文学アルバム』北海道新聞社、二〇〇七年六月、一一七頁―一二五頁。

(12) 自作年譜 監修 上出恵子 編集 三浦綾子記念文化財団『三浦綾子生誕一〇〇年記念文学アルバム』三浦綾子記念文学館、二〇二三年一〇月、一一〇―一二二頁。本稿では、監修 上出恵子 編集 小泉雅代、梶浦浩子、山田美穂『三

浦綾子生誕一〇〇年＋α記念文学アルバム増補版『三浦綾子記念文学館、二〇一三年二月所収を使用、一一〇—一二一頁。

(13) 三浦綾子『道ありき』(『三浦綾子全集 第三巻』)

(14) 三浦綾子『生命に刻まれし愛のかたみ』新潮文庫、一九八〇年八月。

(15) 三浦綾子『わが青春に出会った本』(『三浦綾子全集 第十八巻』)

(16) 註(15) 同書の一八二—一八三頁には、前川が扉に書いた次の全文と、その後には、当時の前川の心境を想う綾子の言葉も記されている。「これは全く私たちと同じ世代の友だちの声、しかも彼らは死に、私たちは生きた、私たちの生は、彼らに負っている。／さあ、更<sup>あたら</sup>めて、／かつての自分たちの声を聞こう。／一九四九年十月二十六日」／彼は結核患者の故に、戦争に赴かなかった一人であった。恐らく彼は私以上に、自分の生を彼らに負っていると思っただけではないか。」

(17) 註(14) 同書、一九八頁。

(18) A説は、「一九五〇(昭和二五)年一〇月」に贈った、とする説。これは註(10) 同紙の、「昭和二十五年十月、リベから『十二年の手紙』をもらった」に拠る。また、註(13) 同書の、一九五〇(昭和二五)年の内容と思しき五八頁にも、「彼は(略)宮本百合子・顕治の『十二年の手紙』など、次々に買ってきては、わたしに感想文を書かせるのだった」という記載が確認できる。一方、B説は、「一九五一(昭和二六)年二月二七日」に『十二年の手紙その一』を、「同年 四月三十日」に『その二』を、「一九五三(昭和二八)年」クリスマスに『その三』を贈った、とする説。これは註(37)に拠る。本稿では、A、B両説に基づき記載した。

(19) 註(10) 同紙。以下引用する。——そして私は、生れて初めて作家に対して手紙を書いた。といっても、甚だ簡単な手紙だった。「深い感動を持って、『道標』を読み終わりました。どうか、くれぐれもお体を大切になさってください。次回の作品に期待しております。」(ただし、「作家に手紙を出すというのは何か気恥ずかしく、私はためらいを感じて、その手紙を机の引出にしまったままにしてあった」とある。)

(20) 註(13) 同書、六三頁。

(21) 註(10) の出典に同じ。「二十六年一月宮本百合子の死をラジオで聞いた時、私は思わず泣いた」、「今に至るまで、

有名人の死を聞いて泣いたのは、ガンジーの時と、宮本百合子の時だけである」に拠る。

(22) 註(18)、B説に同じ。

(23) 註(18)、B説に同じ。

(24) ここでは、朝日新聞朝刊に連載が開始された一九六四年二月九日を「デビュー」としている。

(25) 初出、「主婦の友」一九六五年八月号—一九六六年二月号、主婦の友社。本稿では『三浦綾子全集 第一巻』所収の「ひつじが丘」を使用、三六八頁。

(26) 初出、「週刊女性自身」光文社、一九六六年五月二三日。本稿では『三浦綾子全集 第十五巻』所収の「愛すること信ずること」を使用、五八—五九頁。

(27) 初出、「主婦の友」一九六七年一月号—一九六八年二月号、主婦の友社。本稿では『三浦綾子全集 第三巻』所収の「道ありき」を使用、五八頁。

(28) 初出、註(27)の初出に同じ。本稿では『三浦綾子全集 第三巻』所収の「道ありき」を使用、六四—六六頁。

(29) 初出、「朝日新聞夕刊」朝日新聞社、一九六七年四月二四日—一九六八年五月一八日。本稿では『三浦綾子全集 第二巻』所収の「積木の箱」を使用、五一—四頁。

(30) 初出、「婦人手帖」十一月号、七一号、札幌婦人会館、一九六八年一月。本稿では『一日の苦勞は、その日だけで十分です』(小学館、二〇一八年四月)を使用、九九—一〇一頁。

(31) 初出、「北海道新聞夕刊」北海道新聞社、一九六九年三月一四日。本稿では『ひかりと愛といのち』(岩波書店、一九九八年二月)を使用、九〇—九三頁。

(32) 初出、註(10) 同紙。

(33) 初出、「朝日新聞朝刊」朝日新聞社、一九七〇年五月二日—一九七一年五月一〇日。本稿では『三浦綾子全集 第四巻』所収の「続氷点」を使用、一八六頁。

(34) 初出、「短歌」角川書店、一九七二年四月—一九七三年八月。本稿では『三浦綾子全集 第五巻』所収の「石ころのうた」を使用、四〇—五頁。

(35) 初出、「小説宝石」光文社、一九七三年五月、五月号。本稿では『三浦綾子全集 第六巻』所収の「足跡の消えた

女」を使用、五二〇頁。

(36) 初出、「ベルママン」 学習研究社、一九八〇年一月—一九八二年二月。本稿では『三浦綾子全集 第十一巻』所収の「青い棘」を使用、八七頁。

(37) 初出、「月報」三二「十二年の手紙」と私(『宮本百合子全集第二十一巻』新日本出版社、一九八〇年三月、一一三頁。)

(38) 初出、「私の出会った本」『眠られぬ夜のために』ヒルティ「主婦の友」一一月号、主婦の友社、一九八〇年一月一日。本稿では註(15) 同書を使用、三〇頁。

(39) 初出、「私の出会った本」『枕草子』清少納言「主婦の友」二月号、主婦の友社、一九八一年二月一日。本稿では註(15) 同書を使用、四七頁。

(40) 初出、「私の出会った本」『きけわだつみのこえ』「主婦の友」七月号、主婦の友社、一九八一年七月一日。本稿では註(15) 同書を使用、七四—七九頁。

(41) 初出、「私の出会った本」『十二年の手紙』宮本顕治、宮本百合子往復書簡「主婦の友」一一月号、主婦の友社、一九八一年一月一日。本稿では註(15) 同書を使用、九七—九九頁。

(42) 初出、「泉への招待」あやまちをゆるすのは人の誉である「淡交」九月号、淡交社、一九八二年九月一日。本稿では『三浦綾子全集 第十八巻』所収の「泉への招待」を使用、二六—二六二頁。

(43) 註(34) 同書。本稿では『三浦綾子全集 第五巻』所収の「石ころのうた」を使用、四〇五頁。

(44) 初出、「マミイ」付録冊子「MAMMY」小学館、一九八六年五月一日、四六—四七頁。本稿では『三浦綾子全集 第十九巻』所収の「私の赤い手帖から」を使用、三〇九頁。

(45) 初出、「北海道新聞日曜版」北海道新聞社、一九八六年五月四日。本稿では『国を愛する心』(小学館新書、二〇一六年四月)を使用、五四頁。新書収録にあたりタイトル変更あり。

(46) 初出、「私の中の丸善」『学燈』一〇月五日号、丸善、一九八九年一〇月五日。本稿では『三浦綾子全集 第二十巻』所収の「心のある家」を使用、三六二頁。

(47) 初出、「生かされてある日々」『信徒の友』一月号、日本基督教団出版局、一九八九年一月一日。本稿では『この病をも賜ものとして生かされてある日々2』(日本基督教壇出版局、一九九四年一〇月)を使用、三〇頁。

(48) 初出、「リレーエッセイ」森繁久彌夫人を思う」(「北海道新聞日曜版」北海道新聞社、一九九一年二月八日)。  
本稿では『小さな一歩から』(講談社文庫、一九九七年一月)を使用、一七頁。

(49) 初出、「私の中の歴史 生と死をみつめて」肺結核で十三年間の闘病生活に」(「北海道新聞夕刊」北海道新聞社、一九九三年一月一日)。  
本稿では、道新旭川政経文化懇話会編『綾子・大雪に抱かれて―三浦文学案内』(北海道新聞社、一九九八年六月)を使用、六六頁。

(50) 初出、『三浦綾子VS・ひろさちや対談集 生命との対話 キリスト教・祈りのかたち』主婦の友社、一九九四年二月、一五一―一五二頁。  
なお、本対談は『三浦綾子対話集2 愛と祈り』(旬報社、一九九九年一月)一八一―一八二頁にも収録されている。

(51) 初出、「書想インタビュー」戦場の恐怖よりも、見えない銃口」の恐怖を伝えたい」(「SAPIO」小学館、一九九四年六月三日、六二頁)。

(52) 初出、「対談 三浦綾子 山田洋次 希望 明日へ2」銃口―国民狙う時代の狂気」(「北海道新聞朝刊」北海道新聞社、一九九四年八月八日)。  
本稿では註(5) 同書を使用、一九一―一九二頁。

(53) 初出、「対談・結婚して三十六年 いま思うこと」(「新しき鍵―私の幸福論」光文社、一九九五年五月三〇日)。  
本稿では『新しき鍵 結婚について考える』(光文社文庫、一九九六年一〇月)所収の同対談を使用、二〇九頁。  
なお、本対談は『三浦綾子対話集4 共に歩む』(旬報社、一九九九年四月)九九頁にも収録されている。

(54) 初出、「命ある限り」紫斑病の心配」(「野性時代」六月号、角川書店、一九九五年六月一日)。  
本稿では『命ある限り』(角川文庫、一九九九年六月)を使用、一一一―一一四、一二五、一二八頁。

(55) 初出、「きけわだつみの声」――戦争と平和」(『さまざまな愛のかたち』ほるぷ出版、一九九七年一月)六九―七三頁。  
なお、『信仰エッセイ選 平凡な日常を切り捨てずに深く大切に生きること』(いのちのことは社「フオレストブックス」、二〇二二年一月)一五五、一五七頁にも再録。

(56) 初出、「永遠の平和を求めて―小説『銃口』の背景」註(55)の初出に同じ、一三三頁。

(57) 竹林一志「三浦綾子文学と戦争―戦争の描かれ方の変遷を中心として」(「キリスト教文学研究」第四十一号、日本キリスト教文学会、二〇二四年五月一日)九八一―一三三頁参照。

(58) 註(10) 同紙。

(59) 宮本百合子『金色の口』(随想)の「生きながらの姿で埋められた一人の兵卒の銃口が叢が茂った幾星霜の今日もなお現れていて、それを眺めた人々は思わずも惻隱の情をうごかされ、恐らくはそこに膝をついて、その銃口を撫でてやるのであろう。」に拠る。初出、「文壇曲射砲」読売新聞 一九三七年九月二三日。本稿では『宮本百合子全集 第十七卷』新日本出版社、一九八一年を使用、四八七頁。

(60) 小田島本有『三浦綾子論——その現代的意義——』柏艸舎、二〇二二年四月、二七二—二七三頁。

(61) 宮本百合子の『きけわだつみのこえ』についての言及は、例えば次の記録で確認できる。

①「小さい婦人たちの発言について——『わたしちも歌える』まえがき——」(一九四九)の中の、「わたしちがききよう青年の記録として、『きけわだつみのこえ』と『生き残った青年達の記録』をもち、更にこういう『わたしちも歌える』をもつことのうちに、胸のひきしめられるものがある。」(『宮本百合子全集 第十七卷』新日本出版社、一九八一年三月、七七八頁。)

②『「未亡人の手記」選後評(一九五〇)』の中の、『きけわだつみのこえ』に『読みとりかた』がつけられていて、はじめて現代生活の意味がいきいているということは、この文集とも無関係ではないと思います。」「『宮本百合子全集 第十七卷』新日本出版社、一九八一年三月、七九一頁。)

③「東大での話の原稿」(一九五〇年二月八日、東京大学の戦没学生記念集会での講演メモ)の中の、「獅子文六の『きけわだつみのこえ』が喜劇的になって来る、という言に對し、わたしには どうして きけわだつみが喜劇になるのかわからない。それは獅子文六という方は喜劇を経験したでしょう」(『宮本百合子全集 第二十卷』新日本出版社、二〇〇二年七月、七四〇頁。)

④「ことの真実」(一九五二)の中の、「東大協同組合出版部から、『きけわだつみのこえ』という戦没学生の手記を集めた本が発行された。戦没した学生たちは、帝国主義の侵略戦争がどんなに人類的な犯罪であるかということ、死の訴えとしてのこした。やがて屍となる自分の靴の底へかくした紙きれの文字によって。ポケットの手帖にかかれた瀕死の自画像によって。」(『宮本百合子全集 第十三卷』新日本出版社、一九七九年一月、五三六頁。)

また、東京大学での百合子最後の講演（一九五〇年二月八日）については、次の記載がある。

⑤ 生方たつる「弾圧の中で昇華した抵抗文学 宮本百合子」の中の、「折しも東京大学で『わたつみ像』建立拒否抗議集会の戦没学生慰霊祭に病をおして出席して講演を行った」解説 木下和夫『十二支別・易学解説 女性芸術家の人生12「亥年編」』集英社、一九八〇年六月、七五頁。）

⑥ 辻井喬「戦後の百合子―回想をまじえて」の中の、「『きけわたつみの会』、現在の共産党学生支部、反戦学生同盟などいくつかの団体が集まり、集会の準備をしました。（中略）宮本先生は『少し前から風邪をひいてなかなか抜けなくて調子がよくないが、学生さんが頑張っているのなら行かなければならないわね』と言ってくださり、引き受けてくださいました。」「百合子さんが学生の集会なのにメモまで作って話の準備をしてくれたことを改めて認識しました。風邪で具合が悪かったのにすまなかったなあという思いもしています。」「伊豆利彦「ほか」著、多喜二・百合子研究会編『いまに生きる宮本百合子』新日本出版社、二〇〇四年九月、一五七―一五八頁。）

(62) Philip, Gabriel. *Mura Ayako and the Human Face of Faith : Handbook of Japanese Christian Writers*. Edited by Mark Williams, Van C. Gessel and Yamane Michihiro. Japan Documents, 2022.p207-231.

『銃口』に関する記述『Muzzle (Juko) :The Final Novel』は、二二四―二二九頁等にある。また、本稿での引用は、次の箇所（二二七頁）に拠る。― the Japanese title, Juko, comprises two Chinese characters, meaning “rifle” and “mouth” respectively, thereby representing an opposed pair, with the rifle seen as suppressing voice, the human voice rising in opposition to this suppression.



# ブッカー・T・ワシントンとは何者か？

—アメリカ黒人「保守」思想の「源流」をめぐる議論の再整理—

大森 一輝

はじめに——なぜ黒人「保守派」を取り上げるのか？

アメリカ合衆国で、黒人はいかにして「保守的」になるのだろうか？ かつては奴隷として人間扱いされず、解放後も過酷な差別に晒され、今でも偏見を向けられる彼ら彼女らが、社会の変革ではなく「保守」、現状維持を願うとは、いったいどういうことなのか。

本稿は、ドナルド・トランプの支持者などに典型的に見られる（無自覚の）白人優越主義に対抗するために、黒人「保守主義」に関する歴史的把握の歪みを正そうとする試論である。

トランプ主義者は、自分たちは白人（そして男性）であるというだけで「ガラスの高下駄」を履かせてもらっているにもかかわらず、もはや差別などないのだから優遇政策に甘えるべきではないとマイノ

リテイには徹底して「自助」を求め、それこそがアメリカの伝統だと言い募る（優遇されているのは自分たちなの）。そうした発想を（奇妙なことに）共有する現代の黒人「保守派」が自分たちの「源流」と位置付けるのが、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、南部の黒人に対する職業訓練教育を推進したブッカー・T・ワシントンなのである。

以下では、ワシントンの人生を概観したうえで、同時代の批評／後世の歴史家による評価をふまえて、彼がアメリカ社会をどのように見て何を「守ろう」としたのかを彼の言動から読み解き、現在も政治的磁場の中での毀誉褒貶によって覆い隠されている彼の思想の核心を捉え黒人解放思想史の中に位置付け直すことで、冷酷な自己責任論とは異なる彼の「保守主義」の可能性を再考する。

### 一 ブッカー・T・ワシントンの生涯と思想——彼はどのような時代を生きたのか？

ブッカー・トリヴァ・ワシントンは、ヴァージニアのさほど大きくない農場で、奴隷主家族の料理人だった黒人の母と白人の父親（詳細は不詳）との間に、一八五六年の春に奴隷として生まれた。南北戦争後は家族でウェスト・ヴァージニアに移り、仕事をしながら学校に通う。一六歳になると、黒人用の上級学校があるとの噂を聞きつけ、母親に背中を押され、ヴァージニア州ハンプトンに向かった。八〇〇キロの旅の途中で汽車賃は底をつき、残りは徒歩で（たまに通りすがりの馬車に乗せてもらい）、野宿を

しながら、創設四年目のハンプトン師範・農業学院に辿り着き、何とか入学を許可される。

ハンプトンでは、人格陶冶と規律訓練および実用教育の重要性を身をもって感じ、刻苦勉勵の末一八七五年に卒業して、故郷で黒人学校の教師になる。しかし、数年後には母校から声がかかり、夜間学校の運営や新しく受け入れるようになった先住民用の寮監を任される。さらなる転機は一八八一年に訪れた。ハンプトンの学院長の紹介で、アラバマ州タスキーギに新設される黒人用師範学校に校長として赴任することになったのである。ところが、勇んで行った先には何もなく、文字通りゼロから学校を「作り上げて」いかなければならなかった。

ワシントンの努力で、タスキーギ師範・産業学院は順調に発展した（一九一五年に彼が亡くなる時には、二〇〇〇エーカーという広大な敷地に一〇〇の建物、二〇〇人近くの専任教員と一五〇〇〇人以上の学生を抱えるようになる）。それと歩調を合わせるかのように、ワシントン個人も穩健な黒人教育者としての名声を高めていく。

一八九五年九月にジョージア州アトランタで開催された綿花生産州国際博覧会の開会式に招かれ演説をしたワシントンは、人種混淆への怖れを牽制しながら、両人種の融和・協力を（白人と黒人は、社交的な場面では指のように離れているが、社会発展のためには手のように一つになれる、と）説いた。奴隸制がなくなったからこそ、あらためて過酷な人種による差別が横行するようになった当時の南部において、そうであっても（あるいは、そうであるからこそ）、拳を振り上げて政治的・社会的平等を求めたのではなく、骨身を惜しまず学び働くことで隣人の信頼を勝ち得ていくべきだ、権利はその後についてくる、という主張を黒人であるワシントンが打ち出したことは、穩やかな変化という名の現状維持を

求める白人有力者から熱烈に支持され、ワシントンこそが模範的な黒人指導者だとみなされるようになる。黒人たちからも文字通り立志伝中の人物として仰ぎ見られ、まさに模範Ⅱロールモデルとされた。そのことは、当時、毎年何百人もの黒人の子どもたちが「ブッカー・T」と名付けられ、多くの黒人家庭に彼の写真が飾られ、彼の名を冠した小中高校が全米各地に作られ存続していることから明らかだろう。彼は、一九世紀末から二〇世紀初頭のアメリカで、いや、おそらく世界中で、もつとも有名な黒人であった（1）。

他方、北部で高等教育を受けた黒人たちは、ワシントンの態度を、節を曲げた妥協であり、当然の権利を自ら放棄する敗北主義だとして反発した。その急先鋒となったのが、ハーヴァード大学で修士号・修士号を取得した二人の黒人、W・E・B・デュボイスとウィリアム・モンロー・トロッターである。ドイツ留学を経て黒人として初めてハーヴァードから博士号を授与されたデュボイスは、一九〇三年に出版した『黒人のたましい』において、一章を「人として、アメリカ市民として、黒人が当然要求すべきことを取り下げさせようとする」ワシントンへの論難に費やし、「南北の融和が、産業における奴隷制（の事実上の復活）や黒人の市民としての存在の全否定のような兆候を示すようになり、……法律によって劣等な立場が固定されてしまうのなら……黒人は、愛国心と忠誠心の限りを尽くして」ワシントンに反対しなければならぬ、なぜなら「子どもたち——黒人であろうが白人であろうが——に不可避的に惨禍をもたらす種が蒔かれるのを見過ぐす」わけにはいかないからだ、と述べた（2）。トロッターに至っては、自分が編集・発行する週刊紙『ガーディアン』で、屈従を説く（と彼には見えた）ワシントンを人種の指導者ならぬ敵として繰り返し嘲り、いかに自分のものとはいえ新聞という公器で、黒人はいく

ら真面目に働いたところで奴隷のままだった、奴隷解放をもたらしたのは白人・黒人の奴隷制廃止論者の言論の力だったのに、そのおかげで自分も自由人になったのに、差別撤廃のための議論を封じ込めようとするとは「愚か者」だ、と罵ったのである<sup>(3)</sup>。

このように知識人からの批判はあったものの、世間的には地位を確固たるものにしたワシントンは、複雑な行動を取るようになる。南部では、金と職を差配することで黒人社会での自分の威信を高めつつ、北部で自分に敵対する地域や組織にはスパイを送り込み、黒人新聞等のメディアも操作して自分の威光と意向を維持しようとしたのだ。その一方で、水面下では、人種差別と闘う人や団体を支援したりもしていたものの、そのことは決して公にはしなかった。

その間に、アメリカは、人種によって絶望的に深く切り分けられようとしていた。黒人の進歩と「自由の国」の良心に期待するだけでは、いつまで経っても身の安全を確保することすらできないほどに（ワシントン自身も、一九一一年にニューヨークで不審者として白人男性に殴打され、被害者でありながら警察に連行される）。どれだけ訴えれば、いつまで待てば、自分たちは「アメリカ人」になれるのか、その答えを示さない（示せない）まま、次第に反差別の旗幟を鮮明にしつつあったワシントンは、一九一五年一月、ニューヨークで倒れた後、本人の強い希望でタスキギーに搬送され、五九歳で帰らぬ人となった（本稿末に付した略年表を参照）。

## 二 ワシントン評価の変転——現実的な指導者か、人種の裏切り者か？

その死を悼む声が全国から寄せられたのとは対照的に<sup>(4)</sup>、死してなお非難の声は止まなかった。デュボイスは、自身が編集長を務める全国黒人向上協会の機関誌『クライシス』のワシントン逝去直後の号において、「厳しいかもしれないが公正に見れば、この人物にこそ、黒人の選挙権剥奪の完成、黒人用の大学や公立学校の衰退、肌の色によるカースト制度の厳格化、これらがわが国で起こったことの責任があると云わざるを得ない」と、追悼記事であるにもかかわらず、生涯を黒人の実業教育にささげたタスキージ学院長を断罪した<sup>(5)</sup>。人種差別への順応を唱え、手に職をつけ僅かな財産を築くことだけを奨励し、権利の平等を求める闘いを抑えた「保守的」な人物として彼を描くこのような見方は、学問の世界では、時代を経るにつれて、むしろ強くなる。

アメリカ南部史の大家C・ヴァン・ウッドワードも同様の見解を踏襲し、ワシントンを、南部白人のみならず北部資本家の走狗であり、自由市場を信奉し不利な立場にいる黒人に初期条件を補正しないまま古いタイプの技能で競争を強いる（善意だとしても）非現実的な指導者だとみなした<sup>(6)</sup>。一九六〇年代に刊行され九〇年代まで版を重ねた代表的なアメリカ黒人史の概説書の一つは、ワシントンを次のように論評している。「黒人が従属的な位置にいることを（ワシントンが）明らかに黙認していたことは否定できなかった。彼は、白人の観点から物を見ていたのである<sup>(7)</sup>。」黒人思想史研究のパイオニアであるオーガスト・マイヤーや、ワシントンの残した膨大な量の手紙その他の文書の編纂に自ら携わ

り（一四巻本として出版された）それを基に二巻に及ぶ浩瀚な伝記を著したルイス・ハーランのように、民衆に寄り添いつつ可能な範囲で差別と闘う現実主義者としての側面にも目を向ける研究も現れたが<sup>(8)</sup>、結局のところ、白人に取り入って黒人社会を陰で操った権力者であり、効き目の怪しい処方箋を示し（結果的にではあれ）黒人同胞を白人に売り渡した裏切り者、失敗した黒人指導者だったというイメージは（黒人の暮らしが大きく上向くこともなく、日常生活でも屈辱を味わわれ、依然として投票には行けず、リンチと呼ばれる無法で残虐な殺人が横行したこともあって）長く続いた。

その見直しを迫ったのが、二〇〇九年にハーヴァード大学出版局から刊行されたロバート・ノレルの『歴史より身を起こして——ブッカー・T・ワシントンの人生』という評伝である<sup>(9)</sup>。ノレルは、黒人に職業教育を施すことで人種全体を経済的に向上させるという主張は、当時の南部においては極めて斬新であり、危険を伴うものでありながらもうまく攻撃をかわすことで、ワシントンは黒人民衆に（現実の政治経済状況の劇的な改善は無理でも）希望を与えたとする（その点を強調する）解釈を打ち出した。ノレルを引き継ぐような議論も現れている。政治思想（史）を専門とするマイケル・リチャーズは、二〇一九年の論考において、黒人が白人と対等なメンバーとして政治社会に参画するという共和主義的な理想を掲げ、黒人が立派な市民になれるという可能性と実例を示すことで改革を促した思想家としてワシントンを捉え直し、「ラディカル」な活動家とも敵対したのではなく彼なりのやり方で共に（そして、したたかに）闘った実務家として、黒人解放思想史・運動史の中でワシントンを正當に評価することを提唱している<sup>(10)</sup>。

### 三 現代の黒人「保守派」の主張——彼らはワシントンをどのように利用しているのか？

しかし、このようなワシントンの再評価は、容易に予想されるように、黒人「保守派」と呼ばれる人たちに政治利用される。保守系の論壇誌『ナショナル・レビュー』に掲載された書評は、ノレルが描くワシントン像を手放しで称賛し、実際の言動はワシントンそっくりなくせに大きな政府に国民を依存させようとする（と保守派には見える）当時の大統領バラク・オバマを批判しつつ（オバマも、ワシントンと同じように、対立を避け、白人を宥め、黒人の責任と希望を語った、という指摘は興味深いが、ここでは立ち入らない）、個人の自助努力を唱道したワシントンを誰もが見習うべきだと、「保守的」な価値観を彼に投影するのである<sup>〔1〕</sup>。

ワシントンは、本当に、彼を褒めそやす黒人「保守派」と同じような意味で「保守的」だったのだろうか？確かに、現状の（急激な）変革を求めない、という意味では、「保守的」なのだが、現代の「保守派」の特徴は、それ（だけ）ではなく、個人が政府に頼らず自力で成功を収めるべき、裏を返せば、失敗はすべて本人の能力・努力の不足という、冷酷な自己責任論にある。

代表的な黒人「保守派」として、二〇二四年夏現在、共和党所属の唯一の黒人連邦上院議員であるティム・スコット（副大統領候補になる可能性も取り沙汰されていたほどのトランプ支持者）の主張を見てみよう。彼は「アメリカに人種差別（的な出来事）はあるか？」と問いかけ、自らこう答える。「もちろ

んある。だが、この国のシステムは人種差別に染まっているか？ そんなことはない。」「アメリカとその夢は、生きている。素晴らしく、健全なものだ<sup>(12)</sup>。』

その「夢」を叶える方法として彼が強く打ち出しているのが、「学校自由選択」である<sup>(13)</sup>。貧困地区の学校ではなく（私立や宗教系の学校も含め）別の学校を選び、そこに通わせるための費用を公的に補助する制度だが、その効果については教育学の分野でも議論が分かれている<sup>(14)</sup>。ある種の「公助」ではあるが、それを地域の公立学校を改善するために使うのではなく、個々人が地域を見捨て脱出して良い学校に行くために配分するという発想は、教育における市場経済的な自由競争（学校間の競争という意味でも、個人間の競争という意味でも）至上主義であり、さらには、「自分さえよければ地域も同胞もどうなつても構わない」というトランプ主義の真骨頂でもある。

#### 四 ワシントンの「保守」主義——彼は何をどのように「守ろう」としたのか？

このような現代の黒人「保守派」とワシントンには、多くの相違点がある。ワシントンは、自分一人ではうまく学べず職を得られない黒人を見捨てたりしなかった。そもそも、彼ら彼女らを助けるためにタスキーギ学院を作り、それをできるだけ拡大しようとしたのだから。そういう意味では、彼は「自助」を唱えたのではなく、「共助」を呼びかけたと言うべきだろう。また、彼は、政治的な権利の回復を最優

先とはしなかったが、政治力を行使しなかったわけではない。歴代四人の大統領（クリーヴランド、マツキンリー、T・ローズヴェルト、タフト）との個人的なパイプを活用して、（その選択が私情によつて左右されることもあったとはいえ）かなりの数の黒人を政治任用職に就けていたのだから。この意味では、彼は、政府を頼らなかつたのではなく、むしろ非公式に政府の支援を獲得していたのである。

さらに言えば、ワシントンを批判していた黒人知識人も、アメリカ社会の根本的な変革を求めなかつた、という意味では、「保守的」だつたと言える。トロッターなどは、アメリカ的な自由競争を前提に人種という概念の存在しない世界を目指していたし、デュボイスも、パン・アフリカニズムを経て最終的には共產主義者になるが、少なくとも二〇世紀初頭の時点では、「アメリカ人」としての完全な権利とその行使を保障せよと声を大にしていたのだから（もちろん、それは、当然かつ必要なことではあつたのだが）。しかも、個人主義・能力主義という点では、トロッターや（初期）デュボイスのほうが現代の黒人「保守派」に近い<sup>15)</sup>。

確かに、ワシントンも、泣き言を並べずに倦まず弛まず努力せよ、と黒人民衆に対して繰り返し説いた。その努力は必ず報われると確言して。しかし、彼は、それが空約束にならないよう、自らも皆にとつて最善と思われる努力をした。リベラルあるいは「ラディカル」な黒人が、権利を回復した後は自分で実力を示して地位を上昇させるべきだと考え、黒人が団結する「共助」など必要のない、個人の「自助」だけでやっていける世の中にした（その必然的な帰結として、自分が「黒人」と見られること自体を嫌つた）のとは違つて。ましてや、黒人であっても、負け犬は自分を責める外なく、他人を頼るべきではない（とりわけ、被害者の立場に安住して政府による過剰な保護Ⅱ「公助」を求めるべきでは

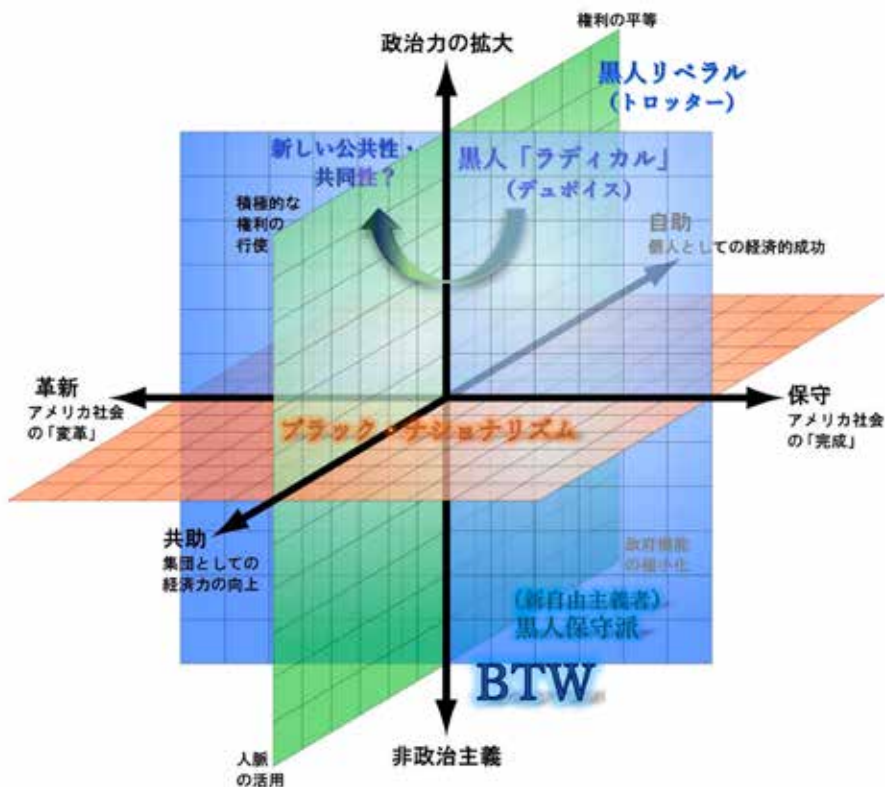
ない」という、現代の黒人「保守派」の信条とも、ワシントンの言動は大きく異なる。

以上のことを図示すると、次頁の図のようになる（筆者作成）。

ただし、これはワシントンが「保守的」ではなかった、ということの意味しない。彼は、黒人だけが不当に権利を制限されていることを誰よりもよく知っていながら、その撤回を政治課題としなかったのだから、十分に「保守的」だった。

表立って体制批判をしなかったワシントンが何としてでも守ろうとしていたのは、集団としての黒人の評判と生活だった。南部は、個々の黒人が、白人と何ら変わりのないアメリカ人として自力で勝ち上がっていくには、あまりに過酷な環境であり、北部での扇動は、彼の愛するタスキーギを、そして南部黒人全体を、危険にさらしかねないものだとしか彼には思えなかったからである。だからこそ、秘密裏に行っていた資金援助も、黒人には納税や読み書き能力を投票の条件としつつ白人には無条件で投票させる「祖父条項」違憲訴訟など、あからさまに人種別の理不尽な扱いに対する闘いを主な対象にした。仮に露見しても、「どの州であろうと、無知で貧しい白人には投票を許し、同じ条件の黒人に投票を許さないような法律を作るべきではない」「どのような資格審査があるにしても、両人種に公平に平等に適用されなければならない」<sup>16</sup> という年来の主張と齟齬をきたさず、むしろ、自分はアメリカの健全性を信じているのだ、と言えるから。

しかし、タスキーギ学院の卒業生のほとんどが堅実な生活をしていたにもかかわらず、それを目の当たりにしても南部白人は「人種秩序」にしがみつき、黒人から奪った権利を返して対等な仲間とみな



そうとしなかった。つまり、ワシントンの保守主義は戦略としても失敗したと言わざるを得ない。付言すれば、この図の右側は、アメリカ民主主義と自由主義経済の正当性を疑わないことが（つまり、必要なのはアメリカの継続あるいは完成であって、変革ではないことが）前提になっている。そういう意味では、こちら側にいる人たちは全員「保守的」である。この弱肉強食の格差社会（とその中の避難所としての黒人コミュニティ）の裏側（図の左側）にある（かもしれない）、

誰もが生活を保障され、違いを認め尊重し合う、なおかつ、デュボイスその他の黒人知識人が惹かれた既存の社会主義・共産主義とも、偏狭なブラック・ナショナリズムとも違う、別の世界の可能性を追求しようとしなかった／できなかったという意味でも<sup>(17)</sup>、ワシントン（思索ではなく行動を旨とする人だったとはいえ）「保守的」だったと言わざるを得ないのである。

それでもそこに、強く「共助」を進めつつ、その立場からアメリカに変革を迫る可能性を読み取るのは牽強付会に過ぎるだろうか。単純な反差別論としての「人種ではなく私個人の能力を見てくれ！」という叫びとは異なる、「私たちの成果を見てくれ」という訴えは、「私たち」の範囲と「成果」を生み出す公的な基盤、その双方の拡張を要求することにつながり得るのだから。

おわりに——多様性を尊重する社会における差別と闘うために

ワシントンは、非の打ちどころのない偉大な指導者だったわけでも、かと言って、権力の亡者として白人至上主義者の手先に墮したダーク・ヒーローだったわけでもなかった。被害者を責めるような態度の黒人「保守派」が、彼を自分たちの思想の先駆者としてヒーローに祭り上げるのは、誤解あるいは意図的な曲解だと言わなければならない。

ワシントンを評価するうえで留意すべきなのは、当時の南部黒人（のほとんどと言っても過言ではな

い)は、ワシントンが常々語っていた(白人との共存への期待はさまざまであつたとしても)自立・自律への望みを共有していた、ということである。彼ら彼女らは、自分の足で立ち、自分で生活を律したいと強く願っていた<sup>(18)</sup>。ワシントンが、どれだけ「民衆と共にあり」、彼らを「指導」できていたのかについては、議論が分かれている<sup>(19)</sup>。彼の処方箋は、当然ではあるが、すべての人を救うことはできなかった。それでも、彼の事業は、実際に多くの黒人(タスキギー学院で学んだ人だけでなく、タスキギーの卒業生に教わった子どもたちと一緒に働いた人々)を救い、彼の人生は、簡単には叶えられなくても、さらに多くの黒人のお手本になつたことは間違いない。

しかしながら、この処方箋は、差別と貧困に囚われ、希望を潰されかかつていた人たちにとつても福音になつたのだろうか? 毎日聖書を読み、それをインスピレーションの源とし、信仰を自分の活動の中で実践しようとしていた(だが特定の教派には属さず独立を貫いた)ワシントンの言葉が、人種主義的な社会を直接的に変える力にはならなかつたとしても、人種主義的な社会を変えたいと思う人々を励ますことはできたのか。この問いに、実証を重んじる歴史学の立場から答えることは困難である。思いを文字に残さなかつた人々については、それを推し量り汲み取ることしかできない。

ワシントンの言動は、虐げられた人々にとつて、希望の光だつたのか、虚しい慰めにすぎなかつたのか。いまだに偏見に塗れた警官にいきなり殺されるかもしれないというリアルな恐怖に晒されている二世紀の黒人たちに、ワシントンの立身出世物語はどのように響くのか。

いや、考えるべきなのは、ワシントンの実践を、どうすれば今の私たちに響くものにできるのか、である。ワシントン以後の百年の試行錯誤の先に何を見るのか、何を構想するのか、が問われているのだ。

そこで鍵になるのは、「私たち」を縛らない（「〇〇人ならこう感じ考えるべきだ」ではなく、被差別体験を含め「〇〇人」としての様々な経験をグループの内外で広く共有し活かす）「新しい共同性」と、公共サービスの提供の責任を官が放棄し民間に押しつけるような、現代日本で上から説かれる「新しい公共」<sup>20</sup>とは質的に異なる、すべての人の生活をしっかりと社会全体で支えるための「新しい公共性」だろう。「助け合い」を本質とするワシントンの「保守主義」を創造的に受け継ぐとは、畢竟、恵まれない人への「公助」を縮小しようとする日米共通の傾向（いや、世界中での「自分（たち）だけファースト」を乗り越えることに外ならないのだから）。

〔付記〕 本稿をまとめるにあたっては、二〇二四年二月六日に都留文科大学で行われた、大学院比較文化専攻主催の講演会での発表と質疑応答から大きな刺激を受けました。鋭い質問や重要な指摘をしてくださった当日の聴衆のみなさんに感謝します。

（おおもりかずてる 北海学園大学人文学部教授）

ブッカー・T・ワシントン略年表（一八五六～一九一五年）

|          |                                                               |
|----------|---------------------------------------------------------------|
| 一八五六年    | ヴァージニア州のフランクリン郡に奴隷として生まれる                                     |
| 一八六一～六五年 | 南北戦争                                                          |
| 一八六五年    | 母、兄、妹と共にウエストヴァージニア州モールデンに移住、製塩所で働く<br>（断続的に学校に通う）             |
| 一八七二～七五年 | ハンプトン師範・農業学院（黒人用の職業訓練学校）に入学し、優等生として卒業                         |
| 一八七五～七七年 | 地元モールデンに戻り黒人学校の教師を務める                                         |
| 一八七八～七九年 | ワシントンDCのウエイランド神学校（バプテスト系）に在籍                                  |
| 一八七九～八一年 | 母校ハンプトン学院で教える                                                 |
| 一八八一年    | アラバマ州タスキーギに創設された黒人用の教育機関であるタスキーギ師範・産業学院の校長となる（二五歳）            |
| 一八八二年    | 資金集めのために初めて北部各地を回る<br>ファニー・ノートン・スミスと結婚                        |
| 一八八三年    | 娘ポーシャ・マーシャル・ワシントンの誕生<br>連邦最高裁、人種差別を禁じた一八七五年の連邦公民権法に対して違憲判決を下す |
| 一八八四年    | 妻ファニーの死<br>ハンプトン学院のアームストロング院長とタスキーギ学院のために北部各州で資金集め<br>キャンペーン  |

|       |                                                                         |
|-------|-------------------------------------------------------------------------|
| 一八八五年 | オリヴィア・A・デイヴィッドソンと結婚                                                     |
| 一八八七年 | 息子ブッカー・トリヴァ・ワシントン・ジュニアの誕生                                               |
| 一八八九年 | 息子アーネスト・デイヴィッドソン・ワシントンの誕生<br>妻オリヴィアの死                                   |
| 一八九〇年 | 南部での黒人からの選挙権剥奪が始まる                                                      |
| 一八九二年 | マーガレット・ジェイムズ・マレイと結婚                                                     |
| 一八九五年 | ジョージア州アトランタで開催された綿生産州国際博覧会の開会式で演説                                       |
| 一八九六年 | ハーヴァード大学で名誉修士号を授与される<br>連邦最高裁、「分離すれど平等」であれば人種隔離は合憲であると判断                |
| 一八九八年 | ウイリアム・マッキンリー大統領がタスキギ学院を訪問                                               |
| 一九〇〇年 | 全国黒人実業連盟を設立<br>アンドルー・カーネギーから二万ドルの寄付（図書館建設用）                             |
| 一九〇一年 | 自伝『奴隷より身を起して』を出版<br>セオドア・ローズヴェルト大統領とホワイト・ハウスで会食<br>ダートマス大学より名誉博士号を授与される |
| 一九〇五年 | ローズヴェルト大統領がタスキギ学院を訪問                                                    |
| 一九〇六年 | カーネギー、タスキギ学院を訪問、追加で六〇万ドルを寄付                                             |
| 一九一五年 | タスキギで死去（五九歳）                                                            |

[註]

- (1) ここまでの軌跡（として本人がゴーストライターに書かせたもの）である「自伝」は、何度も日本語に翻訳されてきたが、昨年、新訳が出た。佐柳文男・佐柳光代訳『奴隷より身を起して——ブッカー・T・ワシントン自伝』（新教出版社、二〇一四年）。本稿は、この新訳に寄稿した「解説」に加筆・修正を施したものである。
- (2) W. E. Burghardt Du Bois, *The Souls of Black Folk*, Second Edition (Chicago: A. C. McClurg & Co., 1903), 50, 55-56. 木島始・鯨島重俊・黄寅秀訳『黒人のたましひ』（岩波文庫、一九九二年）、七四、八〇—八二頁（訳文は変更した）。
- (3) *Guardian*, 9 November 1901, 20 December 1902, 4 April 1903.
- (4) Kenneth M. Hamilton, *Booker T. Washington in American Memory* (Urbana: University of Illinois Press, 2017), Chap. 4.
- (5) “The Late Booker T. Washington,” *Crisis*, Vol. 11, No. 2 (December 1915), 82.
- (6) C. Vann Woodward, *Origins of the New South, 1877-1913* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1971), Chap. XIII.
- (7) Benjamin Quarles, *The Negro in the Making of America*, Second Revised Edition (New York: Collier Books, 1987), 171-172. 明石紀雄・岩本裕子・落合明子訳『アメリカ黒人の歴史』（明石書店、一九九四年）、一一五頁。
- (8) August Meier, “Toward a Reinterpretation of Booker T. Washington,” *Journal of Southern History* 23 (May 1957), 220-227; Louis R. Hartan, *Booker T. Washington: The Making of a Black Leader, 1856-1901* (New York: Oxford University Press, 1972); idem, *Booker T. Washington: The Wizard Of Tuskegee, 1901-1915* (New York: Oxford University Press, 1983).
- (9) Robert J. Norrell, *Up from History: The Life of Booker T. Washington* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2009).
- (10) Michael A. Richards, “Pathos, Poverty, and Politics: Booker T. Washington’s Radically Reimagined American Civilization,” *Polity* 51 (October 2019), 749-779.
- (11) David T. Beito & Jonathan Bean, “A Strong Foundation,” *National Review* (March 23, 2009), 37-40. ドン・ヘンリッス歴史の評価の変転、その詳細については、次のレビュー論文を参照。Joshua Thomas Zeringue, “Booker T. Washington and the Historians: How Changing Views on Race Relations, Economics, and Education Shaped Washington Historiography, 1915-2010,” MA Thesis, Louisiana State University, 2015. [https://repository.lsu.edu/gradschool\\_thesis/](https://repository.lsu.edu/gradschool_thesis/)

- (12) Osita Nwannevu, "Tim Scott's Message Was Fatally Flawed," *New York Times*, 19 November 2023.
- (13) アメリカ連邦上院のスコットの公式サイト (<https://www.scott.senate.gov/>) 46。
- (14) Mark Berends, "The Current Landscape of School Choice in the United States: What We Know, and Don't Know about Vouchers and Charter Schools," *Pui Beta Kappan* 103 (September 2021), 14-19.
- (15) この点（特にトロッターと黒人「保守派」の親和性）については、次のものの第五章・第六章を参照。大森一輝『アフリカ系アメリカ人という困難——奴隷解放後の黒人知識人と「人種」』（彩流社、二〇一四年）。
- (16) 『奴隷より身を起して』、一七七、一七八頁。
- (17) この難問は、公民権運動期にも引き継がれる（そして今を生きる私たちの）課題でもある。マーティン・ルーサー・キング・ジュニアは、ワシントンの方針について、「あまりにも自由のない現状とあまりにも希望のない将来」しか提示できなかった、と言ったが、返す刀で、デューボイスの戦術も「すべての人びと」を視野に入れていたわけではない「貴族的なエリート」のやり方だったと批判した。ただし、キングは、デクスター街バプテスト教会で自分の先任の牧師であったヴァーノン・ジョーンズが、ワシントンに賛同して「共助」（具体的には、農業から販売まで行う協同組合活動）を実践していたことを、好意的に紹介している。さらに、最後の著作では、ワシントンの方法を否定するのではなく、自分はその不十分さを補っているのだとして、次のように説明したのである。「私は、彼（ワシントン）が、平穏を維持しようとして妥協した卑屈な黒人であったという見方を採りません。ワシントンの誤りは、構造的な悪の力の強さを過小に見積もっていた」ことであって、説得と実例だけでは白人を変えることができないのなら、「白人の良心に訴えるときにはいつでも、それと同時に非暴力の圧力を行使しなければならぬのです。」キングも、人種主義が組み込まれてしまった「アメリカ」を、どこに向かって・どのように乗り越えるべきなのかを、差別との長い闘いの歴史をふまえて、模索していたのである。Martin Luther King, Jr., *Why We Can't Wait* (New York: Harper & Row, 1964), 33. 中島和子・古川博巳訳「黒人はなぜ待てないか」『新装版』（みすず書房、二〇〇〇年）、三三頁（訳文は変更した）。King, *Stride Toward Freedom: The Montgomery Story* (New York: Harper & Row, 1958), 38. 雪山慶正訳『自由への大いなる歩み——非暴力で闘った黒人たち』（岩波新書、一九五九年）、三四頁。King, *Where*

*Do We Go from Here: Chaos or Community?* (New York: Harper & Row, 1967), 129. 猿谷要訳『黒人の進む道——世界は一つの屋根のもとに』明石書店、一九九九年、一三八頁（訳文は変更した）。

(18) Steven Hahn, “The Race Man,” *New Republic* (November 4, 2009), 50-55.

(19) Pero Gaglio Dagbovie, “Shadow vs. Substance: Deconstructing Booker T. Washington,” in Dagbovie, *African American History Reconsidered* (Urbana: University of Illinois Press, 2010), Chap. 5.

(20) 『新しい公共』の考え方」内閣府ホームページ (<https://www5.cao.go.jp/mpc/attitude.html>)。

# 翻刻『八雲路日記 三上』(一)

武田 佑希子

『八雲路日記 三上』は、安芸国山県郡本地村（現・広島県山県郡北広島町）の国学者・後藤夷臣が天保四年（一八三三）六月二十三日に安芸国を出発した出雲・因幡方面の紀行文で、出雲のほか、因幡や近江に訪れ、最終的には紀伊国に至る。本稿は、東京大学国文学研究室所蔵（本居文庫）写本『八雲路日記 三上』（以下、本居文庫本）を便宜上分割して翻刻した第一である。

後藤夷臣は、本居宣長の門下であり後に養子となり本居家を継いだ本居大平に学んだ。櫻園を号し、安芸国のみならず出雲・伯耆・石見などを巡り、各地で『古事記』や『古今和歌集』を講じた。

夷臣は、天保四年以前にも出雲を訪れており、天保二年（一八三二）、出雲大社に六月四日より七日間出雲大社に参籠した際には『八雲路日記』を書いている。天保二年の『八雲路日記』は、上下巻に分かれており、上は安芸国出発から出雲に至り帰郷するまでの紀行文、下は出雲大社にて詠んだ百首歌や長歌が納められている。自筆本が本地村近く壬生村の神職であり夷臣の門人の井上頼定の元に渡り、翻

刻資料が『千代田町史』に収録されている。今回翻刻を行った『八雲路日記 三上』の本文中に「天保五夏のころ奇怪のありし事の話は、八雲路日記四の巻にいふへし」とあるが、現在のところ『八雲路日記』と『八雲路日記 三上』以外は未詳である。

『八雲路日記 三上』は、写本二点が確認できる。一点目の本居文庫本は書写者不明である。二点目は『旧島根県史編纂資料 近世筆写編九』所収のもので（以下、旧県史版）、奥書には「天保十二年辛丑七月八日 富永芳久」とあり、その写本を大正九年（一九二〇）十二月二十四日に島根県史編纂掛が謄写したものである。富永芳久は、出雲大社の社家に生まれ、千家俊信や本居内遠の門で学んだ。芳久の名は、『八雲路日記 三上』の本文にも確認できる。夷臣と芳久の出会い、天保二年（一八三一）に夷臣が出雲大社に参籠したことがきっかけである。本居文庫本と旧県史版それぞれ、多少の校異を除き同じ内容であるが、芳久による写しは、夷臣が因幡国に入ったところで書写を終えている。芳久は主に、出雲国に関する部分の書写にとどめているが、『八雲路日記 三上』における夷臣の旅はその後、因幡国から但馬国へと続いていく。終盤では、但馬・美作・紀伊などの埋葬方法や死体にまつわる不思議な出来事に着目している点も含め、夷臣の思想を知る上でも重要な資料といえよう。

さて、芳久と同じように日記中に名前が登場する人物で注目したいのが松江の商人であり国学者の渡部彝である。渡部彝は、出雲の神社三百九十九社を掲載した案内記ともいえる『出雲神社巡拝記』（以下、巡拝記）を夷臣の『八雲路日記 三上』の旅と同年の天保四年の冬に刊行したとされる。夷臣が『巡拝記』の内容をもとに実地で検証を行ったとは考えづらいが、『八雲路日記 三上』内で夷臣が渡部彝の説を引用している文章と『出雲神社巡拝記』の文章に一致する箇所が見られた。『八雲路日記 三上』は、前掲

したように「天保五夏」の出来事に対する記述があることから、本日記が著されたのは天保四年の旅を終えた後、天保五年の夏以降であると推測される。そのため、夷臣が『八雲路日記 三上』の執筆にあたり、渡部彝の『出雲神社巡拝記』を参照した可能性は十分あり得る。

夷臣は、『八雲路日記 三上』の目的について、式内神社の聞見録ほか、「其国々にて怪き奇きと思ふかきりは自ら往見てかくしらせるなり」と記す。その言葉の通り、夷臣は、大平門下として『古事記』や『万葉集』などのテキスト解釈から自らの学問を深めていくだけでなく、出雲の神官や伊勢の国学者たちとも交流を持ち、あるいは遊歴した先々で見聞した葬送儀礼など土着の風習や死者に関する話を収集していった。そうして、夷臣は宣長国学の立場とはまた異なる視点から、神代の跡を各地に探し求めたのである。

(たけだ ゆきこ・文学研究科日本文化専攻修士課程二年)

### 参考文献

- 桐原朋夫「皇学者後藤夷臣(一)」、『飽薇』飽薇同好社、第十卷二号、一九三四年) 一一八頁。  
桐原朋夫「皇学者後藤夷臣(二)」、『飽薇』飽薇同好社、第十卷三号、一九三四年) 五一一三頁。  
小林准士『延喜式』と『出雲神社巡拝記』(島根大学附属図書館『淞雲』第六号、二〇〇六年) 一〇  
— 一一頁。

新見吉治「後藤夷臣」(『尚古』第一年第五号、一九〇七年) 五一一〇頁。

新見吉治「後藤夷臣（承前）」『尚古』第二年第一号、一九〇七年）五—一〇頁。

鈴木理恵『近世近代移行期の地域文化人』（塙書房、二〇一二年）

関和彦「渡部彝の復権と周辺の人間関係」（松江歴史館『松江歴史館研究紀要』第二号、二〇一二年）、  
一—一五頁。

千代田町役場『千代田町史 近世資料編（下）』（一九九〇年）

名田富太郎『山県郡巡り道中記』（広陵社、一九三一年）五—二五頁。

森本国松編『芸備郷土史目録』（第三書房、一九三四年）六七頁。

本文表記については、読解の便宜のため次の方法をとった。

1. 漢字は原則として新字体に統一したが、一部の漢字は原本の用字に従った。
2. 変体仮名は原則として平仮名に改めた。
3. ルビは、原本によるもの以外は打たなかった。
4. 本文中に適宜句読点、中点（・）を加えた。
5. 二行割注は「」で示した。
6. 明らかな誤字・脱字等は右傍に（ママ）と傍注した。「完道」については誤字ではないが（ママ）とした。

八雲路日記

三上

天保四年

夷臣

今年も出雲の大神に詣てむといへは、兎玉利足も同くまうてむといふに、六月の始より、けふや出なむ、明日やいそきなむといふに、利足か母病にいたつきて、命さへあやうかりければ、とかくして日を過たり。今はとて、けさ一人具しておのれはかりいてゆく。けふは六月廿日まり三日也。其夜は新庄の里の友かりに宿れり。此里は、昔吉川氏の知ませし地にて、小倉山日ノ山などいふ大城の跡あり。此処の治功大明神は、吉川興経主の霊を祭て今も岩国の周防君より厚く祭り給ふ。神主三上主わか旅の宿りを訪らひて、夜終物かたりす。当社に風吹の獅子といふものありて、いつにても社外に持出れは

必ず暴風おこりて災ひありといふもかしこし。其里より石見国出羽<sup>イツハ</sup>の里にこえて竹崎孟雄かり訪らふ。かたみにたえたることなといひて、よめりしうたあまたとしへたてし秋も村きもの心はかれぬ言の葉の友

一日あるしと、もに鬼城門<sup>オニノキト</sup>の神社に詣。いともかしこき大きないは、高聳

てたちならひたるか末にて往合たるそ。此社の号の故よしには有けり。祭れる神は貴船の大神とそうけたまはる。祭日は十一月十一日。この竹崎家に執行へり。里の家々よりみきね米さかしねなどいふ物をこの家に持参るを、神供に調、酒に讓して奉るとなむ古言の残りたるもおかし。また当家にむねと仕へ奉る加茂神社は、延暦二年にいはひそめしといふ。今の宮殿は吉川基春奇附の造営なり。御殿幣殿いかめしく、八字の末社等古のまゝなり。神宝の中に古き弓一張矢四筋あり。珍らしきものなり。また月守何某、朝鮮より帰りし時、奉りしといふ鎗二筋あり。今の世には見なれぬ甚なかき物なり。永禄・天正のころ遠近の諸将より奉し物願書等あまたあり。かくて此家を出て、往さまに魚切といふ処あり。こは左右山高く巖聳へたる中らに川あり。岩間を往、水のたきち落るところ五百歩はかりかほと流れと、ろきて、いともかしこし。於此御社あり。石折神根折神を祭れり。こゝを過、河本の駅にいたる。こゝは江の川の渡瀬なり。祖式の里片岡善雄を訪らふて宿る。こゝの神主潮正輝其外これかれきと、ふらへり。人々の乞

#### 新勅撰

朝毎に石見の川のみをた  
えず恋しき人にあひ見て  
しかな

よみ人不知

るまに／＼歌なとかうせちす。温泉の里にいきて湯浴せむと思ふ。始てこえ  
行山路なれば、おほつかなく侍らむとて、善雄かあなひして往。この道次西  
田の里は、葛根を採て葛粉とふ物を製て、里人の薬とす。温泉の津の里にい  
たり。年ころ吾宿れりし福光屋とふ客舎にいりて宿れり。吾国の人ともしる  
しらぬあまた湯浴にまをれるかあへりけり。此名の海浦は北海路を通ふ百舩  
の泊る港にして、商舩漁舟の出入の数多く、商人あまた賑へり。旅枕こゝに  
もあらぬに善雄来訪へり。かれと夜一夜こゝに宿りてつとめて打連ていてゆ  
く。湯里にいたり、霹靂神社に詣。神主竹内正温を詣らふ。何くれと物かた  
らひて神小路<sub>カミコヂ</sub>琴ヶ浜を見にゆく。こゝの浜の真砂は人の往まに／＼響音なひ  
て琴の音なせり。あやしく珍らし。上野朽子谷などいふ処をすく。邇摩郡佐  
間村銀山とて、銀鉱堀処にいたりて天野檢校か家に宿れり。主のこへるまゝ  
によめりしうた

とひ来れはうつも賑はし栲角のしろかね山の君かやとりに

この里は大永の此より銀を堀始て、今も家居あまた立並て賑はへり。山吹の  
城跡は、此家に向ひたる山にして松柏生繁れり。大森は此里に連りて任国の  
君おはして、仕人たちあまた家居あり。こゝに五百羅漢といふもの石もて彫  
て祭れる。舎も岩壁の平面を穿て、石の葩さしてあり。此もの諸国に多かる  
ものなれとも、石もて造りたるは珍らし。久里の里をすく。東南なる山に、

万葉二 人丸  
大船のわたりの山  
同十 々  
妹か袖さやにも見えすつ  
まこもる屋上の山

佐比売山

出雲風土記

神名式

佐比売山神社

今三瓶山云

和名抄  
波祢

同

静間

神名式

静間神社

大城の跡見ゆるは久里隆政か住しあとなるへし。此わたりより渡山八上山見ゆる大田の里石崎賤麿を訪らふ主のうた

露ふらむむくらふ庭のせめてはと君なくさめに鳴むしもかも

かへし

たつねこし吾をなくさめに鳴虫をきゝすてゝ行旅そわひしき

名におふ佐比女山はるかにあふき見る。いとけうあり。昔、西行法師此山を見てこゝにてうたよめりしとて、今も西行庵といふ室あり。遠近の風流雅こゝにきて風流の円居すといへり。羽根の里を過ける時、満蓮の神社をたつねて詣つ。こは昔大江元就大人、此社に一夜陳し給ふことを思ひ出てなり。其比羽根義国といふ人のありしもこの里人なるへし。此処より静間といふ処をたつねて静間神社に詣〔祭神大己貴尊少彦名命〕。抑この社は、海岸のさし出たる岬に巖聳たる処ありて、其処の窟に御社はたゝせ給へり。かくふりはへて此社に詣る故よしは、万葉集なる賤か窟の歌によりて考ることのあればなり。其は出雲の国市畑寺薬師の段にいふへし。かくて出雲国にうつり、多芸三里浜などいふ処を過て園神社にまうつ。祭神八咫瑞臣津努命。大汝持大神の国造らしゝ時、御功ありし神にてこのわたりを園の長浜といふ。杵築より引つらなりたるいと長き砂山は、大神国曳来ませし時の御綱のなれる山なり。長く引延たる砂山の清らなるに、古松生繁りて御社いかめしく建給ひてたふと

和名抄

許築とある許は杵の誤字也

拾玉 慈鎮

はるかなりいくよの雲に  
なれぬらん出雲の宮の千  
木の片そき

家持歌集

白真弓いつもの山はとき  
はなる命のあやな慈つゝ  
あらむ

き。いはむかたなし「委しき事また園の長浜の図など左によりて考へたる事は出雲風土記図考にいふ」。神主園光行か家に宿てよめりしうた

ふみゝれはいよゝたふとし神の代のそのあとしろきそのゝ長浜

けふは八月五日。杵築社の神祭りなれば、主ねもころにとゝめしをしひて出行、杵築にいたり。あひしれる人の家にいりてやといれり。湯浴髪けつりなとして大前に詣。日中過るころ北嶋国造昇殿あり。大庭にて神あそひの舞あり。夕方坪内主を訪らふ。くさゝあるしなし給へり。

此云、当社神宝琵琶の事禁秘御抄云、唐土より持ふりし二面の琵琶、玄上・谷蔭の内にて、玄上は朝廷にてはやく失ひぬるを、紫藤の谷蔭はいつのころよりか当社の御内殿に納りて重き神宝となりしを、文政十二年十一月此琵琶朝廷へめされて叡覧にそなはり、しはらく朝廷にとゝめ給ひしを、翌年七月三日より京都の大地震震希代の珍事九月ころまでも止りしは、またゝ大社神宝の琵琶を朝廷にとゝめ御返納なきを神のおしませ給ふ御祟りなめりとて、同九月下旬に御返し遊されしとなむ。按に、琵琶は希代の珍物にして則琵琶の小舌紫藤なり。撥面に竜虎の画あり。裏に元徳元冬といふ事のありしよし。

元徳は後醍醐帝即位十一年なり

是は琵琶の胴と合せたるを、朝廷にて披き見られし時の写しなりとて奥にしるす。是を以て考るに、後醍醐帝との国ちかくわたらせ給ひし時な

と、当社に納奉給ひしものならむ。

琵琶の裏に

南林妙音火災

名游道

元徳元

南無虚空蔵菩薩

冬之比作

冬の比作とあるは修覆なるへし

類聚歌林

順徳院

八雲たつ出雲の子らか黒髪はよし野の川の沖になつさふ

万葉十二

真菅よし曾我の河原に鳴千鳥まなし吾せ子わかこふらくは享保の比

冷泉宗家卿の歌

木の間より月は出雲の御崎山神代の秋の光みのらむ

神代紀

素戔鳴尊居熊成峯而遂入於根国云々

さて此琵琶朝廷より御返納の節、破損修覆遊され仰紙一紙武家伝奏議奏連著のこと黄金許多御奇附の事など、くはしき事は大社実録〔夷臣著述〕にいへり。此神宝のこと普く世にきこえてかくれなく、またあらぬことなど人のいへる事もあれば、かくこゝにいさゝかいへり。

次の日も大前に詣。そのちなみに能野河<sup>ヨシノ</sup>を渡りて芳久主を訪らひ、帰るさには須賀河を渡りて西村主その外しれる人これか道とかわらふ。さて鰐淵山に詣。左りのかた御崎山なり。けはしき山坂を登り、高き峯をこえ、深き谷に下りおくまりたる処に寺院あまたあり。奥の院と云ふは左右岩壁の奥に曝布有<sup>マツ</sup>。滝の窟に一字ありて、滝水は庇の前に落るなり。和田の坊といふに入て宿る。こゝの摩多羅神と称る神社は、祭神建速須佐之男命をいふ。風土記に云神魂社を是にあつるはいかゝあらむ。或人云、昔年当山にて人の頭骨の大さ六尺はかりなるを、ほりいたせり。人々怪て、須佐能男命の御ならむと恐て今の社を建ていはひ祭れりといふ。また神代紀云、鰐成嶽はこの鰐淵山の事なりと云。この両説はうけかたし。風土記を考るにこの鰐淵山は、西方日の御崎

より東のはて三穂か岬まで引続きたる山にて大汝持神国造らし、時、新羅国高志国より引来給ひし山なり〔委しき事は出雲風土記図考に云へし〕。須佐之男命、此国にき給ひて八雲立の神詠をものし給ふ時は、此山はいまたなかりしなり。されは鰐成嶽は異地にして、また須佐之男命の御あるへくもあらず。また、此山にて天保五夏のころ奇怪のありし事の話は、八雲路日記四の巻にいふへし。是より十六嶋<sup>ウツフルヒ</sup>を見にゆく。此処は海苔の名産なる事、世人よくしれり。其嶋は雲手嶋・京嶋・神伝嶋<sup>三</sup>・大黒嶋・水尾嶋・大平嶋・鯖口嶋・内ノ大平嶋・殿嶋・京口嶋・小嶋・苔福嶋・根瀧嶋・山柄嶋、この十六嶋<sup>ウツフルヒ</sup>といふは、或書に浦人海苔を採に藻屑貝殻などつきたるをうちふるひて採故に、かの海苔のよく生る嶋の数によひなれて、終に十六嶋の字をうづぶるひといふといへり。さもあるへし。都てこれらのこと文字と訓とことなること、伴蒿蹊か考へし事あり。そはこゝにはいはず。此処より松浦といふ処にいつ。また多久村にこゆ。雲見峠といふ山路に石神といふあり。高一杖はかり。周もまたおなし。其側に小石神といふありて、数百余同形なるもの並へり。里人は建石とともいふ。国人渡邊某云、多芸津彦命の神跡なりといふはいかゝあらむ。神名式、常陸国大荒磯崎薬師菩薩明神社同那賀郡、また能登国なる石像の神社いづれも此処なるとまたく同じさまなれば、こはうつなく大汝持命少彦名命の神跡なるへし。また仏家の薬師仏といふものに、

和名抄

意宇郡完道今訛てシンジ  
ユウミ云

神名式同郡

完道神社

出雲川 叔蓮

出雲深きみなとをたつぬ  
れははるかにつたふわか  
のうら波

皮河

神道百首兼邦

和らくる光りはなほそあ  
らはるゝひの川上の出雲

八重垣

鳥上嵩

神代紀一書云素戔鳴尊云

東渡到出雲国簸川上有所

鳥上峯云

市畑寺

出雲風土記云神名火山葦

原神社

薬師神を混合したること、次の市畑寺の段と考合して其誤れることしるへし。  
此山より完道湖眼下に見ゆ。こは往古の海の残りにして、西は平田より東松  
江の城下まで豎六里はかりの湖水なり。かの鳥上嵩はこの湖の南に高くそひ  
へたる山なり。大蛇の住し皮の河は、この鳥上山より湖水に流れる河なり。  
或書に、完道畦地山また完道遠江守正隆といふ人の見えたるも、此わたりの  
人なるへし。是より市畑寺に詣。この寺正面の一字に薬師仏をいはひ祭り  
て、遠近の眼を煩ふ人、この仏に乞禱て神験いちしるし。この東の脇の小社  
に少彦名命を祭り、西脇の小社に葦原醜男命を祭る。門外に坊舎あり。この  
寺の古きものに、市畑神領と書たるものあるよし或人いへりましゝ。この仏  
進をむねと祭る日は、海水ウシホを奉るとぞ。里翁のいへらく、本尊薬師仏往古完  
道の湖中より出現ましゝて、当山の半途に岩窟あり。其処に御鎮坐ましゝ  
を、後に今の堂宇を建て祭れりと云。其始て御鎮座の窟といふはいさゝかな  
れとも、いかさまにも古き神跡とおほしくて、窟中に小祠あり。前に注縄引  
延てあり。倩、当社の事跡を按ふに、中昔より浮屠の輩神社と仏宇にとりな  
して、あらぬ名ともをおほせまつりて、おのかしく祭ることあけてかそへか  
たし。当社もうつなく大汝持命少彦名命の御鎮坐にして、諸人の病患を救ひ  
給ふこと眼病のみに限るへからず。ことに、この国は此二神の御本国にまし  
ませは、万葉集なる大汝持少御神の賤の窟とよみしは、きはめてこのいはや

の事なるへし。この静の窟のこと、石見国邑智郡岩屋村に静かいはやと称するものありて、小篠敏〔濱田候の儒臣明和寛政のころの人にて鈴の屋の弟子也〕鈴の屋翁に物語してより、翁も静の窟はこれなめりといひ置れたり。伴蒿蹊も此説を諸へり。抑、静の岩と称するもの播唐国生子窟これ世の人のしる処なり。これも上古の神作にして、其造れるさまもめつらし。また、この窟作らし、時の石屑イシヅクは、遙遠き処に捨たりといふ。こゝにも、かの二神をいはひ祭るよしの伝なれば、静か窟といはむもまた諸なり。石見国静か窟といふ処、おのれ往て見しに山の麓に小社有て、其山の頂に登るところに中の窟奥の窟といふあり。いづれも聊の自然の窟にして神祠もなし。岩屋村の号の故よしは何れに拠てなづけゝむ。いふかし。然に先年此辺山を洗流して、鉾砂コデツをとるもの山の崩れより、長尺はかりの薬師仏の銅像を堀出せり。是なむ静か窟の神像なるへしと、かの社内にいはひ置しに、自然に蟋蟀コホロキの如くなる黒き虫出て、この銅の仏像を喰て一年余にして、竟に残りなく喰尽せりと云り。此事實は、この出羽の庄に濱田君より置給ふ出羽組代官何某か其ころ書たるものに誌せり。其后は、当社内に神像を斎置ことなしと云り。いと怪しき事なり。此社をしも静か窟の真跡のこと敏かいひしも年ころ諸はれ、かくく侍りしに同国同郡のうち赤谷アカタといふ処あり〔安芸広島より石見濱田府往通の道なり〕。此処より水源凡五十丁はかり登りて、京か原といふ処あり。其山

の南表は、安芸国山県郡高野村才乙村に峯を隔て境をなせり。則、山陰山陽の坂合なり。頂頭より十丁はかり下りて、北の方一山一面の岩壁なり。その平面に方面二杖はかり高九尺余奥深杖余其内角面にして彫磨人力の及ふへくもあらぬ神作の窟あり。其岩屑と思しきもの六七丁はかり山を隔て、谷底に捨たり。是全く生子窟と同じさまなり。是なむ往古かの二神の造給ひて鎮坐まし、静の窟なるへし。然れども此処はいと深き山奥にして、秋の末より春のすゑまで雪のためることなく後世詣る人もなかりつらむを、今の岩屋村にいさゝかの窟のありしによりて、小祠を建、此御神をうつし祭りしなるへし。今は京か原の窟はしるへもなくなりしなり。又、前に云、安濃郡静間村静間神社是も、静の窟の真跡なりとこのわたりの人はいへれと、上古の跡いつれか真の跡ならむ。後世の心もて、強て定るはいとおほつかなき事にてそあれされとも、今試に強ていは、またくこの市畑山の岩屋を二神の鎮坐根元の静の窟なるへき。前にもいふことく、今は仏を祭といへとも、全神社にまきれなき事は神領と云。海水を奉ることなど、古き伝のいちしるし。また当社に乞禱て、諸病に験あること仲子の及ふところにあらず。おのれ前に、杵築の社頭にて百首歌よみて奉りし時、八雲立の御神詠の歌の文字を一字宛、始に置いてよめりし三十一首のうたの中の字

瑠璃色にひかるほとけの名といふはなへて薬師クスシのこれの大神

とよみしなと思ひ出されてかしこかれとも、今は二神の始て鎮坐て万人の病患を守護給ふ静の窟の根元はこの市畑山の窟にして、石見国なる京か原のいはや播磨国なる生子窟は、後に作り坐しゝ処なるへし。さて、岩屋村の社静間の社は自然の窟によりてうつし祭りしならん。此類なるあるへしと考へ定つ。佐陀の御社に詣。祭れる神は伊邪那岐神・伊邪那美神・天照大御神・月夜見命・須佐之男命を合せ祭る。或は云、四坐。渡邊主云、当社祭神古書に神御霊命の子蜺貝比女命加賀の〔加賀のこと次にいふ〕久計止にて座坐る佐陀大神とあるは、猿田彦の命の御事なり。当社は、猿田彦命と大田命と御繩張の宮建にして、こゝにとゝまり給ひぬとあり。然れば、一説四柱のうちならんかと云り。当社も、杵築の大宮に次て嚴重なる御社なり。また、当社に神詠とて国土の広きあら野を田となして鍬の御矛や露の玉米といふうたに、神人の鍬もたる像など書そへて木に彫、紙にうつして信心の人にあたふる也。こはかの大成経を偽作せし美濃国潮音か偽りて作りまうけし歌なりと云り。いともかしこし。かくて水の浦にいたり、久計門の社にまうてむとて、其夜はそこになも宿れり。其夜、但馬国人北垣〔通称和平〕方照、枕をならへてあひかたらへり。此主は、年ころ杵築の大神を信て、近きころ吾山に御社を建ていはひ拝り。つとめて方照主とゝもに、海士の小船にうち乗て、久計門の浦にゆく。久計門の浦にゆく。此処は、北海にさし出たる海涯に大き

久計止  
書紀に洞海<sup>くわうかい</sup>万葉に木間立  
久々霍公鳥まし、百舌鳥  
の草久吉なとみれ今云く  
ぐるる也

鱸  
古事記云栲繩之千尋繩打  
延為釣海士之口大之尾翼  
鱸

神名式云  
揖夜神社  
同石社  
韓国伊太氏神社

なる窟ありて、窟の中に船を乗いれて奥に入、彼方此方と漕めくり、またこ  
き出して高天原古久計止なといふ処に詣。神名式に云、加賀神社是なり〔今  
は社殿はなし〕。祭れる神は、蜃貝比売命・天照大神なり。こゝの窟の中に、  
天井よりしたゝり落る水の露を持帰、乳汁の少き婦女にあたふれば、必驗あ  
りて乳汁いつるなり。渡邊主云、或書云、加賀神崎久計止窟高十丈巡五百步  
東西北は通れりと云〔三方に海に通穴の入口あり〕。猿田彦命、此窟にて生  
給ふ時、御母蜃貝姫暗き窟なるかなと宣て、金弓にて射通し給へは、明りさ  
して〔今の北の方の穴なり〕かゝやける故に加賀といふと云。久計止とい  
ふ号は、窟の中を船にて三方へ往ぬける故に潜門<sup>クキト</sup>なるへし。

さて此処より方照主は三穗の神社へ詣てたる。おのれは別れて松江の方にゆ  
く。この近きわたりに津の森といふ有。是を大蛇の骨宮ともいふ。須佐能男命、  
退治し給ひし大蛇の骨を集て祭れりと云り。こより松江に出て宿れり。この  
松江は鱸<sup>スベキ</sup>の名産にして、十月のころ完道湖<sup>マダ</sup>より大海に下る鱸を採なり。此魚  
の事神代の御典にも見えて、其名いと古きことしるへし。これにより、此処  
をしも松江といふは漢国に鱸の多かる処を松江<sup>スンゴウ</sup>といふ事のはなるへし。  
こゝに四日はかりありて、熊野社・大庭社にまうてし。また揖夜神社に詣。  
祭れる神は、須佐能男命・伊弉命、同右社美保津比売命といふもいかゝあらむ。  
神代の御巻に見えたる伊布夜坂は此処の事なりといへと、此地海辺のなたら

能利刀神社

式今本能字熊に誤

平坂

古事記故其所謂黃津平坂  
者出雲国伊賦夜坂也

大森大明神

式云筑陽神社

大山登嶺の事春平の言た  
る大山ノ記といふものに  
見ゆ

かなる処にて、伊布夜坂と思しき処は見えず。或云、日吉村劔大明神、祭神  
伊邪那岐命・大山祇命〔風土記云詔刀社式云能利刀神社〕。

この御社の山大石壘々として、伊邪那岐命、泉津平坂にて引塞給ひし千引の  
石なりと云〔千家俊信大人の考〕。今の神主の祖父内藏太夫と云し人、神前  
に詣、泉の国に往三日過て帰れり〔現身なく往しにはあらず魂の往しなり〕。

其故よしを人に語らず、老年に及息絶る際に始て泉の国に通ふ穴当社内にあ  
りといふ事を語て息絶たりと云。是より、伊東村大森大明神に詣。神主淺

尾氏を訪らふ。安来<sup>ヤスキ</sup>の里より船に乗て、伯耆国米子に渡り大山<sup>タISEN</sup>に詣。神名式云、

大神山神社祭れる神は大己貴尊、今は大智明大権現と云。さて当山は〔前に

云、佐比女山とこの大山は国留の杵なりと風土記に云り〕西の国に類なき高

山にして、山の頂頭に登る人は、当山の院主おのか代にたゝ一度登るのみに

て、其余案内たにしる人なしと云こと元享釈書といふものに見えて今も然り

と云。然るに吾友濱田人松田春平、教子とをもゐて此山のいたゝきに登りけ

るに、さらにかたきこともあらず、奇怪こともなしと云り。浮徒の輩とさま

かくさまにいひふれて、罪深き人登り得ぬといふ山の国々に多かれとも、類

ひなき富士の山すら人の登り見るに、まひて其より早き山のいかてか登りえ

さらむ。春原<sup>マヤ</sup>か倭魂のほとそこよなかりける。此山の東のかたに、かの船上

山といふは有なり。さかひの浦といふ処にきて三穂の崎にゆく。三穂の神社

三穗

和名抄美保、式云美保神社、三保の関と云、或は手間の関云  
堀川百首

さりともと思ひしかとも  
八雲立てまの関には秋もとまらず

名寄師俊

みことのりかしこみて  
もろたふねこれよりみほのさきにつくせぬ

手間ヶ関は手間天神の有る地にして三穗より七八里へたてたり

に詣。このところは北海隠岐国の方にさし出たる岬にして、其処に御社はた、  
せ給へり。祭れる神は一宮三穗津姫命、二宮事代主命をまつれり。此社にて  
人々神主に物種を乞ふことあり。こは誰人にも大前にて五穀の種と始て桑  
綿其外万物の豊作を乞祈て種を乞へは、何の種を望ても神主よりあたふるも  
の粗なり。其粗を持帰て吾望の品を乞のみ。田畠に蒔は、粗種変て吾乞祈ま  
にく生てことに豊作を得るなり。神験あやしき事ともあり「なほ当社のことくはしく八雲路日記」<sup>(マ)</sup>卷に云。こ、よりまた伯耆国にわたりて、赤崎  
上伊勢などを過、稲積村といふあり。こは歌枕名寄に見えたる処なるへし「名  
寄権少僧都光覚秋の田の稲積の里の秋風に寒けくなりぬ初かりのこゑ」。倉  
石の町にいたりて、漬閑寺重阿主を訪らふ。そより御徳山に詣。山の麓に寺  
天台宗三字あり。奥の院といふに詣る道は、いともけはしき巖のそひへたる  
峰つたひに、木の根をふみ登り鎖をひき、或は梯を登り橋を渡り鳶にとりつ  
きなど、いともあやうきからき道なり。其道すから、巖のさしのそきたる上  
に、神社堂宇を造りかまへ、左右の谷はいく千尋もあらむと思しき谷の岩壁  
よりたきちる水のうちけふりそこゐのきはみも見えず、いともかしこし。か  
らふして奥の御社に詣。人みな投入堂<sup>ナケレ</sup>となもいふ巖の簷へ覗きたる下方の奥  
に御社あり。此御社には詣る人もなく、実に遠より投入たるかことし。趣な  
くては詣るやうこそなかりけれ。すさもおのれもた、かしこしと仰き見たる

はかりなり。其道、次の神社は禁に拝礼殿あり。次なるは野際明神・天満宮・勝手権現・観音堂、次々に建給ひて、いやはてに奥の御社蔵王権現なり。是より因幡国にこえ、鷺峯山に詣。鹿野にいてゝ宿る。



解説シリーズ——今、何が起きているのか？

## 第二回 台湾。ポストニューシネマ

——『KAN O 1931 海の向こうの甲子園』  
についてのポストコロニアル批評の試み——

Taiwan Post-New Cinema: A Post-Colonial Essay on KAN O (No.2)

大石 和久

はじめに

解説シリーズ「今、何が起きているのか？」の第二回として、台湾映画の「今」について書いてほしいとの依頼を本誌の編集委員会より受けた。この依頼に、魏徳聖が製作し、馬志翔が監督した二〇一四年の台湾映画『KAN O 1931 海の向こうの甲子園』（以下『KAN O』）

について論及することで、応えたいと思う。

著者は二〇二三年四月から八月まで台湾芸術大学の研究員として台北に滞在した。それで編集委員会はこのような執筆依頼をしてこられたのであろう。しかし、筆者は台湾映画の専門家ではなく、一介の映画美学研究者でしかない。そのような者が（いくら台湾映画に関心を持っていたとしても）、台湾映画の「今」について「解説」などできるだろうか。荷が重い依頼であった。一度はお断りしようかとも考えたが、結局はお引き受けすることにした。その理由は、筆者が北海学園大学で映画研究をしていることに関わる。このことに触れる前に、まずは『KANO』を紹介しておきたい。

台湾が日本統治下にあった一九三一年、嘉義農林学校（以下、嘉農）は台湾代表として甲子園に出場し、準優勝を果たす（『KANO』とは嘉農のローマ字表記である）。『KANO』はこの実話を基にした劇映画である。嘉農野球部は、一勝もしたことがないような弱小野球部だった。四国の強豪、愛媛県立商業学校野球部の元監督・近藤兵太郎は、嘉農で会計の仕事をしていた。近藤は野球部の監督を任せられ、スパルタ訓練で鍛え直す。近藤は「球は霊なり、霊正しからば霊また正し、霊正しからざれば霊また正しからず」をモットーとし、日本式の〈野球道〉を説く<sup>(1)</sup>。このように、近藤の訓練は技術面のみならず精神面の鍛錬も重視するものであった。嘉農野球部は当時、台湾でも珍しかった「蕃人」「漢人」「日本人」から成る三民族の混成チーム。近藤はこの点に、この野球部の強みがあることを見抜いていた。近藤はこう断言する。「蕃人は

足が速い。漢人は打撃が強い。日本人は守備に長けている。こんな理想的なチームはどこにもない。きちんと練習すれば必ず甲子園にいける」。近藤の厳しい指導に耐え、めきめきと実力を身につけていった嘉農は、とうとう甲子園に出場、準優勝を果たす。

さて、嘉農が甲子園の準々決勝で対戦したのが、北海道代表の札幌商業学校（以下、札商）であった。札商は、現・北海学園札幌高校の前身にあたる学校である<sup>(2)</sup>。この映画の中で、嘉農と札商の試合は大きく扱われ、しかも、札商のピッチャーの錠者博美は、キャラクターとして極めて重要な役割を果たしている。かつての札商、つまり現・北海学園札幌高校は筆者が現在、映画研究者として勤めている北海学園大学の併設校であり、場所的にも隣り合っている。そういったことから、著者は『KANO』にそもそも興味を持っていた。台湾映画の「今」というお題に悩んでいたとき、『KANO』を取り上げたら、何とか書けるのではないかと、ふと思いついた。札商のお隣で映画研究をしているのも何かの縁。それで、台湾映画の専門家でも何でもないにもかかわらず、無謀にも解説依頼を引き受けることにした。

また、著者は映画における北海道表象を、その内国植民地としての歴史性の観点から研究してきた。『KANO』は、植民地時代の台湾を舞台とした映画である。植民地表象という点でも、『KANO』は興味深い。これも、執筆依頼を引き受けた動機となった。台湾代表の嘉農と北海道代表の札商との戦いは、植民地の学校同士の闘争だったのである。

そこで、本解説では、ポストコロニアル的観点から、この『KANO』を解釈してみたいと

思う。その際、ポストコロニアルの重要な理論家の一人、ホミ・バーバを参照したい。バーバの理論から見えてくる、この映画に込められたポストコロニアル的な意味とは何か。バーバの観点に立てば、嘉農の野球は、日本への愛憎半ばする「アンビヴァレンス（両価性）」に基づく、日本野球の「擬態」模倣 mimicry」であったと考えられる。

まずは、なぜ『KANO』を語ることが、台湾映画において「今、何が起きているのか？」を語ることでもあるのかということについて説明する。その後、『KANO』をポストコロニアル的観点から解釈する。本来ならこれで本解説を終えてもいいだろう。しかし、最後に、札商のピッチャー・錠者が『KANO』においていかに重要な役割を担っていたか、ということに言及しておきたい。彼こそが、私に本解説を執筆する動機を与えてくれたからである。

## 一 台湾ポストニューシネマと魏徳聖

『KANO』は、魏徳聖三部作中の一作である。三部作の他の二作は、どちらも彼が監督した『海角七号 君想う、国境の南』（二〇〇八年、以下『海角七号』）および『セデック・バレ 第一部 太陽旗、第二部 虹の橋』（二〇一一年、以下『セデック・バレ』）である。『KANO』

では、彼は製作に回った。魏徳聖によれば自身は野球には素人であったので、野球経験者の馬志翔に監督を依頼したとのことである。

さて、魏徳聖は台湾ポストニューシネマの旗手である。つまり、彼は、一九八〇年代から一九九〇年代にかけて展開された台湾ニューシネマの後の世代に属する映画監督である。侯孝賢や楊徳昌、李安、蔡明亮といったニューシネマの監督達の美的に洗練された映画は、世界的な映画祭で数多くの賞を獲得した。しかしながら、その芸術性は必ずしもかんばしい興行収入には結びつかず、その結果、台湾映画の製作本数は激減した。

台湾映画の低迷は、ニューシネマの監督・楊徳昌の助監督を務めた、いわばその弟子、魏徳聖によって乗り越えられることになる。魏徳聖が二〇〇八年に監督した『海角七号』は、台湾映画史に残る画期的な映画となった。日本統治時代に生まれた日本人男性と台湾人女性の恋愛が、日本の敗戦によって終焉を迎えることになる。そのような悲恋を甘美に、かつノスタルジックに描いたこの映画は、台湾で製作された映画として史上最高の五億三〇〇〇万円の収益を上げた。台湾映画研究者の赤松美和子は、この大ヒットについて「二〇〇八年、台湾映画は自らの歴史をエンタメとして語ることで再び息を吹き返す」と記している<sup>③</sup>。また、『セデック・バレ』と『KANO』も同様に大ヒットを記録している。魏徳聖の登場について、四方田犬彦もこう言っている。

魏德聖という映画人の出現は、二〇〇〇年以降の台湾映画をもっとも特徴付ける現象の一つである。侯孝賢や楊徳昌が映像作家としての繊細な文体に拘泥し、世界中の映画祭に宛ててハイブローな芸術映画を撮り続けたとすれば、その次の世代である魏德聖は逆に、誰もが登場人物に同一化して、強い情動的興奮を体験するエンターテインメントに徹して、台湾映画をもう一度興隆へと導いた。<sup>(4)</sup>

台湾映画研究者の稲見公仁子によれば、エンタメ化の傾向は、現在にまで至る台湾映画の特徴と言つてよい<sup>(5)</sup>。それは、近年、台湾ではジャンル映画（例えば『紅い服の少女第一章 神隠し』『二〇一五年』第二章 真実』『二〇一七年』『程偉豪』や『返校 言葉が消えた日』『二〇一九年、徐漢強』などのホラー映画）が盛んに制作されていることから分かる。これは現在の台湾発のネットフリックス映画にも見られる傾向である。とすれば、台湾映画のエンタメ化の嚆矢となった魏德聖、その三部作の一作の『KANO』を取り上げることが、台湾映画の「今」の一端を語ることもあるだろう。

ここで、魏德聖の台湾映画のエンタメ化は、同時に、「台湾アイデンティティ」の探究とともになされたことに留意しておきたい。稲見は、ポストニューシネマについて、こう言っている。

人々を引きつけたのは台湾が台湾であること、台湾アイデンティティとの関係性であった。

たとえば言語について言えば、国語と台湾語や各原住民族の言語などが混在するのがリアルな社会の描写である。道教の信仰や歌仔戲、夜市などの民俗的アイテムや日本統治時代、その後の白色テロ、民主化運動などの歴史素材も台湾が台湾であることを示す。こうした描写が興行的成功と強く結びついていた。台湾としての意識は、八〇年代のニューシネマでも見られたことだが、九〇年代に入って民主化が進むなかで熟成されていったと思われる。<sup>6)</sup>

民主化以前、国民党一党独裁の下では、映画の中で「台湾アイデンティティ」に関わる光景に焦点が当てられることはほとんどなかった。その独裁が終わり、中華中心主義イデオロギーから解放され政治が〈本土化（台湾化）〉する<sup>7)</sup>。それに照応するように、映画人たちは台湾本位の視点から、台湾の光景を見つめ直すことを始めた。魏徳聖が、多元的なエスニック・グループ——中国語の「族群」——から成る台湾の生活空間に注目したのも、そのような台湾本位の視点からである<sup>8)</sup>。台湾の南端、先住民族の居住する恒春半島を『海角七号』は舞台としているが、この舞台設定をめぐって、台湾映画研究者の林ひふみはこう言っている。

台湾最南部の恒春半島を舞台としたことで、これまでの台湾映画にも見られた外省人、本省人の区分を越えて、客家や先住諸民族も交えた多数のエスニック・グループが、現に共

存し、北京語と台湾語を中心とする多言語の生活空間を形成している台湾社会の現状が生き生きと描き出された。<sup>9)</sup>

台湾に共生する、多元的なエスニック・グループ（あるいはエスニシティ）。これが、魏徳聖が扱う大きな主題の一つである。そして、彼のもう一つの大きな主題は、日本統治時代である。日本統治時代が注目されるには、やはり台湾の民主化が進み、中華中心主義から解放される必要があった。かつて、日本統治時代は、中国への侵略の視点から専ら否定的に表象されるのみであった。魏徳聖は、現在の台湾の礎となった日本統治時代の現実に、その功罪ともども、迫ろうとする<sup>10)</sup>。その意味で、彼がこの時代を扱うのは、やはり「台湾アイデンティティ」を探究する作業であった。上に見たように、『海角七号』も『KANO』も日本統治時代の出来事を取り上げている。そして、『セデック・バレ』も、一九三〇年、日本統治時代に先住民族（セデック族）が抗日蜂起した霧社事件を活劇化した映画であった。魏徳聖の三部作はすべて、エスニック・グループの多元性と日本統治時代を扱っている。以下、本解説では、この三部作の中でも『KANO』に焦点を当て、論じてゆきたい。

## 二『KANO』について——日本野球の「擬態」模倣——

冒頭述べたように、『KANO』は、「蕃人」「漢人」「日本人」の三民族が協力し合い、甲子園で活躍する映画である。魏徳聖は自身で、『KANO』において「団結の精神」、「異なる民族が分け隔てなく互いに協力するというチームワークの精神」を称揚した、と語っている<sup>(11)</sup>。彼は、嘉農に多民族的なエスニック・グループの協調を見ているのである。『KANO』において、日本人は当時の台湾を構成した、エスニック・グループの一つとみなされている。『KANO』は、先住民族の抗日闘争を描いた『セデック・バレ』と極めて対照的であることが分かるだろう。『セデック・バレ』では、日本人の圧政に耐えかねた先住民族が、日本人たちの首を狩り、惨殺するのである（このように、『セデック・バレ』は、一種のエキスポロイション映画の側面も持っている）。

『セデック・バレ』とは真逆に、日本人と台湾人の協調を描く『KANO』は、日本統治時代を美化しているとして、親日どころか「媚日」であると批判されることがあった<sup>(12)</sup>。たしかに、この映画では、『セデック・バレ』のような抗日の激しい戦いは見られない。しかし、そのような批判は、『KANO』が植民地時代の日台の「文化衝突」をテーマとしていることを見逃している、と魏徳聖は反論している<sup>(13)</sup>。彼は「台湾の歴史を考えたとき、原住民の伝統文化、

漢民族の移民文化、外来の植民文化がありますが、この三種類の文化が合流していたのが、日本の統治時代なんです」と言い、このような文化の「合流」からは、それらの「衝突」が生じ、そこから必然的に「ドラマ」が生まれてくる、と語る<sup>(14)</sup>。『KANO』は日台の協調のドラマでありつつも、同時にそれらの「衝突」の「ドラマ」でもあったのである。

『KANO』への「媚日」的という批判に対して、四方田は魏徳聖が『セデック・バレ』の監督でもあったことを忘れてはならない、と注意を促している。『KANO』を『セデック・バレ』の抗日からの単なる転向とみなしてはならないということである。この二作はいわば「鏡の表と裏」<sup>(15)</sup>である。それらは、一見相反するようでも魏徳聖の映画に内在的な二つの側面である。ポストコロニアルの理論家・ホミ・バーバならば、おそらく四方田の言う「鏡の表と裏」を「アンビヴァレンス（両価性）」<sup>(16)</sup>と言い表すであろう。精神分析に由来するこの語は、同一の対象に対して愛情と憎しみを同時に抱く心理状態を意味している。バーバは、植民者と非植民者の関係にアンビヴァレンスを見た。台湾人は、宗主国の日本を愛すると同時に憎み、あるいは日本に憧れと同時に反発を抱いていた。魏徳聖はこう言っている。

台湾人は日本に対して矛盾した感情を抱いている。愛するべきなのか恨むべきなのか。ならば『セーダッカバライ』『セデック・バレ』のこと」で憎しみの原点を描き、『海角七号』で愛の原点を描こう。<sup>(17)</sup>

あるいは、魏徳聖は「日本統治時代は、時には愛憎相半ばし、良し悪しの基準だけでは解釈できない面が多々あった時代です」<sup>18</sup>とも語る。台湾の球児たちは、日本を憧れの対象（憧れの甲子園）としながらも、同時に、セデック族と同じく日本に反発してもいた。魏徳聖が言うように、一見、親目的な『KANO』は日台の「衝突」もまたそのテーマなのである。とすれば、台湾人の日本へのアンビヴァレンスな思いは『KANO』と『セデック・バレ』のようなテキスト間の関係としてのみ存在するのではなく、『KANO』という一つのテキストの中にも込められていると考えなければならない。たしかに、『KANO』では『セデック・バレ』のように明らかに抗日的な光景が展開されることはない。しかし、『KANO』の細部には、嘉農が日本へ抵抗する様が、随所に巧みに織り込まれている。その消息を見ていくために、まずは、当時の甲子園が、被植民者を日本人化する機能を担っていたことの確認から始めたい。『KANO』はフィクションの部分を含む劇映画であるが、魏徳聖は、むしろ、このような甲子園の歴史を踏まえた上で、この映画を制作している。

『KANO』の序盤、一九三一年の甲子園の開会式が映し出される。ここでは、内地の各地域の代表チームのみならず、台湾に加え、満州や朝鮮の植民地からの代表チームが出場しているのが見える。人類学の立場から『KANO』を論じた沼崎一郎が言う通り、当時の全国中等学校優勝野球大会（現在の全国高等学校野球選手権大会）は、台湾や満州、朝鮮といった「外地」の代表をも含んだ「帝国の祭典」であった<sup>19</sup>。大日本帝国の各地方を代表する高校が一

堂に集い、甲子園で競い合う。そのとき、外地は大日本帝国の一地方とみなされ、帝国の空間に包括され均質化されてゆく。また、外地の球児たちは、野球を通して大日本帝国の国民として日本人化、ないしは〈皇民化〉されてゆく。沼崎の指摘通り、甲子園は「インペリアルなナシヨナリズム」の装置として機能したのである。「帝国領内の地方パトリオティズム（郷土愛）が、甲子園という回路を通じて、インペリアルな日本のナシヨナリズムに回収される。それが帝国の祭典としての甲子園の意義だった」<sup>20</sup>、と沼崎は言う（戦後、甲子園はインペリアルな側面を喪失し、いわば縮小された形でナシヨナリズム的な意義のみを留めている）。

ポストコロニアルの視点を取り入れながら、台湾野球の通史を著したアンドルー・D・モリスは、日本人が台湾人を日本人化し、日本人へと同化させる際、野球が極めて重要な役割を果たしたことを指摘している。「台湾人の見事なプレーは、かつての野蛮で遅れた人々を改良するのに日本の植民地体制が成功したということを印象づけた」<sup>21</sup>。野球は、「野蛮な」台湾人に身体的な規律訓練を通して、日本人のように「文明化」する装置として活用された。甲子園は、外地の球児たちを文明化し日本人化する場として機能していたのである。

では、嘉農の球児たちは、甲子園で日本人化されるのに、ただ身を委ねるだけだったのか。甲子園がインペリアルなナシヨナリズムの装置である限り、彼らはたしかに日本人化されたのかもしれない。しかし、嘉農野球部の強みは、エスニック・グループの多元性（「蕃人は足が速い。漢人は打撃が強い。日本人は守備に長けている」）にあった。とすれば、彼らにとって、甲子

園で活躍することは、台湾のアイデンティティにかかわる。つまり、それは、台湾人らしさを体現することである。ここには、日本人化されることが、同時に台湾人らしくあることでもあるという逆説がある。

この逆説は、バーバの言う「擬態Ⅱ模倣」の概念を想起させる。バーバによれば、被植民者は植民者の文化の「模倣」を余儀なくされるが、同時に、それとの「差異」を生み出すことで植民者に抵抗する。バーバはこう言っている。

植民地的擬態Ⅱ模倣とは、ほとんど同じであるが、完全には同じではない、almost the same, but not quite 差異の主体としての、修正された認識可能な他者への欲望である。つまり、擬態Ⅱ模倣の言説はアンビヴァレンスの周りに構築されているということである。擬態Ⅱ模倣が効果的であるためには、ずれ、過剰、差異を常に生産しなければならない。<sup>(22)</sup>

被植民者は、植民者を模倣しつつも、それを差異化しながらそのパロディとしての「まがいもの mockery」を生み出す<sup>(23)</sup>。それは植民者を「嘲笑 mockery」することであり、そうして「植民地的言説の権威」は「攪乱」される<sup>(24)</sup>。「擬態Ⅱ模倣」はアンビヴァレントな性質を帯びている。被植民者は植民者への愛と憧れがゆえに植民者を「模倣」し、それに「擬態」する。しかし、この「擬態Ⅱ模倣」が植民者のパロディとしての「まがいもの」しか生み出さないのだ

あれば、それは同時に、植民者への憎悪と反発も含んでいるのである。

嘉農の球児たちは甲子園で日本人を「模倣」し、それに「擬態」した。彼らは野球のユニフォームに身を包み、そのユニフォームには、ローマ字表記された「KANNO」のロゴが入れられている。彼らは日本球児の標準的な外形と変わることなく、日本人に文字通り「擬態」しているのである（嘉義市内の人々がそれぞれの民族衣装を身につけているのと対照的である）。しかし、それは同時に、日本人との間に「差異」を生じさせることであつた。つまり、日本人の「模倣」擬態が生み出したものは、「まがいもの」の日本人でしかなかった。というのも、彼らにとつて日本人のように野球をすることは、逆説的にも、台湾のアイデンティティを具現化し、極めて台湾人らしくなることでもあつたからである。彼らは、日本人をエスニック・グループの一つとして含むような、エスニシティの多元性を体現したのである。日本人の「擬態」模倣を通じて台湾人となること、それが彼らの日本人への抵抗であつた。このような「擬態」模倣の逆説が最もよく表れているシーンを取り上げよう。甲子園で、新聞記者の小池が、嘉野の球児たちに次のように聞くシーンがある<sup>(25)</sup>。

聞きたいのは、きみたちは、ちがう民族の部員と意思の疎通ができるのかということ。野蠻な高砂族は、日本語を理解できるの。にょほーんご、わかる？

すでに見たように、野球は野蛮な台湾人を文明化する装置とみなされていた。このような差別的発言に、近藤は語気を荒げ次のように反論する。

意思疎通が何ですか。野蛮？ あなた、いったい何を見てるんですか。ちゃんとこの子たちを見てください。民族の違いなんか関係ない。この子たちは、みなほかのチームの子たちと同じ、野球好きの球児たちです。

野球の勝利を目的とする限り、それぞれのエスニック・グループに由来する能力のみが重要なのであって、その目的の下では、文明と野蛮のヒエラルキーは無効化されている。多元的なエスニック・グループの協調が嘉農野球部の強さの源泉である。この意味で、嘉農野球部は台湾のアイデンティティを体现しているのであった。しかし、甲子園は、嘉農の球児たちを日本人化する「インペリアルなナショナルリズム」の装置としても機能した。近藤は「この子たちは、みなほかのチームの子たちと同じ、野球好きの球児たちです」、と言っている。ならば、嘉農の球児たちも内地の球児たちと等しく、「大日本帝国の子たち」ということになる<sup>26</sup>。つまり、日本人化されることによつてのみ、台湾人らしくなれるということである。この近藤の台詞には、「擬態II模倣」の逆説が凝縮されている。ここで、さらにこの映画のラストシーンにも触れておこう。

ラストシーンでは、嘉農の球児たちは日本から台湾へ帰るために船に乗っている。決勝戦では負けたにもかかわらず、彼らは、甲板の上で夕陽に包まれながら多幸感に溢れ返っている。ある部員がガラス瓶に入った甲子園の黒い土を夕陽にかざす、そのクロースアップからこのラストシーンは始まる。彼は、それを見て「めっちゃ、きれいだろう」と思わず声を上げる。その土は、もちろん、日本野球の台湾への移植を含意しているだろう。しかし、それは単なる移植ではなく、「差異」を伴った移植であった。台湾人を日本人化するはずだった野球は、台湾のアイデンティティを具現化するための装置となったのである。それゆえ、甲子園の土は夕陽に美しく映えるのであろうし、球児たちは、そのことに無上の喜びを感じているのである。

ここで『KANO』における、土の主題について触れておこう。映画ジャーナリストの金原由香が指摘するように、土や泥——それは水分を含んだ土である——といった具体的イメージが、『KANO』の説話論的持続を支えていた<sup>27</sup>。例えば、近藤は酔っ払って用水路で眠り込み泥だらけになる（様々な生命を育む、台湾のあのきめ細かい泥。この台湾の泥の中で、日本からの流れ者、近藤は再生するだろう）。選手たちとは言えば、雨の中、泥だらけになりながら試合を戦う。また、彼らは嘉農の白い土とは異なる甲子園の土の黒さに驚く。それを見た近藤はその黒い土を彼の白いシャツに擦りつけ、「土は土だ。台湾の土と変わらん」と彼らを諭し、その緊張をほぐそうとする。このような土と泥の主題の系列が最終的にたどり着くところ、ガラス瓶に入った甲子園の土であった。台湾に運ばれてゆくこの日本の黒い土に、台湾の

アイデンティティの栄光が託されている。とすれば、この黒い土は、日本の野球が台湾に移植されることで、新しく生まれ変わったことを意味するだろう。日台の文化の「異種混交（雑種化）hybrid」が新しい文化を生み出したのである<sup>(28)</sup>。

### 三 札商のピッチャー・錠者博美について——台湾と北海道——

さて、最後に、札商のピッチャーの錠者について触れておきたい。すでに述べたように、『KANON』では、札商の錠者が脇役の中でも極めて特別で、重要な人物として登場する。モリスは、錠者を「第三の主人公」と呼ぶほどである（第一主人公は近藤、第二の主人公は本解説ではふれることはなかったが、八田弥一である）<sup>(29)</sup>。

錠者という人物の重要性は、嘉農が戦った札商との試合や中京商業との決勝戦など、この映画の重要なシーンが彼のフラッシュバックを通して語られることから分かるだろう。『KANON』は、錠者が日本兵としてとして南方の戦線に向かうために台湾に立ち寄り、嘉農に向かうシーンから始まる。嘉農に向かう列車の中で、また嘉農に着いてからは嘉農のグラウンドで、錠者は、嘉農との甲子園の戦いを懐かしく思い出すのである。この映画に、その他の登場人物が

回想するシーンはない。この映画のプロットをその回想によって展開させる唯一の人物が、錠者である<sup>(30)</sup>。

また、錠者は、嘉農のライバルの中でも、単に嘉農に敵対するだけではなく、嘉農に魅入られた者として登場する唯一の人物である。ここにも、錠者という人物の重要性がある。例えば、次のようなシーンがある。札商は準々決勝で嘉農に敗れてしまうが、錠者は、ライバルながらも嘉農の見事なチームワークに感銘を受ける。それで、彼は、嘉農のピッチャーのアキラ（本名は呉明捷、彼のあだ名である）に「俺に勝ったからには優勝しろよ」と言って、自分の「ラッキーボール」を手渡す（しかし、アキラは受け取らなかった。アキラは「君のラッキーボールは俺のラッキーボールとは限らない」と言って、錠者にボールを投げ返してしまう）。

錠者は嘉農と中京商業の決勝戦を見て、さらに嘉農に魅入られてゆく。決勝戦でアキラは指の豆を潰し、流血しているにもかかわらず最後まで投げ抜く。また、嘉農メンバーは一致協力し、最後まであきらめることなく戦い抜く。錠者は、この嘉農の必死の戦いぶりに、いち早く「嘉農は戦場の英雄なり！ 天下の嘉農！」と叫び、このチームを絶賛する。錠者に触発され、甲子園中の観客が次第に「天下の嘉農！」と嘉農にエールを送るようになる。

以上のように、錠者は、この映画の唯一の回想の主体にして語り手であり、嘉農のライバルの中でも唯一、嘉農に魅入られた者として登場する人物である。なぜこのように重要で特別な役割が錠者に与えられているのか。

魏徳聖は、台湾と北海道を一種の相似性において捉えている、と思われる。地理的に見れば、台湾と北海道は大日本帝国の北端と南端という意味で対極に位置するが、どちらも帝国の〈辺境〉であるという点では相似的である。また歴史的には、どちらも植民地——北海道は内国植民地——であるという点において相似的である。このような相似性が、北海道代表、札商のピッチャーの錠者に特別で重要な役割を、魏徳聖が与えた理由であつたのではないか。このことに注目しているのは、管見の限り、四方田だけである。

魏徳聖は明らかにここで、嘉農と札幌商業との対決を通して、日本の最南端と最北端を対等に並べてみせている。今日では記憶する人としてほとんどいないが、北海道こそは、沖縄、台湾、朝鮮に先立つて、日本が最初に植民地とし、開拓の名のもとに原住民を蹂躪してきた場所であつた。甲子園の優勝決定戦とは、こうして新旧の植民地の子弟が、宗主国の大人たちの眼前で日本への帰属度を競いあう事件として再解釈されることになる。<sup>(31)</sup>

ただし、嘉農の札商との戦いは「日本への帰属度」を競い合うだけではなく、日本に帰属することへの抵抗でもあつた、とここに付言しておく。

錠者は「天下の嘉農！」と叫んだとき、嘉農の球児たちと同じく植民地からやって来た者であるがゆえに、嘉農の戦いが意味するものに、いち早く気付き、それに深く共感したのではな

かったか<sup>(32)</sup>。錠者は嘉農に、いわば自らの〈分身〉を見たのである。先に述べたように、嘉農は決勝では敗れたものの、「チームワークの精神」を発揮し、多元的なエスニック・グループが一致団結するという台湾のアイデンティティを体現した。嘉農は日本からもたらされた野球をただ単に模倣したのではなく、それを差異化することで、台湾のアイデンティティを実現するための装置へと変えたのである。そこに、植民者に対する被植民者の抵抗があった。錠者は嘉農の球児たちと同じ被植民者であるからこそ、他の甲子園の観客に先んじて、そのことに気付いたのである。それゆえ、錠者は嘉農を絶賛した。つまり、嘉農が被植民者として成し得た抵抗を称えたのである。

また、錠者のフラッシュバックによつてこの映画が語られなければならない理由も、彼の嘉農への深い共感にあるだろう。彼は嘉農の地で、彼に強い印象を残した嘉農のことを思い出さざるを得なかった。その意味で、フラッシュバックは、嘉農という野球チームへの共感の深さ、その忘れ難さの表現でもあった。このフラッシュバックは、嘉農への共感で震えるその内面の表現でもあったのである<sup>(33)</sup>。

さて、錠者がまず「天下の嘉農！」と叫び、甲子園の日本人はそれに同調し、このエールを繰り返すのであった。錠者に促され、甲子園中の日本人が嘉農の戦いの意義に気付き、エールを送ったとき、嘉農は日本人の目指すべき、理想として立ち現れたものではなかったか。ならば、ここでは、植民者と被植民者のアンビヴァレンスな関係が逆転してしまっている、と言わざる

を得ない。嘉農のように、自国のアイデンティティを体现した台湾人こそが日本人の憧れの対象であり、模倣すべき理想なのであって、その逆ではもはやない。ここに嘉農の日本への抵抗は極まる。バーバは「擬態Ⅱ模倣」とは「他者への欲望」である、と言っていた。このシーンでは、被植民者が植民者をもはや欲望することなく、植民者が被植民者を欲望する。つまり、日本が台湾を欲望するのであって、台湾が日本を欲望するのではもはやない。植民地・台湾が欲望の対象として、宗主国・日本によって承認されるという逆転がここでは生じているのである<sup>(34)</sup>。

## おわりに

本解説を振り返ろう。ポストニューシネマの旗手、魏徳聖は台湾のアイデンティティの追求をエンターテインメントとして描き出した。これが、台湾映画の「今」の一傾向を形成した。『KANO』は嘉農の野球を日本野球の「擬態Ⅱ模倣」として表象した映画である。嘉農の球児は、大日本帝国のインペリアルなナショナリズムを反復しつつも差異化することで、台湾のアイデンティティ、すなわち多元的なエスニシティを具現化した。ここに、宗主国の日本への彼らの

抵抗があつた。また札商の錠者の担う役割の重要さは、彼が嘉農の球児たちと同じく、植民地からやって来た者であつたことに由来する。錠者は、彼の分身としての嘉農の球児たちに深い共感を寄せているのである。そのとき明らかになるのは、植民者が被植民者を欲望するという、それらの間のアンビヴァレントな関係の逆転であり、ここに嘉農の日本への抵抗は極まる。

本解説では、ほぼ製作の魏徳聖のみに言及し、監督の馬志翔に触れることがほとんどなかった。これは反省点である。魏徳聖が野球経験者の馬志翔に監督を任せた効果が出ているのは、やはり、野球の試合のシーンであろう。魏徳聖は「この映画の五〇から六〇%ぐらいは野球の試合風景です。こんなに試合の場面が多い野球映画も珍しいでしょう」<sup>(35)</sup>と語っている。それゆえ、この映画は、運動感覚に満ちた映画となった。上昇運動（空に高く上がるボール）、直線運動（選手達の疾走）や回転運動（バットの回転）等々の様々な軌跡を描く運動に溢れている。映画が運動の芸術であるとすれば、その運動の多様性がゆえに、この映画はまさしく〈映画〉である、と言えよう。嘉農の選手たちは、これら多様な運動を通して、三民族が協力し合うチームワークの精神を具現化したことを、最後に付言しておきたい。

冒頭述べたように、本解説は、錠者投手が筆者の勤める大学のお隣の札商（現・北海学園札幌高校）の球児であつたことに縁を感じて、執筆したものである。筆者は台湾映画については専門家ではない。それゆえ、筆者自身では気付かない誤りを犯している点もあるかもしれない。読者の皆様からのご意見をお待ちする次第である。

[註]

- (1) 阪本佳代「解説 KANOと嘉農をもつと理解するために」、漫画版『KANO 1931海の向こうの甲子園』(魏徳聖・陳嘉蔚原作、陳小雅作画、宇野幸一・阪本佳代訳)、翔泳社、二〇一四年、四一九頁を参照のこと。
- (2) 二〇一五年一月一六日、北海学園札幌高校野球部OB会は『KANO』の日本公開を記念し、本作の特別鑑賞会をデイノスシネマズ札幌劇場にて開催したことをここに記しておきたい(「甲子園で『KANO』と対戦した札幌商業野球部のOB会が特別鑑賞会」、台北駐日経済文化代表処、<https://www.roc-taiwan.org/jp/ia/post/2808.html> [最終アクセス、二〇一四年九月三〇日]。山中いずみ「日本統治時代、台湾からの甲子園出場校描いた映画」、『北海道新聞』、二〇一五年一月二二日、朝刊)。
- (3) 赤松美和子「映画——ニューシネマからエンタメへ——」、赤松美和子・若松大祐編著、『台湾を知るための72章』、明石書店、二〇二二年、二六六頁。また、坂川直也「魏徳聖における日本統治時代のエンタメ化」、『ユリイカ 台湾映画の現在』第七七七号、二〇二一年、四二六―四三七頁を参照のこと。
- (4) 四方田犬彦『台湾の遊び』、岩波書店、二〇一四年、一六五頁。
- (5) 稲見公仁子「台湾映画の歩み」、『ユリイカ 台湾映画の現在』、六六頁。
- (6) 同前。
- (7) 丸川哲史、『台湾、ポストコロニアルの身体』、青土社、一三二―一三三頁を参照されたい。ちなみに、本書では、ポストコロニアル的視点から、台湾ニューシネマについて優れた考察がなされている。
- (8) 黒羽夏彦は、『セデック・バレ』や『KANO』を「族群の多元性が背景に織り込まれたドラマ」であるとし、「多元主義的な観点から台湾島における『我々』の来歴を語り直そうとする試み」であると評価している(黒羽夏彦「台湾理解の変遷——外部の視点から台湾本位の『我々』の視点へ——」、『台湾を知るための72章』、四九頁)。

- (9) 林ひふみ「台湾映画『海角七号』を読み解く」、『明治大学教養論集』第四五二号、二〇一〇年、八一頁。
- (10) 林初梅は、一九九〇年頃までの台湾の映画やテレビドラマにおける日本人表象についてこう言っている。「日本像は中国侵略というイメージばかりで、台湾人の国民的記憶という視点からは、全くの虚像だと言うことさえできるものだった」(林初梅「魏徳聖の三部作『海角七号』『セデック・バレ』『KANO』を鑑賞して」、『東方』第四〇八号、二〇一五年、二頁)。しかし、近年、日本像は「抗日戦争の虚像から台湾人の身近な『日本』経験・記憶へと転換した」(同前)。魏徳聖の三部作には「現在の日本の統治時代に対する歴史認識が現れている」(同前、三頁)。台湾人は、日本に対して単に否定的なものではない「複雑」で「筆舌に尽くしがたい思い」を抱いており、魏徳聖の三部作はこの思いを「感動的」なものとして描き出した(同書、二頁)。このように林初梅はこの三部作を高く評価している。
- (11) 魏徳聖「台湾と日本が共に栄光へ向かった物語を知ってほしい」(インタビュー)、漫画版『KANO 1931 海の向こうの甲子園』、四〇六頁。
- (12) 『KANO』に対する批判については、野嶋剛『認識・TAIWAN・電影映画で知る台湾』(明石書店、二〇一五年)に詳しい。野嶋は『KANO』に対する批判は主に外省人からなされたとし、「抗日八年」の歴史を共有する外省人グループにとっては、日本統治を肯定するような作品を真つ向から認めることは難しい(同前、三三頁)とその理由を述べている。
- (13) 同前、三四頁。
- (14) 魏徳聖「台湾と日本が共に栄光へ向かった物語を知ってほしい」、四〇三頁。また、『映画で知る台湾』に掲載されたインタビューでも魏徳聖はほぼ同じ内容を語っている(四三頁)。
- (15) 四方田、前掲書、一六五頁。
- (16) Homi K. Bhabha, *The Location of Culture*, 1st ed., London and New York, Routledge, 1994, p. 86. (ホミ・K・バーバ『文化の場所——ポストコロニアリズムの位相——』、本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳、

法政大学出版局、二〇〇五年、一四八—一四九頁。）また、Bill Ashcroft, Gareth Griffiths and Helen Tiffin, *Post-Colonial Studies: The Key Concepts*, 2nd ed., London and New York, Routledge, 2007, p. 10（ビル・アッシュクロフト、ガレス・グリフィス、ヘレン・ティフィン『ポストコロニアル事典』、木村公一編訳、南雲堂、二〇〇八年、二六—二七頁）も参照のこと。『ポストコロニアル事典』によれば、「アンビヴァレンス」とは、被植民者の内面において、植民者との「共犯関係 complexity」と植民者への「反抗 resistance」が同時に存在することを意味している。

(17) 『海角七号』特別披露試写会に先立つ、魏徳聖のインタビュー（二〇〇九年九月二九日、新宿・明治安田生命ホール）。林ひふみ「台湾映画『海角七号』を読み解く」、八八頁より引用した。』は筆者による補い。

(18) 「映画『KANO』——甲子園大会で準優勝した台湾代表の物語——」（魏徳聖・馬志翔のインタビュー）、<https://www.nippon.com/ja/people/e00058/>（最終アクセス、二〇一四年九月三〇日）

(19) 沼崎一郎『人類学者、台湾映画を観る——魏徳聖三部作『海角七号』・『セデック・バレ』・『KANO』の考察——』、風響社ブックレット、二〇一九年、六〇頁。

(20) 同前、六四頁。

(21) Andrew D. Morris, *Colonial Project, National Game: A History of Baseball in Taiwan*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 2011, p. 3.（アンドルー・D・モリス『台湾野球の文化史——日・米・中のはざままで——』丸山勝訳、論創社、二〇一二年、xxi頁。）モリスは、台湾における野球と同様に、スポーツが植民地の文明化の手段として用いられた例として、英領西インド諸島のクリケットを挙げている。

(22) Bhabha, *The Location of Culture*, p. 86.（翻訳、一四八頁。）

(23) *Ibid.*（翻訳、一四九頁。）

(24) *Ibid.*（翻訳、同前。）モリスもバーバの「擬態＝模倣」が、台湾人の日本人化を捉えるための概念とし

て有効であると述べている (Morris, *Colonial Project*, p. 22-23 [翻訳「二七頁」])。しかし、彼は「擬態＝模倣」における「差異」を、被植民者が植民者の「まがいもの」を作り出し、それに抵抗することは考えていない。被植民者が植民者をいくら模倣しようとも、被植民者は完全に植民者になることはできず、その点で「野蛮」であり続ける。このような意味で、モリスはバーバーの言う「差異」を捉えている。この点が本解説と異なる。

(25) この小池という新聞記者は、作家の菊池寛をモデルにしていると思われる。菊池は、実際に嘉農対中京商業の決勝を観戦し、「涙ぐましい……三民族の協調」と題したその観戦記を東京朝日新聞に寄稿している。菊池はこう書いている。「僕はすっかり……嘉義びいきになった。内地人、本島人、高砂族という変わった人種が同じ目的のため協同し努力しているという事が、何となく涙ぐましい感じを起こさせる」(『東京朝日新聞』、一九三二年八月二三日、朝刊)。菊池をモデルにした小池も、嘉農のメンバーに差別的に接したことを悔いながら、映画の中で次のように言う。「僕はすっかり嘉農びいきになった。異なる人種が、同じ目的のために努力する姿は何とも涙ぐましい感情をおこさせるなあ」。小池の台詞からは、「内地人、本島人、高砂族」という民族名が削除されている。それらの民族は戦時中、日本人に一元的に包摂される、その下位カテゴリーでしかなかった。沼崎も指摘するように、それらの民族はみな日本人とみなされていたのである(沼崎、前掲書、六四頁)。それゆえ、魏徳聖(彼は本映画の脚本家でもある)は、それらの民族名を削除したのであろう。そうすることで、小池の台詞は、嘉農が多元的なエスニック・グループから成ることを端的に認め、それを褒め称える言葉となる。魏徳聖はそうように考えたと思われる。

(26) 沼崎、同前、六四頁を参照のこと。ただし、沼崎も、甲子園を単なるインペリアルなナショナルリズムの装置とみなした映画であると『KANO』を捉えていない。地元の代表校を熱狂的に応援するという「地方パトリオティズム」の思いを、高校野球は掻き立てる。そのような実感を基に、沼崎はこう言っている。「甲子園という装置が、素朴な地方パトリオティズムをナショナルリズムへと収斂させる回路となっていること

を頭ではわかっていて、信条的には拒否していても、心情的には拒否しきれないのである。……一九三一年の嘉義市民は、実はアンチインペリアル／アンチナショナルな台湾パトリオティズムを表現していたのではないかと想像したくなる」(沼崎、同前、七四頁)。本解説では、「心情」というよりは、むしろ「擬態」「模倣」の構造に由来するものとして「アンチインペリアル／アンチナショナルな台湾パトリオティズム」を捉えようとした。

(27) 金原由香「アジア映画史に加わった新たな1ページ」、『KANO 1931 海の向こうの甲子園』パンフレット、東急レクリエーション、二〇一五年、一九頁。

(28) 林初梅は、台湾文化の異種混交性について、「クレオール文化」という観点から次のように語る。「たとえ負の遺産であってもそれらを台湾の独自性へと転換させれば、歴史や文化が豊かになるという多文化主義の発想が台湾にはある。クレオール文化が存在しない国はどこにもないが、積極的にそれらを認め、そして自らの主体性へと転換させている例はそれほど多くはないだろう。そのような思いが魏徳聖の映画に潜んでいるように思える」(林初梅、前掲書、六頁)。「KANO」では、野球がまさしく「クレオール文化」であった、と言えるよう。

(29) モリス、前掲書、三〇〇頁(日本語版へのあとがき)。また、赤松も、本解説とは異なる視点から、錠者というキャラクターの重要性について述べている。赤松は、錠者がこの映画の「影」の部分を引き受けたがゆえに、この映画が「明るいスポ根青春映画」になったと述べる。「日本領土最北からの出場校である札幌商業の錠者は、最南端の台湾から来た嘉農をライバル視しつつも応援し、甲子園でユニフォームを着ては嘉農の敗北者であり信奉者であるという役目を務め、冒頭と終焉では軍服を纏い日本帝国や戦争の恐怖を表すなど、『KANO』における影の役を一手に引き受けている。『KANO』は、錠者が戦地に赴く間際に台湾に立ち寄り回想した、暗闇から照らし出された物語であるため、これほど明るいスポ根青春物語になったのであろう」(赤松美和子「現代台湾映画における「日本時代」の語り——『セデック・バレ』・

『大稲埕』・『KANO』を中心に——、所澤潤・林初梅編『台湾のなかの日本記憶』、三元社、二〇一六年、一八二—一八三頁。

(30) ただし、史実として、錠者が嘉義に立ち寄った可能性は極めて低い（「果子電影×米倉影業」[https://www.facebook.com/story.php?story\\_fbid=81243158808190&id=41649921506525](https://www.facebook.com/story.php?story_fbid=81243158808190&id=41649921506525)「最終アクセス 二〇一四年九月三〇日」）。錠者投手のいとお孫さんによれば、彼はシベリアに抑留され亡くなっている。現実の錠者は南方に出征したのではなかったのである。

(31) 四方田、前掲書、一六二頁。

(32) 北海道は、内地であると同時に外地でもあるような〈内国植民地〉としての両義性を持つ。とすれば、北海道からやって来た錠者は台湾人に対して、被植民者（外地人）であると同時に植民者（内地人）でもあるという両義性を帯びているとも考えられる。この観点から錠者というキャラクターについて考察することもできよう。しかし、本解説ではその余裕も能力もない。別稿に譲りたい。

(33) 赤松は、魏徳聖三部作すべてに日本人が語り手として登場することに注目している。彼女は、それが中国語や台湾語のみならず、「複数の言語が響き合う複雑で巧みな語り」を可能にしていると言う（赤松、前掲書、一八四頁）。『海角七号』（台湾語・中国語・日本語）では、日本教師が日本語の手紙で「捨てたんじゃない、泣く泣く手放したのだ」と引き揚げを贖罪し、『セデック・バレ』（セデック語・日本語）では、日本軍人鎌田が「台湾の山岳でわれわれ大和民族が百年前に失った武士道の精神を見たのだろうか」と霧社事件での原住民の戦いぶりを武士道と同一化して讃え、『KANO』（日本語・台湾語）では、嘉農戦の敗戦投手で日本軍人として出兵する錠者が「戦場の英雄！ 天下の嘉農！」と喝采する。魏徳聖関係作品の『日本時代』は、植民地統治後七〇年に及ぶ日本の沈黙を補うかのように日本人の語り手により、贖罪され、讃え、喝采され、語られているのだ（赤松、同前）。本解説の観点からは、この赤松の指摘は、ポストコロニアル的な意味を持つ。日本人によって「贖罪され、讃え、喝采され」ているのは台湾人であり、その

意味において、日本人は台湾人を欲望の対象としているからである。ここに、植民地的アンビヴァレンスの逆転現象を見ることが出来る。

(34) この欲望の逆転については Ashcroft, Griffiths and Tiffin, *Post-Colonial Studies*, p. 11 (アッシュクロフト、グリフィス、ティフィン『ポストコロニアル事典』、二八頁)を参照のこと。この逆転は、文化間の「異種混交」と関わっている。日台の文化が異種混交されることで、新しい台湾なりの野球のあり方が生まれ、それが日本人の褒め称える理想となったのである。

(35) 野嶋、『映画で知る台湾』、三八頁。

※北海学園札幌高等学校校長の竹越広志先生、および北海学園札幌高等学校野球部OB会の多田康郎最高顧問には、札幌と嘉農の試合に関する資料をご提供いただき、また直接お話を伺う機会を設けていただいた。そのときの両氏のお言葉から、本解説はインスピレーションを受けたところもある。多田最高顧問からは、一九三一年甲子園出場時の札幌メンバーの記念写真を提供していただいた(二三〇―二三二頁掲載)。ここに両氏に謝辞を申し上げます。





31年甲子園初出場



札幌商業野球部 19

左から三人目が錠者投手。一番左が多田栄郎監督。

〔彙報〕

令和五年度 大学院文学研究科

◆学位論文題目一覧

修士学位論文

●日本文化専攻修士課程

| 氏 名   | 修 士 論 文 題 目               |
|-------|---------------------------|
| 細川 夏歩 | 現代のパフォーマーが「アイヌプリ」を取り入れる理由 |

## ◆ 授業科目及び担当者

### ● 日本文化専攻博士（後期）課程

| 授業科目                | 担当教員         | 授業科目                | 担当教員   |
|---------------------|--------------|---------------------|--------|
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅠA  | テレンゲト・アイトル教授 | 日本歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅢA | 手塚 薫教授 |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅠB  | テレンゲト・アイトル教授 | 日本歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅢB | 手塚 薫教授 |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅠC  | テレンゲト・アイトル教授 | 日本歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅢC | 手塚 薫教授 |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅡA  | 鈴木英之教授       | 日本歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅣA | 須田一弘教授 |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅡB  | 鈴木英之教授       | 日本歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅣB | 須田一弘教授 |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅡC  | 鈴木英之教授       | 日本歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅣC | 須田一弘教授 |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅢA  | 田中 綾教授       |                     |        |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅢB  | 田中 綾教授       |                     |        |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅢC  | 田中 綾教授       |                     |        |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅣA  | 徳永良次教授       |                     |        |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅣB  | 徳永良次教授       |                     |        |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅣC  | 徳永良次教授       |                     |        |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅤA  | 大谷通順教授       |                     |        |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅤB  | 大谷通順教授       |                     |        |
| 日本語・思想文化論文指導特殊演習ⅤC  | 大谷通順教授       |                     |        |
| 日本歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅡA | 郡司 淳教授       |                     |        |
| 日本歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅡB | 郡司 淳教授       |                     |        |
| 日本歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅡC | 郡司 淳教授       |                     |        |

# ●英米文化専攻博士（後期）課程

| 授業科目                |              | 担当教員 |
|---------------------|--------------|------|
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅠA | 田中洋也 教授      | 授業科目 |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅠB | 田中洋也 教授      |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅠC | 田中洋也 教授      |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅢA | 上野誠治 教授      |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅢB | 上野誠治 教授      |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅢC | 上野誠治 教授      |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅣA | 佐藤貴史 教授      |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅣB | 佐藤貴史 教授      |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅣC | 佐藤貴史 教授      |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅤA | 渡部あさみ 教授     |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅤB | 渡部あさみ 教授     |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅤC | 渡部あさみ 教授     |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅥA | ブシャー・ジェレミ 教授 |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅥB | ブシャー・ジェレミ 教授 |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅥC | ブシャー・ジェレミ 教授 |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅦA | 森川慎也 教授      | 授業科目 |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅦB | 森川慎也 教授      |      |
| 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅦC | 森川慎也 教授      |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅠA | 柴田 崇 教授      |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅠB | 柴田 崇 教授      |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅠC | 柴田 崇 教授      |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅡA | 大森一輝 教授      |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅡB | 大森一輝 教授      |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅡC | 大森一輝 教授      |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅢA | 小松かおり 教授     |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅢB | 小松かおり 教授     |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅢC | 小松かおり 教授     |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅣA | 仲松優子 教授      |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅣB | 仲松優子 教授      |      |
| 欧米歴史・環境文化論文指導特殊演習ⅣC | 仲松優子 教授      |      |

# ●日本文化専攻修士課程

| 授業科目          |               | 担当教員 | 授業科目          |          | 担当教員 |
|---------------|---------------|------|---------------|----------|------|
| 日本文学特殊講義Ⅰ     | 関本真乃 准教授      |      | 日本語研究特殊講義Ⅱ    | 徳永良次 教授  |      |
| 日本文学特殊講義演習ⅠA  | 関本真乃 准教授      |      | 日本語研究特殊講義演習ⅡA | 徳永良次 教授  |      |
| 日本文学特殊講義演習ⅠB  | 関本真乃 准教授      |      | 日本語研究特殊講義演習ⅡB | 徳永良次 教授  |      |
| 日本文学特殊講義Ⅱ     | 田中 綾 教授       |      | 日本史特殊講義Ⅰ      | 片岡耕平 准教授 |      |
| 日本文学特殊講義演習ⅡA  | 田中 綾 教授       |      | 日本史特殊講義演習ⅠA   | 片岡耕平 准教授 |      |
| 日本文学特殊講義演習ⅡB  | 田中 綾 教授       |      | 日本史特殊講義演習ⅠB   | 片岡耕平 准教授 |      |
| 日本文学特殊講義Ⅲ     | 中村三春 講師       |      | 日本史特殊講義Ⅱ      | 郡司 淳 教授  |      |
| 比較文学特殊講義Ⅰ     | テレングト・アイトル 教授 |      | 日本史特殊講義演習ⅡA   | 郡司 淳 教授  |      |
| 比較文学特殊講義演習ⅠA  | テレングト・アイトル 教授 |      | 日本史特殊講義演習ⅡB   | 郡司 淳 教授  |      |
| 比較文学特殊講義演習ⅠB  | テレングト・アイトル 教授 |      | 環境文化特殊講義Ⅰ     | 手塚 薫 教授  |      |
| 比較文学特殊講義Ⅱ     | 大谷通順 教授       |      | 環境文化特殊講義演習ⅠA  | 手塚 薫 教授  |      |
| 比較文学特殊講義演習ⅡA  | 大谷通順 教授       |      | 環境文化特殊講義演習ⅠB  | 手塚 薫 教授  |      |
| 比較文学特殊講義演習ⅡB  | 大谷通順 教授       |      | 環境文化特殊講義Ⅱ     | 須田 一弘 教授 |      |
| 日本思想特殊講義Ⅰ     | 鈴木英之 教授       |      | 環境文化特殊講義演習ⅡA  | 須田 一弘 教授 |      |
| 日本思想特殊講義演習ⅠA  | 鈴木英之 教授       |      | 環境文化特殊講義演習ⅡB  | 須田 弘 教授  |      |
| 日本思想特殊講義演習ⅠB  | 鈴木英之 教授       |      |               |          |      |
| 日本語研究特殊講義Ⅰ    | 丸島 歩 准教授      |      |               |          |      |
| 日本語研究特殊講義演習ⅠA | 丸島 歩 准教授      |      |               |          |      |
| 日本語研究特殊講義演習ⅠB | 丸島 歩 准教授      |      |               |          |      |

# ●英米文化専攻修士課程

| 授業科目         |             | 担当教員 |
|--------------|-------------|------|
| 英米文学特殊講義Ⅰ    | 渡部あさみ教授     |      |
| 英米文学特殊講義演習ⅠA | 渡部あさみ教授     |      |
| 英米文学特殊講義演習ⅠB | 渡部あさみ教授     |      |
| 英米文学特殊講義Ⅱ    | 森川慎也教授      |      |
| 英米文学特殊講義演習ⅡA | 森川慎也教授      |      |
| 英米文学特殊講義演習ⅡB | 森川慎也教授      |      |
| 英語研究特殊講義Ⅰ    | 上野誠治教授      |      |
| 英語研究特殊講義演習ⅠA | 上野誠治教授      |      |
| 英語研究特殊講義演習ⅠB | 上野誠治教授      |      |
| 英語研究特殊講義Ⅲ    | 田中洋也教授      |      |
| 英語研究特殊講義演習ⅢA | 田中洋也教授      |      |
| 英語研究特殊講義演習ⅢB | 田中洋也教授      |      |
| 英語研究特殊講義Ⅳ    | ブシャー・ジェレミ教授 |      |
| 英語研究特殊講義演習ⅣA | ブシャー・ジェレミ教授 |      |
| 英語研究特殊講義演習ⅣB | ブシャー・ジェレミ教授 |      |
| 欧米思想特殊講義Ⅰ    | 小柳敦史准教授     |      |
| 欧米思想特殊講義演習ⅠA | 小柳敦史准教授     |      |
| 欧米思想特殊講義演習ⅠB | 小柳敦史准教授     |      |
| 論文指導         | 小柳敦史准教授     |      |

| 授業科目         |         | 担当教員 |
|--------------|---------|------|
| 欧米思想特殊講義Ⅱ    | 佐藤貴史教授  |      |
| 欧米思想特殊講義演習ⅡA | 佐藤貴史教授  |      |
| 欧米思想特殊講義演習ⅡB | 佐藤貴史教授  |      |
| 欧米史特殊講義Ⅰ     | 仲丸英起准教授 |      |
| 欧米史特殊講義演習ⅠA  | 仲丸英起准教授 |      |
| 欧米史特殊講義演習ⅠB  | 仲丸英起准教授 |      |
| 欧米史特殊講義Ⅱ     | 大森一輝教授  |      |
| 欧米史特殊講義演習ⅡA  | 大森一輝教授  |      |
| 欧米史特殊講義演習ⅡB  | 大森一輝教授  |      |
| 欧米史特殊講義Ⅲ     | 仲松優子教授  |      |
| 欧米史特殊講義演習ⅢA  | 仲松優子教授  |      |
| 欧米史特殊講義演習ⅢB  | 仲松優子教授  |      |
| 環境文化特殊講義Ⅰ    | 小松かおり教授 |      |
| 環境文化特殊講義演習ⅠA | 小松かおり教授 |      |
| 環境文化特殊講義演習ⅠB | 小松かおり教授 |      |
| 環境文化特殊講義Ⅱ    | 柴田崇教授   |      |
| 環境文化特殊講義演習ⅡA | 柴田崇教授   |      |
| 環境文化特殊講義演習ⅡB | 柴田崇教授   |      |



## 文学研究科教育・研究発表活動

### ◎二〇二四年度 第一回全体ゼミ（中間報告）

七月六日（土） 9:45～12:00、21番教室にて開催された。修士課程と博士（後期課程）に在学する四名の院生が次の題目で論文の構想とその内容の一部を発表した（参加者約20名）。

城田 龍星 「現代英語における発音と綴り字の不一致」

武田 佑希子 「近世国学者における「黄泉比良坂」の解釈とその系譜―後藤夷臣『八雲路日記』を中心に―」

林 香苗 「三浦綾子『銃口』試論―研究史とその課題―」

大村 勅夫 「笹井宏之の短歌の研究 その2―第二歌集『てんとろり』における身体語彙「ゆび（指）」に注目する―」

### ◎二〇二四年度 第二回全体ゼミ（中間報告）

十一月二日（土） 10:00～12:30、15番教室にて開催された。修士課程に在学する五名の院生が次の題目で論文の構想とその内容の一部を発表した（参加者約20名）。

一色 紗矢香 「現代の変化する漬物にみる食のコミュニケーション―自己表現と生きがい化を中心に―」

藤野戸 柊希 「特定技能2号を目指す外国人のための適切な日本語学習支援のあり方―農業分野における耕種農業を中心に―」

渡辺 駆 「中原中也の詩の音楽性―〈時間〉を中心に―」

多米 玲奈 「幻想の装置としての短歌―葛原妙子を中心に― 第二章 葛原妙子への評価」

中嶋  
奏子

「植民地インドにおけるイギリス人女性  
の植民地経験の多様性―イライザ・  
フェイの書簡『インドからの手紙』を  
手がかりに―」

## 編集後記

### 編集後記

●『年報新人文』第二号をみなさまにお届けします。本号は巻頭言、論文七編、研究ノート一編、資料紹介一編、解説シリーズ—今、何が起きているのか？から構成されています。本号の論考は北海学園大学大学院文学研究科に在籍する研究者や大学院生、および研究科を巣立った気鋭の研究者によって執筆されたもので、いずれも地道な調査・研究活動の成果となっています。執筆者のみなさま、厳正な査読を引き受けてくださった査読者のみなさまに心よりお礼申し上げます。

●巻頭言は、徳永良次教授に「人の「こえ」を聴く」と題して、高山寺の典籍文書のなかから、明恵上人や禅浄房の「奥書」を紹介していただきました。二〇二四年の夏に、北海道立近代美術館で「国宝鳥獣戯画 京都高山寺展 明恵上人と文化財の伝承」が開催されて大いに話題になったことが想起されます。

●『年報 新人文』創刊号が刊行されたのは、二〇〇五年ですが、それから二〇年近く経過した本年、第二一号を無事に発刊する運びとなりました。創刊号の刊行によせて大瀧徹也氏が「国家の下で辺境とされた北の大地から新しき学問の地平をきり拓くにたる飛翔の場たらんとするものです。この種が北の荒野に根づき、大きく育つには幾多の歳月がかかることでありましょう。この歳月に耐えうるには、研究誌として、年ごとに充実していかなばなりません」と述べておられます。その後も本研究科の教員・大学院生が一体となった継続的な努力により、今まさにこの種が開花し始めたのは、望外の慶びとするとことです。しかし、時代の趨勢には抗しきれず、次号からはペーパーレス化に移行します。体裁は変わっても中身にいささかの後退があつてはなりません。本誌のシンボルであるフクロウは、暗い時代の到来を予感しながらも、北の大地から新人文の理想を胸に抱きつつ、これからも飛翔を続けることでしよう。

●本研究科には着実に研究を進めている大学院生が多数在籍しています。本誌は、姉妹誌である『人文論集』とは異なり、査読を経て論考が掲載される学術誌です。大学教員からの論文投稿に加え、大学院生からの投稿も歓迎しています。みずからの研究を世に問ううえで最適の機会ですので、大学院生の皆様も奮ってご投稿ください。

(手塚薫・仲丸英起)

.....

## 『年報 新人文文学』投稿規定

一、『年報 新人文文学』は、人文学に関する広範な分野の研究成果を掲載し、内外の研究交流を図ることを目的とし、年一回発行を原則とする。

二、投稿原稿の著者は、人文学部及び文学研究科の所属者でなければならない。ただし編集委員会が認めた場合はその限りではない。

三、原稿は日本語、あるいは英語とし、種類と分量はそれぞれ次のとおりとする。

- ①原著論文で未発表のもの、日本語なら二〇、〇〇〇字、英語なら一〇、〇〇〇字程度。
- ②研究ノート・資料・報告など、日本語なら一二、〇〇〇字、英語なら六、〇〇〇字程度。
- ③書評など、日本語なら四、〇〇〇字、英語なら二、〇〇〇字程度。
- ④その他、編集委員会が必要と認めたもの。

四、原稿は編集委員会で厳正な審査を行い、採否を決定する。編集委員会は査読結果に基づき、原稿の一部変更を求めることがある。

北海学園大学大学院文学研究科  
『年報 新人文文学』編集委員会

## ◆表紙の「ふくろう」について

表紙に描かれている「ふくろう」には、二重の意味が込められています。ひとつは古代アテネの「ミネルヴァのふくろう」に由来する、「知恵ないし学問」の象徴という意味です。哲学者ヘーゲルが、「ミネルヴァのふくろうは、日の暮れ始めた夕暮れとともに、はじめてその飛翔を始める」と述べたことは、つとに有名です。

もう一つの意味は、北海道に生息する天然記念物「シマフクロウ」に由来しています。シマフクロウは、北海道のなかでも手つかずの自然が残っている場所にしか生息しませんが、その表情には思慮深い哲人を思わせる威厳があります。古来アイヌの人たちは、この鳥をコタンコロカムイ（村の守護神）と呼んで神聖視してきました。

本誌は、この「ミネルヴァのふくろう」と「シマフクロウ」にあやかっ、北の大地から新しき学問の地平をきり拓くべく、大いなる飛翔の場たらしめるものです。

## 年報 新人文学〔第二十一号〕 Annual Bulletin of the New Humanities

発行日——令和六（二〇二四）年十二月二十五日 発行

編集者——北海学園大学大学院文学研究科『年報 新人文学』編集委員会

北海学園大学大学院文学研究科内

〒〇六二―八六〇五 北海道札幌市豊平区旭町四丁目一 番四〇号

電話（〇二）八四一―一六二〔代表〕 FAX（〇二）八四一―七七二九

編集委員——手塚薫＋仲丸英起

発行者——郡司淳

発行所——北海学園大学大学院文学研究科 札幌市豊平区旭町四丁目一 番四〇号 電話（〇二）八四一―一六二〔代表〕

